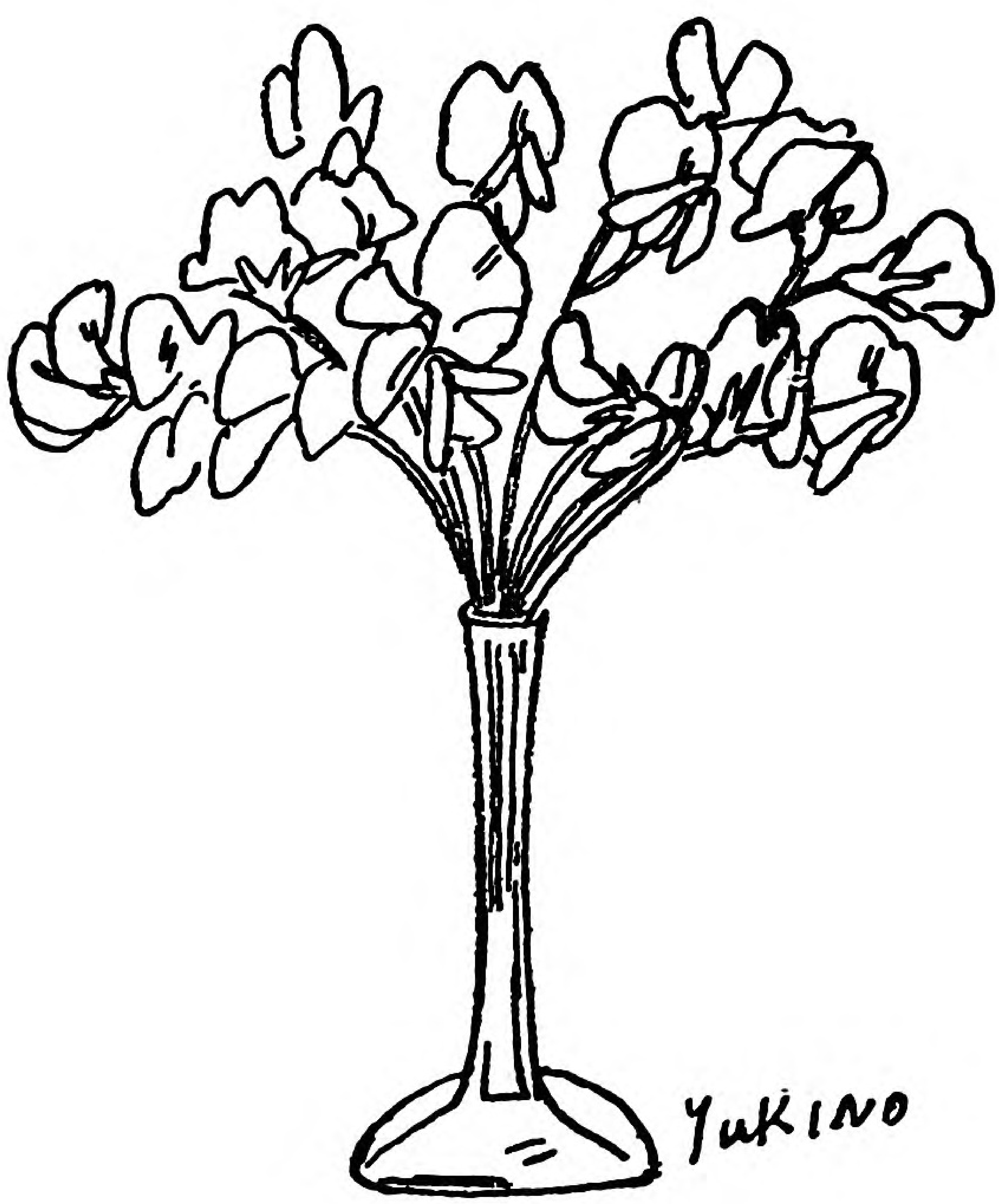

女人藝術
昭和五年五月一日發行（每月一回一日發行）
五月號
附録
女人大衆

白十字堂

初夏の新鮮なる果實洋生菓子

美味しい店・明るい感じのよき店・誠實努力の店



新宿の二階は高級家庭食堂、三階は二百人までの集會宴會場座敷料なし

本郷帝大前本店 電話小石川七〇九五

新宿支店 四谷五七五七

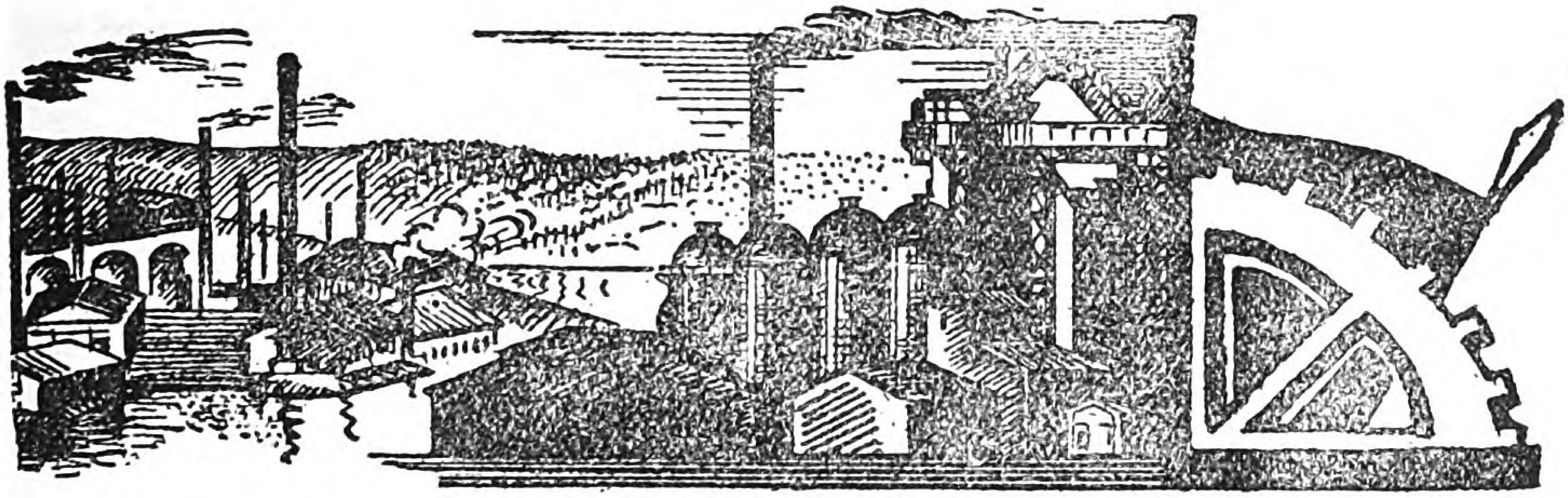
日本橋支店 日本橋八四二

淺草支店 淺草二五三五

神樂坂支店 牛込一五三五

四谷支店 四谷二七一二

駕籠町支店 大塚三二二五

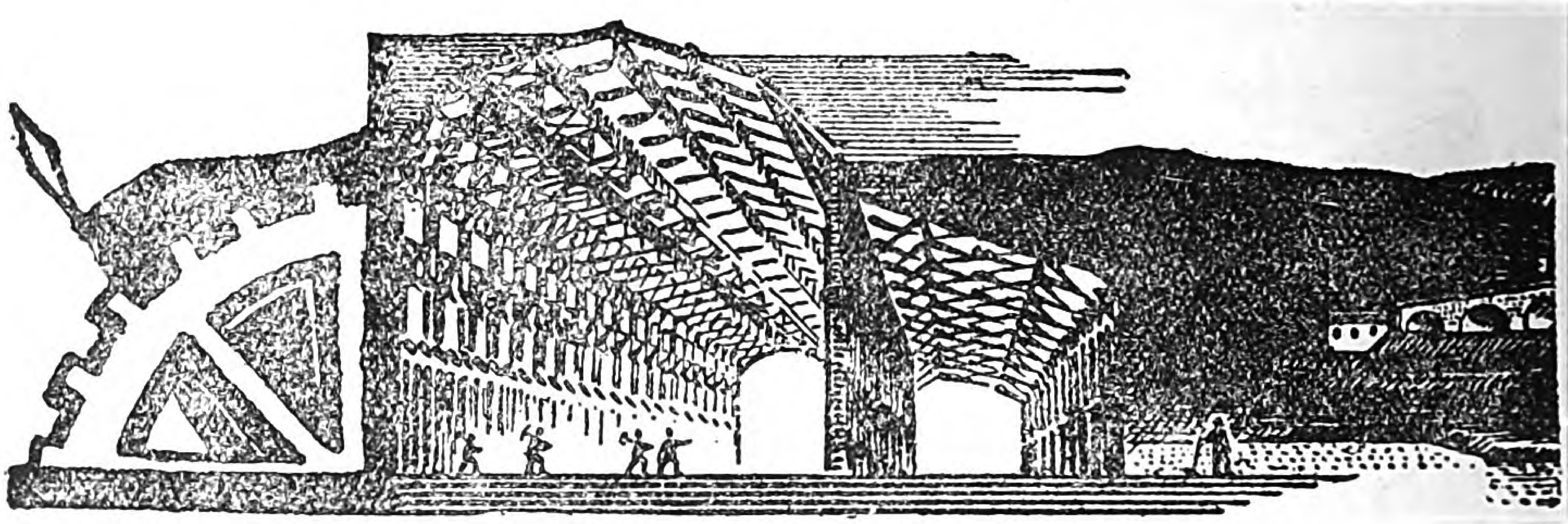


女人藝術第三巻五月號目次

―禁轉載―

小說

實話



メーデー行進

論文

女人大衆


蓄音器も…レコードも
ビクター
No. 1-90
¥ 150
HIS MASTERS VOICE
No. 4-3
¥ 260
日本ビクター關東賣捌元
東京銀座三丁目
十字屋樂器店

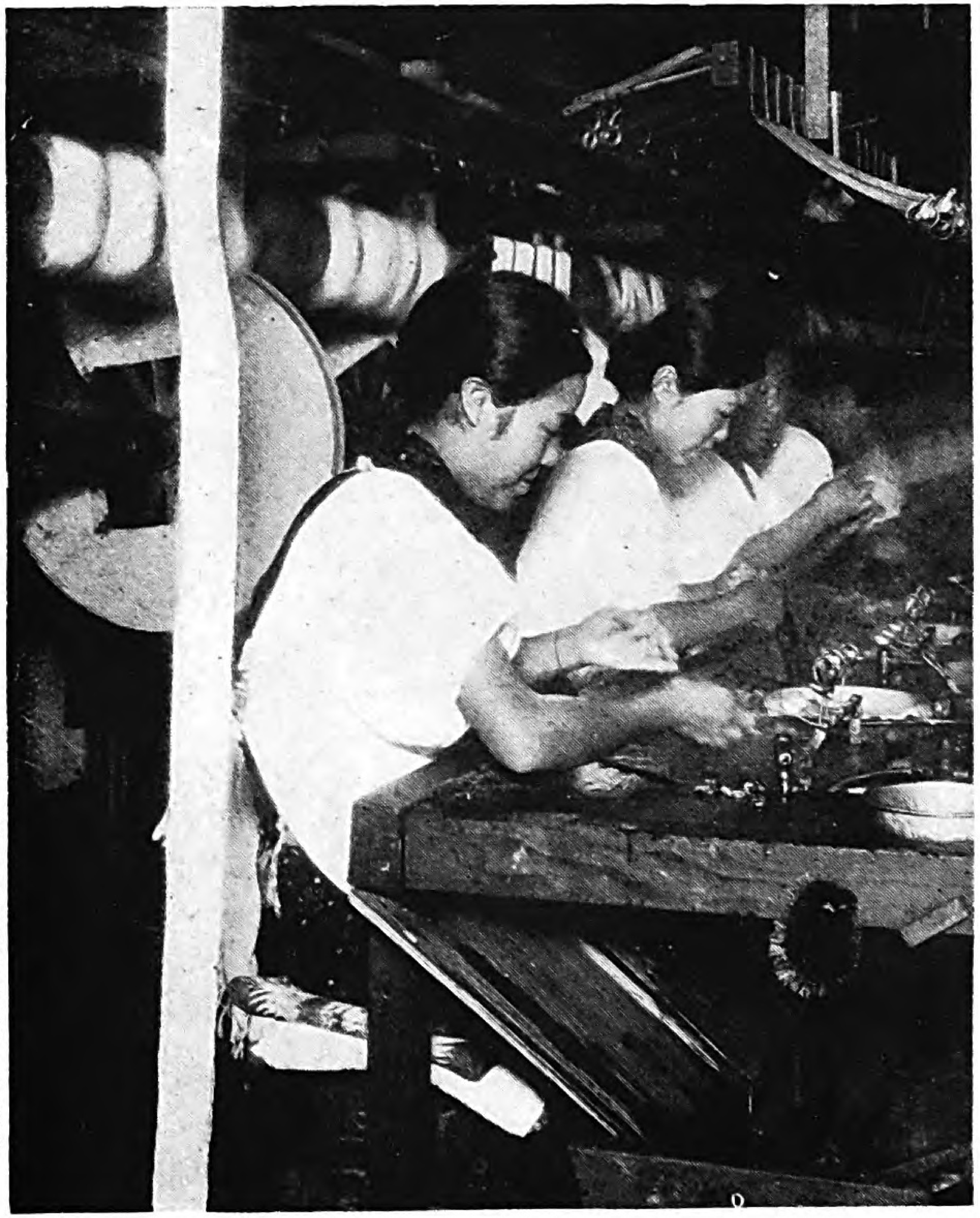


堂々赤い廣場に向つて繰り込むメーデーの行列、——われらの祭日を祝ふロシヤの勞働者達

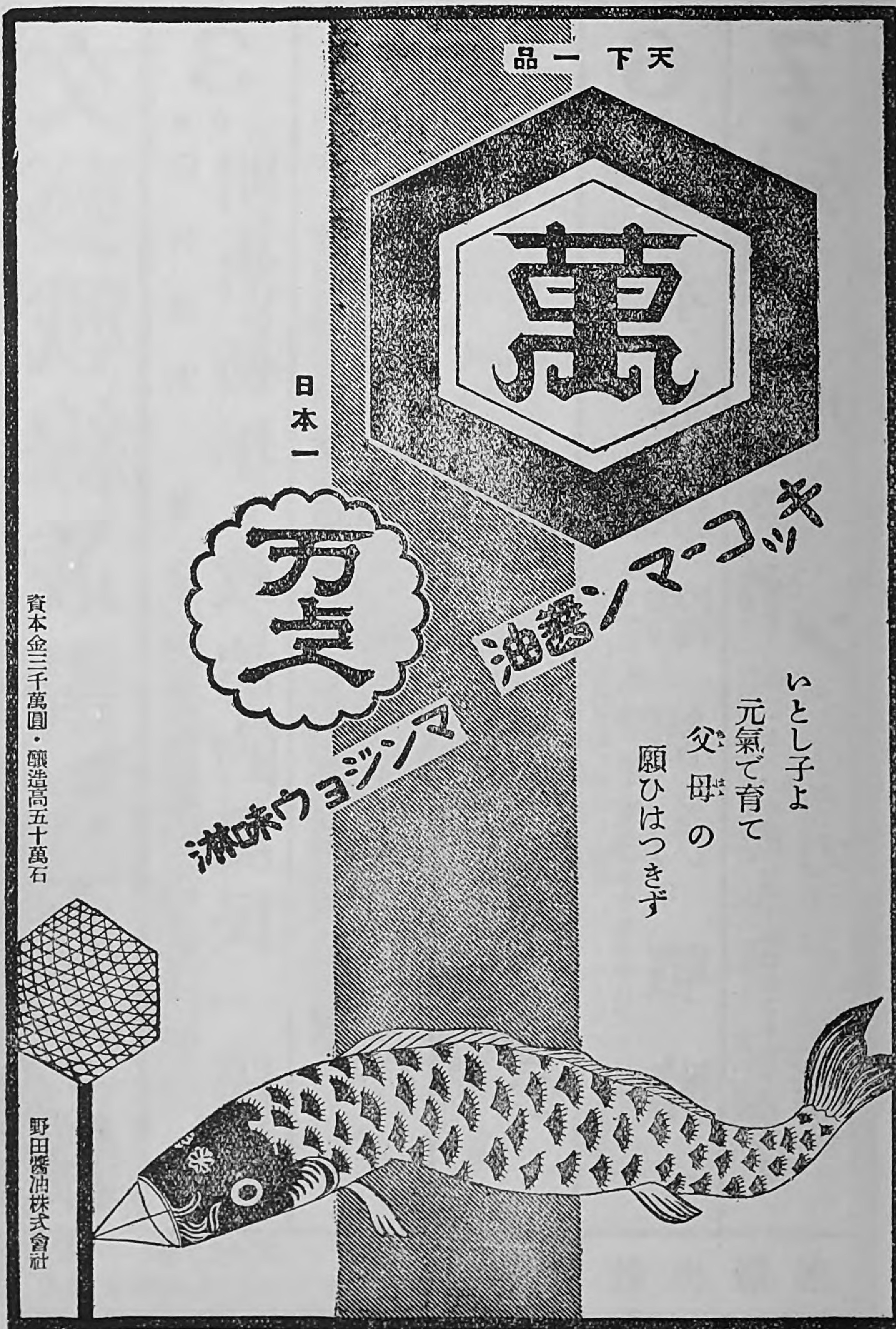
勝利を目指して團結せよ



モスクバに於けるピオニールの工場見學



信州の製糸工場に働く少女達


天下一品
萬
キッコーマン醤油
日本一
万上
マンジョウ味淋
いとし子よ
元氣で育て
父母の
願ひはつきず
資本金三千萬圓・釀造高五十萬石
野田醤油株式會社



中國革命の師祖孫逸仙逝いて滿五年、三月十二日の命日を期して北平中山公園に於いて五週年記念市民大會が催された。
會場は孫文を慕ふ二萬餘の群集を以つて埋められ盛況を極めた。



—京都女人聯盟の諸氏—

ア・コロンタイ女史著
中島幸子譯

新刊
好評

偉大な戀

▼蕗谷虹兒裝
▼四六判美本
▼定譯本

▼定價金六十錢
▼送料金六錢

眞紅のエロチシズムと峻嚴なコムミユニズムの葛籐!!

コロンタイ女史の自傳的面影ある問題小説!!

革命といふ共同目的に奉仕する男女が、三角關係に陷り、『偉大な戀』の實は結ぼれた。その『偉大な戀』の感傷も女子黨員の××的任務に對する、男性の無理解無思慮から破壞されて行く。彼女は如何にして別離の苦惱、決定的な煩悶、獨身の婦人の淋しい室を訪れるノスタルヂャと鬪爭し、彼女の正しき任務を敢行し得たか？悲壯な生活過程を描いた問題小説！譯者は日本プロレタリア婦人運動の尖端に立つ若き女性！　前半「女人藝術」に連載、譯文流麗、原作の妙味を傳へて餘蘊なし！

コロンタイ女史は本社既刊の『赤い戀』『愛の道』その他でこの國には知悉されてるか本書は、これらの思想の必然的發展であり、より小説的興味が豐富なので面白く讀ませゝ！

發行所
東京市牛込區市ケ谷田町三ノ廿一
振替東京七五一五八
世界社



ARIZONA BAR

In Front Of Miyako Hotel

KYOTO JAPAN

アリゾナバー

京都市三條通ミヤコホテル前

お酒をのまない私もはじめてバーの門をくぐりました。三人姉妹でやつてゐるこの店は、家中が女人聯盟員なのです。どうかみなさんお引立下さい。

京都、三條粟田口のほとりで、清楚な、雅味ある家造りです。みんな元氣で瑞々しく若木の潑剌さが古いお酒まで發酵させるでせう。私はのめませんが、中の妹さんのつくるカクテルは非常におしいさうです。

—時雨

記事満載

漫談

五月號

定價三十五錢

東京京橋區木挽町一ノ一 漫談社 振替東京五二一九四番

女人藝術

五月號



一九三〇年の

急激なる無産階級の成長は、支配階級の暴壓を押し切つて、確乎不拔な姿を、歴史の表面に鮮かにあらはしたのである。
資本家、地主の政府を×し、勞働者農民の政府をつくれ！　の合言葉をかゝげて、日本××黨は公然と大衆的な進出をしたにも拘らず、反動的ブルジョアジーは、「三・一五」「四・一六」事件といふ比ひなき强烈な狂暴性を發揮して、その勇敢なる無産階級の政治的擡頭をおさへたのであつた。
然し空前の此の强壓政策をも恐怖することなく、プロレタリアートの陣列は、益ゝ强固に不斷の鬪爭を展開してゐるではないか。

こうした眞只中に、我等はメーデーを迎へる。
五月一日（メーデー）は我等の日である。世界の無産階級の日である。
此の日は、もとアメリカの勞働者が、資本家階級にたいして、八時間制の要求の貫徹を大衆行動を以つて鬪ひとつた日である。
記念すべき一八八六年の五月一日、その日全米の勞働者は一齊に「今日より後、一人の勞働者も八時間以上は働くな、八時間の勞働！　八時間の休息！　八時間の教育！」を絶叫しながら、熱烈な示威運動をおこしたのである。
かくの如く、全米を捲席して、資本家達を畏怖させた運動は、決して平和裡に終つたのではなかつた。引續いて、五月三日には多くの指導者が投獄された。殊に死刑を宣告されたスピースが斷頭臺に殘した最後の言葉たる「墓地に於ける沈默は我々の演壇上よりの聲よりも雄辯であるところの時代は來るであらう」は、實に、今日の澎湃として高まりゆく無産階級の成熟を豫期してゐたのである。
しかし我等は過去の史的悲劇を、いたづらに歎息するなかれ、プロレタリアートの受難史を飾つた人々の靈を慰藉する唯一の方法は、我等が此の倍加し行く支配階級の暴虐にたいし、より果敢に突進して、全世界を獲得する外にあり得ない。
メーデー！　抑壓された我等が、支配階級に對して挑戰する此の日を迎へるたびに、來るべき歴史の推進力たる無産階級の力强い發展を、はつきりと感ずるものである。
此のメーデーこそは、資本家達を戰慄せしめて、プロレタリアートの勝利への、一歩前進のための「前哨戰」である。恐らく大衆的な動員、參加は全世界の貪慾あくなき資本家階級を震憾させるであらう。それはプロレタリアートの解放を要求する日である。
メーデーは、決して靜肅なる勞働者達のお祭り騷ぎではない。改良主義者どもは、只管、靜謐なメーデーを持つことを期

メーデーを迎ふ

待するであらうが、然し觀よ、永い間、屈従と搾取に虐げられてきた勞働者達は、各自の職場から出てきて、お互ひに手を組み合せて「メーデー歌」を高唱するときに、自己の體内に熾烈な××的精神が鬱結してゐるのを識るであらう。

我等は、一九一七年のロシアのメーデーを想へ！　解放の鐘を鳴り響かせたその歴史的成果は多くの教訓を殘してゐるではないか。

婦人大衆よ！　我等は未だ廣汎な未組織狀態に殘されてゐる。然しこの日こそ未組織な婦人層も悉く參加して、我等の要求を大衆行動によつて貫徹させねばならぬ。

マルクスは既に「社會××は女性と云ふ醱酵素なしには、不可能である」と云つて我等婦人に絶大な望をかけてゐるではないか。

殊に東洋に於ける婦人の狀態は、歐米先進國と比較して、實に悲慘などん底に生活してゐる。我等は二重三重の殘虐と桎梏に惱まされきたのみならず、社會的政治的地位は言語に絶した有樣である。然し我等の要求は、ブルジョアフエミニスト達が、婦選獲得にうきみをやつしてゐるやうに、議會主義的漸進主義ではない。

我等が鐵鎖を斷ち切る方法は、唯一つしかあり得ない。それはプロレタリアートの解放を闘ひ取つたときこそ、婦人の完全な社會的自由を築くことが出來るであらう。

日本の資本主義は、今極端に行き詰まつてゐる。そして金融資本家の代辯者たる濱口内閣は、强行的に、産業の合理化を遂行しつゝある。それは商品を廉價に生産して「獨占形態」を完全ならしめやうとの意圖に外ならない。

合理化の最後の目的は何か？　それは勞働婦人の纖細な勞働力の使用である。資本主義の毒牙が、この勞働力にのぞむ手段が、「産業の合理化」の本質を形成してゐる。

産業の合理化は、プロレタリアートの窮乏化と失業群の增大を招くだけである。

婦人大衆よ！　日本の資本主義は、今民衆の生活水準の著しき低下の上に、部分的安定を克ち得たと同時に、一切の反動網を利用して、プロレタリアートの擡頭を攻勢してゐる。此の時、我等婦人は、プロレタリアートと共同戰線をはつて、勇敢な粘り强い、そして執拗な鬪爭をしなければならぬ。そのことのみが、無産者の自由を建設するであらう。

今や新しき帝國主義的世界大戰、××××聯邦にたいする攻撃が、各國のブルジョアジーの日程に上されてゐるとき、我等はあらゆる機會に彈壓と暴虐に抗爭せねばならぬ。

婦人よ進んでメーデーに參加せよ！

（中島幸子）



!!!メーデー行進

メーデーの思ひ出

岩内とみゑ

種々な思ひ出の中に私を最も喜ばせ何時考へても血の躍る様な愉快の感じを與へるのはメーデー參加の追憶である。

昭和二年五月第一會場に當られた有馬ヶ原へ多數の日本紡績勞働組合の婦人部の人々と共に參加した、午前九時頃早くも會場へ集る者數千名に達してゐた。

會場の入口には多數の警官が入場者を一々檢身してゐる。女工さん達は大抵年齡よりも若く見えるので入場がやかましい、列を作つて警官の前を通るのだがなか〱うまくパス出來ない。「お前は何歲、何年生れ何の年うまく言ひ拔けたかと思つたら、駄目だ、お前はまだ肩揚げをしているから駄目だ、出ろ〱」と押し出す女工さんは泣き出しそうな顏をして會場の外へ出てきた。そんな馬鹿な話はない、肩揚げしていたつて二十一なのに、幹部が、××に交渉したが結局駄目であつた。グズ〱言ふとみんな檢束して仕まうぞと大變なけんまくである。ろくに年もきかないで肩揚げの有無で定めてしまつたので折角來た同志を大勢歸して仕舞つた。例へ十九でも工場の中で搾取されるのは同じであるのにどうしてメーデーに參加して惡いのだろう。

あの大廣場を埋めつくした同志の顏には、働く者の未來の希望が胸の組合員章と共に雄々しく輝いてゐた。

春風になびく赤旗、高らかに歌ふメーデー歌、今日一日は世界の同志が資本家の搾取から逃れて勞働の意義を示す日。

入口の方で急に騷がしい聲が聞えて來る。何だ、檢束だと!!横暴だ〱ポリをなぐりつけて奪還しろ、忽ち數十名の同志が檢束者の廻りを取りまいてとうとう檢束者を取り戻した。一同ワーと喊聲を擧げて引きあげて來た、ザマー見ろ、と同志の一人は警官に冷笑をあびせた。

會場の中程に木箱を積み重ねた急造の演壇が出來てゐる、群衆は演壇を取り圍んで雪崩を打つていた。

やがて司會者が演壇に上ると割れる樣な拍手が起つた。一同は謹聽して司會者の挨拶をきいた。續いて決議、宣言朗讀各組合代表者の五分間演說等に滿場の血を湧かしめた。

十二時閉會の辭がのべられ、之より一大示威運動に移る爲に、各自部署に就いた。四列に並んで腕を組み、行列始の旗を先頭に一萬餘の大衆は高らかにメーデー歌を歌ひながら足取りも輕く行進する。數百本の赤旗と、メーデーのスローガンを揭げたる長旒とは特に大衆を勇氣づけた。

今日こそ吾等の日、と男子に負けない



元氣の良い紡績の姉妹たちには警備の警官も驚いてゐた「君達は隨分元氣がいゝなー」と感心すれば女工さん達得意になつて「貴方方とは氣分が違ひますよ、今日は私達働く者のお祭りですもの、お巡りさんも皆な職場を捨ててメーデーに參加する様になればいゝのね。」

警官は苦笑してゐた。

兩側には多勢の人々が示威行列を眺めて、思ひ〳〵の感想を懷いてゐるのが伺はれた。ビルデイングの工事場に働いてゐる勞働者達が高い足場に上つて眺めてゐる。ハンカチを振つて勞働者萬歲を叫ぶと向ふでも手を擧げて應じた!! 一緒に行から、職場を捨てなさい!!

電車も走つてゐる、自動車も通る、自轉車も、皆示威行列を他に見ながら動いてゐる、女店員も看護婦も女中さんも早く目覺めて凡ての交通、生產機關が唯一日休止したらどんなに愉快だらう、資本家階級がどんなに驚くだらう、想像した丈けでも胸の血が躍る。官憲と同志との衝突は所々で演ぜられた、一人檢束されゝば多勢で必死になつて同志を奪ひかへす、「おい又やられたぞ、皆しつかりと腕を組め、拔かれない様に、と赤腕章をつけた警備委員が一同に注意して廻る。

皆手を組み直して尚一層元氣よく「聽け萬國の勞働者」を歌ふ。行列の爲めに飲用水の用意が整へられてあつた、皆息もつかないで二三杯づつ同様に飲んで茶腕をほふる様にして行列に加わつた。あの水の甘さはメーデーに參加した者の到抵忘れ得ざるものである。警備の同志がもう先頭は上野へ着いたそらもつと元氣を出して歌へと勵ましに來る。

斯くして蜒々と帝都をねり歩いたメーデーの一大示威運動は、最後の勞働者萬歲の叫びの中に解散した、第十一回のメーデーを目前に控へて又多くの同志の胸にも共通の追憶を呼び覺めさせることであらう!!

高らかに歌へ

東京　一製本工女

今年もメーデーが近づくにつれ、私は始めてメーデーに參加した時の事がまざ〳〵と浮んできます。それは、どんよりと曇つた日でした。朝早く同志と共に家を出た私は、芝公園へと急ぎました。目的地に着いてみれば、すでに大勢の兄妹は高らかにメーデー歌を歌つてゐました。やがて勇敢な闘士の演說も終り、いよ〳〵越中島指してデモンストレーションに移りました。先頭には「婦人の深夜業廢止」「治維法反對」「言論集會出版結社の自由」等々數流の旗が風に翻へつてゐます、二萬人の兄弟が芝公園から、十數町に列を作りメーデー歌を高唱し數拾本の××を押立て目的地に向つて突進する時、私は大衆の威力をつく〴〵感じました。そして大衆の聲は、メーデー歌から××歌へと變つてきました。幾度かの官×の彈壓に、私の周圍の人々は次第に減少してきます。沿道の群集は私達を勢づけて與れます。或家では接待水を出してくれました。やがて、目的地へ到着しました。その時突然「日本××黨萬歲」と一人の同志が叫びました。それに應じる様に方々から「プロレタリア××萬歲」「勞働者を賣るダラ幹を排斥せよ」と云



ふ聲が一せいに起りました。そして××歌を高唱し赤靑のビラは、人々の頭上にまかれました。

只残念に思つたのは男子勞働者に比し、あまりに婦人の參加者が少數だつた事でした。現在ロシヤやドイツ等は、子供も、老人も、父も、母も、赤坊までが母の背に負はれて、一家總動員でメーデーに加はるさうです。早く日本でもさうなる樣に團結して、未組織の人に積極的に、働きかける樣にしませう。

メーデーに參加して

東京　一女車掌

午前十時車庫に集れ——五時頃にはもう眠がさめて時間の來るのが待ち遠しい。

車庫に集つた皆んなの顔は誰れも彼れも嬉しさうで張ち切れるばかりだ。私は夢中で手を一通り堅く握つて歩いた。今日出動してゐる意氣地無しは成可く私達と視線を合わさない樣に小さくなつてゐる。此の間入つたばかりの小田さんが不安さうな顔をして私に「本當に大丈夫かしら、解つて追ひ返へされるとくやしいわ」と言ふ。「大丈夫よ、ここに居る半數は貴女と同じ樣な人じやないの。二十一歳、明治四十二年、酉年。はつきり言はなくては駄目よ。」

電車の中からもうメーデー歌は始つた。御客に迷惑、——そんなことどうでもよい今日は私達の日じやあないか。芝公園はもう赤い組合旗をもつた兄弟姉妹と警官とで一ぱいだ。愈々二十一歳、明治四十二年、酉年の關所に來た。

皆んなうまくやつたわね——。ええ——竹田さんが追ひ返へされた。あんまり昂奮してつまつたのだらう、あの人のことだ何處かでもぐりこんで來るに違ひない。本當に馬鹿にしてゐる。一人前の働きをしてゐる私達を未定年だから參加させぬと言ふことがあるだらうか。一人でも多く參加させぬ樣にたくらんでゐるのだ。

右も左も中もないじやないか、この大勢の人達は私達と同じ勞働者なのだ、今日かうして顔を合せるだけでもこれ程の力強さを感じる。私達に何時もこんな力強さを感じさせない樣に、力強く戰はせない樣にジヤマをしてゐる奴があるのだ社會民主主義者——ダラ幹の奴だ。今日此處に集つてゐる兄弟姉妹達でその勞働者の敵を葬つてやりたい、そうして皆んなと堅い握手がしたい。

演說が濟んだ、サア出發だ。警官の垣の中を一支部ごとに區切られた。警戒が嚴重であればある程私達の力を恐ろしがつてゐるのだ。そして手をくむな、走るな、×旗歌ふなとすつかり勢ひのない行列にしてしまはうとしてゐるのだ。電車線路を横切る時しばらく立止まらせられる、それから前列に追ひ着くまでの間ワツシヨイ〳〵と腕を組んでかけ出すこの時だけは示威運動らしい氣分になる。區切られるまゝに制止られるまゝについて行く私の生氣地無さが自分ながらゞがゆい。私達の力の弱さが悲しい。

歌だけでも思ひ切り歌はぬと氣が濟まぬ。越中島に着いた頃はスツカリ喉がかれてゐた。明日のストツプ、オーライが氣づかれる程、越中島では又演說が始つた。芝公園でもだつたが此處でも又演說の内容が聞き取れない總同盟や、現實同

盟や其の他警官と仲良しの組合の辯士は中止をされなかつたが、戰鬪的な組合の辯士は直ぐ中止檢束だ。

「何——關東電機だ——」のび上つて見た時はもう姿は見えなかつた、横暴だ〱ワァーと地のひびく様な物スゴイ聲で演壇の方をめがけて押しよせた。檢束者を奪還しようとして警官と亂鬪が始まつたのだ。私は後の方に居たのでよく解らなかつた。演壇の上に何處の馬鹿野郞がメガホンで夢中になつて靜かに靜かにとやつてゐる。さわぎは間もなく靜まつた。そして後の二三人が演說して解散した。

かうして昨年のメーデーは終つた。今年のメーデーは間近かにせまつてゐる。メーデーは勞働者のお祭りだと、然しすつかり勞働者の世の中になるまでは單なるお祭りではない筈だ、總べては資本家を倒す鬪爭以外にはないメーデーも又全世界の勞働者が一齊に資本家階級に對して鬪ふ日なのだ。警官の箱の中に入れられて定められた歌だけを歌つて溫和しく歩いてゐる勞働者を資本家が見てゐる時本當に恐しがつてゐるだらうか？　昨年のドイツ勞働者の勇敢なメーデー鬪爭を聞いた。兄弟姉妹よ、今年のメーデーは本當に資本家をふるひ上がらせる示威運動としようではないか。



メーデーの朝

龜戸一紡績工女

一九二七年五月一日！

私達紡績女工がメーデーに參加するのは今年が始めてだ。しかも今年は丁度日曜日に當るんだ。私達の××モスリンからは八百名參加することになつてゐるのだ。私の部屋では全員參加するのでとても元氣がいゝ。リングのふゆちやんが、織部のきみちやんをゆり起して豫行演習をやつてゐる。滿廿一才でなけりや入場させないからみんな廿一才以上の稽古だ『おい、お前いくつだ。いくつになつたかてんだよ』寢呆けて答へられない。

『お、おれ三十……』

『此のアマ！　ぢや一體何年生れだ』

『う、まゐつた！　まゐつたよ畜生！』君ちやんは急にはね起きて大聲でやり出した。『私は二十二才であります……明治三十九年五月五日生れであります』『へゝしやれてやがら…日本のローザさまか、だがそんな寢呆けてゐたら危いもんだぞ、氣をつけろ…』ふん拳つく食はすな、誰が有馬ヶ原で寢呆けてゐたんだ』此の鬪爭でみんな起されて終つた。やつと東が白みかけてゐる。まだ五時のボーも鳴らないのに、ふゆちやんは今度は總場のぶちやんをつかまへた『おい、お前…』『ハイ私は廿五才であります、明治三十六年三月十五日生れであります』『嘘つけ！　二十五にもなつてそんな若い奴あるか？』『ナニ！　紡績の女工と輕業の女は何時まで經つても若いんだぞ』『異議なしゝゝゝ』其處でも此處でも『お前いくつだ』とやり出した。『おいみんな、そんなに小さくて、とお巡りが云つたら、南京米で大きくなれるか、と云つてやるか』『異議なしゝゝゝ』『それよか菜つ葉の虫で…と云つてやるか』『そんな事通じるもんか』…けん〱ごうごう喧かましいこと限りないが、なんといふ明るさ何といふ朗らかさの充ちた朝だ、七時三十分組合旗を先頭に凉々しい朝を有馬ヶ原さして練り始めた。

公休日の朝

窪田けさ子

汽笛がならないだけで
彼の女達の筋肉は無性にゆるんでしまつた。
公休日から公休日迄の十五日間
デニールを揃へんために
凝視を續けた眼は深くおちこんでゐる。
見番が
主人のお手先として
ベルトの音響にまけまいと
忠勤ぶる罵聲をぶつつけるので
鼓膜はとぼけてしまつて居た。
湯氣に向けられた髮毛は亂れて
首のない木枕からころげおち
兩のこの腕は
うすつぺらな二人寢の布團から
きゆうくつそうに投げ出されて居る。
十指は赤くたゞれて
病蠶を見る樣だ
清冷な朝の空氣も

四國の野よ

角野シゲ子

うるわしい風よ
あのなつかしい
ふるさとの野で
一面にしげつたしばくさを
しごき〳〵
ほそくしごいて
髮をゆつて遊んだ
その指先のいたさよ
長々とねそべつてわたしは
倘、あき足らぬ
土の香にむせたものだ。
今ごみ溜に捨てられた
みつばと
そのそばでをしげもなくのびた
その草の葉が

こゝばかりは
スッパイ匂ひが低迷してゐる
太陽は
げんじゆうな窓こうしと
そこにかけられた
よれ〳〵した幾百の着物から
すきみしてゐるだけだ。
その中で
彼の女達の魂は
どこを天かけてゐるのか？
セリプリンの罰金におびへて
ねがへりすると
からだ中の關節に
極度のさく取から來たる痛みが應へて。
目がさめた
そこへ食堂のおやじが
一とかどの支配者らしく
おいみんなおきろい、
おそいもんにはめしを喰はせんぞ
と……どなりまはつた
みんな首だけだして
おそいもんにはめしを喰はせんぞ
と—口まねして
つゝき合つて首をすつこめた。

はしなくもわたしに
暖かい花をふりかけてくれた、
この溝に流れてゐる
みゝずの群も
何と云ふ白々しい
都會臭さだ。
をさない年に
ふるさとを去つた女は、
あたゝかい情操と
素朴なあこがれを
いつの間にか失つてゐた。
もうせんごけの樣に
じめ〳〵した隅つこで
自分一人を生かすのに
困じはてゝゐる。
やはらかい四國の野よ、
お前は、自分自身ですら
も早や
搾取すべき何物もない
それをわたしは嘆いてゐるのだ。

應接室　前田河廣一郎

三階級のアメリカ女性

一體に、アメリカ婦人と云つても、その階級の相異によつて、婦人の社會的活動や、經濟生活の上に、階級的差別が生ずるものであるが、一般に日本人のアメリカ婦人に對して、ぼんやり持つてゐる考へはブルジョアデモクラシーの生ぬるい浴槽に、泳いでゐる小ブルジョア婦人の層であるやうに見える。

アメリカの社會構造の中でもこの連中が一番表面は花々しい動きを示してゐるやうに見える、だが本來の事を云へば、それはアメリカの社會構造の中に長い間ひたしておかれたどんな女性もが營む行動なのであつて、切りはなして特に、アメリカ婦人の特徴とか、美點とか、活動ぶりとか云ふ社會構造に連關を缺いた、み方だけを持つて來るべきものではあるまい。

あのアメリカに、やはり建國以來ズーッと移住民から次第にその故國の傳統や、歷史や、教育を失つて所謂アメリカ婦人となつたドイツ人、オランダ人、英國人、フランス人等の婦人をみても解る通り、それは決してアメリカに、英國との斷絶から歸化した一團の英國人系の婦人丈のもつ先天性である筈はない。

議論はともかくとして、アメリカの婦人には二つのタイプがある。その一つは、勞働婦人のタイプであつて、もう一つは他人の勞働を搾取して生きる有閑階級の婦人である。

この二つのタイプの——階級層の——間を往來してゐるのはいはゆるヤンキー、ガール型と稱せられる、小ブルジョア婦人層である。

他人の勞働を搾取して悅樂にふける富豪乃至は上流階級の婦人達は、やはりどこの上流階級婦人達もがするやうに、全く自國のあらゆる現象を輕蔑し、すこぶる保守的な、危險な趣味と外國における封建主義的遺制に、あこがれたりするやうなバカ〳〵しい日常行動を營んでゐる。

から云ふ人達は、いはゞ選ばれたる數千人、數百人或は數十人の間だけの、水ももらさぬブルジョア團結性を持つてゐて、毎日の樣なお茶の會、ダンスの會、ブリッヂの會、賭、競馬、お芝居等にふける事が唯一の時間空費法であつて、それをかゝやかしく盛りたてるために、無數のドレスメーカー、美容術師

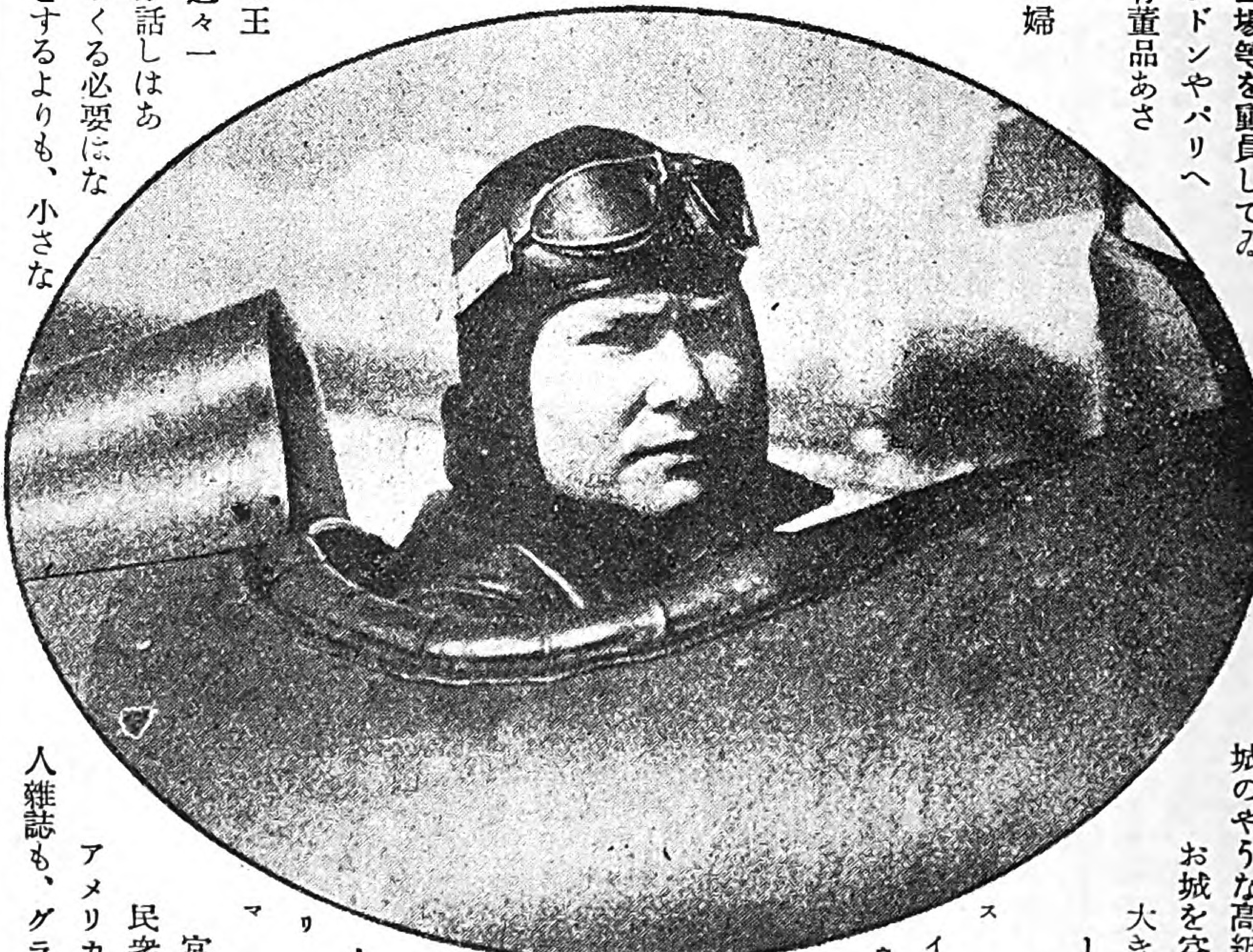
世界各國活動婦人の近狀

寶石商、コスメテック製造工場等を動員してゐる。そして合間々々にはロンドンやパリへでかけて氣のむいたまゝに骨董品あさりや、美術館まはりをする。

から云ふ一連のブルジョア婦人達が時たまプロレタリア出の俳優や、音樂家を、或はオペラの歌手を、自分達の間へ引上げたとしても、それは、その藝術家達がプロレタリア階級出であるからではなくて、ブルジョアのために、こと〲く骨ぬきになつてゐるからである。この婦人達の亂菜や、快樂主義や、貴族主義へのあこがれ等は到底日本の中流階級以下の婦人には理解出來ないものと思はれる。昔支那の王樣が大事な美妃のために、道々一つづつのお城を造つたと云ふ話しはあるが、歐米の王樣は、城をつくる必要はない、そんなまだるつこい事をするよりも、小さな城のやうな高級自働車に美妃をのせて、支那のお城を空中に、さか立にさして、三倍も大きい程のお城が、アメリカや、ヨーロッパ中には到るところにあるのである。たゞこの王樣が、さう云ふお城の門を開かせるのは、昔のやうに千人近くのお供をつれる事ではなくてふところから一枚の紙切を出せばいゝのである。

そして同じ紙切を、ウオール・ストリートや、パリの株式市場にさし出したと假定すれば、忽ち世界の商工業工場に、千や二千のストライキがぽつ發すると云ふものである。から云ふ風にして、アメリカのブルジョア婦人は彼等だけの特權階級の宮殿内に、住んでゐて、めつたに民衆と顏を合せる事がない。だから

アメリカの上流婦人については日本の婦人雜誌も、グラビヤ週間物も、又日々の新聞も



マリー・リンコルン・ヴツウイス

世界各國活動婦人の近状

餘り報道する機會がないやうだ。

次には勞働婦人であるが、私は屢々工場や、家庭や、街頭で男の勞働者が、かう云ふ事を云つてゐるのをきいた事がある。

「どうもかう女達が俺逹の職業を横取りするやうに、なつちやあかなはない。」

さう云ふ話をきいて、實際勞働者の職場や、事務所や、工場それからあらゆる生産部門に渡つた製作所等を覗いてみると婦人の數は實に多いのである。いつも紡績工場やレストランやホテルや洋服業從業員等のストライキがあるとすれば、きつと勇敢な婦人勞働者が先頭にたつて、逞しい聲をはり上げてゐる。

コロラドのラック、フエラーの鑛山のストライキに、いかに彼女達が盛な鬪爭を挑んだか。かう云ふ婦人勞働者を、オルガナイズする人にも、婦人オルガナイザーがあるのである。又婦人オルガナイザーを養成する組合本部にも婦人の幹部がゐるのである。勞働者と農民と小ブルジョアの間に、たへず主義の宣傳をする一般左翼新聞、雜誌の發行所等は殆ど半分以上婦人の編輯人、女子事務員記者等で充滿してゐるのである。

少し左翼的な講演會とか、記念日の催しとか演劇デーとかなると、そのお客は、八部通り勞働婦人やその同情者に依て占められる。現に歐洲大戰當時ニユーヨーク市で目撃した事であるが、私は女の士官と云ふものを、始めて男の軍服の中に發見しておどろいたものである。ところがそのおどろきは、女運轉手女車掌、女ベルボーイ、女巡査等々を目撃する事によつて驚きとしてのショックをなくしてしまつた。最近しば／＼勞農ロシアの赤衛軍に婦人部隊の行列して行くのを寫眞でみ受けたりするがあの歐洲大戰當時のアメリカの勞働婦人の活動を見、更に彼女達の工場における、事務所における、店舖における、街頭における日常鬪爭をみてゐた私はさ程不思議にも感じない。

現に、最近のニユーヨークの新聞はアブラハム、リンコルンのひまごにあたると云ふ女の人が、アメリカ飛行隊のパイロツトをやつてゐる寫眞をみせてくれた。

これ程までに、アメリカと云ふ大きな資本主義國の社會の構造から勞働婦人達は動員されてゐるのである。

おそらくこれから第二の世界大戰が起つたとすれば、アメリカの婦人軍隊が勞農ロシヤの婦人軍隊とタンクを、ころがし合ひ、飛行機を衝突させる事も有り得ないわけではあるまい。普通日本へ御亭主と一緒にやつてきたり、觀光團で、金を使ひに來たりする部類の娘さん乃至はお婆さんは、いはゆる中流の婦人であつて、その人達の日本に對する感想をきけば、いかんなくその人達の階級的イデオロギーが暴露するわけである。

彼女達は景色をあさつて歩く、フジヤマ、ミヤノシタ、ニツコウである。彼女達は勞働賃銀の低さを笑ひながら、馬の代りに、勞働する人力車にのつて、日本から外國に輸出され再び逆輸入される紙のパラソルをひろげてあるく。

彼女達の見る日本婦人は徳川時代の封建主義に、極度に脅迫された幽靈のやうな動作をする蛆虫のやうな自由意志を持つた頭に健康を害する程、重みと、油をのせた婦人なのである。

彼女達の日本の家屋をほめる時には、いかに鐵材やコンクリ

世界各國活動婦人の近状

ートが資本主義と軍國主義との爲にだけ使はれて、民衆の生活には使はれてゐないと云ふ事を忘れて、感冒と肺病とを知らずに、紙のとびら、マッチ箱の引き出しのやうな構造を輕妙にたゝへる――かう云ふ外國に對する無責任な程の小ブルジョア觀を持つた婦人達はアメリカの勞働婦人の上層にある、教育者やタイピストや、女事務員や、女優や、ダンスの先生や、牧師の妻君等に多いのである。言葉をかへて云へば、インテリゲンチヤの立場にある婦人達である。

この人達は皆樣も御存知の通り、いつもブルジョアの階級に旅行免狀をほしがつてゐる人達なので、この人達を通じてアメリカ婦人なるものが、多く紹介されてゐる事は、甚だしい錯誤であらねばならない。

事實かう云ふ事を通じてみても日本のプロレタリアート婦人がアメリカのプロレタリアート婦人と直接な知己を得るまでは無數のブルジョア的仲買人の手を經なければならない事が判明しやう。

で私達はフラッパーや、みぢかいスカートや、タンゴダンスや、斷髮のおきやんなヤンキーガールをみる事によつて、決してあれが代表的なアメリカ婦人であると云ふ事をやめやう。

私の知つてゐるI・W・Wのオルガナイザーにエリザベス・グーレー・フリンと云ふ婦人がある。最近の活動ぶりは知らないが、この人はオルガナイザーとしては、かなり實力のあつた婦人で私の知つてゐた時分は、三十近くでまだ獨身であつた。

この人の演説をきくと、大がいの保守的な勞働婦人でも、やはり壇上に立つて、自分も煽動的演説を、やつてみたくなる程彼女達を、全從業員の一人として、そのソリダリテイのためにふるひたゝせるだけの魅力があつたのである。

平素會ふと別に、理屈も云はぬおとなしい婦人なのであるが一たん、鬪爭の血をみると、彼女の目には、男性も女性もなかつた。そこには壓迫する者と、壓迫される者のえがいた "No Man's Land" があるのみであつた。この間日本の新聞や、雜誌に、自分達は非合法運動をやつてゐるんだ、私のする事はたゞちに、治安維持法に、ひつかゝるんだと、大言壯語をした一婦人の一定期間の拘留をくつた後で、鳴物入りで、又々非合法運動なるものゝ新聞雜誌にかゝせてゐるのを、どこかでみた私は、これは婦人參政權運動者達のふるい手だと思つて苦笑したのであるが、アメリカにも、よくかう云ふ賣名的左翼運動婦人はあるのである。

さう云ふ人々は、フジヤマやニッコウをみるつもりで階級戰へあやまつて、入つてきたので、默々として運動に從事し、默々として、戰線に戰つてゐる他の何千萬もの婦人を代表するものではない事はわかりきつてゐる。ほんとうの勞働婦人を代表するアメリカ婦人はやはり前に云つたフリン女史のやうなきはめて、ふだんは貧乏の灰色の中に、とけこんでゐる。そして常に大衆と心臓の皷動を一緒にしてゐる婦人でないかと思ふ。

現在の半非合法的なアメリカ勞働黨の鬪爭過程で、我と自らなのり出るコロンタイ夫人も、クルプスカヤ女史もない事は運動その物が示してゐる事である。

一端に躍る若人

松村シズコ



1

盈子は、洗濯したカーテンを客間にかけ替へて居ると、
「御機嫌は如何ですか、ミセス澤井。」
と、聲をかけた青年があつた、
薄いネヅミ色のスーツに同色の帽子を被つた、碧い瞳の青年が、道に立つて居た。
『お入り下さい、ジエームスさん。』
彼の顔を見ると、乙女の如くに赤くなる自分を意識すると、盈子は慌てて、チエアーから下りて玄關へ出た。明るい舖道に立つた混血兒のジエームスは、盈子がいくら進めても入らなかつた。
『何處かへ、お遊びにお出かけなのですか？』
脊高い彼のネクタイのあたりへ視線をやりながら、盈子は聞いた
『イヽエ、今日は、會合があるので、出かけたのです。』
盈子は何處となく咎めるやうな彼の返事に、心の底が、ちよつと淋しかつた。
『ミスター澤井は、御在宅ですか？』
『今朝は、早くから中島さんのお宅へ出かけました。』
ジエームスのやゝ剛しい感じのする二ツの瞳にも、冷たい鐵の觸感を連想さす引きしまつた唇にも、最近何んとなく憂鬱な影の動いてゐるのに氣がついたが、ハツキリと聞く程、仲のよい友人でもなかつた。それに彼の態度は、盈子に對して冷たかつたから、彼女は、優しい心になりながら、話せなかつた。
『お急ぎでせうか？』
『さうです。大變急いで居ます。戸川君の一家は、明日の生活にも困つて居るのですから、一日も早く會社と再交渉して貰くやうにお傳へ下さい。』
何んといふ冷たい事務的な口調であらう。しかし、どんなに冷たくされても、一分間でもよけい此の人の傍に居たかつた。
『時間がありませんから失禮します。お歸へりになりましたらどうかお傳へ下さい。』
帽子に形式的に手をかけたジエームスは振り向もしないで電車道の方へ去つた。その後姿を泣き出したい樣な氣で盈子は見送つた。
『マヽ、今のは、ジミーでせう？』
慌しい英子の聲が、新らしいカーテンから洩れたと、同時に、ウキンドを飛び下り、芝生の上を走つて、盈子のそばへ來た彼女は大きな聲で叫んだ。
『ハロー、ジミー、貴方のシスターは、お宅ですか？』
英子はオレンヂ色のドレスの裾をひるがへして、走つて行つたが直ぐ歸つて來た。
『マヽ、貴女は何故ジミーを、家に入れないの？』

やゝ險しい聲で、窓の所へ近づいた英子が咎めた。

『いくらおすゝめしても、お入りにならないのよ。』

『ジミーは、どうして、嫌がるのでせう。戸川の弘子の家へは、毎度の日曜に行くのよ。あんな汚ない家へ行くのに……ねえ、マヽ、ジミーは、パヽが大嫌ひですつてね。英子のパヽは、勞働者を泣かしては、財産を作るから大嫌なのですつて、パヽがあんまり金ばかり追ひかけるから、私は、たつた一人の友人にまで嫌はれるのよ。』

細い瞳から涙がポロリとこぼれると、英子は、其のまゝ玄關から家へ入つた。

太陽の哄笑が彼方の教會の裏へ沈むと、盈子はスクールガールの十六になるマリ子と、英子の三人で、淋しい夕食を濟すと、英子は裏のガレージから自動車を出して遊びに出て行つた。マリ子も自分の室へ入つた。盈子は編みかけたスエターにも興味がなかつた。半分出來上つたクツションの刺繍を、そばにおいたまゝ、ボンヤリとダイニングルームに坐つてゐた。

九時が打つて良人が歸つて來ても夕食は、と聞く程の親切さもなかつた。酒臭い良人の抱擁から逃れながら、

『今日お晝過ぎに、北條さんの子息さんが來られて――』

『混血兒か？』

小鼻に嘲笑を含ませた澤井は、小机の上の煙草をとつて、火をつけた。

『戸川の事で來たのだろう？』

『エヽ、戸川さん大變困つてゐらつしやるから、早くお話をして下さいつて。』

『同胞會だつて、百虫ちやあるまいし、何も彼もに手が出せるか。彼の男も大學を卒業してから、嫌に主義者ぶつて生意氣だよ。彼奴が、北條さんの子でなかつたら相手にもしないのだがなあ。』

『戸川さんのお話つて、どんなことですの。』

『お前も知つてゐるだらう。二十四五になる潤一といふ息子が、仕事中にケガをして、兩脚を切つたのだよ。會社は、二百ドルの手當金を出したのだが、戸川の親爺が俺に泣きつくから、同胞會の名で交渉して、入院費だけは出してもらつたのだ。ところが息子が退院して三四日目に、旅行してゐたジエームスが歸つて來て色々と口を出すのだ。兩脚を失つただけで二百ドルと入院費の二ケ月分を全部拂つてもらへば、上等だよ。それを二百ドルでは少い、一番働く息子を失つたから後の人間が困るつて、彼奴が同胞會へ度々來るから煩さいので再交渉しやうと濁しておいたのさ。彼の會社の支配人は、日本人に對して比較的に親切なのだからあれだけ出したのだ。』

『でも一番上の息子が不具になつてはお困りでせうね、英子の話では、弘子といふ娘さんを頭に、五人も小さいお子さんが居るさうですから、困つてゐらつしやるでせう。』

『不具になつた息子の事は別として、其の家族の世話までする義務

は同胞會にはないよ。戸川の奴は、會員にもなつてゐないのに、俺は同縣人のよしみで世話をしたのだからね、戸川のふだんの心がけが惡いから、こんな時に困るのさ。だから混血兒がいくら喧しく云つても、此の上會社に話せるものか。』

『………』

ダブルベッドの右側に健康な眠りに落ちてゆく澤井の顏に、理由のない憎惡を感じて、盈子は、スキッチをひねつてダイニングルームへ出て來た。

パジャマの上から來たシルクのガウンの紐を持てあそびながら、ボンヤリと晝間の碧い瞳が思ひ出された。

ハイスクールへ通つてゐるマリコのルームから、カチ〳〵とタイプライターを打つ音が聞えた。

2

同胞會長の片岡の右腕として、日本人間の有力家で成功者の一人澤井鐵之助は、今年四十八才の働き盛りであつた。貧しい商家の二男に生れた澤井は、二十年前に妻の京子と一緒に渡加して來た。

澤井より二ツ年上の京子は、近眼鏡の下の細い瞳に、金と、地位と、情慾が燃えてゐた。日本の女の少い移民地の男は、日本の女の肌に飢えて居た。二ドルで求められる白人の女の白い肌より、少し高價でも、同色の肌が好ましかつた。

京子は、獨身の男の爲に、飲屋を開業して、場合によつては××をも提供した。勿論澤井は默認してゐたし、男の自惚れと情慾は京子の爲に都合がよかつた。

妻君の忠實なる貞節によつて、やつとまとまつた金を手に入れた澤井は、一人の友人と共同出資をして小さい山を買つた。山が小さいから收入も少なかつたが、澤井と友人は無中で働いた。京子は金を貯めては良人に送つた。山は小さかつたが二ツに增えた。

其のうちに、白人經營のケー山が賣りに出た。其の山は、製材所ももち、後には海を控えて理想的だつた。野心ばかり大きくて氣の小さい澤井がマゴ〳〵してゐるのを、友人は勵まして白人から金を借りて山を買つた。

山は豫想通り材木も豐富で木の質も素破らしかつた。借金が、半分位すぐに返濟できたのも友人の果斷的商業政策の結果だつた。この恩人に近い友人が、何んの遺言もなく突然死んで、山は澤井が獨占した。變な噂も擴つたが、それは直ぐに消えてしまつた。

成功の一端に取りついた澤井は、妻も二人の子も忘れて一年中の大半を山で過した。昔は生活の爲に提供した京子の肉體は享樂の爲に異性を物色するやうになつた。

長男の鐵夫が大學の三年、英子がハイスクールの一年の時、京子が死んだ時分には山の借金は全部返濟され、一年に萬を越す利益があるやうになつた。そして其頃には、大學を出た鐵夫が自動車と衝

突して死んだので、其の骨を持つて英子を連れて日本へ歸省した。

彼の實家も彼の恩惠で村でも有數の金持になり、昔日の友人たちを搾取して呑氣に生活して居た。十幾年の間に、素破らしく出世した澤井一家に對して村の人々は不審の瞳を光らせたが、金持の前では昔から屈辱にならされてゐる人々は、澤井の成功を祝した。澤井は村長の姪で私立女學校を出た二十の盈子と結婚して、半年程滯在すると、其のまゝ直ぐカナダへ歸つて來た。

山は安心の出來る 支配人にまかせて、澤井は若い妻君を愛撫した。田舍娘の盈子は、想像以上に惠まれた物質に有頂天になつた。

丁度結婚して半年、ヘスチング街に事務所を置いて居る澤井から電話がかゝつて來た。

『盈子？ 今夜、日本のゲントウが來たから、行かないか？』

『ゲントウ？』

『さうだよ、ゲントウだよ、坂妻が主演ださうだ。』

それでやつと、ゲントウが活動寫眞のことゝ解つた。

同胞會では副會長として、日白人の間に、手腕を認められ、日本人間では、其の雄辯さに人氣を博して居る澤井の口からゲントウなどいふ言葉を聞いたので、盈子はすつかり驚いた。一度も聞いた事はなかつたが、澤井の演説といふ物を考へたゞけでも冷汗が流れた。

其の後注意してゐると、澤井は、學力は、尋常科の六年生位であつた。盈子にすゝめられて、本を買つて來るのを見ると、「雄辯」か「講談倶樂部」であつた。ウンザリした盈子は、物質以外に澤井からは何物をも求めなかつた。

結婚して六年目、良人のすべてに盈子は落膽してしまつた。

先妻の子の英子は、いわゆる日系市民タイプの丸顔の鼻の低い娘であつた。英子の胸一杯を占領してゐるのは、多くの第二世と同じく、白人を戀人に、友人に、持つことであつた。

彼女は、父を輕蔑してゐた、若い母は友人としか思へなかつた。小使ひは充分あり、乘り廻すのに、買つてもらつたセダンは一九二×年型であつた。彼女は多くの日本人の友人を持つて居た。新らしいダンスは巧みに覺えた。同級の白人の娘に似合つたからと、いつて、グレタガルボウ好みの帽子を平氣でかぶつて歩く彼女であつた。最初は、經濟學をやつてゐたが、親しい友人――それも白人の娘――が、美術科にかはると、自分も一人で決めてその科に加はつてしまつた。彼女は、カナダで生れ英語で話し食物も、日本食を好まず、すべてが、白人と、少しも變らなかつた、彼女は、日本人でありながら、日本を知らず――父に伴はれて日本に行つたが、それは彼女にとつて、美しい日本着物を買ふ以外に望みはなかつたのだ――さりとて、白人になり得ない彼女であつた。

『損はれたる(スポイルド)第二世(チユウトレン)』の、彼女こそ、よきモデルであつた。

結婚に空虚を感じた盈子と、白人を友人に持つ事に誇りを感じてゐる英子の前に、ジエームスが現はれたのは、最近であつた。

北條氏は「西園寺公」と、呼ばれて居た、此の西園寺公は、第一貧乏であつた。煙草も酒も飲まなかつた。女は、勿論、嫌ひらしかつた。北條氏の過去を知つてゐる人は、一人もなかつた。

北條氏は、貿易業をして居た、學生時代は極く父に柔順であつたジエームスは、東京の大學を卒業して歸へると、カナダ共產黨支部に出入し職業は、ゼネラル、モーター會社の職工である。

彼の一番親しい友人が、戶川の息子潤一だつた。カドバ街に住む戶川次郎太の長男で、ジエームスより一ツ下の二十五であつた。

3

戶川次郎太もまた移民の古顏だつた。けれど、この男は澤井のやうにカナダから惠まれなかつた。成功者澤井とは反對に彼には外國へ來てまで貧乏がつきまとつた。次郎太は小作農の四男に生れた。貧しい家に生れた子供は、一人前に、步けるやうになると、牛馬の如く働かねばならなかつた。

貧乏のくせに家名を誇りとする、戶川家では、二組の老人が健全で居たが、それは食ふ爲に生きて居るやうなものであつた。働き者の母は、太陽を拜む時間さへ惜しんだ。酒飲みで、氣の弱い父と、八人の子供と、老人四人を、母は、どんなに働いても食べさせては、行けなかつた。

次郎太は子供の時から自分で食ふといふだけでは足りなかつた彼は食はせなければならないといふ觀念にいつも突つつかれてゐた。で十四の時、酒屋の小僧にやられたが、其處の主人に金を借りて、二十の春には、金のころげてゐるといふアメリカへ働きに出かけた。

次郎太は、鐵道工事の工夫として、桑港の田舍で働く事になつた。見渡す限りの大平原で、慣れない食物と、言語の通じない不自由さに堪えながら、次郎太達は四組に分けられて――未開人の日本人だから何時、暴動を起すか解らないといふので、一組を三十人足らずづゝに、幾組にも別けられてゐたのだ――監督の碧服とピストルに脅えながら期限の切れるをたのしみに働いてゐた。日本字の滿足に書ける人さへ三十人の中に一人も居なかつたから、皆は、もらつた賃銀を腹巻きに入れて、毎夜、勘定してたのしんだ。

それに目をつけたのが支那人であつた。言葉も何處か共通點があり接近するのに容易であつた。彼等は賭博の面白味を敎しへた。退屈してゐる日本人は、直ぐに覺えた。腹巻きは、グン〱減つて行く。日本へ送金する筈、否、持つて歸へろうとした金は、賭博に消えて行つた。

誰も彼も若かつた。酒が欲しかつた。女が戀しかつた。蟻の如くの打ち廻る情慾は、勞働者を强暴にし、殺人は平氣で行はれる結果だつた。三十人の中でも體格のよかつた佰助といふ正直な靑年は堪えられない情慾のやり場に其の頃、工事場から、十哩離れた村の黑人と白人の混血兒で十八になる娘に、たつた一回、キスした。

翌日は、村中に其の噂が擴がり、救ひを求める伍助を引きづつて、村人は歸つた。それ限り、伍助の姿は永久に、地球から消えた。

第二、第三、と日本からドン／＼移民が送られてくると、次郎太達もやつと、米の飯にありつけるやうになつたが、皆が、幾ケ月ぶりかの日本食故に、日本を思ひ、妻を、肉親を連想して、三杯も食べる者はなかつた。

春が過ぎ夏が逝つて、しぼり取られた次郎太達二百人――黑人、支那人――は、桑港へ送られた。支那人の安ホテルに泊つて、久振に、女の長いスカートを引きづつて歩く後から、ゾロ／＼歩いて居ると、ふと街の角で、黃色のとがつた顏をした女の橫顏をみつめた。

「日本人だ、日本の女だ」次郎太は、無中で女を追つた。女は恐れて、スカートを、手に持つて逃げた。ホテルへ息を切らして歸つた次郎太は、友人達に告げた。友人達は、カードを投げ捨てゝホテルを飛び出した。それが日本人でなく、支那人である事が解るとガッカリして、皆は、笑ふ力もなかつた。

そんな思ひをして、今年こそとさう思つて貯める金も、日本へ歸る旅費にはならなかつた。賢い日本人の中には、女を、うんと儲つて、それを商賣に哀しい次郎太たちの金を絞りとつた。

次郎太たちはまた歸國の金のために働いた。アメリカとメキシコの國境附近で、暑熱と風土病と鬪ひながら未開地を開墾して行つた。その土地が肥えてくると、白人は勞働者たちを邪魔扱ひにした。

日本人は、仕方なく、又外の未開地で、暑熱と風土病と鬪ひ赤土の水を飲みながら開墾の鋤を下した。

結局は、日本人は、だん／＼未開地へ、未開地へと、追ひやられた。食ふ爲には、皆は默つて働かねばならなかつた。

次郎太は、アラスカに二夏を過して、やつと、旅費を作つて、三十四の春に、日本へ歸つた。彼の血と汗の結晶の送金は、何に使はれたのか、家は、依然として、貧しかつた。

戰爭――日清戰爭――で不具になつた長兄が寢て居た。三人の老人は死んで居たが八十近い祖母は、中氣のからだを、暗い納屋でうごめいつて居る。

『お母あ、日本は、戰爭で、景氣がよかつたといふことだの』

『次郎太、それや、地主さんや、商家の人のことよ、わし等、どんなに働いても、やつと食べるだけよ。』

母は、次郎太の送金で買つたといふ田地へ案内した。其處は水田であつたから、大變困ると母はこぼした。いゝ土地はあまりに高くて手がつけられないのだと云つた。

日本に居ても食へない次郎太は、百姓娘のタミと結婚して、今度は、カナダへ渡つて來た。そして子供が出來た。

『タミ、三千圓貯つたら日本へ歸へろう。』

其の頃の次郎太は、それが最大の希望であつた。生れた子供は、三ッか五ッになると、日本の母の家へ預けた。そばに居ては夫婦が

働けなかつた。

潤一が十四の春、中學へ入學させてくれと手紙が來た。

『潤一は、俺達を金持だと、思つてゐるのかなあ。』

『パヽ、二人が一生懸命働いて、子供には勉强させませう。あんたでも、勉强しておれば、澤井さんのやうに運が開けたのに。』

これには一言もなく、次郎太は潤一を中學へ入學させた。潤一は秀才で中學を通した。

潤一から手紙がくると、一週間位は、キャンプ――次郎太は殆んど山の仕事をしてゐた――の人々に見せて廻つた。

潤一が中學を卒業して、次郎太よりも五寸も脊高くなつて渡加して來た。兩親の生活を見た彼は、自分が中學へ通つたことの贅澤さが腹立しかつた。山を下りた親子は、街へ來て働いた。

働けば殘る昔と違つて、働いても／＼生活に追はれた。

『タミ、千圓貯へたら日本へ歸へつてくるかな。日本は、櫻が全盛ぢや』

花のない淋しい植民地であつた。次郎太がさういつて、さゝやいたのは、もう生まれまいと思つた五人目の子供のバスデーの朝であつた。毎年の流産と貧乏に疲勞したタミは、健康を害して入院した。

そして八人目の子が又流産したと、醫師は告げた。

『潤一や、日本へ歸へるのはもう停めたぞ、せめて、甘い物を食ふのがたのしみだ。』

潤一が生れる頃から節酒してゐた次郎太の酒量は、みる／＼增えてきた。日本に居る長女が流感で死に、タミが、不思議に九人目の子を姙んで七ケ月に流產して又入院したのは、此の春であつた。

『潤一、達者で居れば、今に、お前と、弘子と、一郎が、日本へ歸へらしてくれるぢやろう。』

『さうよパヽ、さへ、馬鹿つぺーを買はなかつたらね。』

『アハヽヽ、こいつは參つた。俺も二十年間、隨分買つたが、たつた七十ドルあたつただけぢや。弘子、二十年間に買つた馬鹿つぺーはいくらになる?』

『さうね、一年に二十回買つたにしても、十年で、二百ドル、二十年で四百ドルよ。』

『四百ドル? すると日本金の千圓近い金ぢやなあ……』

潤一は、父親の嘆息がをかしかつた。

『パヽ、僕が、もう五年しない內に日本へ歸へして上げますよ。』

潤一はさう云つて仕事へ出かけた。長い外國生活に疲れた次郎太にとつて、海の彼方の日本は、懷しい夢の世界であつた。

其の日も、夕方から仕事に出かける次郎太は、タミの病院を訪れて、やつと、仕事先きのビルデングに落ち付くと、潤一と、同じ會社に働いてゐる中に青年が、眼の色をかへて、飛んで來た。潤一が、會社で負傷して、病院に送られたと云つた。

ふだん、口の輕い信用の出來ない中根であり、四月一日であつた

から次郎太は、笑つて取り合はなかつた。憤つた中根に引きづられるやうに自動車に乘つて馳けつけて見ると、手術の終つた潤一は、蒼い顏をして、それでも元氣らしく、父に話しかけた。

『パヽ、僕の兩脚は、ヒザから下が兩方とも、なくなつたのよ。ミチコの人形さんのやうにね。』

淋しく笑つた息子も、石のやうに立つてゐる父親の眸にも、涙が一杯たまつてゐた。

日本人經營のドレス屋に働いてゐる潤一の妹の弘子が、オツ〱と入つて來た。彼女は父親より早く驅けつけたらしい。

昏々と眠る子の枕元に默念と坐つてゐる次郎太に、弘子は話した

『パヽ、マヽがね、兄さんのケガを聞いてから、氣が變なのよ。私が、此處に居るからパヽはマヽの所へ行つて頂戴。』

此の病室の裏手にある廣い離屋の病室で、泣きぬれてゐるであらう、老妻の傷々しい姿が浮んだが、それ以上に、潤一を失つた明日からの生活苦が、次郎太にヒシ〱と迫つて來た。

不幸は、どんな飛行機より早いスピードでやつて來たのだ。

4

タミは、其のまゝ病院に移された。會社からもらつた金は、タミの入院費と、負傷の快くなつた潤一の足がはりの車になると、後は殘らなかつた。次郎太の友人は、口を揃へて、云つた。

『我慢しろよ。相手が毛唐ぢや仕方がない。長いものには卷かれるといふからね。』

どんなに苦しくても、巨大な資本家に對しては無學な一日本人の次郎太には、手が出なかつた。

退院した潤一が、日本の人力車に似てそれより小型の車に一日中坐りながら狹いルームを廻つたり弟達に押されながら鋪道を、歩くのを見ると次郎太の心は、訴へ所のない憤りと悲しみに燃えた。

『二百ドルで人間の脚が、買へるなら、俺は、生命を賣つて、潤一に買つてやるぞ、誰か持つて來い、二百ドルの兩脚を持つて來い』

醉ふと、泣きながら次郎太は口走つた。

三つの邦字新聞は、潤一のケガを三行ばかり報じて、會社の過失など一文字も書いてゐなかつた。

貧しい一家は、何處の國へ行つても、振り返へられなかつた。

潤一一家の貧困など、烈しい野心の競技場である移民地に於ては、小つぽけな存在であつた。否、存在價値さへ認められては居なかつた。

5

明るい日曜日の朝弘子は、精神病院の母を見舞つて歸つて來ると、潤一は、鋪道の梨の樹の下で、讀書をして居た。

夕方から仕事に出かける次郎太は、ベッドの中に眠りを貪つてゐる

た。四人の弟妹は、太陽の下で遊び戯れて居る。家に入つて父親のパンツを整理してゐると、兄の車に手をかけて話して居る長身の青年があつた。

ネヅミ色の帽子の下から覗いたブロンドの髪に見覚えがあつた。

『ハロー、ミス弘子、此處にお出でなさい。』

そつと覗いたつもりであつたが、破れた、カーテンから見付け出された。

『ジミー、今日は御天氣ですね。』

『さうです。貴女の頬の如く。』

『そして、貴方の眸の如く美しく澄んでゐますわ。』

クス／＼と表の二人は、笑つて居るらしい。

『弘子、此處へお出で、風が吹くよ。』

梨の樹の下に、名の知れぬ白い花が二つ三つ咲いてゐた。タミの丹誠であらう。此の春作つた父の手製の垣は、クギがゆるんでガタ／＼した。ジエームスは、小石で、打ちつけて與れた。

樹の下は影になつて、涼しかつた。

『隨分、お話がありますね、何んのお話ですか？』

ジエームスさへ訪れてくれれば、元氣になる兄であつた。

『先週ガリンホールで黨の會合があつたのです。それを兄さんにお話してゐたのです。日本とは、内容が違ふのでなか／＼おもしろいのです。』

潤一に煙草の火までつけて渡したジエームスは、フウと煙りを上に吹き出しながら、一番末の六ツになる女の子を、揶揄してゐた。

『さう／＼、私、すつかり忘れて居ましたわ。先日は、又、色々と御心配かけまして、済みません。おかげさまで……

『アハ……ミス弘子は、今日はすつかり内氣な日本娘ですね。』

『父も非常に喜んで居りますの。おかげで皆が助かりましたわ。』

『ジミー、今度は、心配かけて濟まなかつたね。』

潤一も、妹の言葉に續いて心持ち頭を低げた。

『二人共、今日はおかしいですね。彼の事は、もう濟んだのです。それに、僕として、皆さんからそんなに禮を云はれると、心苦しいのです。旅行から、もつと早く歸つて居れば、うんと交渉するのでしたが、少しおそくなつたので、思つた半分も出來ませんでした。』

潤一は、ちつとも恩に着せない友人の心が嬉しかつた。澤井の手を離れて、ジエームスが交渉して與れたのは火曜日であつた。そして、三日目には、澤井が三ケ月かゝつて、交渉して與れた入院費の二倍半の半額だけ持つて歸つて與れた。後は今月中に會社から送つて來る筈であつた。

『ホウ・ミス弘子、今日は、こんなに晴れて居ますよ。兄さんと一緒に散歩しませう。』

涙ぐんでゐる弘子を、ジエームスは扱ひかねて散歩に誘つた。

弘子は兄の車を押した。ジエームスは子供の手を引いて、ソヨソ

ヨと風の吹く舗道を歩いた。

『ジミー、皆、愉快さうだね。』

潤一は、右側にならんで歩いて居るジエームスに聲をかけた。

日本人街のカドバ街には、白人の影は見えなかつた。日本人の弘子達と一緒に歩くジエームスを、不思議さうに振り返つて見る日本人のミセスもあつた。

子供達は、皆明るく愉快さうに騒いで居た。潤一はそれを見て云つたのだ。

『僕は、よく夢を見るのだよ。それが、殆んど、歩けるやうになつた夢ばかりだ。こんなに街は明るいのに、車に乗せられて、病人のやうに、老人のやうに、二十五の靑年が散歩してゐるなんて、あゝ、たまらないなあ。肩手でも或は兩手でも失つたのなら、まだ歩ける。しかし……』

弘子もジエームスも、すぐには慰める言葉が出なかつた。

と丁度、パウエル、グランドでは日本人が四人と、支那人が六七人でベースをやつてゐた。四人の靑年の中で一番モダンなスタイルをした福井が、弘子の戀人であつた。

ジエームスは救はれたやうに救手の福井に聲をかけた。

『福井君、今日はサンデーだといふことを忘れてますね。そして大きな忘れものがある。』

『僕は、何を忘れましたか？』

『貴方の後のミス弘子は、朝から貴方の訪問を待つて居ました。』

振り返つた福井は、熟れイチゴのやうに赤くなつた弘子を認めると高く笑つた。

『ジミー、君のいふ忘れ物とは、彼女のことですか。僕と彼女は、今朝早く、お母さんの見舞に行き、先刻歸へたばかりですよ。』

『ダアー』

と背の低い支那人が云つたので、皆が聲を揃えて笑つた。潤一まで笑ひ出した。

風はあつてもグランドは暑かつたので、皆は、引き返へすことになつた。中根が走つて行つて、アイスクリームを八ッ買つて來た。女の子は、食べながら一人でグランドを横切つて、歸つて行つた。

七人はクリームを食べながら、潤一の家へゾロ〳〵歩いて來た。福井と、ジエームスが、潤一の車をパーラーに抱えて入れた。

玄關に帽子をぬいだ靑年達は、パーラーにそれ〴〵坐つた。暑がりの中根は、オーバシヤツの上に着てゐるスーツをぬいで、ポーチに椅子を出した。福井と山崎とは、カナダ生れの日本を知らない靑年、中根は芝居とシネマ以外には何んにも知らない日本生れのカナダ育ち。潤一の中學時代の親友の市村は、北條氏の事務所に働いてゐる文學靑年だつた。中根が、肥えた身體で、上手にチヤアルストンを踊つて、皆を笑はせた。

先週の發聲映畫『カナリヤの殺人事件』が話題に上つた。ルイズ

ブルックスの好きな福井が、盛んに映畫通を振り廻してゐた。と、ポーチに坐つて居る中根が、慌てて叫んだ。

『オイ〳〵皆、柳瀨のミセスが通るよ』

ドアーの傍に居た弘子は飛んで來た。潤一まで首を覗かせた。三ッ位の短いパンツをはいた男の子の手を引いたミセス柳瀨の黑い瞳が、こちらに氣がついたらしい。

大勢の男性から見られるからであらう。ツバの狹い白い帽子の下の頰が、サアッと、赤くなつた。

『ミセス、何處へ行きますか？』

中根は、直ぐに聲をかけた。

ミセス柳瀨は、深くエクボをつけて、微笑した。

『ミセス、お入りなさい、』

潤一は、少し赤くなつてすゝめた。タミと同村であるミセス柳瀨は、潤一や弘子をよく訪れた。讀書好きの潤一は、ミセス柳瀨から借りてはよく讀んだ。よく遊びに來るといふものゝ一ケ月に二回位であつた。靑年達は、皆、識つて居た。

中根は、ミスター柳瀨が脚本を書いたり舞臺監督をする關係上。市村は、北條氏の支配人が柳瀨であるから。福井は、自分の姉がミセス柳瀨の尊拜家だから。山崎は、美人の噂を聞いてゐたから。

潤一に主として、ミセス柳瀨は話した。そして弘子にもタミの容體を聞いた。ジエームスは、男の子を抱いて、低い聲で何か話して居た。子供好きの中根はポケットを探して、チョコレートを與へた。

ミセス柳瀨は別れを告げて、カドバ街を曲つていつた。

『柳瀨のミセスは、痩せていよいよカミラ・ホルンに似て來たね。』

『オ、神よ、願はくば、僕の妻に、彼女の如き美しき女を與へ給へ。アーメン』

中根の言葉に、皆は、笑ひを爆發させた。

『潤一君、ミスター柳瀨は、社會主義者だつて、ほんたうか？』

山崎が、聞いた。

『さうだよ、日本に居る時、お父さんの工場のストライキに加つたり、兄さんの小作爭議に、小作人に味方したので、すつかり憤つた父親から追放されたのだつて。』

『だつて、をかしいね。そんな事位で日本を逃げ出すなんて、雷親父の一喝に驚いて、アメリカへ來たとは想像出來ないよ。それに、柳瀨さんが來たのは、アメリカに新移民法實施以後であつたし、カナダへだつて、むやみに來ることは出來ないさうだよ。』

『僕だつて、委しいことは知らないよ。何んでも、有名な事件――そら、〇〇事件に、關係して居たので、お父さんが自分の名譽を考へて、うんと金を持たしてアメリカへ來させたさうだ。だから、アメリカ上陸の時でも、ボンドを積んで上陸したのだといふ話だよ。そして、オタワに一年位居て、北條さんの所へ來られたのだよ。さうだらう、ジミー――。』

『さうだよ。』
『○○事件つて、なんのことだ。』
『だから僕が、いつも本を讀むべしとすゝめるのだよ。福井なんか、シネマへ行く時間をさいて、少しは日本の本を讀め。』
『僕には、日本の本は、ちつとも解らないよ。』
『市村、文句を云はないで○○事件の說明をやれよ。』
『○○事件といふのはね。』
市村が、三人に、委しく話して居るそばで先刻から沈默してゐるジエームスの、濃い眉のあたりにイラ〳〵した影を認めると、潤一はそつと聞いた。
『ジミー、君は今日、約束してゐるのぢやないか？』
少し赤くなつて、ジエームスは否定した。
『ジミー、まだ解決がつかないのか？』
『ジヤックにも、幾度も云はれるけれど、現在の僕にとつて、彼女の存在は、何よりも尊いのだよ。』
委しい事を知つてゐるのではなかつた。相手の女性が何人であるかといふ事すら知らなかつたが、潤一が、彼の戀を發見したのは昨年の夏であつた。いつも憂うつにして居る友人を見て、其の苦惱のどんなに深いかといふ事を知るのみであつた。
『ジミー、僕も、最近、苦しいことがあるのだよ。』
『君が……』
『相手は、美しい妻君だが、』
女らしい好奇心で、こちらの話を聞いてゐる弘子に氣が付くと、潤一は中止した。
『アハ……、市村は、社會主義者の卵だね。』
『もうヒヨコになつてゐるのだらう。』
中根の言葉に皆吹き出した。若い青年の高い聲が狹いルーム一杯に充滿した。
『喧しい奴ぢやなあ、眠れやせんがな。』
次郎太が、寢卷のまゝで、ドアーを半分開けてどなつた。
『をぢさん、市村が社會主義の話をしてゐるのだよ。』
『社會主義の話より……』
次郎太はジエームスを認めると、慌てゝドアーを閉めたので、弘子が笑ひ出して、それに續いて皆が笑つた。
『お前達笑ひの神さんでもついてゐるのだね、よく笑ふ奴ぢや。北條さん、先日は、どうも、色々と、有難うございました。お父さんはお目にかゝりまして、お禮を申し上げましたが、貴方は丁度、お仕事に行かれて留守で失禮しました。私も、お父さんのお世話で二つも仕事をみつけまして、時間の都合もつき、割にらくで、それに、百ドル近くも取れますので、どうやら皆な養つて行けます。潤一にも話したのです。北條さんお二人のごおん忘れちやならないよ。同じ日本人でも澤井の奴には……』

『パヽ、ジミーが困つてゐるわ。パヽつてば、日本式にお辭儀するものだから、ジミーが笑つてゐるぢやないの。』

『いや、これはどうも、とにかく、あれで一家は助かりました。お金も、三四日中に送ると、昨日手紙が參りました。』

幾度も禮を云つて、次郎太がケチンの方へ去つた。ジエームスが、用事があるからと云つて歸つたあと暫らく、沈默が續いた。

『市村さん、柳瀨のミセスは、いつも淋しさうね。』

先刻の淋しい微笑を思ひ出しながら、弘子は市村に聞いた。

『それや淋しい筈さ。ミスターはあんなに素晴らしい美男子だらう。毛唐の娘だつて振り返へるよ。』

口の輕い中根が云つた。市村は立ち上つて窓から、煙草を投げ捨てゝから話した。

『ミスターの浮氣ばかりぢやないだらう。先々月號の日本雜誌に、ミセスの小說が出て居たが、ミスターの思想的變化を悲しんだやうなことを書いて居たよ。』

『ミセスは小說を書くの？』

『さうだよ、弘子、ミセスは國の新聞にもよく創作を出して相當有名なのだよ。』

『兄さんは、ミセスが好きだから、よく知つてゐるのね。』

弘子は笑ひながら、赤くなつた兄を見た。

『彼のミセス、幾年だらう。』

『二十五位だらう。』

『僕は、二十位だと思つた。』

『市村、柳瀨さん夫婦と、中島夫婦はよく似てゐるね、ミスターは主義者、ミセスは小說家。』

『中島の主義者は、チヨコレート、クリームだよ。上が固くて、中が柔いのだからね。ミセスだつて、明治時代の作家だよもう彼の女も過去の人間だよ。あんな人が主義者だと思つたら違ふよ。』

『だつて、中島さんは、日本の有名な主義者を招く計畫をたてゝゐるのだよ。雜誌にだつて、中島さんの事が出てゐたよ。』

『あれはね山崎、若い燕の記事だよ、あんな記事に出てゐたからつて立派な人とはいへないのだよ。日本の立派な主義者といふのは、オー氏の事だらうけれど、オー氏は、中島のレツテルを信じて居るから、招かれゝば、來る豫定だつたのだらう。君達も、日本のジヤーナリズムに迷されたり、中島の下らない宣傳に迷はぬやうにし給へ、中島だつて、「勞働者の味方」をスローガンにしてゐるけれど、結果に於て、勞働者を搾取してゐるぢやないか。中島は過去に少しでも秘密を持つた人々を怖脅（きようかつ）して金錢を取つたり、何んにも知らないキヤンプの人々を、うまく煽動して、色々の理由をつけて、金を搾取してゐるぢやないか。そんな行動をする人間は、決つして主義者とはいへないのだよ、眞實に、勞働者の味方をして、資本家と鬪つてくれるのが僕達の味方なのだ。中島のやうに私腹を肥やす一

つの方法として、主義者を振り廻すのは最も憎むべきことなのだよ。昔は、立派な主義者として彼も存在してゐたかも知れないが、今日は堕落してゐるのだ。日本に×××は必要ないとか、日本にも、×××の如き大きな××がくると、君達に教しへて居るだらう。しかし、それは皆下らない自己宣傳の一つだよ。君達は、もつと日本の本を讀み給へ、そしたら、日本もよく解つてくるよ。日本人を親に持つ我々は、どんな場合にも結局は、日本人として、生きて行くのだからね。』

潤一は、噛んで含めるやうに、山崎達に教しえた。

弘子に手傳はせて、次郎太がイチゴを持つて來た。

『潤一の議論がはじまつたね、さあ、皆一休みして、イチゴを食べよう。』

食慾の盛んな青年達は、テーブルへ集つた。

『オイ、オイ、中根、ユウは、そんなに澤山、ミルクをかけちやいけないね。』

次郎太は、イチゴの大きいのを揃へて潤一の皿に入れてやつた。

イチゴを、ホウクで潰しながら不滿らしい顔をしてゐた山崎は、ひざの上で、イチゴを潰してゐる潤一に話しかけた。

『潤一君、そんなに、悪い中島さんなら、領事が取り締つたらいゝぢやないか。』

『それはね、かうした國に來てゐる日本人を、領事は取り締る權利を持つてゐないのだよ。外國政策の下手な日本××の無鐵砲さによつて、人形のやうに送られてくる領事は、チョッキのエリに手をかけて、ブルジョアから取り巻かれて居ればいゝのだよ。第二世の思想が、如何に惡化しやうと、日本人がどんな不法な排斥をされやうとも、威張つて居ればいゝのさ。領事なんていふものは……』

『潤一、そんなことをいふものぢやないよ、領事さんは日本の政府の代理だからね、萬一の時には、どうしても、すがつて行かねばならない人だよ。』

『パヽ、日本の××の役人の頭はね、表の舖道より堅い頭をして居るのだよ。そんな人間の無方針な移民策が、結局は、今日の排斥の最大原因なのだよ。パヽの時代から、少し注意して居ればいゝのに、現在になつて、中學を出た人間でないと移民として送れないなんて、馬鹿らしいぢやないか。ブルジョア政府のやることは、多くの場合、道化役者のやりさうな滑稽ばかり演じてゐるのだからね。領事だつて、ブルジョア政府の手先きだらう。來た當分は、同胞の爲に盡したいとかなんとか大きいホラばかり吹いて、御用新聞にかつがれて、ブルジョアに煽てられて、やつた仕事といふのは、結局、日本人の極く一部のそれもブルジョアの利益になることばかりぢやないか、それで、一大事業をした氣になつて、濟して居るのだもの。それぢや、底に蠢いてゐる貧しい同胞の爲には、ちつともならないのだよ。スポイルされた第一回は駄目として、恐ろしく増える

多くの第二世の爲に、もつと路を開いてやればいゝのだ。日本の下らない連中が視察して、大きなほらを吹いてゐるのを讀むと……』

『もういゝよ潤一、お前は、すつかり主義者になつたぞ』

『をぢさん、僕も潤一君に大賛成なのだよ。此處で生れて、大學を卒業しても、白人の所には、使つてくれないし、結局、日本人の所で安い月給で使はれるのだらう。それぢや進路がないよ、日本政府は、もつと眞劍になつて、第二世の爲に考へてやるべきだよ。福井なんか一年から優等で、大學まで一度も三番にならないといふ素晴らしい成績をとりながら、これで卒業しても、いゝ會社や工場にも出られず、折角勉强したつて駄目になるのだよ。』

『市村、僕は、イーストへ行つて働くから心配はないよ。』

『アハヽヽ、愛するミス弘子を連れて行くのか？』

『ゴッデム、中根』

『アハヽヽヽ。市村、ユウは、明日の船で歸へる池田のミセスを知つてゐるか。』

『をぢさん、知つてゐるよ。』

『なんでも、柳瀨さんが大變心配されたさうだね。』

『彼の池田さんの事も、ミスターが中島の組合に加入してゐたので、中島に交渉してもらつたのだけれど、支配人が相手にしないので、北條氏と同縣なのでミセスが泣きついたのだつて、それで北條氏が、柳瀨さんに頼んで交渉してもらつたのだけれど、やはり、グズグズいふので、ジミーさんが柳瀨さんの應援に出かけたのだよ。そして日本金の二千圓をミセスに貰つてやり、七人の子供を連れて、日本へ歸へるやうに世話したのだよ。』

『ジミーは、えらいね。』

『市村はよく知つてゐるね。』

『ミーはね、北條さんへ入るまでは、彼のキャンプで働いて居たから、ミセスの池田もよく知つてゐるのだよ、おぢさん。』

『さうか、とにかくなんだね、貧乏人を救つてくれる柳瀨さんや北條さんは、俺達には有難いね。』

『さうだよ、おぢさん、看板ばかり大きいより、堅實にやつてくれる人の方がいゝよ。』

『池田は俺よりも、五年も後に來たのに、ミセス達が、二千圓も持つて歸へれるのは、羨ましいね。俺のやうに正直に働いてた者が、結局は損をするわけぢやね、日本で貧乏、メリケンで貧乏、カナダで貧乏、俺の脊中に貧乏神の奴、食ひついてゐるのだね。なあ、中根、グランビル街あたりに千圓位、落ちてゐないかね。』

『をぢさん、あんな賑やかな街へ千圓も落ちて居たら、をぢさんが、出かける間に、毛唐が、ちやんと拾ふよ。』

『アハ……なるほど。』

次郎太は笑ひ乍ら去つた。弘子と福井はいつの間にか居なかつた

長い間しやべつて居たら、陽が落ちたね、もう歸へろうや。』

『をぢさん、御馳走さん。』
『をぢさん、ウェンスデーの午後には、ミーの姉が、チェリーを送つてくれるから、持つて來るよ。』
『潤一君、さよなら。』
『兄さん、御はんよ。』
弘子の言葉に、驚いて、夕風の冷たい窓を離れた。
『潤一、日本の、祖母さんへ、手書を書いて出しておけよ、マヽも秋か、冬頃までには退院させるつもりだと、書いて祖母さんを安心させて上げるがいゝ。』
ナスビと牛肉の煮た匂ひが、食慾をそゝる。
『潤一、お前、えらいやせたね。』
『さうですか、夏やせでせう。』
『氣をつけて與れよ、北條さんのお蔭で借金丈は返されたが、まだマヽが入院してゐるのだからなあ。それに直ぐ冬が來るからね。』
『エヽ』
『パヽが、もつと働き者なら、お前にも、うまい物も食はせてやるのにと思ふのだよ。さうやつて一日中、坐つてゐるのだから、食ふより外には何んの慰安もないお前ぢやからなあ、』
潤一は眼頭が熱くなつて、肉とナスビが、區別出來なかつた。
裏に出て、ガラ〳〵と洗濯のワイヤーを引く弘子が叫んだ。
『パヽ、明日は、雨らしいわ。』

6

夏が過ぎ、秋らしい風の觸感を味ふひまもなく冬が來るのが北國である。教會の多い、バンクーバーの冬は、教會の屋根の尖端からやつて來た。

御大禮奉祝で日本全國が賑つて居る頃此處でも、領事主催で大祝賀會が催されるので、招待されて居る盈子は支度に急しかつた。

御大禮當日に來たドレスでは、皆の口がうるさかつた。それに、白人も五六百人招待して居るといふのであるから、昨年作つたドレスでは、流行おくれである。

盈子は、英子にもピンクのドレスを作り、自分のは明るい色のドレスを縫つた。そして、ドレスの造花や、飾りを買ふ爲に久しぶりにグランビル街へ出て來た。

街は、朝から、ひどい霧であつた、警笛を鳴らす自動車は、徐行してゐるといふよりも、むしろ蠢いてゐる怪物に似てゐた。

不意と側で、話聲がする。話聲は手近だが聲の主は解らなかつた。文字通りの一寸先きは闇であつた。道を横切る時、弱いヘッドライトが、身近く迫つて來て居るのに驚いて飛び退くこともあつた。

街の中央へ來るとギヤスがだん〳〵薄くなつて居た。グランビル街の廣告燈の明滅が、夕闇の感じをあたへた。

買物を濟して、久しぶりで友人を訪れる爲パウエル街で最近着いた雜誌を買つて、カドバ街へ曲つた。カドバ街とパウエル街は、一ブラックの相違だけれど、前者は住宅區域で後者は電車道で商業區域の故か、ギャスの濃さも、倍は違つて居た。

カドバ街を六百臺まで來た時、自分の後の方から忘れられない人の聲が耳に入つた。振り返つた瞳には、濃いギャス以外には映らなかつた。足をゆるめた盈子を追ひ越した其の人には女の連れがあつた。美しい聲の主であつた。チラッと、すれ違つた時見えた肉色のスタッキングの脚は、素晴らしく格好がよかつた。

彼に持つ感情が、戀だと、ハッキリ意識してゐなかつたのに、英子の言葉を信じて、女性の友人はないものと、子供らしく信じて居た盈子であつた。碧い瞳とブロンドの髮を持つ彼に、白人らしい娘の連れがあつたといふだけで、盈子の心は、すつかり暗くなつた。

其の夜の夕食はまづかつた。英子は相變らず外出して、澤井は勿論十時近くでないと歸つては來ないし、溫順なマリコは、早くから自分のルームへ入つてしまつた。外は、雨になつたらしい。買つて來た造花をドレスにつけてから婦人雜誌のページを開いた。

今日の美しい聲は、英語であつたが聞き覺えがあつた。多くの知人から、美しい聲の主を探した。けれど浮んで來る顏はなかつた。美しい脚の主は日本人に少かつた。澤井達の話題になる人の淋しい顏が、浮んだが、彼女は評判の貞淑な妻君である。

『妹さんぢやないかしら。』

あまりに考へ過ぎて、手近い人を忘れて居た自分の心がをかしかつた。英子の所へ一二度遊びに來た彼の妹は、美しい脚と、美しい聲の主であつた。妹だと思ふと今朝からの潰された心が開いて、甘い安堵にほつとした盈子は、明るい心になつて小說を讀み出した。

7

クリスマスが近づくと、歲暮とクリスマスの賜り物をかねて、夕方から盈子は北條氏の宅を訪れた。黑ん坊の下女に案內されて、パーラーへ入つた。自分の家の家具類より質素であつた。

『ミスター北條は、病氣で寢てゐるから、一度聞いて來る。』と、二階へ上つた下女は、なかなか下りて來なかつた。

待ち疲れてボンヤリと外を眺めて居るとジエームスが現はれた。

『お待たせして濟みません。二三日前から風を引いて寢て居たので失禮致しました。』

ミスター北條といわれたので、北條氏だとばかり信じて居た自分の愚さと、思ひがけない人の出現に盈子は二重に赤くなつた。

『こんなに澤山戴くのですか。父が不在ですから、お預り致しませう。』

顏色も惡く、瞳が、非常に憂うつさうであつた。

『夏からお目にかゝりませんでしたが、おやせになりましたのね。

先日カドバ街をお通りになつたでせう。ギャスの深い日でしたわ。』
『イヽエ』
暫らく考へて居た顏にや、赤味がさして來たから、やはり彼に違ひなかつた。盈子はもつと話したかつたが胸がはづんで口は重かつた。其處へ、下女と一緒に入つて來たのは、盈子も二三回逢へた戸川の弘子であつた。
『ジミー、昨日は、有難う。』
『貴女の福井は、健康ですか？』
『エヽ、今日も私と一緒に來ました。』
「マザーが退院なさつて、お目出度う。』
『マヽも一度、貴方にお目にかゝりたいと申しますから、是非お訪ね下さい。貴方は長い間訪ねて來ないのですね。プレセントも貴方の手から直接戴きたかつたのです』
流暢な二人の會話に、盈子は先日のギャスの中の女が、弘子であると思つた。弘子は美しい聲であつた。聞き覺えがあると思つたのは弘子であつたからだ。彼の日は木曜日だから、妹は學校に通つてゐる筈だ。二人に玄關まで送られながら、自動車に乘つた盈子は、弘子もジエームスと握手して、自分の後の、青年の乘つて居る自動車に乘つたのが、不審であつた。自分が居た事が、若い二人の邪魔になつたのではあるまいかと思ふと、胸が熱くなつた。家に歸へつて夕食を濟してから、英子に聞いた。
『貴女の友人の弘子さんね。彼の人に今日、北條さんの所で逢つたのよ、お二人とも、とても仲がよささうでしたよ、彼の人が北條さんの戀人ぢやないの？』
『アハヽヽ、それは違つてよ。弘子の戀人は福井ドラッグ、ストアの讓二なのよ。ジミーには、まだ戀人がないのよ。』
『夏からみると、すつかりやせてゐらつしやるのよ。』
「マヽ、ジミーは、仕事に忙がしくて戀をする時間を持たないのですつて。だから私はもう締めたの、あんなに手紙を出したり、接近しても駄目だつたのよ。』
キャ〳〵と笑つて、英子は、自分のルームへ行つた。
其の日の同じ時刻に、弘子は妹の下着にアイロンをかけながら、ストウヴのそばで、讀書して居る潤一に話しかけた。
『兄さん、ジミーの戀人を御存じ？』
『ノウ』
『私、今日、お逢ひしてよ。』
『エッ？ 誰だ。』
『いやな兄さんね變な聲を出して。兄さんは、ずつと前にジミーと何か話して居たぢやないの。だからよく知つてゐるのでせう？』
『僕は一度も聞かないのだよ。ミセスであるといふことだけは知つてゐるよ。』
『やつぱり、さうね、彼のね、澤井のミセスと、今日二人で話して

居たのよ。彼のミセス素晴らしいスタイルをして居たわ。あんなミセスが戀人ぢや、ジミーも、いやな人ね、』

北條氏と澤井の關係を考へても、弘子のいふ盈子との間が、考へられないこともなかつたが、あんなに侮蔑してゐる盈子を、戀する筈はないと思つた。けれども、ジミーの才能や美貌を考へ、自分の知つてゐる範圍の日本人ミセスの中から、選び出されるのは、やはり盈子であつた。もう一人、居るけれど、あの淋しさうな、そして貞淑な彼女が相手とは考へられなかつた。理性の强さうな彼女が、戀をそれも惠れない戀をする程、情熱がありさうにも思へなかつた。だからこそ長い間、自分の心一つに秘めてきた潤一であつた。

いつも淋しさうに默つて生活してゐる彼女であり、良人の影にかくれて、そつと、生存してゐるやうに思へる彼女であつた。その彼女をオタワから來た當時から、戀してゐる潤一であつた。

『兄さん、何を考へてゐるの?、今度、ジミーが來たら、うんと冷やかして上げやうね。』

浮(うは)ついた弘子に返事もしないで、潤一は、煙草の煙りを追ひながら、自分の秘めた戀人のことを想つてゐた。

8

二十六日は朝から雪で、鋪道も車道も區別がつかない程、積つて居た。灰色の空から降る綿雪は、音もなく降り積つて今夜まで降り續くと、三尺は積るだらうと、次郎太は話しながら仕事へ行つた。

退院後も健康の勝れないタミは、暗い顏をして、ベッドの中で半日を暮して居た。兩脚のない長男の傷しい姿、鳥目からすつかり盲目になつた二番目の娘、そして依然として家は貧しかつた。生活に疲れた良人は、暗い顏をして居た。三四日前から、風邪を引いた次男が、高熱で苦しんでゐる。

タミは、一日中、オロ〱と、泣いてばかりゐた。

タミは、十六の春に、アメリカから歸つて來た次郎太と結婚して、其の冬に連れられてきた。

若いころ二人は白人經營の山に雇はれてゐた。其の頃日本人の女は、男百人に對して一人の割であつた。タミは日本人の炊事をしてゐた。白人の監督は嚴重であつた。以前幾人もの日本人の男が食糧品の買入に惡辣(あくらつ)な事をやつてから、監督は日本人を信じなかつた。

山の生活は實に單調であつた。森から吹いてくる木枯の音と毎日切り倒される樹木の悲鳴を聞いて一日が暮れて行く。男は日本人の主任の小屋に集つて賭博に夜を更かす。日曜日は朝から酒で、男許りの其の空氣は、若いタミには堪えられない程醜いものであつた。

山では唯一の夫婦であつたから、タミ達は丸太を其のまゝ利用した小屋をあてがはれて居た。ルームの中央にストウブがあり、一番奥の窓の下には鐵のベッドがあつて、その横には足のゆるんだ机が置いてあつた。食事は廣いガランとした食堂兼炊事場で、日本人全

部が一緒に食べた。タミ一人では三十幾人の人の世話が出來なかつたから、三十以下の青年は、交代でタミの手傳ひをした。

山にはよく熊が出て來た。男達が仕事に出て行き、小屋の周圍が靜かになると如何にも呑氣さうに、熊の仔が山から下りて食物を漁つた。最初は恐しくて逃げたタミも、朝のブレッドやミルクの殘りを、空鑵に入れて食堂の窓の下に置いてやると、熊の仔は鑵へ顏を突込んで食べた。時には食べた後に顏を出さうとして、顏が出なくたつて騷いでゐる熊の仔の格好は、たまらなくをかしかつた。

人の姿を見ると熊は慌てて姿を消すからちつとも恐くはなかつた。タミにとつて恐いのは人間であつた。女に飢えた男の瞳であつた。四回の食事以外には、ちつとも人氣のない小屋へ、用あり氣に山から歸つてくる男が恐かつた。幾十回も、悲しい、人には云はれないひどい目にあつた。救ひを求めても誰がやつて來やう。仕事場へは二三町も行かねばならなかつた。

勝つより負ける方の多い次郎太の賭博は、次郎太を自暴自棄にし、酒を飲んではタミを毆つた。次郎太にとつて愛すれば愛する程、タミを警戒しなければならなかつた。男は、友人は、皆女に飢えてゐたからだ。主任の村尾は、執つこくタミをねらつた。善良な次郎太を嗾かして、タミに男があるやうな事をいふのも彼であつた。

タミは怖えながらオロ〱と働いて居た。毆られた疵の痛さに堪えかねて、小屋の裏手で、ジク〱と泣く事が唯一の慰安であつた、黑人や、白人の小屋は、少し離れた所に建つて居たから、タミの泣くのを咎める者も居なかつた。

タミが十九の冬は、何十年目といふ大雪であつた。河が凍つて、山から下された材木が堆高く凍つてゐた。山へ行くまでの道は、小柄のタミが埋る程雪が積つて居た。だから仕事を休んだ連中は、村尾の小屋に集つて朝から賭博をした。

タミは頼まれた仕事着の綻を縫つてゐると、烈しい風と雪と一緒に一人の青年が入つて來た。二人は默つて窓から、雪の亂舞を眺めた。彼は、藤井といふ二十五になる温厚な青年で、タミにも一度も變な事を云はない眞面目な青年であつた。タミは、此の藤井が一番好きであつたし、彼の傍に居ると氣分が和んで來るのであつた。

『藤井さん、日本へ手紙を出すから書いて下さい。』

三十幾人の中では日本字と英字の兩方書けるのは、藤井一人であつた。上書を書いてくれた藤井は、色々の人の顏を漫畫化してタミを笑はせた。藤井が歸へらうとする所へ、酒に蒼くなつた次郎太が入つて來ていきなり持つて居た薪でタミを毆つた。不意打ちにタミは昏倒した。

『藤井の、俺の女房だ捨てゝおいてくれ、亭主の留守に來やがつて、泥棒猫の眞似をするない?』

『なにを?』

しかし、藤井は無言で歸つた。氣絶してゐるタミを、次郎太は慌

て、抱起した。それから十日目に、やゝ雪が解けたので、仕事に出かけた男達の留守の間に、藤井とタミは山を逃げ出した。汽車で國境を越えた二人は、アメリカへ來た。そしてたのしい生活が始つた。

それから半年。風邪を引いて高熱にうなされてゐる藤井と、百姓家に働きに行きながら良人を看護してゐるタミの所へ、追ひかけて來た亥郎太がやつて來た。

連れ歸へられたタミは、昔の如く毆られながら幾人もの藤井に救ひを求めた。逃げても〳〵も直ぐ捕えられた。日本人の女といへば何處へ行つても直ぐ發見された。

長男の潤一が生れる頃には、タミは諦めてしまつた。結局は、牛馬の如く働き、良人に毆られる爲に生れて來た女であつた。

タミが貧しい中から、潤一を中學へ通はせたのは、過去に於ける藤井を連想したからであつた。

『潤一お前此の頃すつかり悴れたね、何處か悪いのぢやないか？』

病人が寢て居るので、タミは一息しながら、ボンヤリとストウブのそばに坐つてゐる潤一に話しかけた。

『悴れて、枯れて死んでしまへばいゝのにと、考へてゐるのです。』

『そんなことを、今更云つたつて仕方がないよ。今頃は、皆、忙しいのだらうね、誰も來ないね。』

『皆は兩脚がありますから、働いて居ますよ。』

見上げた潤一の瞳に涙がたまつてゐるのにタミは驚いて聞いた。

『潤一、お前、何か苦しい事でもあるのだらう、マ、に話してくれないか？』

『マヽに話しても解らないことです。』

氣弱いタミは、それ以上聞けなかつた。

『マ、、柳瀬のをばさんが、見舞に來られたよ。』

玄關に出たタミは、黒いコートを着た柳瀬のミセスを招じた。

病室へ行き、菓子箱を出してからミセス柳瀬は潤一のそばへ來た。潤一は、視線のやり場に困つた。

「子供さんが、逝くなられて、淋しいでせう。」

『エ、、とても。』

此の人の微笑は、何故、こんなに淋しいのであらう、と、潤一は凝視めた。

『二十三日に新聞にお出しになりました小説貴女の事ですか？』

『さうですの。私ね、日本では、女工も、看護婦も、事務員も、やりましたのよ。」

『彼の爭議は、吉田町のことでせう』

『エ、』

『ミセスも、なか〳〵勇敢ですね。貴女のやうな方は、極く內氣な、そして、情熱など少しもない女性だと思ひましたよ。』

『オホ……私のやうな性格の女は、人より烈しい情熱を持つてゐるのですよ。』

『さうかなあ、僕は、温良貞淑な妻君だと信じて居たのですよ。』
『それは皮肉？』
『決つして皮肉ぢやありませんよ。』
『潤一さんは皮肉屋さんだから、用心してないといけませんわね。』
『僕は、昔は極く内氣な人間でしたが、こんな不具者になつてからすつかり、皮肉になつて、ジミーにも叱られるのですよ、ジミーも最近、訪ねてくれないのですが、ミセスはお逢ひでしたか？』
『彼の……、昨日、お逢ひしました。』
『僕の妹の話ですが、澤井の妻君が、ジミの戀人らしいと、話して居ましたよ。』
　潤一は、委しく話した。
『澤井のミセスの、歌は、皆、淋しさうぢやありませんか？』
『それはね、プルジョアのミセスの倦怠ですよ。』
『でも彼の人も苦しいのでせう。教養の差は、女を苦しめますからね。彼の人が、現在の生活から脱つし得ない心持も私によく解りますわ。』
『しかし、それは、日本の女の傳統的の弱さでせう。』
『潤一さん、そうばかり、いへないのですよ。第一、こうした土地に來て居ますと……』
　ふとドアーが開いて、黒い帽子を深くかぶつたジエームスが入つて來た。彼は、柳瀬のミセスを認めると非常に驚いたらしかつた。
　タミの運んだお茶とお菓子に、三人は暫らく沈默して居た。
『ジミー、あまり君が來ないから心配して、ミセスにたづねて居るところだよ。』
『早く來るつもりだつたけれど……』
『弘子の奴、澤井のミセスのことを……』
『昨日、弘子さんに逢つて、散々冷やかされたよ。』
『今日は、仕事は半ドン？』
『風邪を、引いたのでまだ休んでゐる。』
　その位の事で仕事を休むジエームスではない事を、よく知つて居る潤一はやはり戀に苦しんでゐるのだらうと思つた。
『君のやうに、美貌と才能に惠まれた青年が、不具的な戀をして居るのが、不思議だと弘子も、話してゐたのだよ。ジミー、清算も出來ないのか？』
　ジエームスは、ミセス柳瀬をみながら苦笑した。
『潤一さん、私も清算することに同感ですわ。北條さんの心持ちはよく解りますけれども、先輩の厚い信頼を裏切り、同志に罵られてまで、僅か單一の女性を愛する事で貴方の魂が一杯になるなんて、それぢやあまりに貴方は小さ過ぎますわ。ジミー？　貴方の昔円は、鐵のやうな意志と、純粋の理性を持つた同志でしたね。貴方は。「私の子供」だと愛稱して下さるミスタールイスを、此の三年間裏切つてばかり居ましたわね。此の春だつて……それに來春の二月の終り

のロンドン大會に出席する事さへ貴方は、拒んでゐらつしやるのですつてね、ジャックから皆、聞きましたわ。貴方は、小つぽけな女性の爲に餘りに大きい犠牲を拂はうとしてゐらつしやる、仕事の爲には生命を捨てる人さへおりますのに、戀の爲に裏切り……』

『ミセス、貴女は――』

それは、交り初めて一度も聞いたことのない悲痛な憤りを含んだ聲であつた。潤一は、形容の出來ない感情が胸に充滿した。

『僕は、申し上げた筈です。此の戀の爲には、世界中の人を敵として鬪ふつもりなのです。』

『ごめんなさいね、ジミー、よく解つて居ますのよ。昨夜のお話ももう一度、考へさせて下さい。』

『僕は、たゞ……』

『ジミー、潤一さんが變な顏をして、居らつしやいますよ。潤一さん、氣にかけないで下さい。此の二三日、ちつとも眠れないので、私も少し興奮しましたの。もう三時ですね又、お伺ひしませう』

殘つた二人は、異つた心を抱いて、坐つて居た。

友人と、そして自分の愛してゐる女性との會話の底に流れる暖かいものに、潤一は强ひて盲目であらうとした。一人は、自分の親しい友人であり、そして若き鬪士として、白人間に尊敬されてゐる人、一人は、貞淑な女性とし日本人間に有名な夫人、そして自分の暗い前途における唯一の光明である。此の女性を失ふやうな事があつたら、自分も生きては居らない。

强ひて、盲目にならうとする潤一であるけれど、押へても／＼泉の如くに湧いてくる嫉妬と焦操が交互して、潤一を苦しめた。彼は、ジェームスの歸つたのも知らず、ストウブが消えて、部屋の隅々から寒氣がヒシ／＼と迫つて來るのさへ氣付かなかつた。

9

高臺の病院の窓から見える山の雪は、下からだん／＼に禿げて行く。海の上にも春らしい色がたゞよひ、夜を散歩する患者の數も增えて來た。

正月も過ぎた十日の朝炊事場で卒倒してから、今日で三ケ月あまり、病院の白い天井を見て盈子は暮した。それは、新年の宴會から歸つて來た澤井が、寢物語りに話して聞せた大きな打擊からだつた。

『盈子、ジェームスが行方不明になつたよ二人連れでね。二日の朝黨の友人が北條氏を訪れたさうだ。其處へ柳瀨が旅行から歸つたのだ。それから大騷ぎよ。北條氏としても自慢の子息が使用人の妻君と逃げたのだからね。眼の色を變へて、探してゐるよ。』

『まあ、誰と……』

『お前達に、云はすと、混血兒は、女嫌ひだといつたが、柳瀨の留守に、あの細君と逃げたのだからなか／＼隅におけんぢやないか。』

烈しい驚きはなか／＼返へらなかつた。

日が經つにつれて、盈子の眼前には嫉妬と失望が渦を卷いた。大切な寳王を掌（てのひら）に乘せてゐるのを、不意に横から盗まれたやうな盈子は、今までの自分の氣弱さが腹立しかつた。まして相手の女性が、自分より若く美しいといふことはたまらない事であつた。それに誰も、彼も、白人へ對する妙な反感を混じへて、ジエームスを惡評することは、盈子の焦燥を深くした。

『ジエームスさんは、おとなしい方ですから、屹度、誘惑されたのでせう。』

さう人に話して、盈子は胸の嫉妬を、落ち付かさうとした。ミセス柳瀬に似てゐるカミルラ、ホルンは大好きな女優であつたから、プロマイドを澤山持つて居たが、全部、燒いてしまつた。

噂は、噂を生んだ。ジエムースの親友のトミーが旅費を作つてやつた。ジエームスと、ミセスが歩いて居るのを見たとか、二人はオタワ時代から關係があつたとか、等々々々。

入院して一ヶ月毎日見舞つてくれる澤井はこんな事も話した。

『お前にはまだ話さなかつたつけかね、去年の春ケガをした戸川の息子を知つてゐるだらう。あの息子が自殺したのだよ。去年の冬から肺が惡くなつて、今年の正月に一回喀血してから、すつかり悲觀して居たさうだよ。そして息子の自殺した夜に母親が又、氣が狂つたのだよ。まだ快くなつて居ないのを連れて歸つて居たのに、眼の前で息子が死んだのを見たから逆上したのだらう。息子は死ぬる。女房は氣が狂ふ、一番末の子供がケガをする、戸川も散々だよ。そんな事から、すつかり弱つて、一昨日、入院したさうだよ。後には、弘子といふ十七八の可愛らしい娘と、ゆせた男の子が三人と、盲目の子供が、一人居るのだが、弘子といふのは、新庄のストアに働いて十五ドルもらつてゐるのだが、それぢや、兩親の一週間分の入院にもならないから、助けてくれつて、北條氏へ泣きついたさうだ。北條氏は、生活費を出してやるのが、やつとだから、俺と新庄に入院費を出してくれといふのだ、戸川の親父は、まだ助かりさうだが、妻君は弱つてゐるからどうせ死ぬからね少しは高いが俺は、妻君の入院費を出すことにしたのだ。戸川へは先刻、十ドル見舞金をやつて、おいたよ。俺も、新らしい山を買はなければならないから無駄が出來ないよ。』

兩脚を失ひ、暗い前途を持つ澗一が、親友を失なつてしまつて、傷しくも死んで行つた心持を思ふと、良人の話は半分も聞いてゐなかつた。

健康が、グン／＼快復して來ると、不思議にあれ程敵意を持つて居たミセス柳瀬に對しても、幸福を祈りたい女らしい氣持が湧いて來た。結婚生活の不滿から、知らず／＼良人に不親切であつた自分も考へられた。自分の不親切に對して變らない愛情を示してくれ、毎日／＼百日の間、一度も欠かさず見舞に來てくれる良人にもあるなつかしみをもつた。氣弱くなつてゐる盈子は、良人の愛情がたま

らなく懐しくもあつた。

『お前が居ないと落付かないので昔より早く歸つて寢るのだよ。お前が早く退院できたら此の春は、アメリカへ遊びに行こうね。』

さう、さゝやいた良人を想ふと、ベッドから、飛び下りた。さうだ、今から突然に歸つて驚かして見やう——

外は暗かつた。二十五哩のスピードで走るタクシーの窓から見える街の灯の明滅は、たまらなく美しかつた。ショウ、ウヰンドには、今春の流行色が、充滿してゐる。自分の昨年のコートを連想して、明日は、良人に、頼まう等と、甘い氣分になつた。

自動車に金を拂つて、コートから、キイを出した、盈子は、バーラーの灯が明るく、ともされてゐるのに、不審を抱きながら、ケチン、ダイニング、英子のルーム、自分のルーム、と、ベッドルーム等を覗いて見たが、ケチンルームより外のルームの灯は全部消えて居た。スクールガールのマリコのルームにもキイがかけられて居た。英子とシネマへでも、出かけたのであらう。

やがて良人も歸へるだろう。なんとなく疲れた身體をベッドで横になつて居やうと、ベッド、ルームの電氣のスヰッチをひねつた、ルームは、パッと、明るくなつた。何氣なく、ドアーを閉めて、振り返つた。ダブルベッドの上には……

『アッ？』

『盈子？　お待ち？』

慌てゝ呼び止める澤井の聲を後に、盈子は燕のやうに、外へ飛び出してしまつた。街は、靜かで、街路燈が、淋しさうに、立つてゐた。

コートも帽子も被らないで走り行く異國人を振り返へる人もなかつた。たゞもう無中で、走つたが病後の身體は、それ以上走れなかつた。街路樹にもたれて居たが、兩脚の先きからだん〳〵力がぬけてヘタ〳〵と其處へ坐つてしまつた——

『信じて、居た良人は、妻の入院中に、スクール、ガールと、寢てゐる。』

盈子は、堪えても〳〵堪えられない熱い涙が、洪水のやうに湧いてきた。

折角、新らしい希望をつないで、生きて行こうとした自分の、はかない望みさへ絶ち切られた。

今から何處へ行こう？

忘れた筈の二つの碧い瞳が、ポッカリ浮んで來たが、それもだん〳〵消えて、眼前には暗い自分の要求がヒシ〳〵とせまつてくる。

風を切つて通りぬける自動車のヘッドライトが、街路樹にもたれて泣く盈子を、照らしては通り過ぎた。

空には、一ッの星もない暗い晩であつた。

一九三〇——三——六——



最後の奴隷

平林英子

一

屋上の女給部屋を、女達は「第三天國」と呼んだ。彼女達は、客を相手に屢々その部屋を話題にした。だが、誰も本當の事を言ふものはゐないのだ。何時も暗示的に、多少は滑稽味も加へて、男性の好奇心を適度にそゝりながら、相手の氣持を苛々させる事が、近頃では、惡戯的な快感にまでなつてゐる。

「一度でいゝから、その部屋を見せろよ」

「駄目々々、第三天國は男子禁制よ」

「いやに勿體をつけていらくさせやがるなあ、一體どうなつてゐるんだい？」

「そりや素的だわ、一寸言葉では言はれないのよ、だつて、第三天國には秘密がないんですもの」

「成程ね、秘密のない女人國か！婦人雜誌的な煽情性だね」

併し、事實は、その部屋に對して、女達は何の關心も持つてゐはしないのだつた。屋上の露臺の一隅に溫室の樣に、据えられて、物乾臺と丈比べをしてゐる八疊の女給部屋は、兩側が水族館の魚類箱の樣に、素通しガラスの窓で出來上つてゐる。天氣の好い日、女達は臥そべつた儘、飛行機を眺め、時には鳥の影さへ見かけるのだつた。そして、深夜の月光は、舞臺の照明の樣に、醉拂つた女達を、深い感傷にまで導いた。

片側のざらくした薄黒い壁には「煙草の火に注意せよ」「屋上いゝすの子に塵紙等捨つべからず」等の注意書が裝飾畫の代理を勤めて

ゐる。襖のない押入れには、無數の風呂敷包や、みだれ籠や、バスケット等が、三等客車の網棚の樣に雜居して、片隅の行李の横には、戸板の樣に薄っぺらな布團が、妙に突つ張つた格好で積み上げてある。所々の縫目から、鼠色の古綿がはみ出てゐるのだが、それを修繕する程の「度胸」のある者もゐなかつた。全く、取り代へる事が出來さへすれば、明日にでも捨てたい代物である。

「本當に、みんな少しは片づけませうよ、これぢや、まるで女の住んでる樣な處ぢやないわ」

年嵩の女がぶつ／＼言ひ乍ら、髮の毛や鯛燒の尻尾を片づけ始めると、他の女達も立ち上つて、お役目的に一通りは掃除をする。だがそれは風の日の庭掃除と同じく、直ぐ後から又散らかされて行く。

風呂敷包を取り出して、襦袢の襟を掛け代へてゐる者、古新聞を展げて髮を梳く者、鏡を見詰めて七面鳥の樣に表情の研究に餘念ない者、寢卷姿のまゝ悠々とトランプで今晩の運勢を占ふ者、臥そべつてラブレターを何枚も書き崩す者、質札を並べて利子を計算する者、空想する者、喋る者、まさしく第三天國は浮浪人の樂屋だ。

姉はラシヤメン
妹は女給さ！
親父ぢや萬年町でコラサノサ

一人が唄ひ出すと、直ぐあとから二三の者が續ける。

犬殺しサイ／＼

冷たい金屬性の、ヒステリックな合唱だ。

早番で店へ出てゐる女達は、客がないので、自棄に蓄音機にスピードをかけて、拂ひ切れない月末の呉服屋への借金と、親睦會の訪問着の心配を沫殺しようと努力する。すると、騷々しいジヤズは、水蒸氣のやうに「第三天國」にまで上昇し、浸入するのだ。

だが、誰も部屋代を拂つてゐるわけではないのだから、お互に我慢しなければならない。そして、その結果は、少し神經質の者だつたら、不眠症か痴呆症にでもなつて仕舞はねばならない。金廻りの良い二三の女達は、こうした「第三天國」の騷音の中から逃げ出して、それ／＼に間借りをした。少しばかりの不經濟は、職業的なモダニストにとつては、時には却つて「經濟的」でさへ有り得るかも知れないのだ。

「自分の部屋つていゝものよ、こうした酒と唄の中から一歩外へ出ると、全くせい／＼するわ、そして、自分の部屋へ歸つて疊の上に座ると、まるで素人のやうに虔ましい氣持になつちやふのよ」

その上、自分達が一日毎に「女給タイプ」に染つて行くのは、一日中女給部屋と酒の中にばかり居て、外の自由な伸々した時間を持たないからだと主張するのだつた。女達はいつも、「女給タイプ」になる事を、役者が鉛毒を怖れる樣に嫌つてゐた。傳染病院の看護婦の樣に、周倒な注意と敏感な神經質で、病菌に侵されない樣に、常に消毒を怠らない積りだつた。だが、職業と言ふものは、上等の染

料のやうに、無慈悲にも彼女達を、はつきりした色彩に染上げて仕舞ふのだ。異つた社界の新鮮な空氣を吸ふ事は　この場合、女達には第一に必要な事でなければならない。どうやら「自分の部屋」と言ふものは、肺病患者に日光浴が及ぼす程の効果はありそうだつた。だから部屋を借りられない女達は、少しでも閑があると、彼女達の部屋を訪れて、「人間」らしいと言ふ疊の上の生活にあやかつた。

　自分の部屋を、自分の部屋をと、女達の願望が、一しきり「部屋」と言ふものに集中して行つた。「部屋」は戀人の様な魅力をもつて、女達の心を惹きつけた。中には、二人で共謀して、若い金持の學生に家を借りさせて、其處の二階を占領しようと計畫した者もゐた。小遣を節約して間代を貯蓄する者、同棲者をさがす者、さうして、「第三天國」から女達が、競爭的に外へ流れ出さうと準備した頃のある日だつた。かねてから、自分の部屋を持つてゐた一人の女が、一枚の葉書を持つて、狼狽てゝ女給部屋へ驅け込んだ。

「一寸、大變よ、警察から呼び出しだわ」

　葉書には「×月×日友人の件に就き當署へ出頭せられ度く云々」と書かれてある。カフエー取締りの第一着手として、通勤女給の素行に疑惑の目を向けた警察が、その取調べを開始したのだ。

　その日、女は目を泣き腫らして警察から歸つて來た。

「ひどいわ、人を馬鹿にしてるわ、いきなり頭から、男が幾人あるつて訊くんだもの、そして、あたしが、いくら獨りで居るんだつて言つてもきかないのよ、仕舞ひには階下のおばさん迄呼び出してさ、憎くらしい事を色々言ふのよ、色々言つたわ、一寸此處で言へない様な事まで言つたわ」

　女は一息に喋ると、鬱憤の捨て場がないとでも言ふ様に、強く足踏みをした。

　翌日、又一人が呼ばれた。だが、この女は亭主持ちだつたので、警察の取調べは簡單に濟んだ。その代り、彼女は原籍地へ紹介されさうだと言つて心配した。田舍に故鄕を持つと言ふ事は、それだけで、彼女を封建的な道德に縛りつけることだつた。都會生活の窮迫と、田舍の封建主義とが、二重に彼女を苦しめるのだ。

「一寸、一寸、警察ではどんな事を訊くの？あたしんとこへもこんな呼び出しが來たのよ」

　好きな男達と氣隨に逢ふ爲に、獨りで下宿をしてゐる年若い女が、斷髮の毛を波立たせ乍ら、誰彼となく、經驗のある女達の間を廻つてゐた。

　總理大臣は、ラジオで「緊縮」の放送をした。警視總監は、禿頭を帽子で隱して、銀座のカフエーを視察した。婦人雜誌には、有閑婦人のカフエー見學記が、ジヤナリズムの波頭に泡立つてゐる。そして、××會館には、一流カフエーの女給代表が「女給稅反對　の講演會を開いて氣勢を擧げた。

「おうい、みんな集つて異れ！」

店を代表して、警察の訓示を聽きに行つて來たコック頭が、裏梯子から首を突き出した怒鳴つた。女達は掃除を終へたばかりなので、誰も彼も大儀そうに、不貞腐れた足どりで降りて行つた。

「………………だから、餘り外出しないがいゝよ、營業中にだ、いゝか、營業中に客と外出した處を見つけた場合はだ、如何なる理由ありとも、女給が客を誘惑したものと認めるつてんだ。認められるんだから辯解は成り立たないものと思はなけりやならないね、そしてだ、淫賣の意志ありと見て拘留に處すつてんだ」

「チエッ！馬鹿々々しい、何だつて又、そんな意地悪を言やがるんだい！」

「營業中つて言ふと、朝からなんでせう、まるでひとを禁足する積りなんだよ」

「この世智辛の世の中に、おかしくてそんなお說教がきかれますか？つてもんだ」

「ふん、客と歩いて淫賣か！よく考へ出したもんさ！」

女達は、さうした事の凡てが、コックのせいでもある様に、その場でコックに不平を投げつけた。中には、何時か、活動の歸途、客に言はれた言葉を引證して、彼等こそ女給を良い加減に利用するのだと主張するものもゐた。

「君達の様な女を、誰が好きで連れてつてやるものか、實は、同伴席に這入りたくて一寸利用したまでさ！」

營業時間十二時迄と言ふ新規定は、客にも女給にも物足りなかつた。かつきり十二時にビールを一本注文して――いくらお上の命令だつて、買つた酒を飲む間も許さねえつて法はあるめえ？そんな筈はなからう――等と言ひ乍ら、わざと悠然と腰を据える請負師もある。スペシアル・ルームのカーテンを降して、馴染の藝者と話し込む紳士もあつた。十二時になると、店の表を幾人もの巡査が往復した。マスターは營業停止を恐れて街燈を消し、十二時後の客は、こつそりと裏口から歸した。

食堂の正面の壁にいかめしい警視廳の注意書が、風呂屋の衞生規定の様にはられた。そして、それは少からず客の「氣分」に影響した。ともすれば女給の收入にまで、悲觀的な効果を及ぼすのだつた。

「何だ、こんなもの！折角飲んだ酒も醒めて仕舞ふぢやないか」

そしてこの言葉は、同時にチップを置かない口實にも成るのだ。

店は月毎に缺損が續いた。すると、マスターは不景氣の連帶責任を、第一に使用人に負はせるのだつた。コックもバアテンダーも出前持も、給金を二割宛下げられた。女給達は、出錢の廢止によつて食物の質を下げられた。

「えゝつと、朝の味噌汁の實が全部で金八錢也、すると一人前いくら宛だい？晝飯が四切十錢の鹽鮭で、晩飯は十五錢のむきみ汁さ、だから、あとから來るのろまな奴は何にも食へねえんだよ」

フライパンで、油をヂイ〳〵させながら、見習コックが、十五錢

のむきみ汁にあぶれた女給を揶揄ひながら、帳場のマスターの表情の變化を、寒暖計の様に計つて見る。

　店では酔つ拂ひが、近頃の警視廳の取締り規定に就て女給を冷嘲してゐる。

「何だ、君達や知らないのか。近頃警察では懸賞をつけて、一人の不良女給を捉へた者には、金一圓也を與れるんだよ、薄給のお巡りさんたる者、腕によりを掛けずんば非ずさ、要するに、可愛想なは女給でございだ。君達は懸賞付きのお尋ね者なんだからなあ」

　いま〱しいこの言葉を、無下には否定する事も出來なかつた。全市の活動寫眞館では、毎夜、幾組かの「疑はしい」男女が調べられたから。

「履歴書だの、身分證明だのつて、色々めんどう臭い手續きもいらないし金にもなるからと思つて女給になつたんだけど、近頃しみ〲嫌やんなつたわ」

「生きて行く事がめんどう臭いわ、何だかだつて……」

「自分一人生きるのにさへ容易ぢやないのに、あたしなんか、弟達の仕末までしなきやあならないんだもの……」

　夜、猿股や肌着や腰巻が、半乾きのまゝ、天井に吊るされてある女給部屋の、部屋一面に敷かれた布團の中へ、豚の子の様にもぐり込んだ一部の女達が、ぶつ〱語り合つた。併し、そんな事には、まるで無關心に、布團の上に座つて、財布の金を調べ乍ら、何時迄も首をひねつてゐる女もある。

「えゝ、あたし酒井さんを愛してますよ、愛してますとも、うんと愛します」

　三角戀愛に氣を腐らしてゐる女が、脱ぎかけた着物の下から眞赤な長襦袢を見せて、まるで亭主にでも物を言ふやうに、酒臭い呼吸をはあ〱させ乍ら、宙を見詰めてゐる。

「咲ちやん、いゝ加減にしてお休みよ、うるさいやね、全く」

「大きなお世話さ、寝ようと起きようとあたしの勝手だい！だが、あの人はいゝ男だらう？全くいゝ男さ！」

　この女は東北生れで、聲がよかつた。酒に酔ふと何時迄も床の中で、感傷的な聲を出して「おばこ節」を唄つた。

「誰か、一寸便所まで連れてつてよ、何だか、體がふら〱して困るからさ、よう」

　便所は、一階の一番向ふ側の隅にあるので、消燈した暗い階段を降りて行くのを、誰も億劫がつた。

「面倒臭いね、バルコニーでやつちやいなさいよ！」

　誰かゞ、舌打ちをして、床の中から怒鳴つた。

二

　コック場の置時計が十二時を指す頃には、女給達の小型な装飾用腕時計も、それ〲に十二時の前後を示してゐる。すると、「月給取

り」のバーテンダーは、待ちかねた樣に窓のカーテンを降して仕舞ふのだ。コックは、心にもない落着を示して、ストーブの火をおとす。女達は、豫算の狂つた收入を胸算用しながらエプロンをはづして、テーブルの上を片づけ始める。

外出用の羽織姿で、手に襟卷を持つた一人の女給が、電話口で喋つてゐる。

「モシ〱、平和タキシイですか、自働車を一臺ね、えゝホロよ、何時もの三丁目の蕎麥屋の角へ……」

消燈した店の裏口から、通勤女給の一組が歸つて行く。その後を僅かの距離をおいて四人連れの女が續く。彼女達は、巡査の姿に警戒しながら、こそ〱と街角へ姿を消した。

蕎麥屋には、約束の京橋邊の材木屋の主人だと言ふ四十男が、布袋の樣な體を堅い椅子に硬ばらせて待つてゐた。女達が這入ると、正面の階段から、顔見知りの××警部が、ぞろつとした和服姿で、馴染の女給を背後にかばひ乍ら降りて來た。四五日前、愛宕山から「不良少年少女に關する有益な話」を放送した有名な警部である。彼は、フエルト草履を輕く突つかけると、變に間の惡いやうな、その癖、いやに高壓的な微笑を女達に分配して出て行つた。表の舖道には、夜勤巡査が、外套の襟を立てゝ寒風の中を彷徨してゐる。

入口の戸が鳴つて二人連れの男が、あわたゞしく這入つて來た。

「いらつしやい!」

突然、一人の女給が大聲で怒鳴つた。そして、狼狽てゝ首を縮めた。周圍の客の、朗らかな笑聲が、食べかけた丼の中から立ち上る湯氣にもつれて、四邊を陽氣にする。客商賣に浸み込んだ者の、時々起る無邪氣な錯覺だ。

五人の客を、團子の樣に詰め込んだ自動車は、交番の赤い燈火をさけて、辷りの惡い裏路を曲折して、がむしやらに走つた。空には鼠色の雲が重く垂れ下つてゐる。

女達は、新聞によつて、昨夜も非常警戒が敷かれた事を承知してゐた。だが、緊張の直後は緩慢である。女給だつて、魚ではないのだから、さう簡單に網になどかゝりはしない。萬一、ストップを命ぜられた場合にも、既に、言ひ逃れの方法は充分練つてあるのだ。運轉手と車掌は、まるで飾り土偶の樣にむつつりと前方を向ききりである。自働車は風の樣によく走る。

「洲崎でしたね」

かすれた運轉手の聲がする。

「あら、違ふわ、角海老よ、吉原でなくちや詰んないわ、洲崎なんて、なつちやいない」

「こら、餘計な世話をやくな、大藏大臣は俺だからな」

「ケチン坊! いゝわ、もうあなたなんかに從いて來やしないから……

…」

布袋男は、一種典型的な商人だつた。彼はチップに置く五十錢銀

貨に、いつも故意に唾を吐きつけて女達に渡した。冗談にしては少しアクが强過ぎる、だが、長者名簿に名前が出てゐると言ふので、マスターにとつては大切な客であつた。彼には簡明な持論がある。

「大臣だつて博士だつて、當節は全く金次第さ、金さへありや世間に恐いものは何んにもありやしない」

同じ大盡遊びでも、彼の場合、相手は女給に限るのだ、女給は藝者と違つて、玉代がいらないのだから。

自働車を降りると、角刈りに前掛を占めた牛太郎が、去勢された馬の様な顔をして出迎へた。奥の廊下を渡ると、素足を眞赤にした、若いお職が、柄の古臭い錦紗の上着を、長襦袢の上へ袈裟掛けに着て、寒さうに笑釋した。家全體に薄暗い電燈が、不馴れな女客にも心安い落着を與へる。

二階の廣間に落ちつくと、布袋男の傍へ、例のお職がぴつたりと座つた。番頭が、正宗の四合瓶を運んで來て、德利に注ぎ、それを火鉢の銅壺の中へ入れ乍ら、小糠煎餅の様にぼろ／＼したお世辭を言ふ。タンクの様な體の「やりて婆」が、馬の靴の様な顔を廊下から突き出して愛想を言ふ。この老婆は、廊下を歩き乍ら、ひつきりなしに、おいらん達に小言を言ひ續ける。

「電氣を消しな、電氣を」

「今消すわ」

小言は更に、次の部屋へ移動してゆく。

「お婆さん、コップに水を、早く……」

「何てざまだえ、そんなざまをするものぢやないよ」

「何でもいゝから早く水を！」

向ふの部屋からも別の聲がきこえる。

「あら！わたしの紙がないわ、さつき此處に置いた筈だのに――」

「氣をつけな、仕末が惡るいからだよ」

午前二時、家全體に渡つて、生活の營みが始つてゐる。生の執着、これこそ生きんとする意志のどん詰りの荒廢した「忍耐」である。

女給達は、布袋男の意志を無視して、おいらんを買ふ事を協議した。番頭が標札の様な木札を裏返しに四枚並べた。一枚宛手に取つて見ると、松子、正子、時子、敬子と書いてある。制度だけは、あくまで古風を嚴守しても、此處にもモダーンの進出がある。改革はいつも「腹の痛まない」處から出發する。そして、其處で立往生をするものだ。

珍客に買はれたおいらん達は、一人づゝ女客の後へ座つた。

「寒いでせう、一緒の座布團へ座りませうよ」

「あら、そんな事、罰が當ります、お尻が曲りますわ」

窓の下を、新内流しが過ぎ、蕎麥屋の笛が泣き、何か物賣りの呼び聲が通る。

「お前達は、女同志でいろ／＼と、身の上話があるだらう。どうして買はれたとか、何故女給になつたとか、な、まあ、ゆつくり話すが

いゝさ」
布袋男はお職の手を取つて、彼の部屋へ引きあげた。女達は、その後姿を見送つて、空虚な笑聲で義理笑ひをした。
「どうです？景氣は……」
「えゝ、とてもひどいんです」
「今は何處でもね、あたし達なんか、まるで駄目よ、昨日なんか廻番で一つしか番を持たないのよ」
まだ、田舍訛の取れない。〝おいらん達は、女客との會話には馴れてゐなかつた。女達は布袋男が考へた樣な、安價な身の上話等で、お互を誤間化し合ひはしなかつた。鍋燒を食べながら、唯々不景氣の話だけだつた。
「時子さん、お座敷だよ」
やりて婆が障子の外からドラ聲を放つて女達の會話を中斷させた
「あたし達も寢ませうよ」
女客は、それ〴〵に、自分の「相方」から借りた、身丈と柄の違ふ浴衣を着て、一つ部屋へ枕を並べて寢た。
「おやすみなさい、夜中に廻つて來るわけにもゆかないわね」
一番年増らしいおいらんが、布團の裾の方をぽんとたゝいて、妙に浮々と冗談を撒いて部屋を出た。
「廻らなくてもいゝお客なんて、きつと、あの人達嬉しいのよ。世の中の女が共謀して、おいらんの買〆めをやつたらどんなもんでせう。いゝいゝ、いちんちでいゝから、助平な男達を思ひきり懲らしてやりたい」
「男なんて、全く意地が汚いやね、むかむかするよ」
誰も寢つかれなかつた。自分の亡靈が、長襦袢一つで、野獸の様な男に抱かれる姿が、執念こく頭の中を往復する。筋向ふの部屋の障子が開くと、床から這ひ出した女が、障子の穴を專念に覗く。
「一寸、どんな男？」
「うん、なか〳〵美男子さ！」
「妬けるよ、あたしにも見せて」
廊下はひつきりなしに人が歩き、何か取り込みのある家の様に、隅々までも騷々しい。部屋々々からは、さゝやきが漏れ、まれに笑聲が起る。玉の井の淫賣の話を語る客の、得意そうな聲が一段と高く響く。何かを女に強いてゐるらしい、變態性の男の聲がする。すると、寢られぬ床の中で、女客達が昂奮して、足をバタ〳〵させ乍ら憤慨する。新しい客を案内するやりて婆の聲、不秩序な騷音の中に、おいらんの草履の音のみがいつも單調で寂むそうだ。
寢不足の瞼をした女客達は、白粉の剝げかかつたおいらん達に見送られて、朝歸りの自動車に乘つた。路傍の屋臺の前には、長襦袢のまゝの一人のおいらんが、客の朝食の惣菜を買ひに來てゐる。その落莫とした姿に朝日がまぶしい。
遊廓を出ると、街は相變らず昨日の生活の平凡な連續である。自

動車が飛び、電車が走る。人間が雜踏する。騒音がもつれる。そして此處にも朝の太陽が燦然と輝いてゐる。

「あゝ、やつと娑婆へ出た」

「ふん、シャバか！」

不機嫌に口を噤んでゐた女達が、ぶつきら捧に吐き出した。

亂雜、無秩序の生活は、貧困の重荷の下に、益々女給達を絶望的な自棄の世界へ追ひやつた。一人の女給が、裏の露路口で、金を無心に來た母親に、二三枚の銀貨を渡して來ると、北海道へ病身の老父を殘して來た女が、父親からの手紙を、澁い顏で讀んでゐる。

「でもいゝわ、あなたなんか手紙の催促だから悠長なものさあたしとこへは、何しろ六十三の戀人が毎日やつて來るんだからね」

店のストーブの前には、月賦拂ひの反物代を集金に來た吳服屋が、煙草を吹かし乍ら、何時迄も頑張つてゐる。女達は、この吳服屋の暴利振りに不平を抱き乍らも、容易に絶緣出來さうもないのを無念がつた。染物屋は頼みもしないのに、新柄見本を矢鱈に展げて、女達の慾望をそゝらせ、効果のない時は、他店の女給の注文柄を說明して、購買慾を煽りたてる。既にパトロンに春着を買はせた女は「第三天國」へそれを陳列して、まだ何の目算も立たない者達に觀賞を强要する。お座敷の歸途、客と立ち寄る藝者達の衣裳も、何時の間にか明るく變つてゐる。街には春が來たのだ。女達は、正月着の殘金も濟まさないうちに、觀櫻會の衣裳が頭痛の種だつた。

いら〳〵と、體の處置に困る樣な日が幾日も續く、そしてそんな日、女達は誰かを口說いて、京濱國道を一息にすつ飛ばすのだ。唐もろこしの樣に、髮を赤く縮らせた、超國家的なチャブ屋の女と、目茶苦茶にダンスでも踊れば、日頃の鬱憤が性急に飛散する。眠れない夜は、品川の「サントク」邊りで飲み明せばよい。そして、翌日は夕方迄熟睡だ。女給部屋の、戸板の布團に厭いた時は、待合の雜魚寢も面白い。凡そ、物事を考へると言ふ事は身の毒だ！考へたつて、金になるわけのものではない。

一人の客が、受持女給に「會計」を命ずると、周圍の女達は、自分の客を置きざりにして、何氣なさそうにたかつて行く。番外の恩惠に預ろうと言ふ下心である。そしてそれは不景氣に連れて益々露骨になる。

だが、行き詰つたものは展開させねばならない。一部の女達は、さうした生活の中から少しづゝ内省の時を得た。果てしなくもつれて行く生活に、疑問の瞳を向け始めた。そして、徐々に、書物と思考への慾望が動き始めた。

三

蓄音機のジャズは鸚鵡の樣に毎日同じ文句を我鳴り立てゝゐた。臺の客は大部分が學生である。今日も二階の廣間のテーブルには、私立日大學に席を置く一人の「思想家」が、資本論の原書を抱

へて、ビールを飲み乍ら、如何に語學の難解なものであるかを、受持の女給に語つてゐる。この男の言葉を聽いてゐると、語學の解らないものには全々思想がないとでも言ふ樣である。だが、女達は、この男の前で物識顔をする事を遠慮した。多少でも、物の解る樣な顔をすると、彼は早速、懷から回覧雜誌の樣によれ〱になつた原稿を取り出して、衒學的な文章を得々と、しかも强制的に讀ませ樣とする。こうした男の前では、女達は常に警戒的だ。

「どうして女給つてものは、こうも眞實性がないのかなあ、餘り商賣氣を出すなよ」

「ご冗談でせう。あたし達、眞實性の安賣なんかしないわよ。これでも彼と二人の時にはね……」

暇な日には、二三冊の書物や雜誌が、女給達の間を、そして終ひにはコック部屋迄も轉々する。

女學校を出たと言ふ一人の女が、女子大學生の友人から、時々本を借りて來た。

今日も彼女は、女子大學生が、その素晴しい本箱の中から選んでくれた、女給には適當だと言ふ書物「ヤーマ」を讀んでゐた。

美容院通ひでもしそうな、縮れ毛の藝術家らしい風彩の青年が、その傍に立つて、皮肉な微笑を浮べてゐる。

「君、今頃そんな本讀むのかい？そんな處は、もう現在のロシヤにはありやしないよ」

女は、何か惡るいものでも見られた樣に、狼狽てゝ本を閉ぢた。

「さうでせうか、でも、私讀むものがないんですもの、私達は一體何を讀んだら好いんです？」

「さあ、モーランの夜開く夜閉すなどはどうです」

男は其處へ腰をおろしてウヰスキーを命じた。そしてくど〱と小說のくだらないことを論じた。變に氣を負つた、人を小馬鹿にした樣な態度である。

「あの、少しロシヤのお話をして頂戴。あなたはきつとご存じでせう？」

「くだらん事ですよ、そりや僕にも、そんな事に興味を持つた時代もあつたんですがね」

「私ね、近頃よく思ふのよ、どんな仕事でもいゝから、何かもう少し意義のある仕事がしたいと……」

「僕なんかね、資本家のからくりなんてものはとうに解り切つてゐるんだから、現在では唯それを逆に利用して見ようと思ふ丈です」

氣がついて見れば、彼は「ダイヤモンド」と言ふ相場の雜誌を持つてゐた。

「それよりかどつかへ一度愉快な旅行をしようぢやありませんか」

「嫌やな方！あなたなんかと旅行したら損するわ」

「貞操的にですか。それなら男だつて損ですよ」

「そんな馬鹿な事が……」

「いや、君は案外古いですね」
男は、チップを氣張つて、鳥打ちを直して出て行つた。後で若い女給達が囁き合つてゐる。
「一寸今の男ステッキボーイに持つてこいね」
「そう、一寸いゝ顔してるぢやない？和製バレンチノかハハ……」
一部の女達は、書物を讀み、自分の周圍を見廻す度びに、自分達の生活態度に益々不滿を感じ出した。何か、もつと生甲斐のある生活方法が、何處かになければならない筈だと思つた。始めて上京した田舍者が、東京の名所をさがす樣に、女達は手がゝりのない焦燥に驅られながら、本屋の店頭を漁つた。
ある日、よく雜誌等に寫眞を出される、プロレタリア文士が、その友人に連れられて飲みに來た。二三の女給達は、顏の白粉の濃さを氣にしながら、虔しみ深く歡迎した。書物等まるで無關心な朋輩にも、彼が傑れたプロレタリア文士である事を吹聽して、喜びを分擔させた。彼は、銀座の歸途で非道く醉拂つてゐた。ウヰスキーを立て續けに命じながら、手近の女を捉えて無理やりにキッスをしたり名刺を取出しては、誰彼となくばら撒いた。そして、少しばかり肩を張つて自分が前科三犯である事を喋りたてた。大部分の女達は、薄氣味惡そうに彼のテーブルを離れて行つた。
「社會主義の文士つて、全く非常識ね、いきなりあたしにキッスするんですもの、あんな奴大嫌ひだわ」
一人の女が、侮蔑的な、投げ捨てる樣な怒りを擲くと、傍の女が氣の毒そうになぐさめた。
「でもね、社會主義つて職業（しやうばい）の人だつて、皆あんな人ばかりぢやないわ。何時かあたしが、銀座にゐた頃よく來た、松村駒三つて人なんか、何時も大勢の書生さんが、先生々々で大變よ、それに氣前もいゝしね」
多少「常識」を持つた女達はこの會話を、苦笑して聞き捨てた。
女給部屋へは、講談雜誌と一所に、見馴れない赤表紙の本や、薄いパンフレット等が、次々に持ち込まれた。女達は、女學校出の朋輩に、難しい言葉などの解釋を聞き乍ら、熱心に讀み出した。感激して涙ぐむ者さへあつた、併し、中には、鼻唄を歌ひ乍ら、それ等の本を、灰皿の代理にして濟ましてゐる女もある。
激しい夕立の日だつた。雨をさける爲に、三人の長髮の學生が飛び込んで來た。彼等は注文したコーヒー茶碗をテーブルに飾つて、何かしきりに議論を始めた。言葉の中からは熱情を帶びた難しい熟語が澤山飛び出した。そして、軈て激しい議論に疲れると、今度は低いバスで、首に力を入れて、元氣の良い歌をうたひ出した。

春のヴォルガの溢るごと
觀喜はロシヤに滿ちて　……………

一人の女給が、舊友にでも逢つた樣に、親しさうに彼等のテーブルへ近づいた。

「一寸、あたしにもその歌教へてよ」
學生達は、はつとして歌をやめた。そして、お互に注意深げに瞳で合圖し合つた。
「君、この歌が何の歌だか知つてるのかい？」
「えゝ、解る様な氣がするわ」
併し、彼等はスパイにでも對する様な神經質で、女に警戒的な質問をした。女は、變に氣眞面目に不骨な返答をしてゐる。軈て一人の男が登校用の靴の中から、一枚一錢と二錢の藏書標を取り出して、獄中の同志の家族を救ふ爲に買つて呉れと言ひ出した。女は、ひどく感傷的になつて、帶の間から貰ひ立ての一圓紙幣を出して渡した。自分等には、手の屆かない處にある様に考へた、運動と言ふものの爲にこうも容易に盡す事の出來たのが喜しかつたのだ。
「あたしね、弟に仕送りをしなけりやならないのよ、もつとあげたいけれど、これだけ寄附するわ」
「濟みません。僕達、こんな處の女で、あなたの様な物解りのいゝ人始めて見ましたよ。本當に嬉しいんです」
彼等の間に、一しきり主義者の苦しい生活狀態が話題に上つた。
女は昂奮して、涙ぐみながら言つた。
「あの、もし何かの會合でもあつて、周圍がうるさかつたら、家へゐらつしやいよ、家のスペシアルなら大丈夫よ、晝間は客もないから、あたしがうまくやるわ」
學生達の歸る時、女は早口に訊いた。
「あの、そうした、あなた方の運動は、誰が主導してるんですの？どう云ふ方法で皆さんがお働きになるんです？」
「解りませんね、凡ては雲の上の命令なんですから、僕等は唯、歷史的使命の爲に、默つて働くだけです」
學生達は、極めて普通の聲でそう言つた。
「雲の上の命令だつて、そんな事何だつていゝわ、あゝ言ふ人達の爲に使ふお金なら」
明るい感激が、わく〳〵と泉の様に湧き出た。女は、女給部屋へ驅け込んで、糊で突つ張つたエプロンの端で、亂暴に涙を拭つた。
感激と、緊張の生活がしばらく續いた。そして、女達はともかくも、自分達が虐げられ、蹂られた「階級」に屬してゐる事を理解した。何が自分達を自棄と亂倫の生活に追込んだかをも會得した。だが、理屈の上では、自分達が新しい生活への出發をしなければならない事を承知しながらも、進路を見出す手がかりを得ることが出來なかつた。彼女達は、店へ來る「主義者」達に、客の少ない時を選んで、眞面目に正面から突き當つて行つた。彼等こそ、自分達の味方として、必ず手を曳いて呉れるであらう。だが、それ等の希望は片端から裏切られた。
「お前達になど解るものか」
ひどく高壓的に出る學生主義者がゐる。自動車の女車掌と、工場

の女工以外には全く希望を持たない「主義者」もゐる。場所柄も考へずに、運動の話など質問する女給に、キッスを持つて應答する若いプロ作家もゐた。

「御自分樣では何と思つてお出ででも要するに人は君達をたゞ賣笑婦としか思つちやゐませんよ。第一生活がルンペンですからね」

酒臭い呼吸と共に、こんな風に言はれると、女達は救はれ難い寂寥と侮辱に沈默せねばならなかつた。自分の本心には、二重三重の衣を着せて、お互に騙し合はうとするのが、在來の女給と客との間の取引だつたのだ。女給の言葉の中に、眞劍な眞實を發見する等と言ふ事は、鮑から眞珠を嚙み出す程珍しい事である。季節はづれに咲いに花の樣な、女給達の眞劍さも、結局、相手には理解されなかつた。折角動かされ初めた自覺的な生活への情熱も、やがて又少しづゝ軌道をはづれ出さねばならなかつた。彼女達は、過去の不幸だつた自分の生活の經路に、再び絶望的な自棄をさへ感じ出した。

時代の波に浮動する、流行の一部分を摘み取つては、適度に自分達の生活樣式に同化させる事は、彼女達の昔からの「本能」である。そして、女達は、今度も亦、この方法を實行しようとしつゝある。相手の客によつて、一日のうちに何回も主義の變更をやり、誰にでも迎合的な態度に出て、收入の多くなる方法を實行するのだ。

「君は主義者だつてね、一つ僕と議論しようぢやないか。マルクスは事物の過程と言ふ事に就て言つてゐるが、革命のあとには、どんな建設が用意されてあるんだい？」

鑄型で造られた樣な銀行員が、女給を相手に流行のマルクスを攻擊して、安價な自己滿足に瞬間を享樂してゐる。

「お坊つちやんね、お味噌汁で顏でも洗つてゐらつしやいよ」

女達はこんな面倒臭い議論は、上手に茶化す術を會得してゐた。

「タワリシチイ」

アナーキストだと自稱する、金持の靑年が、近代劇の色男の樣な握手を求める。

「だが、一體君は赤か？黑か？」

「そうね、今日は黑くなりませうよ、お久しぶりですもの」

常識的に「大衆化された社會主義」は、恰も「貨藥サフラン入り」の仁丹だ。毒にも藥にもなりさうもなかつた。都會交響樂と草津節と、浪華小唄と、そして勞働歌とが、何の不調和もなく街頭を流れて行く。そして、夜の鋪道には、モダンボーイと共に、マルクスボーイが濶步した。彼等は、髮を五分刈にして、ネクタイをつけない事に時代の尖端を表現した。——主義者の戲畫的模型も時代の產物である。

緊縮、不景氣の騷音の中で、冷酷に生活の脅威に惱まされてゐる女給達は、今日も、明日も、大衆化された淸凉飲料的な「社會主義」を賣つて生きようとしてゐる。最後の日まで、遂に救はれ難い彼女達の「宿命」であらうか。

完

便衣隊創設

中本たか子



1

炸裂する榴霰彈の音。空中に青い扇形の閃光が開く。忽ち一齊射撃——敵は森の中だ。

「……駈足！」

追撃——薄のやうに穂を揃へた中隊の銃口が兵士等の頭上で一齊に揺れると、幅廣い河になつて緑の野を走り出した。野道がベルトのやうに旋回する緑を縫ふ灰色の縦隊、長い！　タ、タ、タ、タ……

森の中からは又一齊射撃——木々の間から白煙が吹き出る。唸り來る銃彈、叫び聲、爆發の音！　味方の銃口が揺れざわめき、日光燦く。背嚢の下から汗。見る見る細る中隊の後に湧き上る土埃——

「止れ、此處だ！」

樫の森迄。ばらばらに止る足音。

「伏せ！」

「撃て！」

腹這つた兵士の擡げた銃口——一齊に赤い火焔を吐く。空中を裂く彈丸、とゞろく音、噴煙、行く手をこめる火の手——

飛び來る彈丸が兵士等の頬に鋭い直線を殘す。重い！　鐵のひゞき、馬具の軋しみ、兵士等の喘ぎ！

再び炸裂する榴霰彈の音。森の中に火が燃え擴り、細い樹の枝が明るく見え出した。その下にうごめく敵兵の頭が赤く明滅する。

罵りながら崩れる敵兵のざわめき——敵の退却だ！

「起きよ！」

「突貫！」

再び追撃――銃を胸の前に構へたまゝ、兵士等は脊を丸め、喚聲をあげて駈け出した。ウワ――ッ……

兵士等は落葉のやうに森の中へ散り込んだ。森の中から敵の放つた火の手が次第に擴つて來る。遠く敵兵のざわめき、軍馬の嘶き。

「萬歳（ワンセー）！」森の中の兵士等は歡呼し乍ら銃を轟かした。

「――國民革命軍第一師は北路の江村を攻め、廣西軍は支へ得ずして退却した。第三師は石圍塘より雲南の主力を攻撃し、三回に河を渡つて突撃したので、遂に敵方退却、白雲上、觀音山は第三師の手に歸し、敵方はその北方、五杆の地點にあり。廣東は全く革命政府軍の占領に歸す――六月十二日。』

勝利した國民革命軍は、觀音山、白雲山に守備隊を殘し、隊伍をとゝのへて廣東城内に歸還した。兵士等は綏り銃を肩にかつぎ、唸り、叫び、笑聲を立てゝ續々と城内へ入る。城門の口に青銅の龍が轉り落ち、城門の名入りの額が斜に下つてぶら／＼搖れてゐる。建物や樹々からはまだぶすぶすと煙が立ち、煙硝の臭がこもつてゐる敵の遺物――靴、帽子、上衣、藥莢――

「萬歳（ワンセー）！」

城内に湧き立つ歡乎、各戸になびく×旗――滿地紅。罷業團員は群になつて街を押歩き、赤ネクタイの兵士等は市街に充滿してゐる。城門の口。勝利した軍隊の先登から一齊に喇叭が鳴り渡つて來た。

――テト、テト、タ――、テト、テト、タ――……

日光に燦く金色の樂器。壓力を持つて伸び行く吹奏。灰色の軍服の長い列――四列縱隊、足音の律動、タク、タク、タク……。斉しく角度を作つた幾千の銃身――

「國民××軍、萬歳（ワンセー）！」

打振る手、赤い布片、鱗のやうに光る群集の顔。軍隊は次第に街へ伸びて行く。集つて來る群集、群集――遂には、群集は軍隊の兩側に並び、それと並んで歩調を合せて歩き出した。街路の幅一ぱいなつて流れる小銃の林と人々の頭。

「國民××軍、萬歳（ワンセー）！」

「打倒軍閥、萬歳（ワンセー）！」

電車はとまつた。黄包車（ワンポーツ）の苦力は梶棒を下して駈けつけた。子供等は二階の窓から花束のやうに首を押し出してゐる。小路の口は市民の顔で埋つてゐる。

テト、テト、タ――、トテ、トテ、タ――

街路一ぱいに群集は埋り、動く、動く。炎熱の午後、人々は汗ばみ埃にまみれ、内部から湧上る無形の慾求に操られて激しい力を感ずる。

澎湃とした群集の波、群集の叫喚、大地のとゞろき、吹き上るサイレン――それは街々が、それ自身の内部から押し出す音響だ！　慾求だ！　奔騰した群集の音響は街々の窓へ反響し、電柱を搖るが

し、高く參き昇つて、巨大な煙突や、遙かな高塔をふら〳〵にした市全體に漲り溢れる群集は、旋風のやうに、濁流のやうに、渦巻き廻る。幾十萬か、幾百萬か――この巨大な群集の波は、きらきら光る人々の顔が識別することも出來ず、群がりつゞいて出來たのだ。群集全體が一つの意志を持つた生物だ。

又罷業團が行列に加つた。女達が加つた。子供等がついて來る。――歡呼の反響で、觀音山の遠景がゆれる。

白熊のやうな白雲が群がり登る亞熱帶の大空。その巨大な圓形――亂舞する太陽光線の滿ち溢れる空間。地には舗道が燒け、人々の身體が蒸れ、堪え難い暑氣！　埃、埃……鳴動する天地の中にとけ込んで行く群集の大波――長く、そして大きく……

「打倒軍閥、萬歳（ワンセー）！」

2

靜けさ――昨日の熱狂に代る今日の靜　。街は正しくその體形を守つて、動かない。屹立した洋館の切線、電柱の直立――堅い沈默炎熱を反射するコンクリート。その中に挾まれた二本の平行線――レールは白く、鋭く、光る。

昨日の群集はどこへ吸ひ込まれたんだ。街路には稀な人影。時々自動車……乘合自動車はどこへ行つたか。それから黄包車は――

靜けさ――だが、どこかに何か動いてゐる。その奥には何か隱されてある。

不協和音を出す銅羅の音が一しきり、遠くにひゞいてゐる――

珠江に面した港には、船體を横づけたまゝ動かない河船が數多いそのマストに赤旗のみが飜つて船上には人影が見えない。埠頭には苦力がまばらだ。埠頭に近く立つ、白く大きな洋館――亞洲飯店（エシア・ホテル）の窓々に、風を受けて大きく膨らむ日覆の布片がばたばた騷ぐ。――海風。

靜けさ――その幕を押すやうに、時々河船の汽笛が鳴る――

バンド（海岸通り）の向ふ沙面島には、各帝國の軍艦の竝列――或間隔を持つて環になり、複雜な鎖！

同志永は廣東總工會の本部にゐて、續々と來る罷業のレポートを受けてゐた。彼は汗の滲むシャツ一枚になり、赤インクと墨で手を染め、頬にまでその飛沫をつけてゐる。

――市内乘合自動車、一齊罷業開始。

――河船四隻、水夫火夫三百人――續いて二隻、百五十人罷業。

――沙面のアマー、ボーイ等罷業索動。

――上海のゼネラル・ストライキ及びボイコットは完全に行はれ該地の勞働大衆は、外國陸戰隊、義勇隊及び外國軍艦と戰鬪に入つた……

印刷物を一抱へにした青年ユウが這入つて來た。鬱蒼と茂る長い

髮が額に垂れ下るので、うるさげに首を振つては拂ひながら。入口で一寸立停り、永の姿を見つけると、進んでその卓子の上でどかりと印刷物を投げ出した。その重みに愕いて永の縋つてゐる卓子が搖れる、一しきり。彈みに印刷物の上の二三枚が飛び散る。永は振り返つて、その大きな二皮眼で青年を認める。そして、首を縱に動す。

「出來たか。」

とび散つた一枚を手にとつて、永は讀み出した。青年ユウは卓子に片手をかけ、肩をつき上げて永の赤銅色の顔をみつめる――

『立て、廣東の勞働大衆よ！　今は一刻も猶豫すべき秋ではない。我々は上海の××人紡績工場の殘虐に悲憤した。五三十事件に震撼した。各國××主義の横暴、殘忍に切齒扼腕した。時、眞夏を控へたるに、我々の骨の髓にまで鬼氣啾々として迫り來る。前世紀から百年にかけての白禍は、我々中國同胞の土地を奪ひ、職を奪ひ、ありとあらゆる利權を奪ひ、剩へ幾千萬の人命を傷つけ失つた。尙もこの上我々は弱少民族として、各××主義の銃口の前に屈服してゐるか。否、斷じて否！　憎むべき惡鬼、毒蛇たる各××主義を中國の土地より掃蕩すべく立たざるべからず。

立て、廣東の勞働大衆よ！　今は一刻も猶豫すべき秋ではない。各××主義の利權と結びつく、各軍閥を擊退したその勢を持つて、立て！　――勇敢果敢なる上海の勞働大衆の行ふ戰鬪に連帶表示として。五三十事件に流した同胞數十名の血の代償を拂へ！　ゼネラル・ストライキへ！　打倒帝國主義へ！――』

「よし、ぢや、配布だ！」

青年ユウは印刷物をとつてポケットに詰め込むと、後も見ずに出て行つた。扉の彈き返る音をきくと、永は何か思ひ出した。

「待て、ユウ。」

永の呶鳴る聲は、閉つた扉に刎ね返された。永は前屈みになつてへなへなになつた空腹を叩いた。

粗末な、黄色い建物――廣東政廳だ。玄關口には薄汚い灰色の軍服を着て、小銃を持つて立つ、番兵が二人。

その二階の裏向きの部屋。巨大な、無愛想な、中年の外人が、數人の支那人の額を集めてゐる。卓子の上には書類――夥しい書類が積み重ねてある。外人は荒い頬髯の伸びた中から高い鼻を突き出して、黑くて鋭い眼を輝かせてゐる。彼こそは、廣東の主腦ボローヂンだ。

「組織だ、組織だ！　好いかね、この全國擧つての排外運動は、須く組織的に行はなければならない。銃を持つ前に、我々は彼等の最も弱點である經濟封鎖を完全に行ふことだ。それには廣東の罷業の火を香港に點けることだ。香港を完全に封じてしまへば、彼等は震へ上つてしまふんだ。――廣東は商業地にして、香港は工業中心地だ――兩者で全一の經濟區域だ。だから敵の根據地香港との提携――これなくしては廣東の罷業は、充分に効果を收め得ないであらう。

これこそは、經濟上戰略上の重大意義だ！　時に總商會の答は。」
　ボローヂンはその高い鼻を、右側にゐる顏の長い男に向けた。
「やつと話が纏つた。總商會はボイコットに割合澁々だ。併し、罷業團に對しては、西門に近い民家數棟を貸して呉れることになつたそれは過日雲南軍が徴發してゐたものだ。優に一萬人を收容することが出來る。」
「ぢや、香港からの罷業團が何時歸つても好いね、そこに收容出來るから。――で、香港の方の手筈は大丈夫かね。」
「いや、その念押しは恐縮だ。」と角刈りの男が顎を出した「六月始に組織者として三十八、六月十二日――××軍が廣西雲南軍を擊破した時に十五人、更に十五日には二十人送り、着々と組織し、遂に十九日から總罷業開始の豫定とまでになつた。」
「萬歲(ウラア)！　だが諸君、バンドをしつかりしめてかゝり給へ。敵は世界の列强を一束だ。もう既に、租界の沖には續々と軍艦が來つゝあるではないか。この際、戒むべきは暴動である。沈着に、冷靜に――諸君。これから、廣東の總罷業に就いて具體的討議に移らう。」
　ボローヂンの顏から汗。他の人々の顏も脂ぎつて光る。窓から蒸す如き熱風。彼等の圍む廣い卓子の上には書類――夥しい山積み。
　市街の電柱、壁、塀、さては商店の柱にまで、罷業罷市の煽動宣傳のビラ傳單！　隙間もなく、べたべた貼り並べ、貼り重ね――全市の武裝！　魚鱗のやうに輝いて、炎熱を反射する全市の諸所に、×旗が鰭のやうになびく。廣東は潮が來さへすれば、直ちに游ぎ出す魚の形だ。
　亂雲は空に湧き上つた來る。白晝、折々驟雨。そしてその間に、中空に突き立つ煙突や、埠頭に並ぶ巨大な起重機――動かないそれ等に、太陽光線は激しく降る。棧橋の後方の塔で、眞鍮の鐘が鳴つてゐる。傍で眞鍮の棒が運動する――遙か彼方の各帝國の軍艦の煙を拂つて――左、右、左、右‥‥●

3

夜。路次の角。闇の中から數人の男が駈け出した。先方に走る黑い一點を追つて――ポン、ポン‥‥短銃の音。先方の黑い影が搖れた、倒れた空氣が尖る――漲る殺氣！
「行け、あいつを確めろ！　裏切者だ！」
　數人の男は倒れた者の側までかけつけた。靜寂の中にひゞく足音すぐ側の港では、碇泊した汽船のロープが搖れてゐる。
――この邊りには、罷業團の步哨が隱されてあるのだ。
　河船水夫シイは、泣いてゐる妻を尻眼にかけ、肩を垂れて家を出て行かうとした。兩手をポケットに突込んで――右手の指先に觸れる、冷い銀貨。シイが戸口まで進むと、後から妻が追ひ縋つた。髪

を振り亂し。顔には止め度もなく涙の條を作つて――
「お待ち。ぢや、どうしてもその一元（約一圓）を組合へ持つて行かうとするのね、あんたは。あの子は死ぬよ、御覧、あの通り熱に呻いてゐるぢやないかね。」
「駄目だ、放せ！　組合の規定だ！」
シイは妻の力にひかされて二三歩後退つた。
「いゝえ、その一元を此方へお呉れ。あの子は死ぬる――もう薬はない！」
「全く、さうだ。だが――おい、分つて呉れ。この一元が――からして俺と同じに他の奴も苦しみ抜いて出す一元が、俺達を救ふんだ、あの白鬼を、この支那から追出す爲の軍資金だ！」
「ぢや、どうしてもあんたは、あの子を殺すんだね。あゝ――見す見す、殺すんだね。」
妻はシイの肩を捉へた手を放して、わつと泣き伏す。シイは唇を突き出して、ぢつと妻の顫へる肩、首根に亂れた髮を眺める。やがて彼の心を打つあるものゝ響き。
「おゝ――打倒白鬼！」
彼は自らを叱咤して扉を蹴つて外に出た。彼の後頭を髮の様に強靱な綱が引張る。いけない――彼は飛び上つて電柱に突き當ると、又默々と歩き出した。ポケットに突込んだ指先に觸れる冷い銀貨。冷め、熱し――種々な思ひ。溜息をつき、心に戰ひ乍ら彼は行く。

軍資金――罷業資金――政府も補助する――商人は二元以上十元官吏は俸給高による按分比例、學生は五十仙以上二元、兵士は二十仙農民は十仙、そして俺等勞働者は日給一日分――規定の徴收だ。
「おい、シイぢやねえか、一寸待て！」
後から聲を浴びせるのは、荷揚人足のクンだ。彼はばたばたと追ひついて――
「ぞつちの方はどうだね、俺等の方はすつかり調つたよ。愈々明日から罷業だ。」
「此方だつて大丈夫さ。二三日におつ始める手筈だ。」
クンはシイと肩を並べて歩き出した。
「一寸、俺には腑に落ちないんだがな。總商會が俺等と一緒に罷市に入るのは、ありや一體、本當に俺等の味方かね。」
「外國人を追つ拂ふ時だけさ。洋鬼子に對しては、同じやうに恨みがあるからさ。だが、總商會と總工會とはその根本が違ふんだ。俺等の本當の味方は勞働者同志よ、それから農民だ。これがみんな手を繋ぐんだ。だから、そら、今度だつて、農民があんなに大勢で、わざ〳〵やつて來て呉れたぢやねえか。まだ〳〵來るんだぜ。」
「ぢや、俺達同志――勞働者と農民とだけで、あの憎々しい洋鬼子を追拂つたら好えぢやねえか。」
「そこがよ、問題なんだ。今、外國人を追拂ふには、總商會――あの金持等と手を繋がなくちや、充分とは行かないんだ。」

「さうか――さうだな。ぢや、後で。」

クンは首肯いた。そして、大きな手を振つて、あつさり踵を返した。シイは一寸その方を見たが、又すたくくと歩いて行つた。

「鬪爭だ。いや、戰鬪だ――命を的に――打倒××主義！」

夜――はてしない闇。

闇の奥、ずつと遠い邊りから、一點の火がゆらめき出した。それは次第に育つて高く上り、又下つて此方へ近づく――烽火だ。近づくに隨つて、それはその後に一定の間隔を置いて、點々と火を連らねてゐる。火と火の間には、一團の黒い人影が續いてゐる。

烽火を打振り〳〵、その一行は、何かがや〳〵話し乍ら進む。先登の火が闇に消えた。續いて、次第々々に消えて行つた。と、突如として、近く、大きな焔のゆらめきが見え出した。それに續いて又後から後から……。森を廻つたのだ。焔の明りで、男達の長い蓬髪が、肩に擔いだ旋條銃の口が、見分けられる。話し聲――がや〳〵と無秩序に、列に伴ふ。

烽火の列は水田に眞赤な反映を投げ、うねり、曲つて、輝き上る。樹木の列が照し出された。小枝の茂みが、ひら〳〵とひらめく滑らかな木の葉が……。

彼等の足音がはつきり聞きとられて來た。咳、話し聲、叫び聲。眼の落窪んだ頬のこけた男共、錆びたシャベルに似た手、裂けた服、足には藁靴――農民の一團だ！ 誰か頓狂な聲を出した。

「ありや、何だね？ きら〳〵と空に廻る光りは。」

「一寸、待つた。うむ、あれだ――探照燈ちうもんだ。乾度、毛唐の軍艦がやつてやがるんだらう。」

「ぢや、廣東はもうすぐだな。」

「すぐだ。そら、そこにある黒い山――見えねえか、あれが白雲山だ。」

「よし！ 俺等がかうして十何里といふ道を厭はずにやつて來たんだもの。廣東の兄弟は飛び上つて歡ぶだらうなあ、おい！ 廣東の勞働者等のことよ、俺等の兄弟等さ。」

烽火はボンボン音を立てゝ燃え上り、ゆらめく。焔の列は闇の中の蛇のやうにうねり、消え、現れ、旋轉して、急ぐ、急ぐ……。

4

廣東大學で開催された聯合大會――廣東農工團及び學生團商團百二十餘團體の代表者を集めて。國民黨より汪兆銘、廖仲愷等が來て聲援演説。辯士も聽衆も熱狂、奔騰。――來る六月二十三日の總罷業、總罷市と共に、排外大示威行列等の手筈が全く定まる。

上海、廣東及び香港の連帶罷業は着々と進み、總工會にレポートは飛ぶ、刻一刻……。

――上海の勞働大衆は、外國義勇隊と蘇州橋上で白兵戰を行ふ。

――香港海員組合は、十九日、英國船會社の沿岸航路に對して、同盟罷業を行ふことを決議し、同日午後三時英國汽船三隻とノールウエイ汽船一隻の支那船員ストライキ開始。十九日夜十二時廣東を出發する筈の香港廣東間の英國汽船も全く動かなくなり、廣東澳門(マカヲ)から歸つて來る筈の汽船も姿を見せず。外人使雇の支那人下女男組合でも、二十日より同盟罷業を行ふ手筈。罷業に對する香港英國政廳の準備――香港義勇隊及び警官の非常召集。九龍半島の租界線の警備嚴重。

――廣東の租界地沙面島のフランス橋入口で日本人が射撃され、卽時絶命。

――二十日、香港の總罷業、火の手益々揚る。電車運轉車、車掌等の罷業――運轉中止。電車會社職工の罷業。ピーク・ホテルのボーイ連の罷業。對岸の九龍に飛火して、そこの外人使雇の支那人の一齊罷業――近く、九龍、香港に渉つて總罷業を開始せん。香港政廳は必死の大警戒。

――沙面の罷業開始――二十一日朝から、勞働者、使用人等は全部沙面を引揚げて、廣東の收容所に入る――午後三時には完了す。イギリス水兵は、水道及び發電所を警備し、各國人は食糧を貯へて籠城準備。英國總領事の通牒――廣東政府へ「罷業團が外國人に危害を加へ、又は暴動を起さぬやうに十分に警戒を望む」と。

――香港から廣東へ歸還した罷業團約一千、沙面より千五百は、臨時[illegible]人收容所に入り、一年間繼續の意志。持久戰の用意――食糧供給の策、農民との握手。

――全部歩調を整へた香港の總罷業。二十日來、急轉直下の勢で進展。工場勞働者と海員とは全部。ピークの外人使雇のアマー、ボーイ等六百名參加。ケーブルカーの從業員は操業停止。チエーヤーや黄包車(ワンポーツ)も殆ど罷業に入り、横に長い香港の街に、徒歩の通行者は右往し、左往す。クインス・カレヂッを始め、その他の英人經營の學校は全部同盟休校。印刷工の總罷業により、新聞發行不能。牛乳配達夫の罷業入り。「香港勞働委員會」――支那勞働者の秘密結社が××黨指導のもとに組織さる。その委員會へ、罷業の諸件に關した絶對權を扶與し、廣東政府保護のもとに行動す――!××黨員の神出鬼沒、赤いリボンを胸につけて。

――廣東總工會の前衞分子二十名、香港の總罷業應援に赴く。廣東市中の各所で、市民、勞働者の排外の大道演説――市中に俄かに緊張味加る。外人の市中歩行は危險。黄埔軍官學校の制服をつけた軍人が、街角で激烈な言辭を弄し、群集を煽動し、氣勢を擧げてゐる。廣東の事態は愈々惡化す。

――火の手が刻々に揚る香港。完全なる組織網を布く××黨――その秘密結社は罷業者に號令し、中央集權の實、全く成る。大衆は動く、上へ、下へ……。「人種差別を撤廢し、參政權を與へよ」及びその他の要求六ヶ條を罷業團より香港政廳に提出。直ちに香港政廳

は戒嚴令を布き、食糧の管理を始めた。電報電信の檢閲。一切の商業、金融營業の停止。

二十二日、廣東の領事會議が開かれた——事態の險惡に對し、沙面の防備の件、及び食糧供給に關し、各國一致行動をとること決議。租界地沙面は一の要塞化す——廣東へ導くところの橋の橋門は鐵條網と土嚢を以て封鎖。陸戰隊の上陸。無數の軍艦は海岸線に添つて環狀となり、廣東市に砲口を向け——戰鬪準備着々と整ふ。

——香港の罷業罷市全く成る——工場、交通、港灣勞働者及び使用人等一人として餘すところなし。死のやうな靜けさを保つ市中を英印の巡査が武裝し、隊をなして市中巡察。港内にはモーターボートを走らせて警戒。一時間おき位に大粒の驟雨が見舞ひ、時々狂つた颶風が襲來する——その中を侵して××黨員の神出鬼沒。遂に罷業團の前衞分子は決死隊を組織して、英國義勇隊に突進す。——外國市民は不安と不氣味に眉を顰め、流言はしきりに飛ぶ——

5

港内に碇泊した汽船の林立したマストの上へ、一齊に上る××旗——搖れ、なびき、赤い翼となつて羽搏いてゐる。

埠頭に山積みされた貨物——木材、鋼鐵、石炭、亞麻袋等の靜かなる羅列。置き捨てられた發動機が黑く海光りに沈んでゐる。

港にまで延びた鐵道線路には、動かない貨車が、無數に這ひ集つてゐる。シグナルは傾いたまゝだ——安全瓣の停止。

亞洲飯店の窓々は閉され、日覆は凋んだ花瓣に似てゐる。ずつと横、鐵骨を見せる櫓で、支那の銅鑼がしきりに鳴つてゐる——ドラン、ドラン・・・

亞熱帶の夏空に湧き上る巨大な亂雲は、南方の赤い空映に追ひまくられて北へ走る。觀音山の遠景が搖れる——空氣の斷層。煙を吐かない巨大な煙突や、市街の夥しい無數の電線に燃えたつ、まぶしい太陽光線——時々、驟雨。その合間に、颱風は空を荒れ廻り、全市の上高く伸び上つた高塔や起重機等をなぎ倒しにかゝつて來る。颶風、驟雨、太陽光線——代る〲、大空の圓蓋の中で、狂ひ、亂れ、渦卷き循る。珠江は逆卷き、白牙をむき出して、岸邊へ唸りかゝる。泡だち混濁した河水は、颶風の來る度にその勢に卷き込まれ、龍卷きとなつて高い水柱をたてる——

その波濤を蹴立てゝ、租界の沿岸ではしきりに英國の水上警察の白い汽艇が走り廻つてゐる——

全市は一齊に××をかゝげ、驟雨に濡れた舗道がその底に白く光つてゐる。家々は戸を閉し、傳單やビラで武裝した市街——隙間もなく貼り並べ、貼り重ねた紙片が、烈風に鳴り引き剝がされ市全體から押し出した喚聲が空高く湧き上る。ウオー、ウオーッ・・・

市の大通りに充ち溢れた群集の巨大な列——粘土色と褐色の顔、蓬髮、辮髮・・・帽子、軍帽・・・頭と顔が大河の如く流れ續き、その

中から××布片が飜り、列の上高く幟、幾百流か、幾千流か――。
行列は續く、長く、長く…先登には十數騎の武裝せる騎馬兵。續いて長く、夥しい淺黄色の服――勞働團だ。それから農民團、學生團…後尾に步兵一聯隊。總數約十萬。――排外大示威行列だ。

「打倒××主義！」

「租界國收！」

口々に叫び上げる群集の聲、跫音、騷音が街々を搖すり、大地に轟き、大空に湧き上つて、颶風に吹きちぎられる。前へ、前へ――群集の力は聲と共に次第に膨脹し、感激が次第に胸をしめつける。

――ウオ――、ウオ――ツ…

街路に堵列した市民や女や子供等は群集の煽りを受けて、齊しく熱狂して應援する。一人の市民が行列へ馳け込んだ。續いて二人、又三人…彼等は行列の中へ入ると、忽ち自分の力が二倍し、三倍になるのを覺えた――こいつは素晴しい、全く掛算だ。

市街と群衆は一體に融合し――否、市街は人々の息を吹き入れた巨大な生物となつて、鳴動し、蠢動する。――常にはとゞろき鳴る機械、職場、全市を覆ふ金屬の大騷音が、今や、人間と自然との大騷音で、完全に封じ込まれてしまつた。

群衆は續く、長く、長く…無限大に膨脹し、伸びゆく、その勢その步調――堪え難い昂奮と、破裂しさうな心臟の鼓動。

颶風は幟を焰のやうに吹き上げ無數の××を焰の樣に吹き煽る。

「打倒帝國主義！」

「租界回收！」

――ウオ――、ウオ――ツ…

颶風の咆哮を突き破つて、人間の咆哮のとゞろき――

行列は市街大通りを拔けると、海岸通りへ出た。白波の咬む海岸の切線、之に接觸する群集の隊形は尨大なる圓――圓と切線――進む――長い列の行進――先登の騎馬兵の銃口が眩い。

どよめき、唸る群集は、租界の入口、フランス橋にさしかゝつてゐた。運河の向ふには巨大な白堊館――ヴイクトリヤ・ホテルの横顏が見える。彼方、バリケエドを築いた橋門の向ふには、英佛の陸戰隊が詰めかけてゐる。見よ、高々と築き上げた防備！

群集は更に湧き返つた。吹鳴り、押しあひ、××を打振り、續けざまに叫び立てた。

「打倒××主義！」

「租界回收！」

――ウオ――、ウオ――ツ…奔騰した群集の叫喚は、運河を越え、バリケエドを越えて轟き渡り、敵兵の頭を打ち毆つて殺到した。

間一髮！　敵の銃口から白煙が噴き出た――ドドン。ドドン…

銃聲のひゞき、飛び來る彈丸！　忽ち一齊射擊！

「やつたぞ！」おのれ、洋鬼子！」

「散れ！――先登から號令が傳つて來た「散れ！」

騎馬隊は散兵し、群集の隊形は空の颶風よりも狂ほしく亂れ、散り、吹雪のやうに旋風のやうに渦卷き搖れる。――ウオ――ウオ――ッ……飛び來る敵彈――ドドンドドン……ビユ――ビユ――……

後尾の軍隊で、士官の號令――「退却！」トトト……

ウオ――、ウオ――ッ……「散れ！　散れ！――」

ドドン、ドドン……ビユ――、ビユ――……タタタタ……機關銃が加つた。

風速は次第に早まる。彈丸の密度は增す。巨萬の群集は逃げ場を求めて、巨濤となつて打ち寄せ、打ち返し、絕叫、咆哮――

「ウ――やられたッ！」灰色の服がばつたり倒れる、續いて靑服がそこにも、ここにも――

彼方、橋門を塞いだバリケエドは白雲に包まれて、次第にその正體を隱さうとする。銃火が明滅する度に、敵兵の並べた機關銃の口が現はれる――白鬼の牙！

「擊つな――發砲を控へろ！」

此方、群集の波の中から、指揮者の絕叫が傳はる、颶風に押されて、太く、細く……臂を打ち合せ、熱病的にくるめき、外廓にある群集は散り〲に路次へ、家蔭へ、なだれ込む。

タタタタ……ドドン、ドトン……ビユ――、ビユ――…… 彈丸の密度は更に增す。機關銃の遍漏なき廻轉――彈丸は空中に唸り、裂け、降りそゝぐ。

「アッ、ウ――、ウ――ッ！」

「おのれ。洋鬼子！……」

風聲の底――地上から、伏し倒れた者の唸りが立ち昇る。逃げ惑ふ群集は打倒れ、なぎ拂はれ……續々と轉がる。

「ウッ、洋鬼子――ッ」絹を裂く叫び。

港の浪は怒り、高鳴り、逆卷き上つて、風と共に吠える。陸上も海上も、空間も――一體となつて、絕叫、咆哮、騷音――

海岸の起重機の鐵骨は電線のやうに震へ、棧橋は浪に浮いた板切れのやうに脆く搖れる。沖邊の鎖――敵の軍艦どもは、巨濤に腹をかまれ乍ら、泰然として此方を觀測してゐる。――マスト樓で廻す望遠鏡のレンズが光る。空が急にかき曇つた――驟雨。空間は暗く閉され眼先を失ふ！雨足と密度を競つて敵の彈丸は益々强まる。逃げ惑ふ群集の波動――

首にべつとり絡む――倒れた隣の奴の血だ！　と思ふ間もなく、その者の身體が角度を作る、胸から吹き出る鮮血！　虚空を摑んでよろめいた途端に、足許に轉る死體に躓いてどつと倒れる「ち、ちく生！」……血、血、血、驟雨を受けて、赤い地圖が地上に擴る……

ウオ――、ウオ――ッ……タタタ――ドドン、ビユ――、ビユ――……晦瞑する天地の中に逆卷く絕叫、咆哮、大騷音！

6

――六月二十三日、バンド進行中の排外大示威行列に向つて、英佛の發砲。死傷者百數十名、例外として、××主義軍隊の誤射に當つた沙面居留の佛商人ジエーバスケーの死亡。英國は直ちに居留地沙面に戒嚴令を布く。居留民全部、一時軍艦へ避難。

血醒い臭氣が紛々として街々に漲り、颶風に鳴動する天地を包んで、六月二十三日の夜は進む。バリケエドを築いた橋を境に、租界地沙面と廣東市とは完全に二分された。

闇と風で徐々に光を吸はれる、遙かに望む敵地――そは、火を消し、鳴りを靜め、針鼠のやうに脊を丸めて武裝してゐる。軍艦どもは、鋭い探照燈で廣東市を洗つてゐる、くるりくるりと廻轉しながら――その光線の截斷線が複雜に交錯する。

もはや死傷者を運び去り、悉く火を消し、完全に闇で塗り込められたバンド。蕭々として荒れる風聲の中に、地の底からひゞく斷末魔の唸き――錯覺か、執念か。

闇の中にふらりと浮ぶ二つの黒影――銃を手にし、並んで足音を殺して……。鼻先に迷ふ血の臭、煙硝。岸邊でばた〱騷ぐのは帆綱の搖れる二つの影は唇だけを動かして囁いてゐる。

「俺の耳にはどうも、死んだ奴等の唸りが聞えてくる。まだ拾ひ殘してゐるんぢやねえか。」

「殘つてる筈はないがな、だが、俺の耳にけまだ、晝間の彈丸の唸りが喰ひついて離れないぞ。」

「畜生！　洋鬼子！」

「シッ、シッ……」

二人は突如、道の傍に伏して、前方の闇を見透した。天地を覆ふ怪鳥――颶風の羽搏が一しきり……。

「何でもねえぢやねえか。」

二人は起き上つて又秘かに歩き出した。忽ち片方の男が何かを踏みつけてずるりと滑つた。傾けた身體が隣の男にもたれかゝつた。

「どうした？」

「血だ、血を踏んだんだ。」

二人は少時默々として歩いた、四邊に敏感な警戒を配りながら、

――次第に熱した口調で、右手の男が聲を高めて來た。

「おい、お前はどう思ふか。何故、今日洋鬼子の奴ばらが撃つ時、政府は俺等に發砲をとめたんだい。その後でもすかさず、敵に襲撃するのを控へてるのは、何故だい？　俺りや、腸が煮えくり返つて思はず、國民黨のビラを引き剝いでやつたよ。」

「俺だつて、腹が立つて、立つて、堪らねえんだ。あの洋鬼子どもを一人殘らず撃ち殺さずには置かねえと齒がみをしたさ。ところが政府が發砲をとめたのには、考があるんだ。――敵を見ろ、英佛日米等の世界の列强が一かたまりになつてるんだ。俺等の方は、支那全體が挑戰熱に燃え上つてゐるとは云へ、彼方此方、ばらばらだ。

武器を持つて戰ふのでは、敵の前にこつちは一たまりもねえんだ。此方が奴等に擊ちかゝつて行く。すると、そら、そこに探照燈を光らせてるあの軍艦！　あれは、俺等に擊ちかゝるのを待つてるんだあの何十隻といふのが、一度にどつと押し寄せて、廣東に打ちかゝる――二三時間の中に廣東市は木つ葉微塵だ！　そして、奴等の陸戰隊が上陸して、忽ち占領し、その上どん〳〵內地の方へ進擊してくるのは火を見るより明かだ――チエッ…だから、この際、奴等をへこますのは、此方の鐵砲ぢやなくて、嚴重なゼネ・ストとボイコットだ。好いか。これをやつて見ろ！　今に奴等は、池の水を乾した鮒のやうに乾上つちまふから。」

「よし、分つた。完全に、ストライキとボイコットだ。俺達兄弟の流した血がどんなに高價なものか、この際、金高で知らしてやれ。奴等はすべて、勘定でなくちや分んないからな。若し、裏切る奴が出たら、打ち殺しちまへ！」

「さうだ、忘れるな――六月二十三日――一九二五年――」

手にした銃の臺で思はず地を打つて、その男は飛び上つた。きらり、探照燈の光芒が、二人の脊を斜に切る――

7

表面穩かに見える日が廣東に來た。軍艦に避難した居留民どもは沙面に歸還した。併し、煙を吐きたてゝ各國の驅逐艦が入つて來た

香港では二十三日の流血事件の報が傳るや、罷業罷市の結束は更に固くなり、南支を相手の貿易及び金融の營業停止は長期の見込み。香港罷業團が續々と廣東へ歸還する。

北京政府は外國公使團に對し、上海（五三十）事件の交渉に關する十三ヶ條要求を改めて提起すると共に、突如として一切の不平等條約の修正をも要求した。廣東政府は各國の領事團に、沙面事件の謝罪を要求した。先方は斷然刎ねつけた。

總工會の一室で、數人の首腦の評議會。

卓子の中央にゐる眼の丸い男――同志林がペンを持つた手で頰を支へて一同を眺めてゐる。その橫で、顎の長い男――同志徐が、調書を讀み上げてゐる――ストライキ參加組合及び人數を。

「――その上、香港や沙面から退去して來た勞働者の數が、既に二萬五千。」

「ふむ、ストライキの方に心配はないね。」

四角な顏――同志李が口を入れた。

「この際、嚴重にとり締らなければならないのは商人達だ。ボイコットを完全にやらなくちや、折角の企も水の泡だ。」

眼鏡の男――同志蔡が林を仰いだ。林は頰を支へてゐた手を下して徐ろに口を開いた。

「俺は思ふが、この際、我々プロレタリアートが、ボイコットの執

行權を握らなくちや駄目だ。實行による證明のみが、廣汎な大衆を獲得し、ヘゲモニイを握る唯一の手段だから。半植民地狀態にある我が國のブルジョアジイの桎梏は一皮だ。我々プロレタリアートは二皮だ。だから、我々がこの二重の皮を剝がうとして、主要動力となり、第一線に立つて活躍するそれで巧く××主義を擊退した曉に政府が我々を裏切るのは必然だ。だから、こつちはすかさず、國民××から、プロレタリア××へ——既に今から、我々の政府×××を作るべく、萬策を循すべしだ。プロレタリアの黨は唯一つだ。だから、斷じて國民黨に卷き込まれてはならないぞ。彼等を提携して、卽ち共同戰線を張つて、敵を擊退すると共に、漸次ヘゲモニイを此方に握つて來なくちや。我々は徹底的に××主義の掃蕩を勵めると共に、すかさず、××××樹立へ進め——」

「勿論、異議なし。」同志蔡が強く言ひ切つた。

「××××樹立へ——これを我々の頭から忘れてなるものか。」

「先づ、その第一段階として」と林がいふ「ボイコット執行に獨裁を揮はう。却つて、政府は何もいふことが出來ず、我々に引ずられて來るだらう。プロレタリアがヘゲモニイを握るには、この際プロレタリアが他の階級を指導し統制する位置に立つことが必要だ。」

「異議なし。」同志李か卓子を叩いた。「沙面及び香港へ送る生活必需品一切の杜絶と、香港から來る英貨及び外貨一切の差押へ——之を斷乎として處置することだ。」

「これは廣東だけではまだ不備だ。」同志徐が眼をあげて皆に向つた「香港をして、開港場の意義を完全に失墜せしめるには、どうしても南支の各港を悉く封鎖しなくては駄目だ。廣東、九龍、澳門(マカオ)は勿論東の方は汕頭(スワトー)、厦門(アモイ)等、西の方は瓊州、海防(ハイフォン)等、凡そ港といふ港はいかに小なる處でも全部嚴重な取締りを施すことだ。——で、至急總工會から警備隊を送ることにしよう。」

同志李は癖のやうに又卓子を叩いた。

「贊成だ！　兄弟の流した血の意義に徹底しろ！」

同志蔡がその後を追つかぶせるやうに口を入れた。

「各地のボイコットの强制執行と同時に、各地にまだ充分でないストライキをも遂行せしめなくてはならない。」

「さうだ、それに幾千人を要するとも、度々の血で洗はれた廣東の勞働者は、もはや充分に敎育されてゐるからね。誰をどこへ出しても、充分に任務を遂行して呉れると、俺は固く確信する。」

同志徐は、長い顎を撫り乍ら、よく光る眼で、意味のある微笑を皆に向けた。

8

空にはセメント灰に似た暗雲が北へ疾走して行く。

港內には幾千の船舶が、荒波に飜弄されてゐる——ロープの唸り、マストの動搖。埠頭の起重機は烈風の中にその鐵骨を曝して洗

默し、後方の市街の上に高く擢んでてゐる煙突どもは、煙を忘れはてゝ……。全くの寂寞——高い波の音——ダダダダ……

海岸に堆積した貨物の間から赤い焔がゆらめき上る、そこ、かしこ……白煙は濛々と次第に空高く昇り、きな臭い臭氣が風に吹き散らされる。焔は見る／＼育つて來て、火の子は火の鳥となつて、舞ひ上り、飛散し、音をたてゝ落ちて來る。烈風は唸りながら、橫なぐりに焔へ襲ひかゝると、焔は身體を橫へ曲げて風を避けると、執拗に空へ頭を擡げて來る。一瞬、又一瞬——擴大する火の手、火の足……パチ、パチ、パチ……ドドツ、ドドツ……外貨の燒棄！

白煙は延び／＼て、租界の沖邊の鎖——軍艦どもの列を塗り消さうと努める。火の鳥は次第に空高く舞ひ上り、明滅し、又光る、パチ、パチ、パチ……ドドツ、ドドツ……

そこ、かしこの貨物の山々から燃え上る火の手は、呼び合ひ、招きあひ、尨大な火焔となつて、後方の市街の姿を覆ひつくし灰色の空を劃り、幾千萬の帆柱に赤い傍線をひき、港の水面に朱を流した。

烈風に煽られる火は盛に燃え上る。その後方からどつと歡聲が崩れて來る。

「萬歲（ワンセー）！」

數人の武裝した菜葉服が小銃を手にして、焔の間から躍り出た。續いて又數人。

「見ろ、この火を。もう、奴等の權力は死滅するのだ！」

「五月三十日に、そして、六月二十三日に流した兄弟の血の一滴をまで償はずにゐるものか、俺等は。この洋鬼奴！」

彼等は海岸の切線に、或は埠頭に散つて立ち、眼路はるかな港口を見張つた——ボイコットの統制を司るピケッツだ。彼等の後方で貨物の燃える火は更に擴りつゞけ、音を立てゝ碎け、崩れる——パチ、パチ、パチ……ドドツ、ドドツ……起重機の鐵骨が焔の反映で赤い飴細工のやうに歪む。

ピケッツの見張る港口の水平線上に、巨大な船體が現れて來た。黑い煙突の首に二本の白線が見分けられる。埠頭の先に立つたピケッツは、口に手を當てゝ、少し離れた仲間を呼んだ。

「おーーい、おーーい！」

忽ち、ヂャン、ヂャン、ヂャン——埠頭の根で鐘が鳴る—— 三點鐘だ。

それ——、焔の向ふから散り出た數千人の菜葉服。埠頭の根に固つて、漕いだ小船の纜をとき出した。

港の口の汽船は、甲板に動く人影が見分けられる位になつた。やがて、とまつた。錨を下ろす、鎖の音——

又、三點鐘——ヂャン、ヂャン、ヂャンヂャン、……。

埠頭の根でとき放たれた小船數隻は、激浪に弄ばれてバランスをとる。數十人の菜葉服は小銃を持つて、それに分乗した。

「行け、密輸入者を引張れ。裏切者を逃がすな！ 外貨は一切押收

しろ！」

數隻の小船は先を爭つて漕ぎ出した。激浪は小船を搖り返し、押し返し、白い齒を剝いてかみつく。船首にたてた×旗が烈風にひきちぎられる。天が晦暝する――驟雨だ！

「おー――い、おーーい！」

烈風にひき裂かれる叫喚、強く、弱く…..。

浪間の船共は離れ、近より、進む、進む。

驟雨――

搜索隊は嚴重な探査を終へ、沖邊の汽船から歸つて來た。埠頭の根に投げ上げる品物を、腕に腕章をはめた統制者が一々檢査した。羅沙、綿布、グラス、マッチ、藥品…

二隻の船からは、小銃の間に挾まれた白麻の洋服が三人、それから菜葉ズボンが二人。

腕章をはめた色の黑い顏が、濡れて顫へる洋服どもに向つた。

・「こいつは何だ！」

「密輸入者だ、ボイコット違反者だ！」

側にゐて銃を手にした菜葉服が答へた。

汚れ、裂けたシャツを着て、おど／＼震へてゐる、眼の窪んだ男どもは、訊かなくともストライキの裏切者り者だ。

「やい、面を上げて見せろ！チエッ、まだこんな奴等がゐるのか、卑しくも支那人たる者が…馬鹿！」

彼等をとりまいた一同の後から、口の大い男がどなつた。

「おい、こいつ等を總工會に突き出せ！　あつちで好いやうに處分する――」

色の黑い男は、眼前の捕虜を指差して、側の一隊を顧みた。

「今度は密輸出者を見張れ！　一人だつて見遁すな！」

後方で大きな聲が、烈風に喚き散る…..。

9

同志林は、シャツに汗を滲ませ、窓際の卓子に縋つて、しきりにペンを動かしてゐる。そこへ、同志徐が額の汗を拭き／＼やつて來た。彼は入口に立停つて、ちらと室内を見廻した。壁根にかけた數十枚の血染の寄服――二十三日の流血事件の犧牲者の服だ。そこからは眞夏乍ら襟のすくむ冷氣が溢れる。

同志徐は進みながら話しかけた。

「見たかい、ピケッツの活動は素晴しいね、全く。」

「見たさ。我々プロレタリアートが漸次ヘゲモニイを握りつゝあるのは確かだ。そこで、俺は今一步、步を進める必要を痛感する。外でもない――が、ま、こゝへ來給へ！」

林は顎でしやくつて、徐を招いた。

「――と、いふのは？」

徐は椅子を引き寄せ林に額を近づけた。林は徐ろに云ふ――

「外でもない。ま、見ろ——すべては我々の成果ではないか、ストライキも、ボイコットも……。政府はこの際、何をなし得たか。みんな我が前衞分子の活動ではないか。そこで、俺の提案は、この勇敢果敢なるピケッツを、我々の軍隊に編制することだ。軍隊を持たなくては駄目だ、我々が完全にヘゲモニイを握らうとするのには。更に嚴重に獨裁を揮つて、ボイコットとストライキの違反者を處分し、獨自の裁判權をばりばり行ふ獨自の警察をも兼ねる軍隊だ。更に進んでは我々が蜂起する時の赤衞軍だ！」

「うむ、そいつは素的だ！」徐は手を拍つた。

「××的前衞分子を集めて、軍隊編制——こいつは素的だ。それによつて、××を統制し、指導してゆく——こいつは素的だ。第一線に立つて活躍する、わが廣東の勞働大衆の記念碑だ！善は急げ——早速やらう。」

正面には幾十本となく立てられた×旗。それに交る數枚の靑服が高く竿頭に掲げられてある。點々と黑くこびりついた血痕——血染の服。へんぽんと飜るその旗の中から、慄然とした冷氣が生れる。

庭一面に埋る——一色の菜葉服。銃を手にし、腕に赤い腕章をはめて——幾百。一定の制服、一定の武裝——これぞ、廣東のプロレタリア前衞分子によつて編制された獨自の軍隊であり、且つ獨自の警察であるところの「便衣隊だ」。

整列——直立姿勢——行き渡る規律。

亞熱帶の太陽光線は彼等の頭上にさんさんと白金の針を降らす。

正面の壇上に、同じく制服をつけ、赤い腕章をはめて菜葉服がとび上つた。緊張が小波のやうに列の後へ押し擴がる。

遠く、壇上の男の口髯の間から白い齒が光る。

「——こゝに、我々は便衣隊創設を宣言する。即ち、勇敢果敢なる廣東プロレタリヤ前衞分子よりなるその一隊だ。諸君——これぞ、我が中國プロレタリアにとつて、最初のそして偉大なる輝かしい記念碑だ。動け！　諸君こそは中國プロレタリアートの礎だ。行け！　諸君こそは、この地上を支配する司法權の所有者だ！　一個の怪物がヨーロッパを徘徊してゐる——と、曾てマルクスは宣言した。今やその怪物は、ロシアに根を下ろし、印度に、支那に、否、全世界に、その翼を擴げて來つゝある。きけ、その羽搏きを。見よ、その巨大なる翼を！　千里の地を覆ひ、全世界を廻る怪物こそは、即ち我々プロレタリアートのヘゲモニイだ。我々は何をか恐れん、之に抵抗する各帝國主義者等の神聖同盟も、軍艦も、飛行機も。——何故ならば、我々はこゝに、獨自の軍隊の警察を兼ねる便衣隊を持つことが出來たから。

幾年、幾十年、幾百年——我々プロレタリアは血にまみれ、命をふつ飛ばして鬪爭又鬪爭——見よ、この血染の服を！　この尊き犧牲者の血の代償を拂ふべく立つ、我が便衣隊！　この血染の服こそ

は、我々の旗標だ！
今や、一個の怪物が南支を支配する——即ち、廣東プロレタリア前衛分子よりなる便衣隊——これである。動け、諸君こそは中國プロレタリアートの礎だ！ 行け、諸君こそはこの地上を支配する司法權の所有者だ——」
整列した幾百の人々の額で眼が輝き出した。頬に血が燃え立つて來た。別の男——脊の高い男が壇上に飛び上つた。銃を横にして、頭上に高く差し上げて絶叫した。
「便衣隊創設、萬歳（ワンセー）！」
それを追つて、銃の穂先が一齊に高く突き上つた。幾百の聲が、一齊に咆哮して來た。
「便衣隊創設、萬歳（ワンセー）！」
長く尾をひき乍ら、それは地を叩き、家を搖つて、空に奔騰した人々の顔は一齊に搖れ、飛び上り、動搖した。
「中國プロレタリア萬歳！」
更に新しい聲が湧き上つた。
「あらゆる權力をソヴエトへ！」
「あらゆる權力をソヴユトへ！」
一隊の正面に立てた數十本の×旗と血染の服——幾百の聲に煽られて、はたはたと翻り、その廣場を圍む周圍の家は、玩具のやうにもろく投げ出されて、搖すられ通した。
やがて、便衣隊は隊伍を組むと、旗標高く街へ出て行つた。四列縦隊——正しい足音の律動——一二、一二、一二……。
進む、便衣隊の空突く氣銃を目がけて、太陽光線はさん〲と降る——輝かしき日——一九二五年、六月二十×日。

10

沙面の沖には、新たに巨大な鎖がふえた——英砲艦マグノリヤ、米砲艦ヘレナ、そして、日本驅逐艦三隻。
香港政廳から派遣された印度兵一隊の沙面上陸。更に引きつゞいて又一隊。
租界地沙面と廣東との間の橋門には、前にも倍して嚴重な防砦を築き、そこに張つた鐵條網には電流が通じて來た。
沙面への食糧斷絶が完全に行はれ、且ボイコットの影響を受けて居留民どもは續々と香港へ引き上げて行く。
北京政府、廣東政府の要求により、各國は今回の支那問題（五三十及び沙面における）を國際聯盟の議場にまで運び出した。
だが、廣東政府と英國との睨み合ひは暗雲の亂れる中に續いた。
廣東政府は、英佛兩國總領事に沙面居留地の還付を要求して出た。威丈高になつた英國は強硬な態度をとり出した。——英佛の陸戰隊は、沙面のバンドル十八門の機關銃を据付け、その沖邊に浮ぶ二十餘隻の軍艦を、防禦の第一線として備へた。

電報、無線電信、郵便等は不通。

僅かな幅を持つ運河一つの距離で、此方と彼方とは萬里も遠い。――敵はもはや、此方から發砲しさへすれば、一撃のもとに廣東を粉碎すべく砲口を揃へてゐる。

沙面の犠牲者は國葬――と、大元帥令で發表された。

第二回の示威運動の計畫――六月三十日。

香港及び沙面から歸還した罷業者は、今や十五萬、二十萬と算して來る……。ストライキとボイコットは、もはや一人の裏切り者も出さなくなつた。――便衣隊の支配權は、廣東、香港は云ふに及ばず、南支の各港を委く統制してゆく。

香港貿易の大打撃――南支及びアジアより完全に閉め出された。これから持久戰だ。

燒けつく炎熱。白雲は巨大な塊りとなつて大空を行く。駘蕩として流れ漲ふ、熱風。

全市の脊は、太陽光線の亂舞で、白く光り、白く輝く。その間――各所に燃えたつ赤旗――滿地紅。その下に搖れ、渦巻き、長い列となつて街路を埋めた群集――街々に滿ち溢れ、瀧のやうにとゞろき乍ら押し進む。目路遙かに望む群集の顔は、長蛇の鱗のやうにきらきら光る――第二回排外大示威行列だ――これから持久戰に入るその示威！

「打倒帝國主義！」

「租界回收！」

――ウオ――、ウオ――ツ……

絶叫し、咆哮し、長蛇は逸せず、光底にうねる。絶えず新しく、街々にくり出される群集の氾濫――一體これは、どこから湧き出たのだ？　こんこんとして後から〳〵と續き、漲り、溢れる――この群集！　その膨脹力、その繁殖力！　幾萬、幾十萬、幾百萬！　中國民族の根強い生命力の表現！　何といふ偉大な力だ！

行列の先登に立つた靑服の武装せる一隊――便衣隊！　彼等はその象徴として、二十三日の犠牲者の血染の衣服を高く揚げてゐる。見よ！　その靑服を染めた黒い點々……。色こそ變つてゐるが、更に固く、黒く塊るその遺恨と復讐の焦點――血染の服――高く揚げられて、へんぽんと飜るその奇怪なる旗！　それに纏る同胞の血はまだ生々と匂ひ、それを追つて續く――×旗、群集、群集、群集！逆巻く血の壓力、燃え上る憤恨と反抗！――進む、中國民衆のその活潑なる足音の轟き、その聲、その意氣――解放へ！　建設へ！

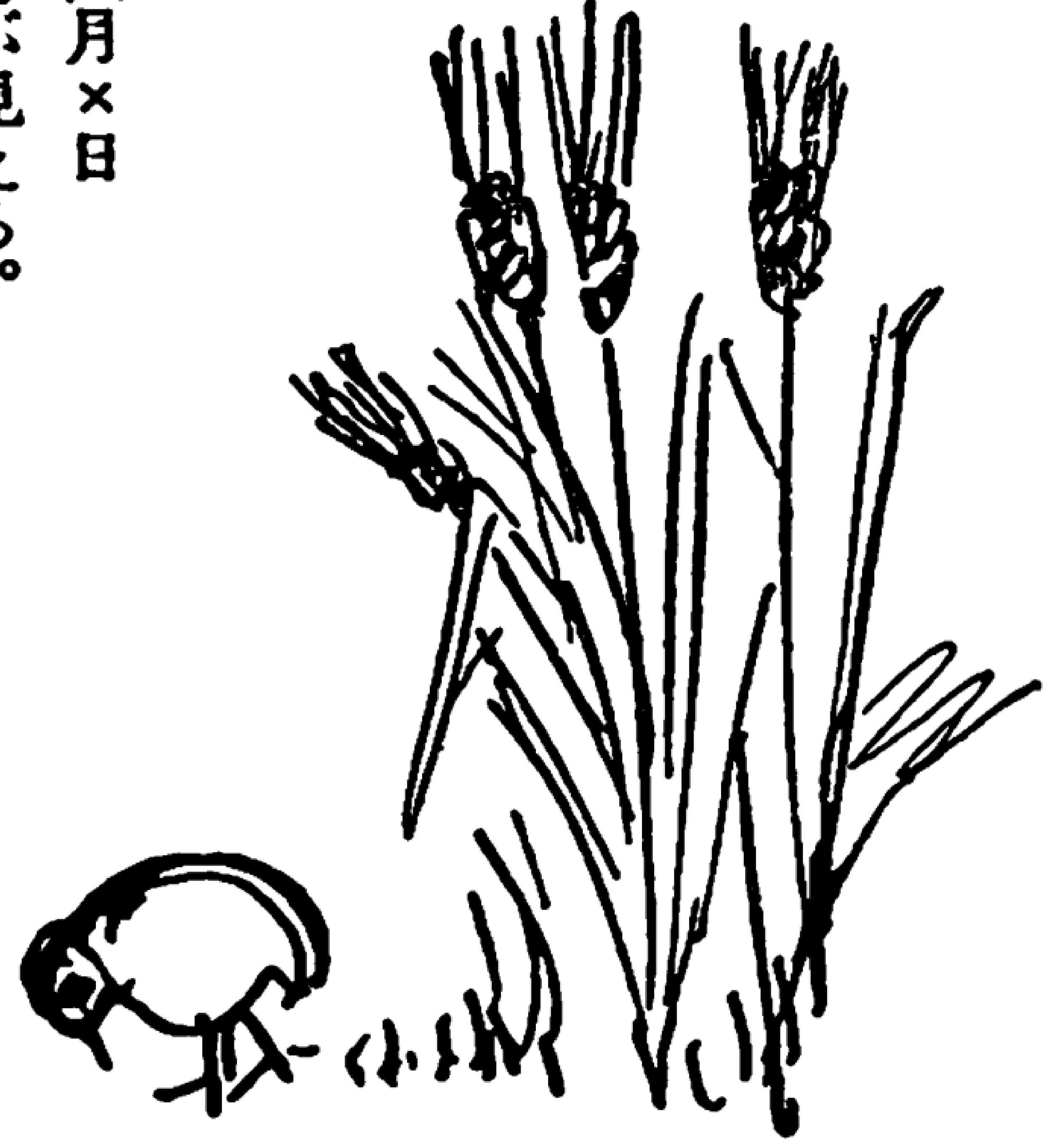
地上を支配する×者は、今やこの老大なる群集だ！　彼等の頭上に榮光あれ！　風は吼えよ！　山は崩れよ！　海は逆巻け！

天地を包む大鳴動の中に、群集は進む、進む、進む――咆哮は高く湧き上つた、一度、二度、三度……。

旅の古里

—放浪記—

林芙美子



六月×日

海が見える。

海が見える。

五年振りに見る、旅の古里の海！　汽車が尾道の海へさしかゝると、煤けた小さい町の屋根が、提灯のやうに擴がつて來る。

赤い千光寺の塔が見える、山は若葉だ、海のむせた緑色の向ふに、ドックの赤い船が、キリキリした帆柱を空に突きさしてゐる。

私は涙があふれた。

借金だらけの私達親子三人が、東京行きの夜汽車に乘つた時、町はづれに大きい火事があつたが……。

「ねえ、お母さん！　私達の東京行きに、火が燃えるのは、きつといゝ事がありますよ。」しよぼしよぼ隱れるやうにしてゐる親達を私は、こう言つて慰めたが、東京でむかへに來てくれる者は、學校へ行つてゐる、私の男一人であつた。

だが、あれから、あしかけ六年、私はうらぶれた體で、再び旅の古里である尾道へ逆もどりしてゐる。その男も、學校を出ると、私達を置きざりにして、尾道の向ふの因の島へ歸へつてしまつた。

氣の弱い兩親をかゝえた私は、當もなく昨日まで、あの雜音のはげしい東京を放浪してゐたが、あゝ今は旅の古里の海邊だ。海添ひの遊女屋の行燈が、つばきのやうに白く點々と見える。

見覺えのある屋根、見覺えのある倉庫、かつて自分の住居であつた、海邊の朽ちた昔の家が、ぢつと息してゐる。

何もかも懷しい姿だ。少女の頃に吸つた空氣、泳いだ海、戀をした山の寺、何もかも、逆もどりしてゐるやうな氣がする。

尾道を去る時の私は、肩上げもあつたが、今の私の姿は、銀杏返へし、何度も水をくゞつた疲れた單衣、別にこんな姿で行きたい家もないが、兎に角、もう汽車は尾道、肥料臭ひ匂ひがする。

午後五時

船宿の時計が五時をさしてゐる。待合所の二階から、町の灯を見てゐると、妙に目頭が熱くなる。訪づねて行こうと思へば、行ける家もあるが、それもメンドウクサイ、切符を買つてあと、五十錢玉一ツの財布をもつて、私はしよんぼり、島の男の事を思ひ出した。樂書きだらけの汽船の待合所の二階に、木枕を借りて、つつぷしてゐると、波止場に船が着いたのか、ヴオ！　ヴオ！　汽笛の音、人の辷り降りの雜音が、フッと悲しく胸に聞えた。

「因の島行きが出やんすで……。」ガクガクの梯子段を上つて、客引きが知らせに來ると、花火のやうにやけた、縞のはいつた、こうもりと、小さい風呂敷包みをさげて、波止場へ降りて行つた。

「ラムネいりやせんか！」

「玉子買うてつかアしやア。」

物賣りの聲が、夕方の波止場の上を滿たしてゐる。

紫色の波にゆれて、因の島行きのポッポ船が、ドッポンドッポン白い水を吐いてゐた。漠々たる浮世だ。

あの町の灯の下で、ポオルとヴイルジニイを讀んだ日もあつた。借金取りが來て、お母さんが便所へ隱れたのを、學校から歸へつたまゝの私は、

「お母さんは二日程、糸崎へ行つて來る云うちやつたりやんで……。」

と、キテンをきかしてお母さんが、佗し氣にほめてくれた事があつた。あの頃、町には城ヶ島の唄や、沈鐘の唄が流行つてゐた。

ラムネを一本買ふ、殘金四拾七錢也。

夜。

「皆さん、はぶい着きやんしたで！」

船員がロープをほぐしてゐる。小さな舟着き場の横に、白い病院の灯が、海に散つてゐた。この島で長い事私を働かせて學校へいつてゐた男が、安々と息してゐるのだ。造船所で働いてゐるのだ。

「此邊に安宿ありませんか。」

運送屋のお上さんが、宿屋まで連れて來てくれた。

糸のやうに細い町筋を古着屋が軒をつらねてゐる。私は造船所に近い山のそばの宿へついた。二階の六疊の古ぼけた床の上に、呂風敷包をおくと、私は雨戸をくつて海を見た。

明日は尋ねて行かう。私は四十七錢也の財布を袂に入れると、ラムネ一本のすきばらのまゝ汐臭ひ蒲團に足を延ばした。

どこか遠くの方で、蜂の巣の樣にワンワン喚聲があがつてゐる。

六月×日

枕元をガリガリ水色の蟹が這つて行く。町はストライキだ。

「會ひに行きなさるゆうても、大變でごぢやんすで、それよりや、

社宅の方へおいでんさつた方が……。」

私は心細くかまぼこを噛んだ。

社員達は、全部書類を持つて、倶樂部へ集つてゐると云ふ。

私はぼんやりと外へ出た。萬里の城のやうに、えんえんとコンクリートの壁をめぐらしたドックを山の上から見ると、菜つぱ服を旗に押したてゝ通用門みたいなとこに、黑蟻のやうな職工の群が、ワンワン唸つてゐる。

山の小道を、子供を連れたお上さんやお婆さんが、點々と上つて來る。六月の海は、銀の粉を吹いて、縺れた樹の色が、シンセンな匂ひをクンクンさせてゐた。

「尾道から警官がいつぱい來たんじやと。」

髮をいつせいに、後に吹かせた若いお上さんが、ドックを見降した。××と職工のこぜりあい。

「しつかりやれッ！」

「負れなはんな！」

「オーイ……」眞晝間の、裸の職工達のリンリとした肌を見てゐると、私も兩手をあげて叫んだ。旅の古里の言葉で、

「しつかりやつてつかアしやア。」

「あんた娼妓さんかな。」私は沈默つてコックリした。

「御亭主があそこにおつてんな、うちの人ア、こおなつたら、もう死んでもえゝつもりでやる云ひしよりやんした。」

私はわけもなく涙があふれた。事務員をしたりして、つくした私の男が、大學を出ると、造船所の社員になつて、すました生活をしてゐる。どうしても會つて歸へらなければいけない。

「こゝから見てると、あんな門位、船につかふ××××××を投げりや、すぐ崩れちやふのに。」

「職工は正道でがんすけん、皆躰で打ゝかつて行きやんさアね。」

門が崩れた。

蜂が飛ぶやうに、黑點が散つた。

ツルツルした海の上を、小舟が無數に四散して行く。

潮鳴りの音を聞いたか！
茫漠と擴つた海の叫喚を聞いたか！

煤けたランプの灯を女房達に託して
島の職工達は磯の小石を蹴散し
夕燒けた濱邊へ集つた。

遠い潮音りの音を聞いたか！
何千と群れた人間の聲を聞いたか！
こゝは內海の靜かな造船港だ
貝の蓋を閉じてしまつたやうな
因の島の細い町並に
油で汚れたヅボンや菜つぱ服の旗がひるがへつて
骨と骨で打ち破る工場の門の崩れる音
その音はワアン　ワアン
島いつぱいに吠へてゐた。

ド……ド……ド……

青いペンキ塗りの通用門が群れた肩に押されると

敏活なカメレオン達は
職工達の血と油で色どられた清算海をかゝえて
雪夜の狐のやうにヒヨイヒヨイ
ランチへ飛び乘つて行つてしまふ。
表情の歪んだ固い職工達の顔から
怒りの涙がほとばしつて
プチプチ音をたてゝゐるではないか
逃げたランチは
投網のやうに擴がつた〇〇の船に横切られてしまうと
さても
此小さな島の群れた職工達と逃げたランチの間は
只一筋の白い水煙に消されてしまう。

齒を嚙み額を地にすりつけても
空は――
昨日も今日も變りのない
平凡な雲の流れだ
そこで！
頭のもげそうな狂人になつた職工達は
波に呼びかけ海に吠へ
ドックの破船の中に渦をまいて雪崩て
ゐつた。

潮鳴りの音を聞いたか！
遠い波の叫喚を聞いたか！

旗を振れッ！
うんと空高く旗を振れッ

元氣な若者達が
キンキラ光つた肌をさらして
カラ、カラ、カラ、
破れた赤い帆の帆綱を力いつぱい引きしぼると
海水止めの關を喰ひ破つて
朱船は風の唸る海へ出た！

それ旗を振れッ
〇〇歌を唄へッ
朽ちてはゐるが
元氣に風をいつぱい孕んだ朱帆は
白いしぶきを蹴つて海へ！
海の只中へ矢のやうに走つて出た。

だが……

オーイ　オーイ
寒冷な風の吹く荒神山の上で呼んでゐる
波のやうに元氣な喚叫に耳をそばだてよ！
可哀想な女房や子供達が
あんなに脊のびして
空高く呼んでゐるではないか！

遠い潮鳴りの音を聞いたか！
波の怒號するを聞いたか
山の上の枯木の下に
枯木と一緒に双手を振つてゐる女房子供の目の底には
火の粉のやうにつゝ走つて行く
赤い帆がいつまでも寫つてゐたよ。

宿へ歸へつたら、蒼ざめた男の顏が、ぼんやり天井を見てゐた。

「宿の叔母さんが迎いに來て、ビックリしちやつた。」

「…………」

私は子供のやうに涙が湧いた。何の涙でもない、白々とした考へのない涙が、あとからあとから、あふれて、沈黙つてしきゐの所に立つて泣いた。夕方の空を時鳥がケンケン鳴いて行く。

「こゝえ來るまでは、すがれたらすがつてみようと思つて來たけど、宿の叔母さんの話では、奥さんも子供もあるつて聞きましたよ、それに、町のストライキを見たら、どうしても、貴方に會つて、はつきりとすがらなくてはゐけないと思ひました。」

沈黙つてゐる二人の耳に、ワァンワァン喚聲が聞える。

「今晩町の芝居小屋で、職工達の演說があるから、一寸のぞいてみなくては……。男は、自分の腕時計を床の上に投げると、そゝくさと町へ出てしまつた。

私は、ぼんやりと部屋で、しやつくりを續けながら、高價な金色の腕時計を、そつと腕にはめてみた。涙がダボダボあふれた。東京で苦勞した事や、裸で門を壞してゐた晝間の職工達の事が、グルグルして、時計の白い腹を見てゐると目が廻りそうだつた。

六月×日

宿の娘と連れだつて、濱を歩く、今日で一週間になる。

「くよくよおしんな。」私は何もかもメンドくさくなつて、呆然としてゐると、宿の娘は心配してくれる。

何も考へてやしない。何も考へやうがない。

昨日は東京のお母さんへ電報ガワセを送つたし、私はこうして海の息を吸つてゐるし、男がハラハラしやうとしまいと、それはお勝手。私から何もかもむさぼり取つた男なんだから、此位のコワガラセが何だらう。――尾道の海邊で、波止場の石垣に、お腹を打ちつけては、あの男の子供を產む事をおそれたが、今日はいじらしいお伽話だ。

昨日の電報ガワセで、義父や母が一息ついてくれゝばいゝ、キラキラした濱邊を、洗ひ髮をなびかせながら歩いてゐると、町で下駄屋をしてゐる男の兄さんが、オーイオーイと後から呼びかけて來た久し振りに見る兄さん、尾道の家に、木になつた蜜柑や、オレン

チを持つて來てくれたあの姿そのまゝで、笑ひかけてゐる。
「何も言はんもんぢやけん、苦勞させやんした。」

海が青く光つてゐる。
娘をかへして、二人で町はづれの男の親の家へ行く。
海近くまで、田が青々して蜜柑山がうつそうと風に鳴つてゐた。
「あいつが氣が弱いもんぢやけん。」
海にやけた佗し氣な顏して兄さんは口をつぐむ。

家では七十になる老婆が、コトコト米をついてゐた。牛が一匹優さしい瞳をして私を見た。私は、どうしてもはいりたくなかつた。
何だが、こんなところへ來た事さえも淋しくなつた、白い路のつづいてゐる濱路を、私はあとしざりするやうに、宿へ急いだ。

六月×日
颯爽として朝風をあびて、私は島へハンカチを振つた。
どこへ行つても、どうにも仕様のない事だらけなんだ、東京へ歸へらう、私の財布は五六枚の拾圓札でふくらんでゐた。
兄さんの家でもらつた、デベラの靑籠と風呂敷包みをかゝえて、ピヨピヨした板を渡つて、船へ乘つた。
「氣をつけてのう……。」
「えゝ！　兄さんもうストライキはすんだんですか。」
「○○が仲へ入つて三割かた職工の方が折れさせられて手打ちになつたが、太いもんにやかなわないよ」。
男は寢ぶそくな目をシパシパさせて、波止場へ降りて來た。
「體が元氣だつたら、又いつか會えるからね。」
船の中は露に濡れた野菜がうづたかく積んであつた。

あゝ何か馬鹿になつたやうな淋しさで、私は口笛を吹きながら、遠く走る島の港を見かへつた。二人の黑點が消えると、靜かなドックの上に、ガアン　ガアンと鐵を打つ音がひゞいてゐた。
尾道についたら、半分東京へ送つてやらうかな、東京へかへつたら、氷屋もいゝな、せめて暑い日盛りを義父さんが、ウロウロ商賣をさがして歩かないやうに、此暮は樂に暮らしたいものだ。
私は體を延ばして、走る船の上から波に手をつけてみた。
手を押しやるやうにして波が白くはじける、五本の指に藻がもつれた糸のやうにからまつて、しほしほとしてゐる。
「こんどのストライキは、えれ短かゝつたなあ――。」
「ほんまに、どつちも不景氣だけんな。」
船員達が、ガラス窓を拭きながら、話してゐる。
私はも一度、青い海の向ふにポッンとした島を見た。

映畫漫想（二）

尾崎翠



杖と帽子への愛

フイツシエルの戯曲「チヤツプリン」の中の一節を、チヤアリイ禮讃の字幕として借りよう。つひでながら、秦豊吉氏の解説によれば、ゴオルド・ラツシユは獨逸人を驚倒させ、チヤアリイの人間的悲哀と人間的諧謔は、獨逸文壇にも爭ふべからざる各種の刺戟を與へ、チヤアリイを主人公にした作品さへも現はれるに至つた。メルヒオル・フイツシエルの「チヤツプリン」もその一つであるといふ。

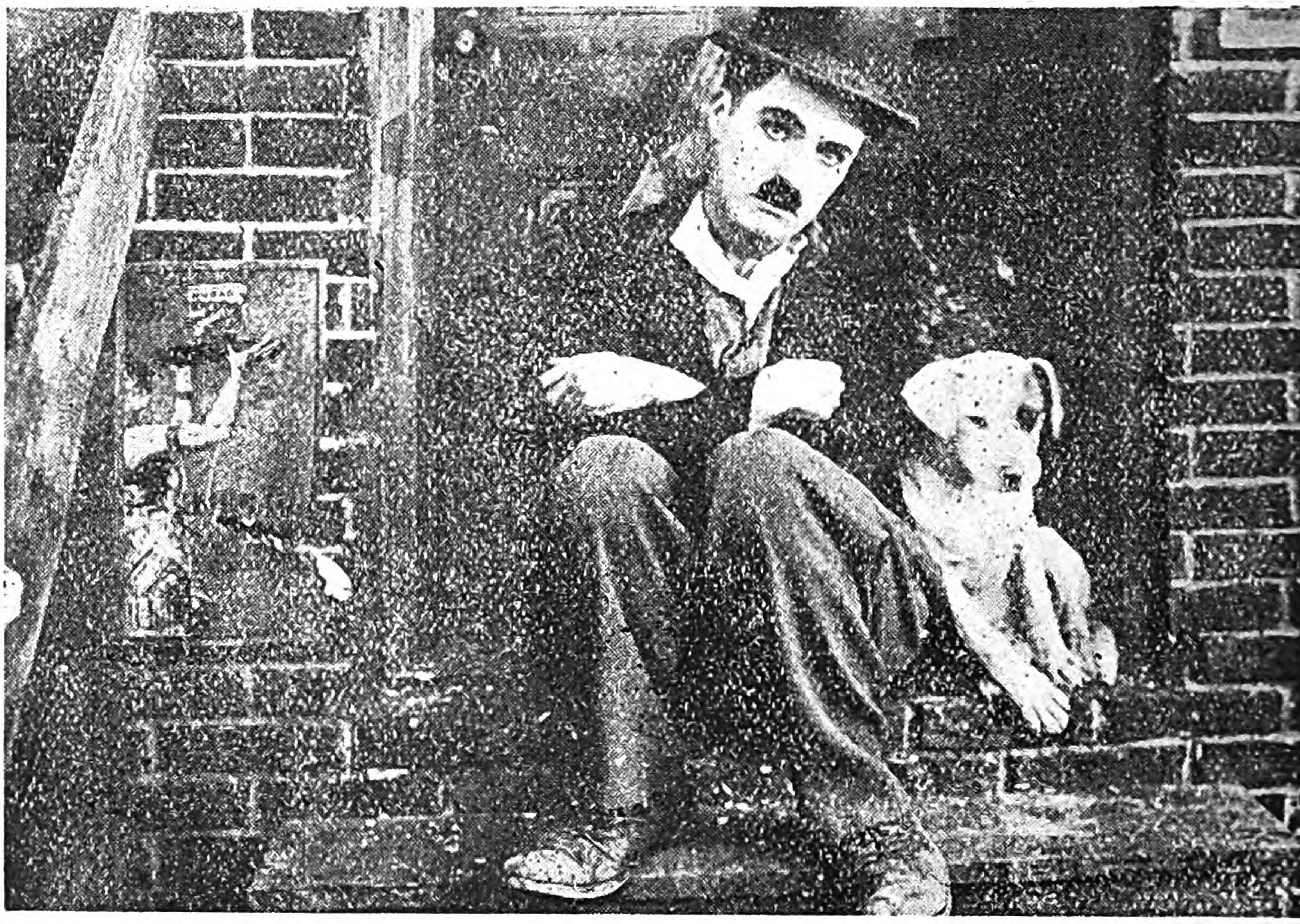
もうひとつつひでながら、この解説で思ひだしたことは、日本にも、むかし久米正雄氏にこの種の作品のあつたこと。しかしたぶんゴオルド・ラツシユ前のチヤアリイ。「病床」そしてなにか横つづりの副題がつき　幕の上ならぬ病床の、扮裝にくるまれないチヤアリイの焦慮や悲哀を扱つた佳篇だつたと思ふ。たぶん病床のチヤアリイが各國から集まつた渇仰者たちの手紙を讀む場面があり、その手紙のなかに、日本のクニタロオ・タカハシのひとつが混つてゐなかつたか知らと思ふ。そして東洋のひとつの手紙が、病床のチヤアリイの焦りと哀しみを救ふ。

「病床」は手許にないので、この記憶が漫想のいたづらだつたら兩氏にお許しを乞ひ、次の字幕は近代劇全集を披いて正確に寫さう。

チヤツプリン　（秘密を打明けるやうに）帽子は人間を造りますよ。帽子を冠らない頭は頭です。僕が帽子なしなら、頭だけです。頭だけといふ事ははづかしかないが時代に適切でありません。帽子はすべてです。シカゴ迄二三時間といふことで、この年に僕は君に言ひます。吾人は頭を持つてゐないのです。吾人は帽子を持つてゐるだけです。帽子は人間を造ります。他人と區別します。（誇る樣子）我我は帽子です。

――秦　豊吉氏譯――

この戯曲の作者フイツシエルの細かい觸角が、いかに正しくチヤ



杖を忘れたチャップリン

アリイの帽子とチヤアリイ自身をつかんでゐるかは、この短い字幕の示すとほりである。フイツシエルは幾度ゴオルド・ラッシュの畫面を瞶めたか(を考へるのも、閑人の時間殺しではないのだ。すべてチヤアリイに關する考へごとは、時間殺しと全然緣のない貴重事だと思ふ)——ともかくフイツシエルは、チヤアリイの前を素通りしてはゐない。——我輩は帽子です——さう、チヤアリイは帽子だ。彼から秘密を打明けられるまでもなく、チヤアリイの帽子は彼の全身と言つていい。また、彼の創る全世界は帽子だと言つていい。

いま、ちよつとあの帽子をチヤアリイの頭から借りて來て(チヤアリイ! 二分間だけ帽子なしで「頭」だけで我慢してて下さい。帽子を取つた君の「頭」についても思ふことがあるけれど、今は帽子で忙がしいのです、二分間だけ貸して下さい)大映しにしてみる。ながめたところ、ただひとつの、誰の頭に載つかつてても差支なささうな山高にすぎない。(おまけに金鑛地の吹雪と公樂キネマの雨に打たれ、地は毛羽だち、つばは草臥れてゐるのだ)だから、ちよつとダグラス・マツクリインの頭に載つけてみる。いけない、山高が萎れてしまふ。この帽子は厭人家なのだ。キイトンの頭の上では溜息をはき、デニイの頭の上では眞蒼になつて怒り、ロイドの頭の上では身投げするか知れないのだ。誰にもいけない、撰りごのみのやかましい偏執狂のやうな帽子なのだ。いつもチヤアリイの頭でなければ承知しないのだ。この偏執は何から來るかといへば、答へは短い言葉で濟む。それはチヤアリイがこの帽子を愛してゐるから。チヤアリイはこの帽子への偏執狂だから。答へはこれだけだ。眞實、幕の上の全世界を通じてチヤアリイくらゐ帽子を愛してゐる男はないと思ふ。彼以外の役者の頭の上で帽子が厭人癖を出す

のは、彼等が帽子を愛しないからだ、だけでなく、彼等の多くは、帽子を愛するといふやうな境地は勿論、帽子の存在をさへ知らないからだ。

チヤアリイの帽子への愛は、ゴオルド・ラッシユをたとへば四分の一見ればいい（どの四分の一でも）。これでチヤアリイの偏執はいやでも感じなければならないのだ。八分の一でもいい（どの八分の一でも）。十六分の一でもいい（これもたぶんどの十六分の一でも）。選ばれた幾呎でもいい（二分間で消えてしまふ長さの幾呎）。この幾呎の中で、チヤアリイは「帽子は人間を造ります。他人と區別します。我輩は帽子です」といふ言葉が、表現派作家の頭の遊戯でないことを解くのだ。

「選ばれた幾呎」のもつとも輝いた、代表的な二つの場景を思ひだす。ゴオルド・ラッシユの終りに近い酒場と、サアカスの試驗の場面。この二つの場景の中で、チヤアリイは、帽子への愛、偏執を、燦然と發揮する。前者では、女に待ちぼけをくつたチヤアリイが杖を小脇に抱え（チヤアリイ！　これで君のすばらしい杖も登場した。この儚い杖を何處で登場さしていいのか迷つてゐたところだ）酒場ののんだくれどもの中に紛れこんで來、そして、チヤアリイ！（君のことを書いてると、いつも直接君に呼びかけたくなつてしまふ。病氣なのだ。そしてこの病氣は、君自身と君の帽子との相關偏執から來るのだ。君と帽子とはペンを偏執病にしてしまふのだ、フイッシエルならぬ儚いペンまでも）君は、杖と帽子と君自身と三人でのんだくれどもに揉まれながら、君の好きなジヨオジアの在處を聞いて廻るだらう。一人一人に帽子を上げて。あれなのだ。チヤアリイー　クニタロオ・タカハシならぬ東洋のもう一本のペンを病氣に陥らしてしまふのは、あの帽子の動きかたなのだ、君の指にちらと持ち上げられる。君は帽子を溺愛し、帽子は君を溺愛してゐる。そしてチヤアリイ！　偏執者二人の生んだあの場景は、一人の片隅の觀客を、やはり偏執者にしてしまつたのだ。その觀客はいつまで經つても君の帽子への溺愛からのがれることが出來ないのだ。そして彼は、あの時君が小脇に抱えこんでゐた杖をも、君と同じに愛してゐるのだ。

杖。チヤアリイ！　あの時君は、杖をも帽子と同じに愛した。あの時だけじやなく初めつからなのだが、殊にあの時は愛した。だから君はのんだくれの鼻つさきで杖をあんなふうに振れるのだ。まばたき一つのあひだだけ、杖は君の拳からはなれる。ぶくぶくののんだくれの鼻柱と並行にはなれる。そして杖は、のんだくれに憤つてる君の表情と同じ表情をしてゐるのだ。憤つた杖の挨拶は帽子の挨拶よりもすばらしいくらゐだ。だから、あの杖の動きは、儚いペンでは映せないのだ。君がチヤップリン髭を剃り落し、上衣の身幅をばくばくにし、ズボンの型を變へたつて、儚いペンの所有者は君があの杖を二分間失くしただけの淋しさは感じないのだ。

話を戻して、「選ばれた幾呎」の中の後者――サアカスの試驗の場面で、チヤアリイはいよいよ杖と帽子を愛してゐる。むづかしい面をした親方の前で、サアカスに入れてもらつてパンにありつくか、追つぱらはれてパンにはぐれるかの試驗を受けるところ。椅子の上と横に帽子と杖とを忘れる。すばらしい忘却。杖と帽子なしの後姿。覺醒。風のやうに杖と帽子にとびつき、三つの偏執狂が抱擁する。

サアカスはいつたいに前作ゴオルド・ラッシユに及ばなかつたが、杖と帽子への愛の一點では前作を凌いでゐると思ふ。

此處でなぜサカスがゴオルド・ラッシュに及ばなかつたかを考へてみる。映畫の世界の科學者ならぬ漫想人種（の漫想心理については前號に書きました）の考へ得る答へは、これもごく短い言葉で濟む。ゴオルド・ラッシュは、ひとつの偉大な黒子を持つてゐた。ボテトオ・フオオク・ボテトオ。この耀きすぎる黒子がサアカスにはなかつた。これだけのことだ。サアカスの中にも幾つかの耀いた黒子はある。けれどいちばん耀いた鏡の部屋も、前作の薯の踊りには及ばないのだ。待ちぼけの孤獨な彷徨者が蠟燭のあかりの中で、雪にかこまれた小舍の中で、しかも夢の中で（女が待ちぼけをくれなかつた、幸福な夢なのだ）踊らせる薯がなかつたとしたら（考へても淋しいことだ）サアカスとゴオルド・ラッシュは粒揃ひの二傑作だと思ふ。

帽子なしのチヤアリイの「頭」。影の界の創り手としての「頭」は何を考へるか。それはあの體軀の持味をいかに活かすかといふことを。それだけを。



ジヨセフイン・ベエカア。

筋・挿話・手法・背景・扮裝・附屬品、すべてがあの體軀に事へてゐる。帽子をぬぎ素顏になつたチヤアリイの頭は、幅狹の哀しい肩をどんなに上衣に包み、どんな挿話の中に紛れ込ましたらいいかと考へる。肩よりも一段すぼまつた胸をどんな想ひの中に置き、どんな背景の前に遣ればいいかを考へる。そして結果は幕の上いちめんを哀愁で塗りつぶすことになるのだ。これはチヤアリイの體軀が哀愁そのものだからだ。貧弱な上衣は、もともと瘦せて哀しい肩の助けになるだけだ。このことは彼の全の身について言へる。こんな考へが漫想人種の儚い錯感だつたら、杖と帽子を伴れてぶらぶらあるきしてるチヤアリイの後姿に訊いてみてもいい。

ソオデスカ。ソレハ　ドウモ。ボクノ　マイタノハ　ワライデトント　アイシユウデハ　ナイヨオダ。ベツ。サイゴノオクバマデ　カゾエレル　ワライナンダ。

チヤアリイはさう答へる。しかし、この暗號を暗號と思へない人種は、チヤアリイの撒く哀愁を笑ひとばす術しか知らない。彼等の最奥の奥齒に向つてチヤアリイは鄭重に杖を振るだけだ。

聲畫の自殺

映畫とは、ただに靜かな影であつた。なまぐさい聲を用ひない豐かな言葉で語る靜かな世界であつた。一枚の木の葉が舖道の上をころがつて行く。なまぐさい擬音に汚されない、だまつた一枚の木の葉が季節を語る。嚴つい靴が反對からやつて來て木の葉を踏んづけても、木の葉が靴のために粉粉に碎けても、その語る言葉は靜かで廣ろかつた。その頃の畫はなまぐさい聲を吐くことを知らなかつたからだ。

いま、吾吾の心には、影・沈默の塔・儚いもの・微かなものへのノスタルヂアがある。聲畫がこんなにものさばつてきたからだ。沈默の領土を知らぬ泥靴め。

けれど此處に一つの聲畫の魔力がある。泥鞍の饒舌屋がポケットに潜めてゐた魔力。それは靜畫へのノスタルヂアとまるで反對のもの、現身への被征服慾と言つつていい。

ミシシッピイの無頼漢が鏡に向つてネクタイを結びながら鼻唄を呟く。樂器たくさんの騷騷しい器樂はただ耳を掩ひたいだけだけれど、一人だけの聲――輕い、ぼやけた、曲の惡くない唄が、無精な咽喉から鼻孔の壁とすれすれに外氣の中に送られ、ネクタイがだんだん形をとつてくる、こんな時、觀客の聲帶は、あの無頼漢について唱ひたいほどには締めつけられてゐるのだ。だから、なまぐさい聲畫を全身で排してゐたつもりの觀客は、思はぬところで咽喉を聲畫にひつ掴まれてゐる。そしてこの咽喉は全身からの遊離者になり、そして彼は思ふ。――オペラを聽きたいな、鑵詰ぢやなく現身から出るやつを。それから俺は、どうも幕の上のジョセフィン・ベエカアよりも、松竹座あたりのレビュウの方を好きになりさうだ。「淺草紅團」の何とかいつた、あれも見たいな。影には引つ返せなくなつたんだ。耳や鼻や腦味噌が靜畫へ隱遁したいんならそれでいい。俺は、聲畫の半端ななま味を徹底させた處へ行きたくなつた――此處に聲畫自殺の假想がある。映畫である以上は影に徹した靜畫。でなかつたら聲畫の聲が自ら指唆した舞臺の現身。

線香の煙ジョセフイン（瘦軀禮讃）

ジョセフイン・ベエカアの心に殘すなごりは好い。幕の上――幾日か後――幾ケ月か後――翌年。この時の經過につれて、彼女は不思議に心の中で細つてしまふ。

「モンパリ」の幕の上で時間をながく踊りすぎる彼女は、はじめははらはらさせ、眼をそむけたい思ひをさせ、亞いで飽食させ、やがて退屈させる。眼なれた人士は知らず、チヤアルストンなるものを幕の上のジョセフインによつて初めて知るほどな迂遠な眼は、あの踊りから纒まつた、爽かなリズムを汲むことは難しい。「プランテエション」はこの眼にとつて途方もなく難しい問題なのだ。だからぢき舞踊が與へる美感ぬきの退屈に陷つてしまふのだ。もつともこれは一九二九年のこと。「モンパリ」に刺戟されてか、むやみに女優を裸にするはやりを、まださう色濃くは感じなかつた頃の昔ばなし。

ところで、一九三〇年には（いま四月だけれど）頭のなかにそろそろ裸女映畫のはきだめやエロ女優の塔ができようとしてゐる。グロリア・スワンソンが寢臺に身を投げ、天井に向つてはね上げた脚から靴下を剝いだのは、ぢき一昨日のことだけれど（これが當時の尖端的エロなのだ）もう舊い昔の思ひがする。その昔から明後日にしか當らない今日、ズロオスから噴きだした脚の並列を見すぎてはも

うたくさんと言ひたい古代心も涌く。それでてやはり脚のために最後の銀貨をはたきたい儚い尖端心に短銃をつきつける意力もなく、だから頭のなかに裸女の塔ができてしまひ、その中の一人ジョセフインが、時の經つにしたがつてだんだん細つてゆく經路をも語りたくなるのだ。ジョセフインのなごりは、頭のなかで次第に輕く、細くなつて行く。人間――細身の杖――火箸――線香――其けむり。この作用が、當時幕の上では解くことのできなかつたチャアルストンのリズムか知らと思ふ。或はあの痩軀で力いつぱい踊つたジョセフイン自身の持味か知らとも思ふ。さう言へば、太つた裸女はいつまで經つても頭のなかでどんよりと太つてゐる。その中でジョセフイン一人は鋭角だ。とまれ線香の煙が消えてなくならない限り「モンパリ」は强ひて再び見ない方がいい畫かも知れない。

時のもの二つ

「ハンガリアン・ラブソデイ」――まづサウンド映畫と名づけられた音樂の騒騒しさには降伏の帽子を脱がなければ。かう絶えず唸られては牧歌情調とやらも飛ばされてしまふ。

娘役デイタ・パァロオを田園の自然描寫の中におき、エロ役リルダゴフアを蒸れた室內に置いたのはいい。しかし自然描寫がありすぎて退屈に陥らせ、その中でパアロオの純情役はすこし戸まどひしてゐる。初めてみる役者なのではつきり言へないけれど、何か他の役がありさうな氣がする。最後に細君になつて大地に種子をぶつつけるところは、彼女と自然描寫二つとも健康に輝き、退屈でない。

リル・ダゴフアはまんべんなく老巧で癖がつかめないので、この老巧に對してお詫びしなければならない。しばらく老巧者の悲哀で我慢して頂く。どつさり上げ下げしたい時が來さうです。

ジプシイのヴァイオリンひきは全身黑子だらけだ。中將夫人の寵を得ようとして彈くグロテスクな身ぶり、やきもちの表情。彈きやめた時の手つき。――獨逸男アンドオル・ヘルタイ。この名前は覺えておきたいものだ。この畫の此處だけに好い獨逸癖を掘りあてることができる。

驃騎兵中尉フランツ・ツロッシイ伯爵閣下――この役者の名前は取りたてて覺えなくても好さゝうだ。獨逸男でもアメリカ男でもないやうだ、ただ、やはり、霞のやうな伯爵閣下のやうで、たまに侵略的ドンフアンのやうにお見受けしますが、閣下のお眼がときどきしよぼついてゐましたのは、隱し化粧のおつもりで睫に粉かなんか振りかけて居られたやうで（これが閣下の御交際仲間の尊いならはしでしたらお恕しを）別だん泪の爲ではなかつたやうです。閣下。

「幸運の星」――ラッキイ・スタア――原名も譯名もお菓子のやうに可愛い。そして讀んで標頭のとほり、可愛い、おめでたい星ひとつ。おなじ主演者二人による「第七天國」とおなじ味。しかし「第七天國」に及ばない。フアレルはせつかくの脚を足なえでこぢらしてゐる。なんしろ幕の上で感心させられるやうな松葉杖には一度も逢つたことがない。バリモアの松葉杖、フアレルのそれ。役者が苦心するほど見る方はてれくさいものだ。

ジャネット・ゲイナアの可憐さはピックフオオドを偲ばせ、故郷の味を持つてゐる。今日ではこの味の女があまりゐなくなつたから。そして此處にジャネットの進んでゆく路があると思ふ。ただ佳作「第七天國」の後の「ラッキイ・スタア」は偸安、マンネリズムの憾みから免れない。

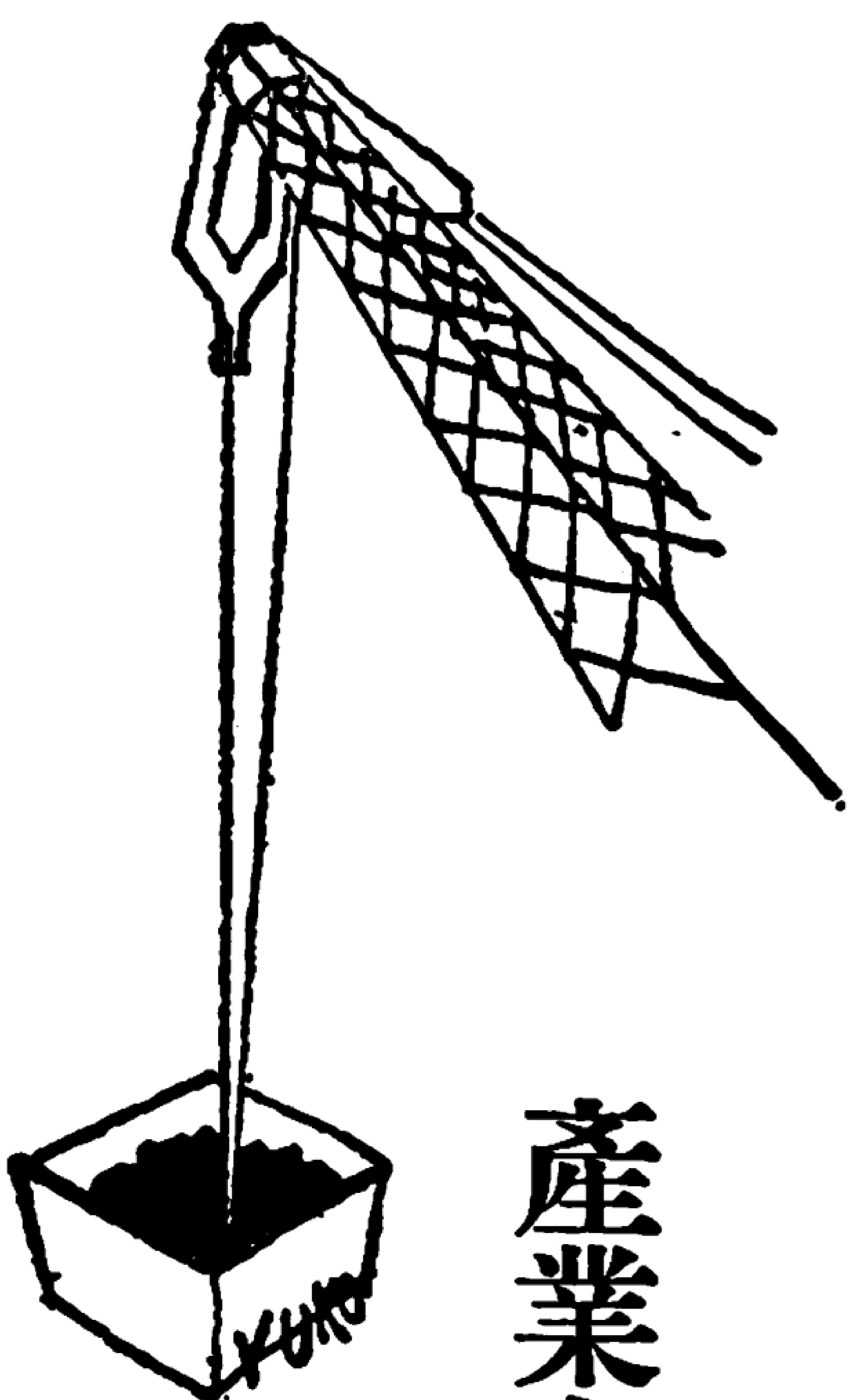
穂麥

長谷川かな女

落ちて居て匂ふ煙草や青き踏む
ピンポンの球走らせぬ夏の園
麥の穂に歩まんものの生命のあれば
麥の穂によき額もつ男子なり
麥の穂の匂ばしければ描くかな
勞働祭市塵を旗を劍を見よ
黃塵に勞働祭の旗まぎれず
桑の實に開きくらべし掌
蜘蛛の子や窓に見え來し夜の空
桐の葉の雫に若荷子をうみし

産業合理化と大衆的失業

佐野京子



1

『産業の合理化』といふことが、昨今、わがブルジョアジーの陣營で狂熱的に問題となつてゐる。

濱口首相は、去る二月三日の臨時産業審議會の席上に於て、一場のあいさつに於て曰く、『産業建直しのためになさなければならないことは多々あるのでありますが、今日の場合就中もつとも急を要するものは産業の合理化であると思ひます。』と前提して『一口に産業の合理化と申しましてもその範圍はすこぶる廣はんでありまして、企業の統制、製品の規格統一および單純化、國産品の使用奬勵、基礎産業の確立、科學的管理經營法の實行、試驗研究機關の整備充實販賣の合理化、原始産業の經營改善、産業金融の改善、いづれも合理化の方策たらざるはないのであります、然しながら凡そ産業なるものは、いづれの國に於てもその國特有なる發達を遂げ來つたものでありますから、産業の合理化を實行する場合において如何なる事項に最も重きを置くべきやは、國によつて自ら異なるものがあるのであります。隨つて我國においても我國産業の現行に即してもつとも適切なる方策を講じなければならないことはもちろんであります』故に『我産業界の現状に鑑みて特に緊急を要するものとして差向き企業の統制、能率增進の徹底的實行、産業金融の改善、國産品の使用奬勵等、二三の事項を諮問案として提出し度いのであります。……云々』と。更につけ加へて首相は、産業の合理化に伴ふ種々なる影響の故を以つて、産業合理化そのものを非難するの否を語り、例へば失業者の發生等に對しては、産業合理化の具體策を實行するに當つて、これらの弊害を生ぜしめざる樣、又はその弊害を最少限度に止むる樣、周到なる注意を拂ふことの必要を言明してゐるのである。而して、今や全政策を、合理化運動の成就のために集中しつゝある。

産業の合理化とは、これを文字通りに解すれば、産業の合理的な振興繁榮であつて、此の上もない結構なことゝいへる。

だが、今日世上に問題としてゐる産業の合理化とはいふまでもな

、資本主義的產業の合理化であつて、その總てが資本に對する最高生產のための、最高利潤のための、合理化である。

資本主義的生產の根本要求は、利潤の增大である。利潤の增大のためには勞働者の搾取の慘酷な强化――或は、勞働者一人當りから搾取する量を增すことによつて、或は搾取する勞働者の數を增すことによつて――が行はれる。「企業體系の上に於ける政變、作業過程の上における單純化、又は生產物や機械の標準化による合理化等は、すべて最高生產、最高の經濟的利益を獲得するための目的にのみ役立つところのものである。

從つて、資本主義合理化に、常に切り離すことの出來ない本質的なものは、勞働の最高の强度化である。勞働の强度化の目的のためには、機械の使用人であつたところの人間は、全く逆に機械に奉仕し機械によつて使用され左右されるところのものとなつてしまふ。

產業合理化が生み出した極く最近の技術の飛躍的發展――『傳送裝置』若しくは自働的促進及勞働强度の統制といふが如き原則上類似した體系は、まさに驚くべきものがある。

我が國に於ても合理化された工場の高度の技術的進步の一例を示せば、『芝浦製作所の鶴見工場は十二萬坪の大工場であり、一萬トンの船舶が直ぐ横につくことが出來る。勞働者千七百、工場長が「職工の利益のために特に意を用ひた」といはれ、その工場に於ては工場の出入口に各自のカードがあつて、出入の際そのカードを電氣時計の記錄器に挿込んで、時間をスタンプし、遲刻すれば赤字でそれがカードに現はれる仕組になつてゐる。一分一秒の餘裕も與へられてゐない。廻轉機工場は二町餘の奧行きを持ち、勞働の全行程が少しの停滯もなく天井の走行起重機其の他の運搬機によつて進められる。コンベーヤーは極度に利用される。アメリカでさへも珍しい程の設備であるといふ。送電中のロッス（損失）をなくする機械は今までドイツの一萬五千キロヴオルトアムペアが世界最大のものであつたが、この工場に於ては、三萬キロヴオルトアンペアのものを製作するといふ。電氣機關車は最も優秀なものが製造され、鐵道省の國產使用は此の工場に數千萬圓の利益をおくる』（產業勞働時報三月號による）といふ。

2

從來は、勞働の强度を勞働時間に比例して、或る一定の點以上に上ぼさないことが、或る程度まで企業家自身の利益であつた。ところが今や、ブルジョアジーは、此の「合理化」による一分一秒すらの餘裕をも與へないところの、勞働者の出來得る限りの强度化の强制によつて、勞働者の心臟の最後の血の一滴に至るまで直接吸ひとることを躊躇しないのである。彼等は、まさに勞働者を×すまで使ふ自由な可能性を持つに至つたのである。

資本主義合理化による、かゝる驚くべき技術の加速度的進步增大は、一方これを逆行して從來使用してゐた、より質の高い勞働力を、より低度の勞働力によつて、卽ち男子を婦人によつて、年長者を少年、少女によつて、更に多數を要したものを少數の者によつておきかへる。婦人勞働による、或は少年少女勞働による勞働員中よりの男子勞働の排除が益々尖銳化する、のみならず、婦人勞働の競爭それ自身合理化の進展と共に、一層致命的結果を及ぼすものなる事は明かである。

產業の合理化と共に、婦人失業者の數は、婦人による男子の壓倒にも拘らず一般男子勞働者の失業者の數よりも遙かに急速に增加し

てゐることを歐米諸外國に於ける資本主義合理化の結果が實證してゐるのである。こゝに資本主義的合　化が恒に伴つた所の同一の矛盾の現はれについてシュトラッセルの言を引用すれば、

『勞働力を過剰ならしめるところの、同一の合理化が、正にそれによつて勞働力の増加的申込をつくり出す。一部の勞働力を工場外に驅逐するその同じ合理化が、他の勞働力を工場内におし込む。失業及び短期勞働者の妻達、プロレタリア的中階級の娘達、荒廢せしめられたる小ブルジョアジーの所屬員たち、かれ等凡てはかれ等の勞働力を資本に呈上すべく餘儀なくされる――人間勞働力の問題が永續的に沈下する時代に於て勞働力を呈上すべく、家庭婦人勞働者の數千をして、彼女等の貧しい一片のパンを「技術的進歩」の鐵の如き歩みが此の舊式な生產方法を情け容赦なく粉碎しつゝ奪ふ所の、その同一の合理化が、他で更に數千の婦人、婦人失業勞働者達、失業者の妻達を完全なる貧窮化への途上に於ける此の最後のステーションに追ひやる。世界の矛盾は今日たゞに獨逸に於てのみならず、また墺太利に於て、英國に於て、フランスに於て、否アメリカに於てあれこれ多くの方法の中の何れか一つを特に用ひる事はあるが、何れも資本が經濟を「合理化」して居る所に於ては到る處に於て現れて居る。そして到る處に於てその結果は同一である。卽ち新しい求職者が勞働市場に於てその「婦人らしい無要求性」によつて企業者の恥知らずの要求を滿足せしむべく脅威されつゝ彼等は未だなほ工場にふみ止つて居るものゝ抵抗力を弱め、合理化の「犧牲」となり、更に自ら合理化過程の危險なる促進者となる。何故ならば、資本がかくも多くの場合に於て、婦人の求職者に對して、男子求職者に比して優先權を與へる事に對する決定的理由は、獨逸に於ても、アメリカに於ても、イギリスに於ても、フランスに於ても、決して純技術的原因なのではないのである。企業者は、婦人の手が新しい作業に對してよりよく適して居るからでもなく、婦人が、イギリスの一政府委員が說明した如く、「勞働の單調さにより容易に耐へる」からでもない。寧ろ決定的なるものは、婦人が男子よりも無要求的であり、より階級意識が稀薄であり、より組織が弱いからであり、又より廉價な、より從順な、より撓め易い、より無防禦的なる搾取對象であると云ふ事である。これこそ今日凡ての勞働者が知つてゐるところの事實である』

3

深刻、且つ廣汎に進行しつゝある經濟的恐慌は、我が國に於ても多くの小工場に致命的な打擊を與へ、小工場、小經營は續々として閉鎖、廢止の打擊を受けてゐる。

昭和二年中に警視廳工場課に工場廢止を屆出た小工場の數は三千四十九工場に及び、その大部分は、下半期のものであると。東京のみでも本年一月一日から三十一日までに旣に二百八十餘の工場廢止の屆出があり、益々この傾向は多くなつてゆくばかりであるといふ。全國的に見るときは驚くべき數字を示すに至るであらう。

こゝに於ても、組織的に、街頭に投げ出される恒常的失業者が厖大さを增してゆくのである。而して、今日に於ては最早や生產力の發達と資本主義的所有關係との矛盾によつて、勞働者數の絕對的增加を伴ひ得ない狀態にある。失業者の數は、就業者の數に比して比較にならぬ程の勢ひで增大するのみである。

世界的危機を反映してゐる纖維產業に於ては、特に我が國に於ても、羊毛工業の恐慌が甚しい狀態にある。最近、三大モスリン會社

の東洋モスリン東京龜井戸第二工場は閉鎖した。合同毛織は中津、會津その他の工場六千の勞働者に對して賃銀一ヶ月後れの支給をなしており、工場閉鎖と同然である。

製糸工業に於ても、中心地の長野、群馬等に於てすでに昨年末から生産制限を行つており、大小工場の閉鎖、賃銀不拂ひ等、多數貧農出身の製糸女工は、受けとるべき賃銀を受けとらずに組織的な失業群として貧しい農村へと追ひかへされてゐる。

失業者の問題が、我國に於て今日ほど解決を迫るべく急をつげたことは未だないであらう。

最近府社會課で調査推定した東京府市だけの失業者が八萬六千人その家族を合すれば裕に三十萬を越えるといふ。全國でおそらく百萬を下らぬであらう。

産業合理化の進展に伴つて、今後更に失業軍の巨大な増加を見ることは明かである。

『現在の失業の波は先づ第一に甚だしく、資本主義國合理化と此の合理化がその下に於て實施される所の經濟的事情との直接の結果である。技術の急激な發展、勞働強度の強化、過剩生産の慢性的恐慌國内市場の狹隘化若しくはその増大の緩漫性。國外市場獲得のための闘爭激化、新しい國々の工業化等々に當つて——は失業を著しく増大せしめずにはおかないからなのである』(ルビンシタイン)

かくしてこれらの失業者による産業豫備軍の編成は、勞働條件の惡化、勞働時間の延長——賃銀引き下げ勞働者を淘汰するために等々資本によつて利用されつゝあるのは言ふまでもないことである。

マルクスの科學豫言は『勞働者階級の一部を他の一部のものの過勞によつて强制的に怠けさせるやうに宣言すること及びその逆は、個々の資本家の富致の手段となると言つてゐる。

失業問題は、まことに今や焦眉の急をつげてゐる。今日職がなく、明日食がなく、街頭に群れ、全國にあふれた巨大な失業軍が救はれ難い狀態のまゝ放任されてゐるのであるにもかゝわらず、政府黨も在野の黨も、あげてその解決を口にすれど、未だ眞の解決の、否！一時的應急の策をすら與へ得ないのである。

失業防止並に救濟の基本的對策として、社會政策審議會の答申によれば——(一)失業統計の調査、(二)職業紹介機關の整備充實、(三)産業の發達、國産の奬勵、貿易の振興、(四)地方工業の發達農村副業の奬勵、農業土木、山林事業の振興による勞働者の都市集中防止、(五)職業輔導並に敎育制度の刷新、(六)我が國情に適應せる失業保險制度の調査、(七)失業基金制度の調査、(八)勞働年齡、勞働時間、勞働賃金の調査(東京朝日新聞)——等を列擧してゐる。

政府が審議會の答申に基いて立てた失業對策のうち應急策として實行中のものは——(一)中央地方の事業調節委員會にはかつて公共事業の調節を行ふこと、(二)從來六大都市に限つてゐた冬季失業救濟事業を地域的にも、時間的にも擴大して必要に應じて公共團體に失業救濟事業を起させこの事業に對して起債を許し、低利資金の融通をはかると共に國庫より勞力費並に勞働手帳作成費の二分の一の補助をすること、(三)小額給料生活者卽ち知識階級失業者に對しても必要に應じ公共團體をして國庫の補助をもつてとう寫、筆寫、計算、圖書整理、製圖、製本、タイプライター。調査資料の收集整理等の授職施設を行はせると共に場合によつては職業輔導をもさせること——等である。

これら多くの應急策が擧げられてゐるにもかゝはらず、果して以

上の如き對策を以つて果してどれだけ實質的救濟をなし得るか？ましてや、根本的救濟の策に於ては皆無である。

失業保險の問題すら、單に調査研究中を以つて糊塗し、財源の點から實施の見込みないといふのである。

ブルジョアジー救助の應急のためにはいちはやく、政府は、糸價補償法の發動とか、硫安直下防止とかに全力を盡すことを忘れない、また、國防の名によつてブルジョアジーのための戰爭準備に五億圓の莫大な軍事費を擁するところの國家が、今日の職がなく明日の食に飢える民衆のための焦眉の問題を調査、研究によつて解決し僞瞞せんとするが如きは、今日の國家の本質を、また、政府の正體の何であるかを民衆の前に如實に曝露するものでなくて何であらう。

ひとり、政府、政府黨のみならず、在野の政友會も、今日の不景氣と失業とを緊縮政策の政府になすりつけ責任を回避するのみにて、何等　これにかはるべき具體的方策を持たないのである。

無產黨と自稱する社會民主々義者の諸黨また、僅かにブルジョア黨の僞瞞的政策に拍車を加へる役をおうせつかつて『公共事業を起し、勞働者を救へ』と叫ぶに過ぎぬ。

4

以上のことから、次の事實を知ることが出來る。今日に於ては、資本は最早や、勞働階級に仕事を與へないといふことを。約言すれば、ブルジョア社會は、プロレタリアートを吸收し、プロレタリアートの生活を維持するには堪えられなくなつたといふこと、而して自らの生命を持續し、權力を維持するためには、ブルジョアジーは、一方に於てプロレタリアートを徹底的に酷使し、最も慘虐な手段を以つて資本への最高生產のための、最高利潤のための、資本主義的產業合理化のために全陣營を擧げて武裝しつゝあるといふことを。他方に於て、資本はます〱合理化に向つて執拗に徹底的に、失業者を利用して從業勞働者の勞働條件を惡化せしめ、ひいては、全勞働者階級の生活水準を著しく低下せしめ、勞働者階級を分裂せしめ且往々經濟的鬪爭の際に於ける直接のストライキ破りのために彼等を利用せんと企らみつゝあるといふこと、即ち今日ブルジョアジーは、資本主義合理化の成就のためには、先づ改良主義者の積極的支持によつて、××的勞働者に對し、××主義者との鬪爭とに對して、進步的分子のすべてを大工場から放逐し、或は勞働者暴壓法の實施によつて、總ての障害物を除かうとするのである。從業勞働者を失業者より分離せしめるために、あらゆる手段を用ひて努力し、組織されたものを未組織勞働者よりの孤立の爲に努力する。

かゝるプロレタリアート彈壓の手段による外には最早ブルジョアジーは、自らの生命を持續し得ない狀態におかれてゐるのである。

從つて、濱口首相の合理化と共に『その實行するに當つて起る弊害を最限度に止むる樣、周到なる注意を拂ふことの必要』も、空言以外の何者でもないといへよう。

現存する失業者に對する策に於て、現內閣の無爲無能振り、當面應急の策をも考へ得ない、否！一應の僞瞞的解決策を以つて眞に與へようともしない所以も資本主義合理化の必然的な、そして本質的なものである。それ故にこそ、マルクスは斷言した。

『勞働者の絕對數を減少せしめたところの、即ち事實上全國民をして比較的短かい期間にこの全生產を完成するを得せしめたところの生產力の發展は、革命を招來するであらう。何となれば人口の多數がコースの外へ出されるであらうからである』。（一九三〇・三月）

巷にて

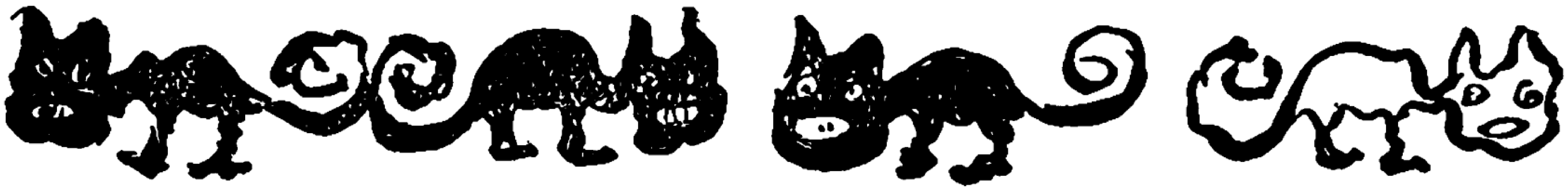
若杉香子

垂れこめた春の闇が
香(かぐ)わしい匂ひをはらむものとは
此の巷では思ふ事さへ許されない

氾濫する下水の臭ひにまみれ
今宵もまた一國の×人は、
ふるさと遠い異邦の夜空に
狂暴な叫びを擧げ爭つてゐる。

相撲つ肉體のきしみ、
碎け飛ぶ器具の響音。
物狂はしい人間の慘虐性に
群衆はなだれを打つて湧きかへる。

×人とは喧嘩をするもの、



×人とは半額の日當にて働くもの、
×人とは日本人に非ざるもの、
かゝる意識の故に
群衆は犬を嗾しかける氣輕さを以て
すさまじい歡聲を浴びせかけてゐるのだ。

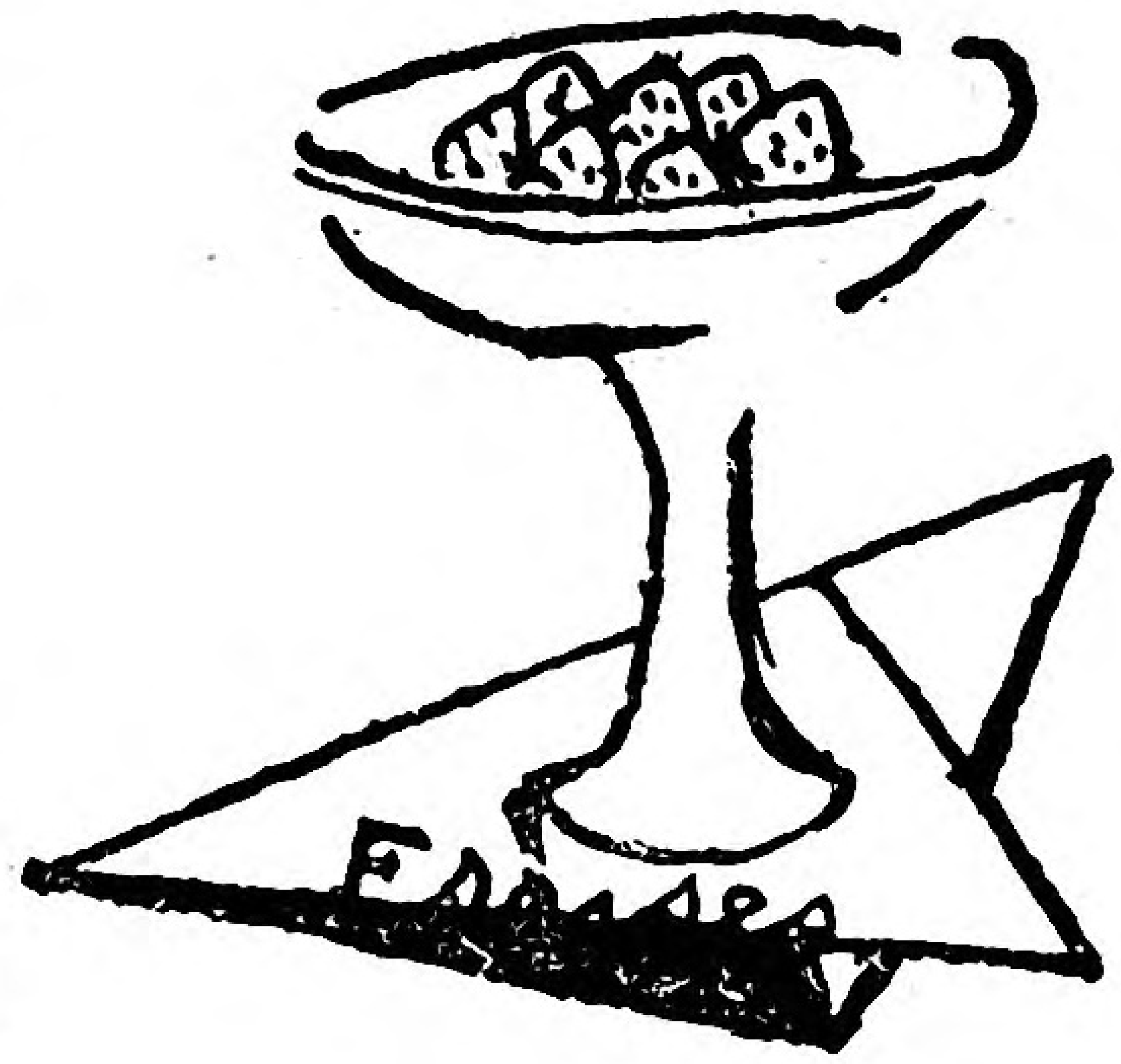
だが人々よ
暫しその拍手をやめよ、

遠く海峽を越へて
じりじりと此處にまで浸潤して來た彼等ではないか、
ふるさとの土に狹められ
默々と異邦の空に氾濫して來た彼等ではないか。

痴鈍な面に流れるものは
どす黑い血潮だけではない、
そこには忘れ切れない人間の爭鬪性が波打つてゐる筈だ。

あゝ　陋巷の闇をゆするどよめきに
私は
虐げられた人間の怒聲を聽く。





風景をつくる人間

小泉せい

世界の終りの南の果に、その島はならくの都の様に浮いてゐた。

大樹の繁りは太陽の灼熱を防いで山を抱き、紺碧の空を反映した海が、汎ろ汎ろと波を押しひろげて雲を遊ばせてゐる世界だつた。

野は、芭蕉の實がうれ、たびをかは莖を伸べ、土にたろ芋が根をはつてゐた。

山鳩が鳴く——鳴がなくかもめがなく。

うぐひすは、樹立してゐる椰子林よりももつと、やかましく啼き噪やした。王妃の様な極樂鳥が、稀に、姿をみせた。鈴なりのマンゴーの樹の下や檳榔樹の林の中に二千年も昔の原始人が、石と木と草を以つて三角圓形に住家を作り、生きてゐた。佛蘇華(ブッソゲ)には、紅雀が甘へかかつてゐた。

ここは、常夏の國だつた。風は春の風が吹いた。

魚と眞珠貝と珊瑚が、海底に海中に、まるで踊り子の様に、はしやぎ切つてゐた。

椰子からは椰子ざけが湧き流れ、彼等を醉わせ、歌わせ、踊らせて、お月様は、マンゴーの實が、いくつうれてゐるか、數へてゐた。

島は海から潮が流れ込んで二ツの村を作つてゐた。西の、アミロルと云ふ村の土人は、東のサロと云ふ村の土人よりも、皮膚の色が白かつた。サロ人を牛に例へたらアミロル人は豚の色位の相違だつた。

アミロル人の先祖は、世界が始る時、西の方から漂着した。——サロ人は、東の方から流れ着いた先祖であつた——と、彼等は、その父と母を旦る[illegible]く鮮に、その傳説を信じてゐた。

サロの男が、アミロルの女に戀をした。

サロの女の眼は、牛の様に大ほきくて、いつも充



支那で角の生えた人發見。

トルコ

小アジアのブルサ在のある農婦の胃の腑に蛇が住んでゐる——農婦さんノラで晝寢をしてアングリ口をあいてゐたので、小蛇がはひこんでしまつたのだ。以來蛇君胃の腑で成長し毎日咽喉まで出てきて息をする。ところが春が來て蛇君活動し苦しめるので、この大腹中の農婦さんもいよ〳〵手術にとりかゝる。

フランス

パリのモリス孃フランス女子スポート聯盟から男裝、ヅボン常用で除名され、八百磅の損害賠償を要求した。何故ヅボンがいけないかの理由の一、若い會員に非常な惡影響——つまりヅボンの包有するエロチシズムが問題。

血してゐた。髮毛が漆黑に光つて、艶々してはゐたが、アミロルの女の髮が、その茶味を帶びた少しばかりのちぢれを額にただよわせてゐるほど、魅惑的ではなかつた。おまけに、アミロルの女の眸は、空の樣に靑かつた。口唇はラッパの樣に開き、沺ぎつた鼻がぶよ〳〵大ほきくふくらんで顏全體にあぐらをかいてゐる自分達の女よりも、赤い唇と、すつきり通つた鼻筋を持つてゐるアミロルの女を、本能的に、彼は、美しいと思つた。

村の堺目になつてゐるその川の中程には、素敵もない大きい長い鐵木が渡されて橋になつてゐた。鱶が、人間喰ふ味を忘れるか、この川を見捨てるかしない限りは、この橋は彼等に必要であつた。

橋の袂の兩側には、村の勇士が一人づつ、鋭利な刄物に磨ぎすました貝殼を柄の先きに付けた槍を握りしめて、橋番をした。槍は、十人位の人間は突き殺すことが出來た。

アミロルの番人は木ノ葉で腰み
のをしてゐた。サロの番人は、木皮の褌を〆めて、各〻、小高く盛り上つた小石の上に腰打ちおろし、太陽の直射で、ギラ〳〵目を射る樣な川面を眺めてゐた。彼等は、笑ひの表情を、まだ授つてゐなかつたので、それは、生命のやり場に困つたような表情だつた。持て餘した精力の消散でもしてゐる樣な顏つきでもあつた。

そして彼等は、村で一番の大馬鹿者が、村全體の勇氣を負ひ込んでゐるようなつもりで、この橋番をして、通行人を、睚み通してゐた。

殊に彼等は、この橋が、戀のかけ橋にしない約束で渡された橋かの樣に、戀愛事項嗅ぎ出しに全力をつくし、通行人を吟味した。それ以外には又、彼——橋番の必要は彼等にはない筈であつた。

誇りの心情は、時として人間を小心にする。

美しい女を持つアミロル人は、サロ人にいつも優越を感じてゐた。そのため、度々災難を感じて警戒をしなければならなかつた。用心をした。

どちらの村も、女は男の八パーセントしかなかつた。アミロル人は、種族的な誇りを冐されないために、サロ人は、一人でも女がアミロルの男の美しさに心を引かれない樣に、監視した。

彼等は、犬の樣に敏く地を嗅ぐ鼻と、音のない風を聽きわける耳を持つてゐた。川の底に泳ぐ魚の存在を感じる目を持つてゐた。意志は動作で表した。直ぐ突く——殺す。言葉は僅かに、彼等の慾望に向つての行動を補足する位の役をつとめるだけだつた。

だが戀は、彼等よりももつとすばしこく、魔物のように姿を現し、風の樣に橋を渡り合つて、成立してゐた。黄昏になるとどこからともなく、風が甘酒の樣な薫りを香わせて橋袂にもやつて來て、彼等を酔はせた。とろり、とろり、居眠つて目を閉くと、向ふ側の番人はもう、飴の樣に、だらりと槍を投げ

ドイツ

ベルリン隨一女千里眼夫人今年の世界運勢を豫言——極東に戰爭が起る。オーストリアに全世界を驚かせる事件が起る。•ドイツに新人物現はれ世界中の人が頭痛を病む。世界中の婦人が政治に捲きこまれ害毒を流す——

メキシコ

メキシコ・タンピコ港でビールのバーの閉鎖を法律で命じたら、ビールを飮ませないなら働かぬと勞働者達總罷業に取りかかる。

アメリカ

禁酒國へ痲酔愛輸入の曲者は傳書鳩なので、稅關吏大閉口。

ハワイ

ハワイ・ホノルル・ワイキキ海峽でお魚が人間を釣つた——釣られたのは五十八歳になる日本人大きな魚が針にかゝつたので悦んだが水中に釣り込まれてしまつた。側にゐた二十九歳の息子君助ける事も出來なかつたのだと——

以下ニホン

三日間にムクムクと風船玉のやうに丸くふくれちやつたお爺さんのお話。靑森縣の三八おぢいさん二月七日から十日までに頭のテッペンから足のさきまで三倍も太く丸くなつて體重はちつとも尠な

出して眠つてゐた。
アミロルの女に戀をした男は、今日その夫とこの川の中で決闘する日だつた。それは彼等の間に約束された習慣でもあり道德にもなつてゐるのだつた。
番人は、ジリ〳〵身體が燒け付く樣に暑くなると臀の下の小石を掘り返して、冷つこい石を臀に當てた。戰爭をする時は、この小石は、たちまちつぶてに變つて敵陣の中に飛び込んで、目を潰し腕を折り股をくぐつて、彼等の有一の武器となるのだ。
橋の下では潮が絶へずだくだくと流れ動いてゐた鱶の群は、一家眷族引き連れて小魚を追ひ廻して、急行列車の樣に島の周圍を走り廻つてゐた。
彼等は、そこで二日でも三日でも水中決闘を續けるのだつた。片方が疲れて殪れるか、鱶に喰れるまで、女は毎日、橋の中央に立たせられて、それを待たねばならなかつた。兩方が疲れると、合意の上で疲れを休めて又始めた。
その女の夫は、今から何べんか昔の月を數へる位前に遭難した白人の船で、長い間、西方の都で暮して來た男だつた。
彼は、しばらくでも寒をくぐつた彼方の世界で、言葉も風俗も異つた人間を見、見たこともない樹や花や寒い氣候を感じ、海には機械で波を蹴散らして小狗の樣に走り駈ける船や地を這ふ乘物に驚かされた彼は、その女にさへ解らない感情を持つてゐた。たとへば、彼は、奴隷に對する意識が明瞭になつて來たのだ。美の優劣で彼は、物の見分けをつけることも、貧富によつてその權力が擴大され縮少されることも知つた。自分達の世界以外の世界は、不平等不合理極るものだと云ふ怖れを抱いてゐた。何故ともなく、文明人から受ける侮蔑壓迫を彼は怖れた。そして彼は、その不合理極る文明人の生活を、嫌惡しつつ、反對にそれを細胞の中に一ッ一ッ吸ひ込んでしまつてゐたのであつた。いつとはなしに彼は、自分の感情と思考を自分以外の者に強ひようとしてゐた。自分の智慧と考へを、形に現さうとした。彼の感情は、いちぢるしく進んで精神の動きは、彼の行動を支配するのだつた。彼の存在は、たしかに彼等の仲間には刺戟であつた。「魔物に憑れた男」老人たちはさう云つた。時に、こんな得體の分らない精神と云ふものを持つてゐる男が今まで生れたことはあつたが、彼等の仲間には通用しなかつた。
水中決闘などと、こんな馬鹿氣た、そして動かせない彼等の掟で判決される戀も、同じ村人同志では實に自由に悍るところなく享樂するのであつた。殊に、女は自由に樂しく暮した。雜婚し、少妻多夫であつた。彼女等は、いつも平和だつた。自らの戀愛がこんな冒險を重ね、今日の結果を生んだことも、別に悲しみではなかつた。それは永い間行はれた習慣だつたから、そして生――死――さへも彼女等に

い。コリヤ一體どっした事だんべとエッキス光線で調べてもらつたら左助骨三本折れ一本が肺に突きささりポンプの役をしたので全身に空氣充滿、世界に例のない氣しゆ病といふのだつた。患部を切開して空氣を出したので、人間風船が飛ぶかとばぬかの研究はフイとなる。

九州若松

人間の生魚を捕へたと水上署へ電話、係員さん答へて「水族館へもつてゆけ！」そのまた答へ、あわてちやいけません生魚といふ船ドロの姓名です。

東京市外

米俵廿五俵を積んだ馬力の鶴さん、こんなにまあ米を運ぶ身分なのに、なんとセチがらく人間は食へぬ事かと考へながらくると、馬車馬のアオ二才君もまたなんにもいはずトボ〳〵歩を運びながら、憤慨してゐた「あんまり馬鹿にしてる、鶴さんも搾取がすぎるぞ、俺は腹がペコ〳〵だ」其時馬力君も今朝から食べさせぬ馬君の空腹を思出して、せめてオカラでもと買ひにいつた。時しも八百屋の大さん人參ほうれん草を抱へて登場、馬君好物な青物を持つて來てくれたとばかり飛びついてアング

は何等の悲しみも感じないでいい程、彼女等は自然人だつたのだ。この世界にあつて、自分達の生を惜しむ何物もなかつたし特別の愛着を感じるような努力の痕跡だにないからだつた。生んだ兒は猫の様に成長して別の世界を作つて繁殖して行つた。

兩肩にちぢれた髪を垂して、彼女は、無心に川面を見つめて立つてゐた。二人の男は左右から首を抱きしめて、名殘りを惜んだ。闘爭心を持つてゐることは、男に取つて不幸だつたそのため、彼等は悲しみ惱まなければならなかつたからだ。その夫は、涙さへ流した。見物人が兩岸に集つて來た。白い大鳥が羽根をひろげて、彼等の頭上を翔けた。

彼――その夫は、突差に、自分たちが今始めようとしてゐることが、いかに馬鹿氣た眞似であるか、と云ふことを考へた。

「下らない！　もし鱶の餌食にでもなつたらつまらない役割だ」と彼は思つた。だが、こんな考へは相手に通用する筈はなかつた。

「いやだ！　こんな決闘はやめだ」突然彼は呼ぶなりその女を抱へて脱兎の様に走り出した。

「いくじなし！　その女をこつちへよこすか」相手の男は奴鳴つた。決闘をこばめば、當然女を相手に渡さねばならなかつた。

「いやだ！」奴鳴り返して彼は妻を抱へて群衆の中に飛び込んで行つた。

見物人は、たちまち戰士に早變りした。橋を挾さんで早速石の礫を飛ばす。槍を投げる。逃ぐる者、防ぐ者、阿鼻叫喚、たちまち修羅場と化した。

この戰爭は何十年も續けられた。川の中の決闘の様にこの戰爭も悠長だつた。疲れると休息し、倦くと忘れてお月様と一所に踊つたり歌つたりした。橋の番人だけは三人づつ殖へて見張つてゐるだけが、常と異つてゐる位のものだつた。番人が合圖をすると彼等は石を投げ槍を投げて戰つた。この戰爭を見物に生れて來た様な赤坊も直ぐ大きくなつて戰士になつた。橋の上には全く人の歩む姿を見なかつた。戰爭をしてゐる目的も分らなければ、原因も知らぬ若者もあつた。間には隣村人との戀愛とは云へ、その刑罰が酷いと云ふ者もあつた。兎に角、戰爭は彼等に一ッの進歩を型づくつてくれた。自分達のなしてゐること、生きてゐることを考へてゐる様になつた。鱶の襲撃を受けた小魚が川面へはね上り飛び上り、必死になつて逃げ廻つて來ると、番人どもはその柄の長い槍を、スーイと突き差して取つて喰べた。彼等は、滿腹すると、戰爭がしたくなつた。

この頃では、バナナの實も、落ちて腐つた。マンゴーの實も、大方は鳥の餌になつた。だんだん、人間の數がへつて行つたのだ。

一度この島に遭難した事のある巨船が其時武器と計劃を滿載してずんずん彼等の島へ近寄つてゐた。

り、勢ひあまつて大さんの腕まで食ひついてしまつた。

埼玉縣高萩村

三十歳の女ふと氣が變になつて二ッの我子の頸と股を食ひちぎつて逃げる。子供は瀕死。

新潟縣中頸城

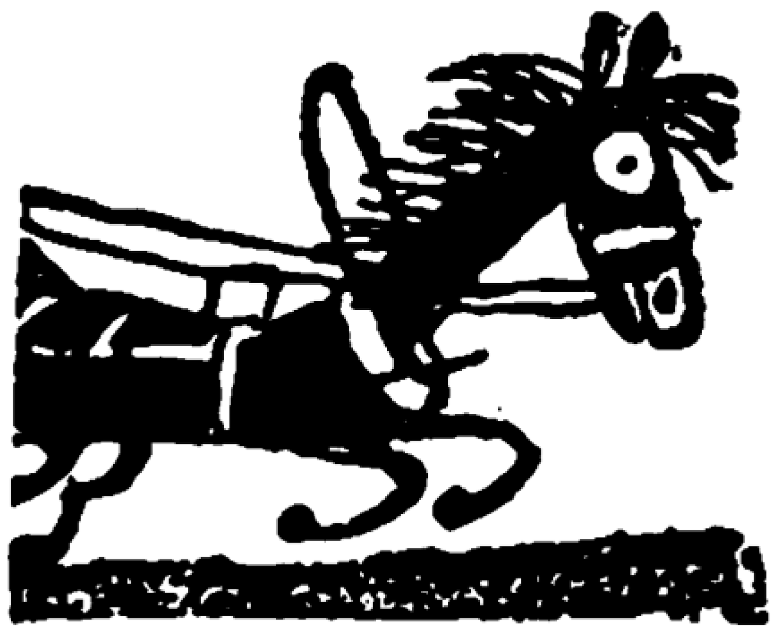
江藤氏、人間に指紋あるごとく牛に鼻紋のあるを發見。

神奈川縣高座郡

氣狂ひを承知で「精神病者は認める。給料として年二百五十圓を定め、若し離婚する時は前期給料の割合で慰藉料を支拂ふ」といふ理契約で結婚した青年が、同棲日數九十九日で女を離縁したので、女の兄さん日割給料六十八圓を要求告訴した。すつたもんだの末半額にまけてもらひ金三十四圓也女房代正に支拂申候也。

大阪道頓堀千日前

こじき五十余名檢擧、彼等曰く最新組織「こじき會社員なり」社長野村、渡邊の兩人は西成區に廣大な邸宅を持ち、日當三十錢にて彼等を雇ひ自宅にてこじきの職服を與へる。社長連は圓タクで現場監視に一時間毎に廻つてくる。社員一人當り平均五六圓の收入とお巡りさんビックリ。社長二人も檢擧じゆずつなぎ。



選擧と一女性

島　あやめ

Ｏ市にも總選擧を目あての政黨が東京無産黨と前後して結成された、主體は××勞働組合と二三の小さい勞働組合とからなつてゐた。

シイ子は、Ｓと云ふ小數な組合の婦人部員だつたので、いきほい黨員の一人に加へられたのだつた、そして總選擧戰は開かれた、而し、シイ子は自分が政黨の一員であることを不愉快なことにして選擧の方の仕事はろくにしようとはしなかつた。

もと／＼シイ子がＳと云ふ組合に加入した原因がこうだつた――シイ子はそれ迄にある縣の總同盟に籍を置てゐたが、爭議が起つても、或は解雇手當や見舞金の交渉を依頼されても總同盟の處するその交渉の仕方たるや實になまぬるく、身を以つて相手方にせまると云ふやうな積極的行爲の出來る人は更に一人だになく、まるで勞働者を種にする處のブローカーと云ふ態たらく、シイ子はそれがどんなにいま／＼しかつたか分らなかつた、何故そんな場合總同盟は勞働者の徹底的利害の立場に立つて相手を打ち敗かすことが出來ないのか、それは總同盟が勞働者にとつて何の糞つぱちにもならぬ右翼政黨を支持してゐるから――政黨は本質的に多數の黨員を持てばい﹅のである、從つてそこには個性が無くて妥協があり、戰鬪力に缺けて乞食の精神がある――だとシイ子は思つた。あの工場は誰氏の地盤だから工場主に反感を抱かせては黨の爲でないとか、この爭議はこ﹅あたりで切り上げてその變りに全職工を組合に加入させることにしようとかのからくりは正にブローカーの仕業でなくて何だ。

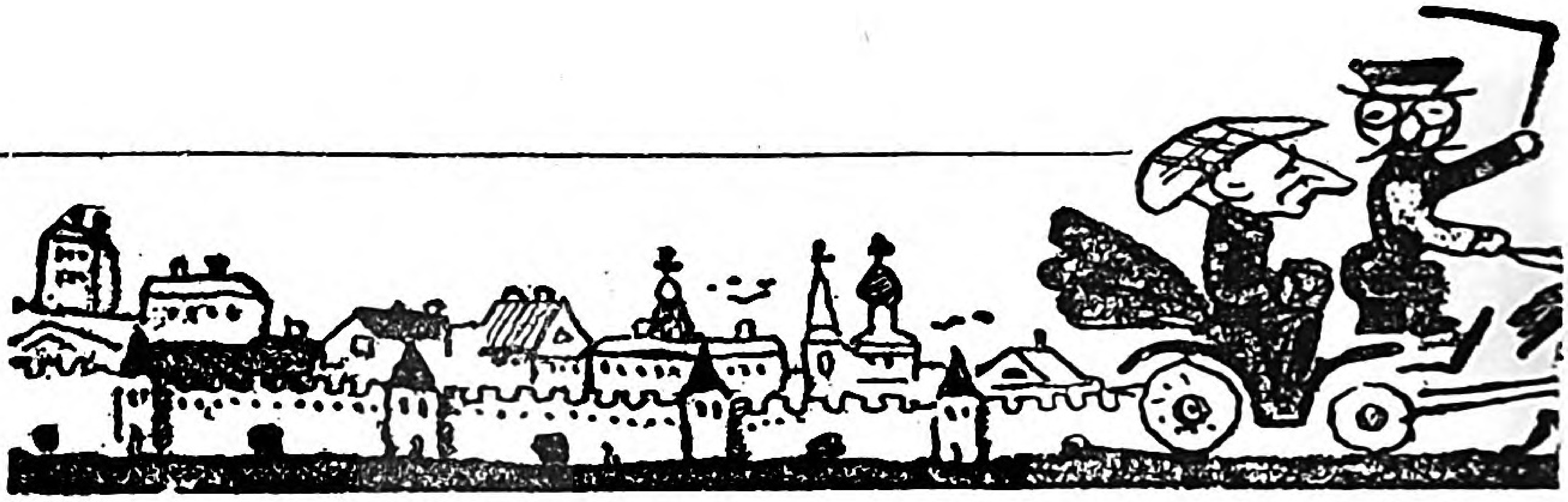


シイ子は次第にルンペンなこの組合にゐることが苦痛になつていつた、そしてひそかによい組合に轉ずべく心掛けるやうになつていつた。

シイ子はさうしたいら／＼しい氣持を、シイ子の通學してゐる（シイ子は當時その當地の勞働學校に通學してゐた）學校の講師であるＫに持ちかけた、Ｋはその氣持が決して墮落ではないこと丈は云へる、うんと苦しんで自分で道を切り開いて行くところにあんたのねうちがあるだらう、と云つた。

Ｋの妻も善い人間だつた、シイ子はその人にもよくなつかしめた、妻の方でも妹のやうな氣がすると云つて色々と氣をつけてくれて、ＫもＫの妻もシイ子の研究心を常に刺戟するやうにはげましてくれた、殊にＫは茶話にもシイ子にふさわしい話をすることに心してくれた。Ｋは確かに議會主義者ではなかつた。

普通選擧法が出來たときも、雜誌や新聞に感想文を頼まれ



て書いても、無産階級の爲に喜ばしい事だ、なんては一言も書かなかつた、無產黨から九割もの代議士を出馬させるよりか、指導者の立場にあるインテリゲンチヤでよい人間が一人でも殖へて、勞働者にとつては勞働爭議の內容する力と云ふものが政治なんかより如何に偉大なるものであるかを教へこまねばならぬといつた。

シイ子は全く然りだと思つて聞いてゐた。

それから幾月かの後、K夫婦とシイ子はO市に移り住んだ、O市は工業土地だし思ひつきり素晴しい仕事が出來るだらうと云ふので。

O市に家を構へると直ぐKは工場に這入り込んでフラクション運動をはじめた、シイ子は派出婦をして出來る丈會社の病院に這入りこんでゆくことにした、さうして出來上つたのがS勞働組合なのだつた。

組合は次から次へと爭議を起しては勝利した、組合の方針はどんな場合にも戰鬪的であることだつた、敵に對しては一歩の妥協もゆるさないことだつた。

だからして、O市での勞働組合中でも、最も左翼的戰鬪的組合としてその成長を注目された、だが惜しいことに、皮肉にもKはこの發展のなかばにあつて、ブタ箱生活が原因で肺病になり遂に死んで了つた。

それからと云ふものは、とかく內部にごた〱が絕へず、次第に色彩も變つてゆき、遂にはこんど出來た政黨を支持することになつたのであつた。だからシイ子にしてみれば他の組合とは違つた歷史を持つS組合が、而して自分が代議士候補××氏の選擧應援をすると云ふことが決して快いことでないのだつたんだ。

よし、××氏の政黨が右翼政黨ではないにしろ、總同盟時代のいまわしい印象を持つシイ子には、再び愚劣なことをくり返すかにしか思へぬのだつた、否！むしろ、政治運動をすることは階級鬪爭の尖銳を痲痺させ、未組織內にある勞働者の階級意識を曲げて意識させるものだとさへ思ふのだつた。

使をやらぬと選擧本部にも出てこないし、よし來ても先に立つて仕事をしようとするでもないシイ子の有耶無耶な態度は、戰ひがはげしくなるにつれて皆の間に怒りを買つた。

實際のところ皆はシイ子に多くの期待を持つてゐた——例へば、書きもの、會計係、食事のこと、演說等々と——。

今迄の組合に於けるシイ子は、ばき〱と事務的のことなんか一人でやつてのけてゐたのだから、シイ子を知る人たちは期待はづれがしたのだらう。

どうせシイ子なんかプチブルな意識からぬけきれないんだ。

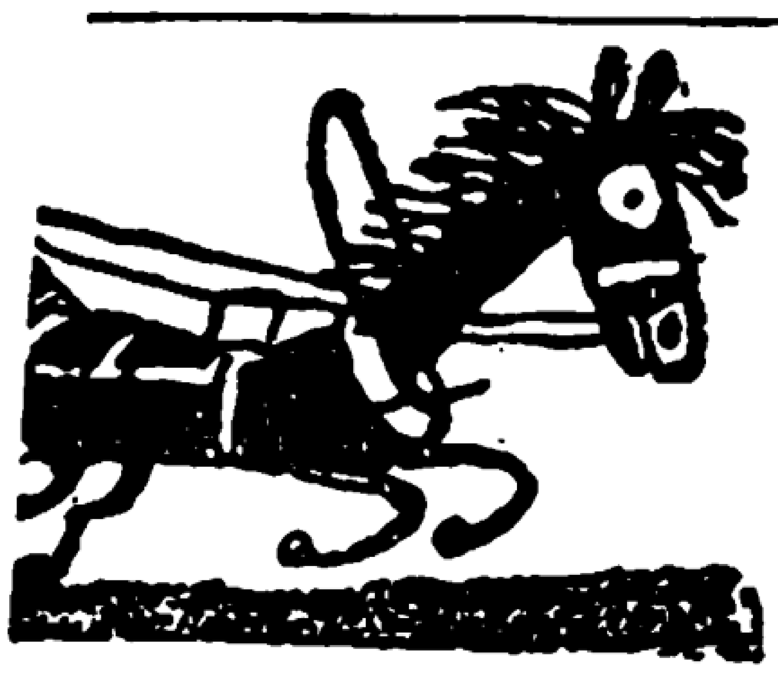
書籍から得た知識なんてあんなものさ、感情で鬪爭をしようつてものだ。

彼女のやうに統制を亂し鬪爭を廻避する奴は除名しろ。

もつと甚だしい惡口もシイ子の耳に這入つてきた。

色男でも出來ていろけのない無產運動なんか嫌になつた

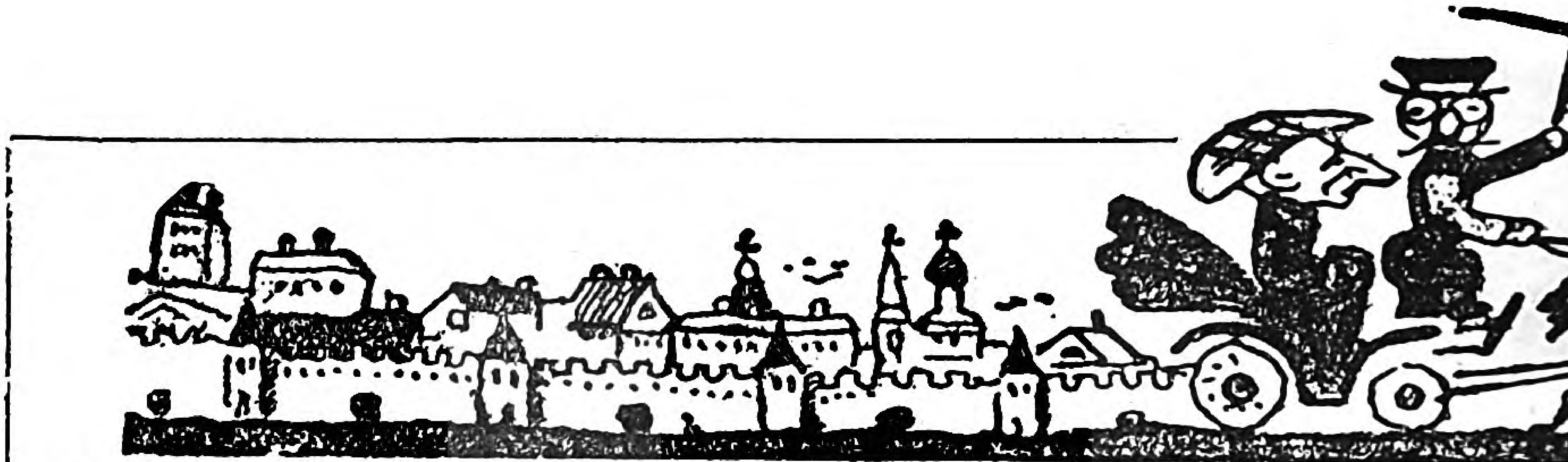
んだよ。
　二三日前彼女の家に美青年がゐたと云ふことだ、而も彼女は取り亂した格好をしてゐたと云ふことだよ。
　デマゴーグ――だが何と云ふ淺間しい人々の世には多いことだらう。流石にシイ子は女の身、ものさびしい氣持にかりたてられるのだつた。
　――今度は七ヶ所ですからシイ子さんも絶對に行つて貰ふことにします。
　この黨にとつては有勢派の××組合員であり辯論部長の役にある男は、演説會場を書いた紙をぽいとシイ子の上になげて命令した。
　――あゝら又初まつた、私には選擧の應援演説なんて絶對に出來ないつて最初つからお斷りしてあるぢやないの、
　――ノー、ノー、演説が出來ないなんて理由は認めません、ぐづ〳〵云はないで、辯論部長の命に從つて第一會場から第七會場迄巡次まわつて貰ひます。笑談半分にだが、高びしやにきめつけられてしまつてシイ子は云ひ譯にこまつた。
　――だつて私はしたくないのに、第一私がしたら票を少くしちやうやうなものよ、それではこまるでせう?
　――階級的立場に立脚して演ればよいぢやありませんか、得票云々は第二の問題です、それよりあんたのやうに、やれ演説はしたくない、書くことはお斷りだ、なんて云つてゐることの方が餘程こまるではないでせうか!?　こんなに猫の手でも欲しいときだし、餘すところいくらも時日も無い全くの血を以つて闘ふべきときだから、いやにひねくれてあまつたれてゐないで勇敢に働かうと云ふ氣になつたらどうですか?



　――まあ、私ひねくれてなんかゐないわよ。
　――ぢやあ默つて演説會の方も承知してくれるとよいではないですか。とにかく僕は忙しいのです、これから七ヶ所の集會屆を持つてゆかなきやならんのですから。そゝくさに、嫌な言葉を殘され出て行かれると、シイ子の胸はぶたれたあとのやうに波うつた。ひねくれてゐる――なんて第一癪に障はる。自分の態度が人々にそんなふうに思はれてゐると云ふことは心外であり甚だしい侮辱だと思つた。
　いろ〳〵の恥辱的同志の仕打、シイ子は自分の黨内に於ける立場が、もう行詰つてゐる、即ちみんなのシイ子に對する氣持が最早同志としての信頼を欠き、異端者に對する樣な白眼視的態度になつてしまつてゐることを思ふと、今日中にでもはつきりと自決して一切の關係を斷ちたいと思ふのだつた、さうすれば行きたくもない演説會になんか行かなくてすむのだ、さうだ脱退屆を出してきつぱりと明日から來なくしよう。勞働組合から離れたくない感情でもつてこゝまで引きづられてきたが、どうせS組合だつて昔のやうな組合ではなくなつてゐる。



　脱退屆を人に依頼してをいてシイ子は北風のふきまくつてゐる夕暮の町に出た、既成政黨のポスターはともかくと



して、無産黨の候補者のポスターが針の如くにシイ子の眼に這入つた。そしてそれ〴〵の黨主の面かげがシイ子の頭をかすめてゆくのだつた。大山一派が何だ、麻生一派が何だ、堺一派が何だ!! 英雄主義者の洪水洪水洪水だ！

外人經營のセメント會社のストライキは、對外國の資本家だけに世間の注視のまとになつてゐた、シイ子もかげ乍らそのなりゆきに心を引かされてゐた。

シイ子は何とかしてセメント會社のストライキに這入りこめないものかと思つた、だが確實な方面へ聞き合せてみると、爭議團は非常に訓練されてゐて、事實上の爭議の幹部二名は、この間コミンタンの會議から歸つてきた人々で、とても一面識もない者の應援なんか受け容れないであらうと云ふことだつた。

さう聞くとシイ子は猶更ぢつとしてゐられないのだつた、何とかしてそれらの人に加つて仕事をしたい――シイ子は毎日爭議團の前をぶらつきに行つた。

正服巡査、刑事、警備隊員、門前はこれらの人によつて血なまぐさく取り圍れ、とてもとても、外來者のよりつけるどころではなかつた。それでもシイ子はこりずに樣子を探りに出てきて何とかして爭議團の人に一通の手紙を託しようとした、手紙がうまく幹部に渡れば屹度這入りこめる自信をシイ子は持つてゐたから。

晝の間は絶對に駄目だ――シイ子は數日の後そのことに氣付いた。夜の十一時十二時になると××の眼がずつと弛む、そのときなら大丈夫だ、シイ子はこんど夜おそくやつてきてチヤンスを窺ふことにした。

シイ子がかうして爭議團に這入りこむ爲に夜となく晝となく家を空けてゐる間も、××氏の方からは頻りに使の者を訪つてシイ子が選擧本部に出てくることを勸めてゐるのだつた。Kの妻が笑ひ乍ら告ぐるのだつた。

――女の辯士がゐると聽衆が散らないでよいのですよ、なんて言つてたわよ。

ちゑッ、代議士患者の尻押なんかしてたまるものか、だ！。

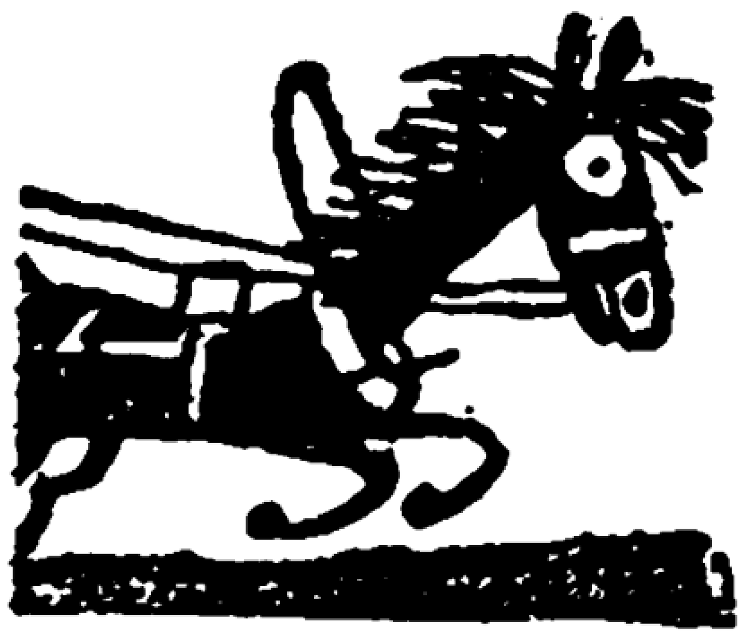
――全く情なくなつちやう、選擧に消費する丈の物質と勞力を爭議の爲に使用するとして御覽、どんなによい仕事がいくつも出來るか分らないわよ。

選擧なんかで演説をしたり、再三擴大委員會なんてものを公會堂あたりでやつてればそれで何とかよいことになりさうに考へてゐるんだからして萬年たつても貧乏人の浮ぶときは無いわけだ。

誰かゞ、我等の行く道は銀座街道ではない、裏道だ歩み難いいばらの道だ、と云つたわね、本當にこの頃の自稱革命家に鼻糞だけでもその氣持があればいいんだけど――いやに氣焔をあげるのね、民主々義者にぶち殺されるよ。

――彼奴らにぶち殺す元氣なんてあるものか、私のこの眼を見たらむかふでオダブツしちやうよ。

シイ子はいたづらつ子がどんぐり目をして見せるやうに、拳を握つてKの妻を睨みつけてみせた。



就職

大久保文子

五月の空は陰鬱に灰色によどんで居た。會計課長と時間應對をやり、速度を早めて文字面にキーを壓下し初めると、會計報告を定時間に打ち終へて、急いで、階段をすべる様に下り様とした。

瞬間、下腹部が猛烈な苦痛に刺戟された。壓搾される様な衝動は、同時に激しい動悸と共に、「カァッ！」と異様な臭氣を含んで胸を這ひ上つて來た。

「チエッ！」葎子は眩暈を蹂躙する様に、鼓動を抑制し、痙攣する不氣味な肉體を辛じて洗面所にはこんだ。嘔吐は咽喉を破けそうな强烈さで胃液を排出した。下腹部の肉塊は狂暴的に筋張つて、痙攣した彼女は唇を噛みしめてうんと全身に力を入れた●

毆りつけられた様に、無抵抗になつて、洗面所を出ると、彼女はタイプライターの前に崩ほれた。蒼白に汗ばんだ額には、アイロンを當てゝモダーンを粧ふおくれ毛が悲慘に亂れて居た。口紅は樂にかさ〱に乾びて居た。

葎子は動搖する心身を沈靜にして又もや入獄して居る彼を想起した。幻影は彼女の視野を惑亂さした。

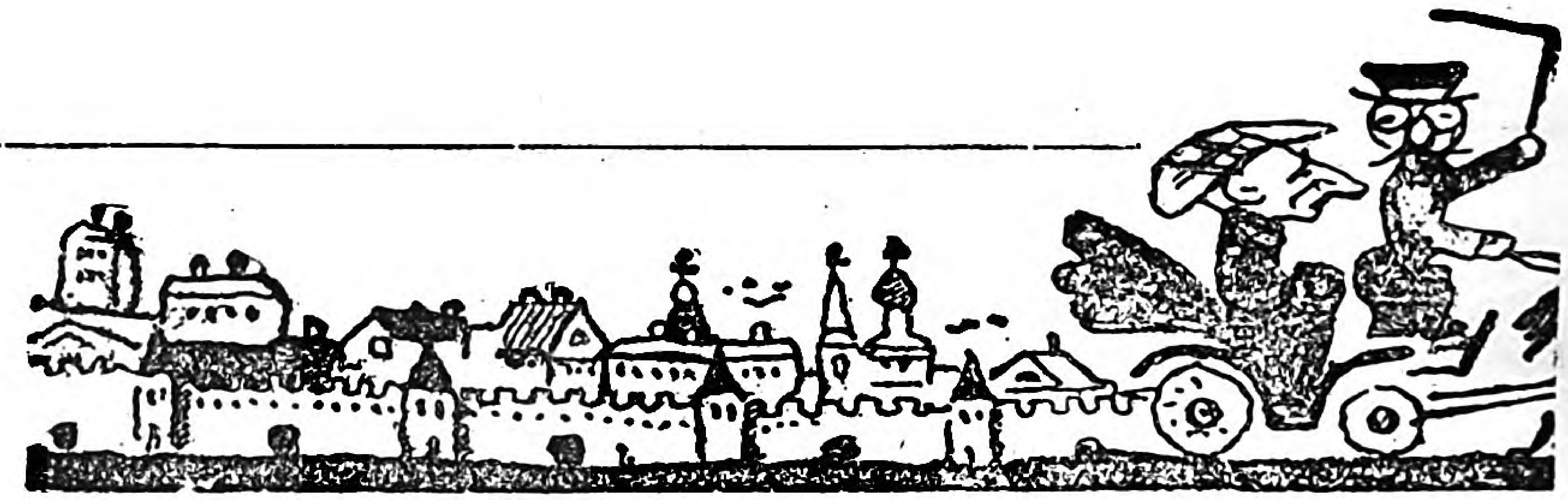
四・一六事件に連座して檢束された鎖につながれて行く日、彼はぶつきら棒に云つた。

「身體を丈夫にするんだ」だが冷酷な言葉に彼の視線は餘りに矛盾して居た。葎子は鋭い凝視を腹部に感じあらゆる感情が轟然として爆發され様とするのを微かな理性と異様な反撥で抑制し

「……」默つて彼の視線にからみ付いた。それは卒氣ない慘酷な人世途上の生別だつた。だが彼女は決して逡巡と躊躇を持つ世紀の遺物ではなかつた。憂鬱な寂寥は焦慮と悲哀を彼女にぶちまけたが彼女は其の混沌とした底から微かに冷笑し返す自分を見出して居た。



突差の生活の變化は彼の留守勝ちな平常をこれが豫期出來ない永遠に持續するのかと考へる時葎子は流石に瞼が熱くなる事もあつた。だが空虛な情操的な幻影の感觸に陶醉して居るべき時ではなかつたことだ、彼女は日々の新聞廣告にあせる様に目を通した。免狀を握つて居る彼女は邦文タイピスト入用の活字を射竦める様に目を見はつて求めたがそれは駄目だつた。東京を出て大阪に來て居る彼女には就職に就いても誰一人照會してくれる者はなかつた。例へ有つても主義者の妻君で而も姙娠して居る様な女を現在の打算的な、不合理な社會の何處で歡迎してくれようか結局葎子は總てを祕して社會の一部に或る期間、身の二つになる迄の勞働をして得なければならぬ賃金、卽ち報酬が入用



だつたのだ。

事務員、派出婦、ウエトレス、女工、女店員、だが經驗のない事は彼女を臆病にした。

或る朝の事だつた。

土砂降りが激しい雨脚で地上を毆りつけて居た。破れ戸の二階の手すりのすき間から白いしぶきが古い赤茶けた疊の上をぶよ〳〵にしめらして來た。不氣味な音を立てゝ天井から雨もりがし出した。葎子は陰欝な瞳でやり場の無い焦慮を感じ冷たく凍つて行く兩足を掻き抱いた。「バサリ」懷しい音だ。待ち憧れる瞬間の期待、無表情に動かない冷たい視線を彼女に落し、ミシ〳〵と階段を下りて行く階下のおば樣にも何の腹立しい憎惡も感じずに、彼女はむさぼる樣に新聞を引き寄せた。

嗅覺をそゝる油の香がプンと鼻に來る、それにも一種の魅惑を感じつゝ人事案内を閃光の樣な素早さで凝視する。

突き落される樣な悲哀と苛々する絶望より外與へられないそれに對して日々の繰り返しに過ぎない連續的な瞬間の昂奮。

「オヤツー」最初、錯覺ではないかと思つた。次にそれが正確に社會の一部に要求して居る正しく需要者で有る事を認めると葎子は狂氣の樣に昂奮した。

「邦文タイピスト入用、但經驗者に限る」

市內東區北濱一丁目、株式會社。

間違なく、ゴチック文字で雜然とした求人側に竝んで居る、葎子は突差にはね起きた。新聞紙を破りぬくと、よれ〳〵のハンドバックに入れ、いつから書き留いたか知れない履歷書を風呂敷に入れた。大きく毛にウエーブして蒼褪めた頰に紅をさした。是非必要と認めたからだ、彼女は哀れに昂奮して傘を打ち叩かれ電車舗道をめざしてかけ出した。

早朝の割引電車は、元氣旺盛な筋肉勞働者を滿載して走つて居た。葎子は其の混雜に包圍され、同じ無產者階級の意識を今更躍如として感じ身內に黎明の喚起されて來るのを認識した。

KN株式會社は、其の高層建築を、北濱角に屹然として冷やかに押し默つて周圍を威壓して居た。彼女は白い其の洋館をまぶしく見上げ無視された樣な悲哀を瞬間感じた。その氣弱さを叱りつける樣に辛じてドアを押した。

後ればせに追ひすがつて來た者を咎める樣な無數な視線が嘲笑する樣に彼女を射竦めた。

「駄目だ自分等取つて來れるものか」

冷やかな視線を感じると、葎子は淋しくなつた。

其處には新聞廣告にすがり付いて、自分と同じ道程を踏みしめて來た、人間達が一縷の望みの前に互に慘忍性を如實に暴露して相反目して居るのだ、彼女は哀訴する樣に受付の男に履歷書をおず〳〵と差出した。

「しばらく順番の來る迄待つて下さい」

鼻眼鏡越しに男の好色的な野卑な充血した視線に、凡てを默忍して目禮すると彼女は拾幾人かの順番をひかへて居

らねばならなかつた。

強烈な競爭心と不安な哀愁の底を彷徨しながら足もとから、下腹部に漸次感覺を失ひつゝ冷却して行くのをむしろ慘忍な憎惡を覺へつゝ生活の爲には腹部躍動を呪詛した。しばらく經て、彼女の順が來て應接室に通された。

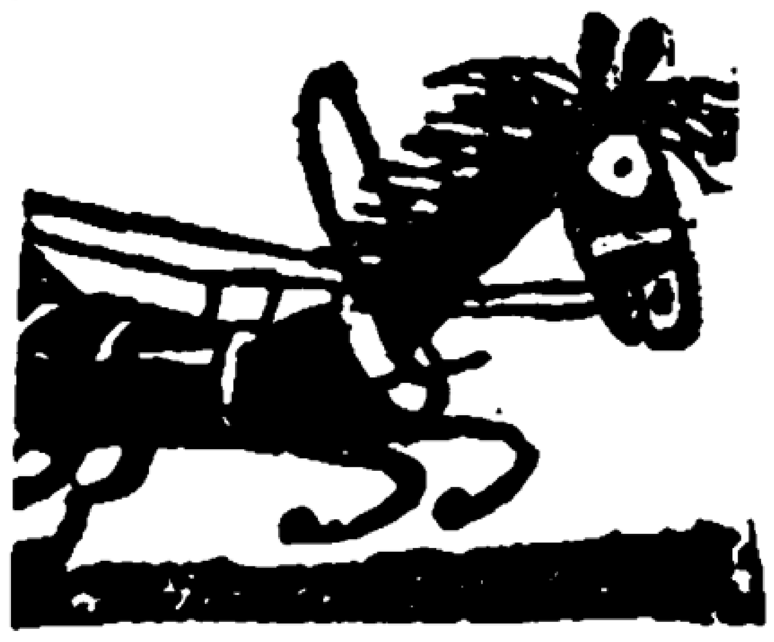
「小坂葎子で御座います」

彼女は其處の大きなデスクに鷹揚に煙草をくゆらしながら、無遠慮に、頭の上から足先迄を一瞥視して履歴書と見くらべて居る其の委託された權利で自分等の深刻な焦慮を奔弄して居る樣な男の態度に一種の侮辱と不用意な反感を感じた。が彼女は決して輕卒に此の好期を失してはならないのだつた。激しい屈辱を感じながら彼女は忍從した。人事係は彼女に椅子を進め、

「原籍は東京で、現住所が大阪ですね、一人で自炊生活と云ふ奴ですね、年は、廿歳と」

「そうで御座いますの、私、一心に勤めさして戴きますわ、是非御採用下さいます樣にお願ひ致しますわ」

「とすると會社の方で慣れた頃は直ぐ結婚しなくてはならないですね、はつは……」



男は野卑な哄笑を竹を割つた樣に續けた。彼女はすかさず洗練された羞恥を含んだ視線で聲をうるませた。

「あの、其の點御安心下さいませ、少し外に考が御座いまして、家を出て居るんで御座います、私、絶對的な野心を持つて居るんです――」

「と…仰ると、何か、どう云ふ方面の」

「少しばかりなんですけど趣味以上に、文學的方面の研究を致したい希望もございまして、仲々、結婚等しばらくは」

媚びる樣に葎子は二重眼瞼(マブタ)をしば叩いた。歪んだ樣に微笑する男には、幾分か感銘する點が有るらしく、彼女はそれを洞察すると腹の奥で大聲を擧げて冷笑していつた。

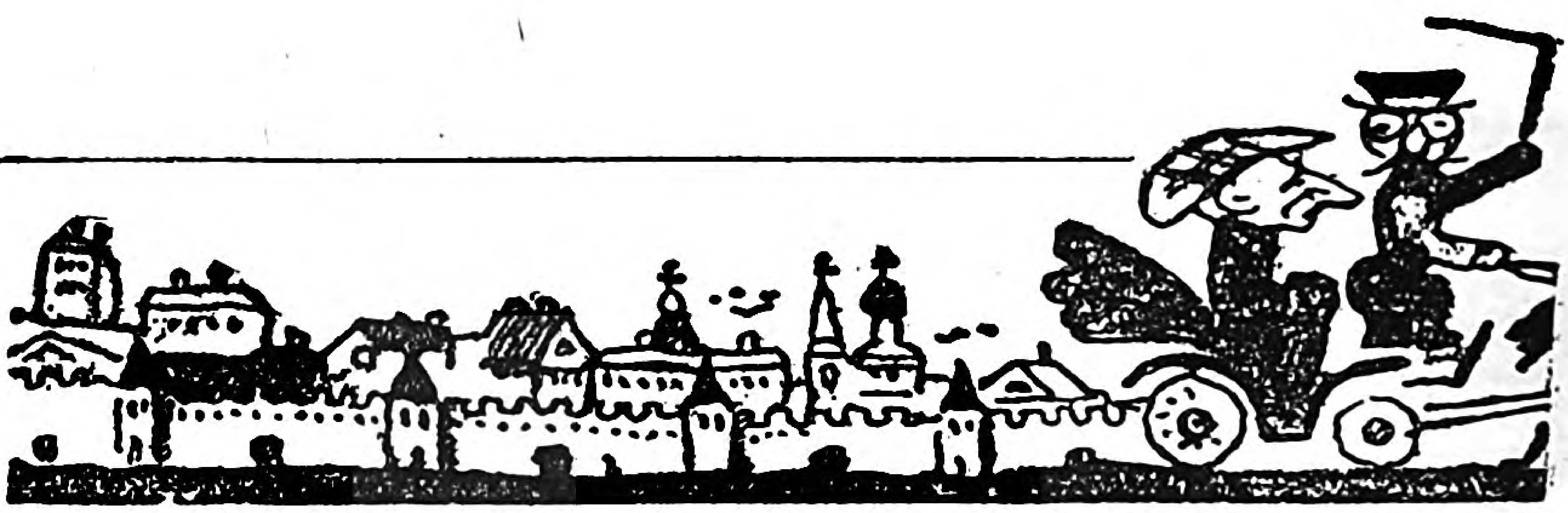


「お願で御座いますわ、女學校を出てから、ずつと、東京で勤めて居りまして經驗は十分自信御座いますの、H式甲號機で御座います。それに給料等幾等でも結構なのです」

「なる程。」勿論と、云つた風に、男の情慾的な視線は凝然と葎子を凝視して動かなかつた。

資本家に取つて、それは何と云ふ好都合の條件の一つだ。だが彼女の場合、この期を失した三拾五圓にでもすがりつかねば食つて行けないのだつた。幾十分應接しただらうか、葎子は或る程度の自信を持つて、應接室を出た。控室には二十名からの女が沈滯し切つた空氣の中で變に落ちつかない不安な顏で押し默つて彼女を射圍んだ。

翌朝、豫感通り葎子は採用通知狀を握りしめて、餓死する事を救助された。彼女は當然の結果とほくそ笑んだ。輕薄な、浮調子な男性達の中に侮蔑と、冷笑を持續しつゝ來た。



時折、否、堪へず彼女の精神を狂暴的に强迫して來るものに出遇つた。其處に彼女は發作的に慘忍な暴力で腹部を壓迫した肉塊がびく〱躍動するのを力まかせに、夢心の力で押へつけた。生理的に今更それが卑怯な不可能事と斷念しつゝ辛じて生きて行く爲の現在を通して未來に至る事を考察する時葎子は暗然とした。苦痛がうすらぐと閃光の樣に腦裡に響く恐怖がかすめた。

「いけない。こんな事をして居ては……」

長い幻影を打破すると、いきなり立つてドアーを押して廊下に出やうとした。其處へ人事係井上がドアを脊にしてハンドルを握り入つて來た。其の視線は慾情的に充滿し、葎子に肉迫して來た。

「ね、いゝでせう。夕食を一寸つきあつてくれたまへ」葎子は、其の變に油つ濃い生溫い手が自分の首にまつわり付くのを意識しつゝ屈辱と惡感に戰慄し乍ら辛じて凝然と動かなかつた。

「少ないのだけど、取つときたまへ」

井上は意味有り氣な視線で葎子の前にうすい箱を投げた。葎子は瞬間、ふいと顏を上げた。

「すみません」二重眼瞼を大きく見開いてコケツト風に流し、脣をゆがめて媚る樣に顏一ぱいに笑つた。

井上は五時過ぎを約し、場所をつけくわへ下へ降りて行つた。彼女は急いで切手を取り開いた。

「金五圓也　〇〇呉服店」

彼女は默つて、白い紙片を凝視して居る中に、身内がカツト燃え初め、變に目頭が熱くなつた。

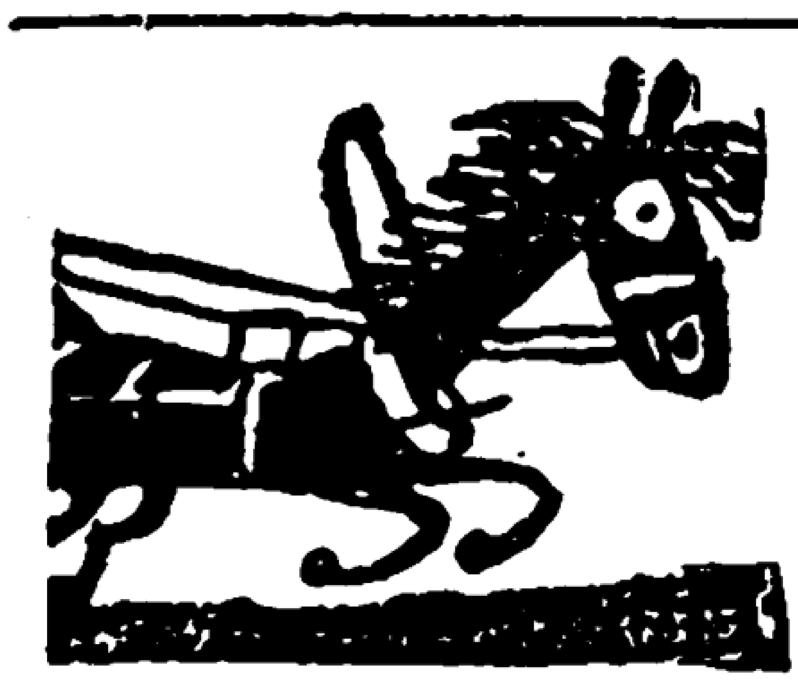
「畜生!　五圓の代價で自分を買はうと云ふのか」彼女はいきなりビリ〱と引き裂くと、力まかせに投げつけ樣とした。だがそれは抑制した。「金五圓也。を棄てゝ何になる」そうした打算が腦裡をかすめた。彼女は狂人的な哄笑を續けるとそれをもとに握りしめた。タイプライターにカバーをかぶせ終るとメモに彼女は走り書いた。

「急に頭痛がして堪ゑ切れませんの、お約束、甚だ相濟みません」

それを小さくたゝみ給仕を呼ぶと井上樣にと依賴した。急いで歸る仕度をしながら激烈な腹部の苦痛によろめきながら伸吟しつゝ彼女はほのかに、今夜にでも流産してくれる事を祈つた。瞬間井上の狼狽と困惑で度迷つた顏を想像し、葎子は冷然と嘲笑をあびせて立ち上つた。

一九三〇・二・一六

岡田八千代女史が夫君三郎畫伯と御一緖に海外行脚に四月十九日夕出立される。女の友達同士で十五日に築地常盤でゆつくり座つてお話しする會が催される。岡本かの子女史を送り、いままた八千代女史をおくる。この次貴人と文人の御夫妻で海外旅行されるのはどなたでせう八千代女史は劇のことなど知らせてよこして下さるでせうと思ひます。



指輪

矢田清子

人物

本田。畫家、二十七八の男。
美代子。本田の妻、二十二。
久子。美代子の友人、二十三。
寶石商人。三十五六。
所。東京の郊外の家。

木の多い崖の上に建つた明るい十疊の部屋。室の周圍には額椽のない畫が一面にかかげてあり大きな風呂敷包からは、美しい色彩の着物がはみ出てゐる。

崖に面して硝子窓あり、比較的立派な本箱にはギッシリ本がつまり、その上に奇麗な花が盛られてある。

幕あく、中央に置かれた机に向ひあつて本田夫妻が、さも樂しさうに紅茶をすゝつてゐる。

美代子。まあこの紅茶のおいしい事!! かうして好きな紅茶を飲む事も、隨分久しぶりねえ。何てすばらしくおいしいんでせう。

本田。ハハ……だから貧乏はするものだよ、こんなにおいしく紅茶の飲めるのも皆、僕の妻となつたお蔭さ。さあこのシユークリームも一つ食べて御覽。

本田うしろにかくしてあつた菓子包をとり出す。

美代子。いやな方! そんなところにかくして置くなんて隨分ね。でもありがたう、私、これ大好きなの。(シユークリームをとつて食べる。)本當によかつたのねえ、畫が賣れて。紅茶やシユークリームが食べられるし、それに久しぶりに私の着物もかへつて來るし、私、うれしくて／＼たまらないわ。

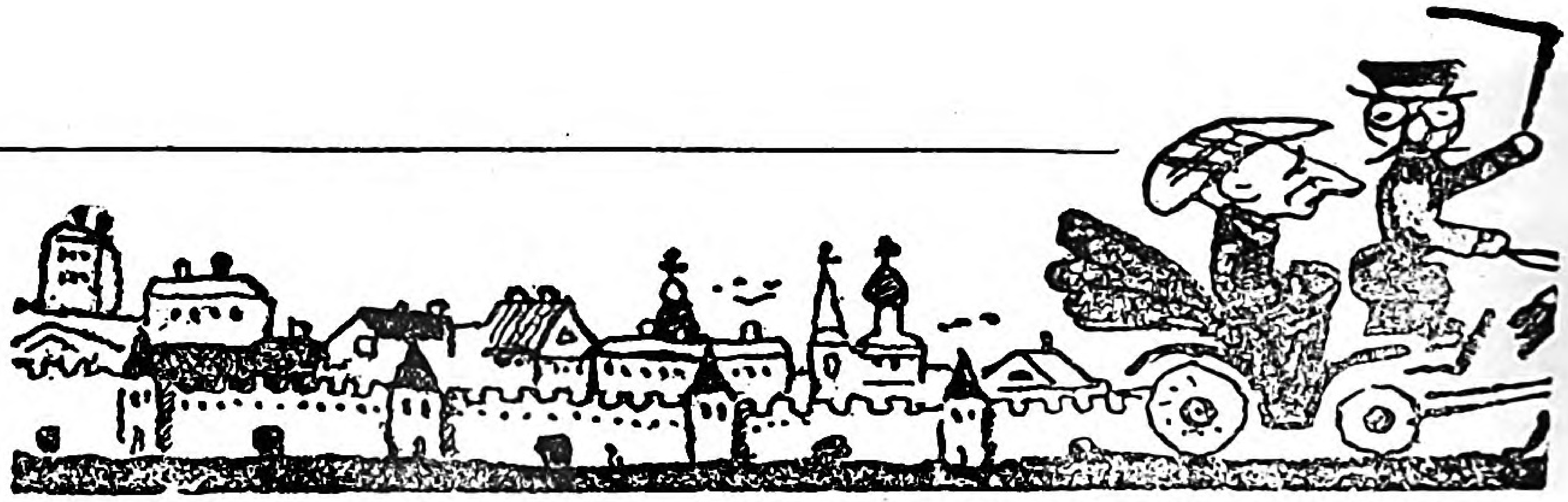
(美代子。幸福さうにほゝゑむ。)

本田。本當に思ひがけなく道重君が僕の畫を買つてくれたので大助かりさ。五百圓あれば二三ヶ月は大丈夫だらう。今度はうまく使ふんだよ。少し金があるとぢき二人ともパッパと氣持ちよく使つてしまふんだからなあ!

美代子。ハハ……、でも大丈夫よ。私この頃とても大した經濟家になつたんですもの。うまく使つてよ。ねえ一寸、質屋つてものはとても重寶ないいものね。私感心しちやつたわ。夏は冬物、冬は夏物を、簞笥に入れる代りに持つて行くと、いくらでもお金をくれるんですもの。第一、火事や泥棒の心配もなくて、本當にいいのね。それに久しぶりにかうして自分の着物を見ると、とてもなつかしくて、うれしいものよ。

本田。新らしく買ふよりいいだらう。





美代子。さうね、何とも云へないなつかしさが感ぜられますの。一枚一枚、いろんな思ひ出がにぢみ出るようで——。（着物をひろげて、なつかしさうに見る。）

本田。ところで君の創作の方は一體どうなつたんだい。一向、傑作も出來ないらしいねえ、いつまで無名作家でゐるんだい。

美代子。だつて、これでもお家を持つと、やつぱり何だかんだといろんな用事があつてよく勉强が出來ないんですもの。それに、私が實家にゐる頃見て頂いてゐた三井博士は亡くなつたし——三井博士だつて法學博士松田一郎の娘の美代子のものは喜んで見て下すつても、貧乏畫家本田の妻の美代子のものはどうでせうねえ——本當に人間つたら皆打算的の利己主義でかたまつてるんですものいやになつてしまふわ。内田代議士だつて、私、實家にゐる頃は、いつも選擧運動を手傳つてあげたのよ。それにこちらへ來てからは私の出す年賀狀の返事さへくれないの。重井さんだつていつも私にペコ／＼してたのに貴方に逢はうとしないんですつてねえ。隨分失敬だわ。今に！　今に！　だから。

美代子、次第に自分の言葉に興奮し、眞赤な顔をして、掌で机を夢中にたゝく。

本田。皆、世間の奴はさうしたものさ。小村にしろ太田にしろ、本人はうすのろだが親が大臣だつたり伯爵だつたりすれば、皆が萬事を排して逢ふからなあ。いづれ利用する時があるかも知れない。と云つた考へからね——、まあいゝさ。我々二人は、二人の生活を築けばね。

美代子。さうね。どうせ私達は世間なんかを問題にしないで結婚したんですものねえ。さう云へこの頃は久子さんちつとも來なくなつたのね。こんな郊外へ引越したし、もう貴方を諦らめてしまつたんでせうか。

本田。久子さんと云へば、今日街であつたよ。相變らずケバ／＼しく飾りたてて、キザで、大嫌ひさ。もしかしたらうちへやつて來るかも知れないぜ。しきりと僕に話かけるのを、僕、忙しいからつて逃げて來たのさ。いやな奴さね。

美代子。いやあだ！　久子さんに逢つた事を今までだまつてるなんて、本當は貴方も少しは久子さんを好きなんでせう。白狀なさいよ、私、決して怒らないから。

本田。何云つてるんだ。馬鹿だな。あんな奴の話は止さう。不愉快だから。それより君こそあんな奴に引かかつて金を使はないように用心しろ。

本田。時計を見る。

本田。もう三時過ぎたぞ、三時半迄に三田のところへ行く約束なんだ。

本田立ち上る。

美代子。洋服を出しませうか。

本田。いいよ、これで。

美代子。では早く歸つて來て頂戴、私この頃體が一寸變なの。

本田。どうかしたのか（驚いてぢつと美代子をみつめる）

美代子。何でもないの一寸、ウフフ——

本田。（五六歩出かけたが、急に氣づいたやうにもどる）あの、お金を三百圓置いて行くよ、落したり、つかつてしまふといけないからね。

美代子。たしかにうけとつてよ。本當に三田さんのところなんか、一番危險ね。あの人はとてもおだてる事が名人なんですの。でわ行つていらつしやい。

美代子。しばらく夫の後姿を見送り、やがて、手に持つた三百圓を本田の引出しに入れてから、あたりを片づけはじめる。

久子。耳かくしに結ひ、耳輪をはめ、赤いケバケバしい服裝をなし、丈の低い商人をつれて登場。

久子。御めん遊ばせ。

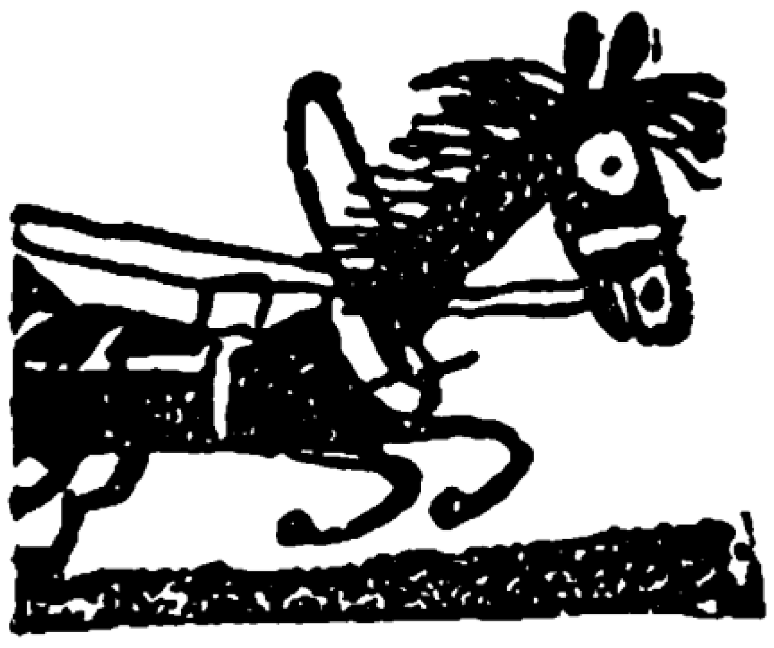
美代子。おや！　どなた?!　まあ久子さんなの、よくいらしたわね。さつきも本田とお噂してましたの。

寳石商人。久子の後から顔を出す。

商人。へい、今日は。

美代子。おや！　どなたですの。

久子。貴女、もうお忘れになつたの。天文堂の番頭ぢやありませんか。今日私、指輪を二つ買はうと思つてると、偶然本田さんにお逢ひしたのよ。



で、一緒に見て頂かうと思つて隨分お願ひしたんですけど、美代子さんの夫になり切ると大したものね。私なんか相手にして下さらないので私、せめて貴女に見て頂かうと思つて、この番頭さんをつれて來ましたの。

商人。へい、奥樣、しばらくで厶います。

美代子。まあ、おあがりなさいな。

久子。おや！　澤山いい繪が出來ましたのね、私、一枚頂きたいわ。額椽に入れたら、隨分引き立ちませうねえ。（立つてくる／＼廻つて畫を見る）

久子。隨分御上達になつたのね。今度も御出しになるんでせう。

美代子。さあ、どうですか。（紅茶をすゝめる）

美代子。どうぞ冷めませんうちに。

久子。商人。どうも有りがたう厶います。

久子。ね、美代子さん、貴女寳石を見る事がお上手だつたわね。私今日、一寸したダイヤの指輪を買はうと思ふの。いろんな型があつて私迷つてますの、貴女見て下さらない。

美代子。え！　拜見してもいいわ。

商人。奥樣も是非、御求め遊ばして。（指輪をいくつも出して机の上に置く）

美代子。まあ隨分見事なのが出來るやうになつたのねえ。（一つ一つ手にとつて見つめる）

商人。へい、毎年變つたのが出來ますので何卒、お求めなすつて。

美代子。これはとても變つてて、派手でしかも上品でいいぢやありませんか。

美代子。一つをとつて、自分の指にはめたが、ふと氣づくと、あわてて指輪をぬきとる。その樣子を久子が目ざとく見つける。

久子。おや、どうしておとりになるの、貴女の指にはめて、見せて下さいな。

美代子。貴女の指輪になるのですもの、貴女の指にはめ



て御覧なさいな。私見てあげますから。

久子。 でも貴女の指は奇麗なので評判だつたぢやありませんか、美しい貴女の指にはめて見せて下さいな。定めし指輪も一層かゞやいて見えるでせうからね。

美代子。 えゝ、でも私の指この頃すつかり駄目になつたの。（赤くなりながら指輪をはめて見せる）

久子。 まあどうなすつたの、あんなに美しく軟かだつた指が、こんなに太くみにくくなるなんて――おや失禮云つてすみません。

久子。勝ち誇つたような笑みをうかべながら、自分の指を出してくらべて見る。

美代子。 さうね、この頃はおさんどんになり切つてるんですもの。指の手入れなんか遠い昔の夢ですわ。

久子。 それが貴女の御理想なんでせう。それにしても學生時代あんなに手を大事になすつた貴女がね、世の中も變つたのね。

久子。意地惡さうに云ふ。商人。ハラ〳〵して二人の様子を見てる。

商人。 あの指輪はどれになさいますですか。

久子。 さうねえ、美代子さんの指にはまつてるのを頂きませう。それとも美代子さん御買ひになる？ 一寸價がいゝのよ。昔の貴女なら兎に角――ね如何私頂いていいんでせう。つい昔なじみで失禮な事を云つたかも知れないけれどどうせお互ひ様ね。（ケイベツしたように云ふ）

美代子。 私、この指輪頂きますわ。

久子。 まあ貴女、それ三百圓よ。

美代子。 三百圓だらうがいくらだつていいんです、私昔から寶石は大好きですもの。

久子。 では私と美代子さんと同じ型のを頂きませう。

久子。帶の間から財布をとり出す。

久子。 私、今日餘分にお金を持つてますの何でしたら、たてかへて置きませうか。

美代子。 有りがたう。私もこゝにありますから、はらつて置きますわ。

美代子。本箱の引出しから三百圓出して、商人に渡す。

商人。いそいで請取書をかくと、あわててひろげた指輪をしまふ。

商人。 どうも有りがたうムいました。またよろしく御願ひいたします。（ペコ〳〵おじぎしながら退場）

久子。 今日は思ひがけなく貴女とおそろひの指輪が買へてうれしかつたわ。本田さん相變らず親切でせうねえ。

美代子。 えゝ、愛してくれますわ。

久子。 結構ね。でもいくら御理想の生活でも、その指をきたなくするのは惜しいわ。女中を御やとひなさいよ。

美代子。 でも私達二人つ切りの方がいいんですの。みじめな生活ですけれどまたその中に人しれぬ幸福もありますのよ。

久子。 さうでせうねえ、幸福つてものは思ひがけないところにあるものですからね。私のところは今度箱根に純洋風の別荘を建てましたの、お二人で是非いらして下さい

な。それから私の肖像畫をかいて頂きたいんですの、御禮はいくらでもしますからつて本田さんに頼んどいて下さいな。

美代子。云つときませう、兎に角ね。でも本田は氣むづかし屋で、お禮ではなか／＼動かないのよ。その代り氣がむけばこちらから進んでかきたがるんですが、氣がむかないとお金を山とつんでも駄目なの。

久子。ハヽ――いやな美代子さん、それは貴女御自身の事でせう。本田さんさつき途で一寸御願ひしたら、來月になれば暇になるからかいてやるつて、その代り御禮はうんと頂きますよつて仰つしやつたわ。

美代子。ぢや貴女には本田の心が動いたんでせうよ。（指輪をぬきとらうとする。

久子。あらいな美代子さん、はめるための指輪ぢやありませんか、はめていらつしやいよ。

美代子。さうねえ。

久子。貴女、隨分澤山にいい指輪を持つていらしたのね、あれどうなすつて。

美代子。あゝあれ、何故？

久子。私この頃貴女の二代目で寶石が好きになつたの。で參考のために貴女のいい指輪を見せて頂きたいのよ、ね見せて頂戴よ。



美代子。あ、あの、あれね。みんな賣つたの、私この頃とてもあきつぽくなつて。

久子。まあ惜しい事をなすつたのね。さうと知れば私ゆづつて頂くんでしたのに。道理で今日それをお買ひになつたのね。本田さんまだなの――お歸りにならないの。

美代子。さうねえおそくなるかも知れないわ。何か御用なの？



久子。別に用つてないの。さつきの肖像畫の事よく頼んで置いて頂戴ね。

美代子。えゝ、云つときませう。

久子。隨分長居してしまつて、また私の方へも來て下さいな。

美代子。しばらく久子の後姿を見送つてゐたが、久子の姿が見えなくなると、ペッタリ坐り、指輪をぢつとみつめて、しく／＼泣きはじめ、遂に袂に顔をうづめて泣く。

間

本田。おい！ 歸つたよ。（大きな包を持つて、ニコニコしてゐる）

美代子。御歸り遊ばせ、隨分おそいのね。（指輪を箱に入れ、それを机の下にかくす）

本田。これでもいそいで惡友から逃げて來たのさ。

本田。おや！ 君泣いてたのかい。

美代子。私?! 貴方がちとつも歸つていらつしやらないのでさみしくて――。

本田。うそ云つてらあ！ 誰か客があつたんだね。



美代子。そんな目をしないでお座りなさいよ。

美代子。三田さんところで何か面白い事でもあつて。

本田。うん三田はいつも呑氣な奴さ。晝の賣れた事を話したら、自分の懷中へ金が入つたように喜んで、ヤレホテルで晩餐をおごれの、帝劇へつれて行けのつて、一人でさわいでゐたぜ。何でも今日は生憎國から人が來るので出られないが、明日は是非おごらせに行くつて決めてた。

美代子。あらさう。三田さんはいつも愉快な方ね。一體に女より男の方がサッパリしてゐていいのね。ね貴方、さつきのお金ね、三百圓。あれ、あの私に下さいね。

本田。何を改まつて云つてるんだ。どうせ僕のものは君のものぢやないか。

美代子。ですから、あれ私の自由に使つてもいいでせう。

本田。いいとも。それよりこのうまい林檎を食べないか、銀座までまわつて千疋屋で一番いいのを買つたんだ。

（赤や黄色の香のよい林檎を机の上にならべる。

美代子。ね一寸、私あのお金みんなつかつてしまつたのよ。

本田。ハハ――おどかすなよ、そんな事云つたつて誰が本當にするものか。

美代子。本當なの、怒つちやいやよ。（机の下から指輪を出して見せる）

美代子。これを買つたの。

本田。な、なに?! 一體どうしたつて云ふんだい。

美代子。あのさつき久子さんが寶石屋をつれて來て、指輪を買ふから見てくれつて仰つしやるの。それまではいいんですが、私の指を見ていかにもケイベツした調子で、やれきたないの、指輪は買へないだらうと云つた事を云はれたので私、前後の考へもなくくやしさに買つてしまつたの。そして本當に馬鹿な事をしてしまつたと泣いてるところに貴方が歸つていらしつたんだわ。

本田。おい！ 君は本氣で云つてるんか。僕が、やつと――やつと金の事を問題にせずに二三ヶ月は落ちついて制作が出來ると樂しんでゐると、君はぢき、僕の心をづた〳〵に傷けるんだね。――あ！ 君には少しも僕の心持ちが分つてはくれない。いつまでたつてもいい繪は出來ない。馬鹿！ 林檎なんか消えてしまへ！ （狂はしく頭髮をかきむしり林檎を壁や、美代子の顔にぶつける）

本田。おいだまつて泣いてたつて仕方がないぢやないか。それよりその指輪をすぐ買つた所へ行つてかへしておいで。

美代子。私、そんな事出來ませんわ。

本田。どうしても出來ないか。よし。出來なきやからしてやらう。（美代子を横に倒し美代子の首をしめる）

本田。これでもかへしに行かないか。うんこんな悪人は殺してやる！ こら！

美代子。く、くるしい、かかんにんして、かへしに行くから。

本田。本當か？

美代子。私、死んでもかへしになんか行くのはいやです。久子さんがどんなに笑ふでせう。そんな恥づかしい思ひをする位なら私死にます。たかが指輪一つ買つた位で殺すのなんのつてさわぐ意氣地なしの男、私大嫌ひ、お腹の子だつてそんな親は持ちたくないでせうから、私死にます。（やにはに崖に面したガラス戸をあけ飛びおりようとする。本田。びつくりしてだきとめる。

本田。あ！　あぶない！　君は一體な、なにをするんだ。あ、おどろいた！　指輪の一つ位なんだい。

美代子。だつて貴方は指輪をかへしに行かないつて、林檎をぶつつけたり、首をしめたり殺してしまふつて云つたりなすつたぢやないの。私、貴方に殺されたくないから自分で死なうとしたんですわ。

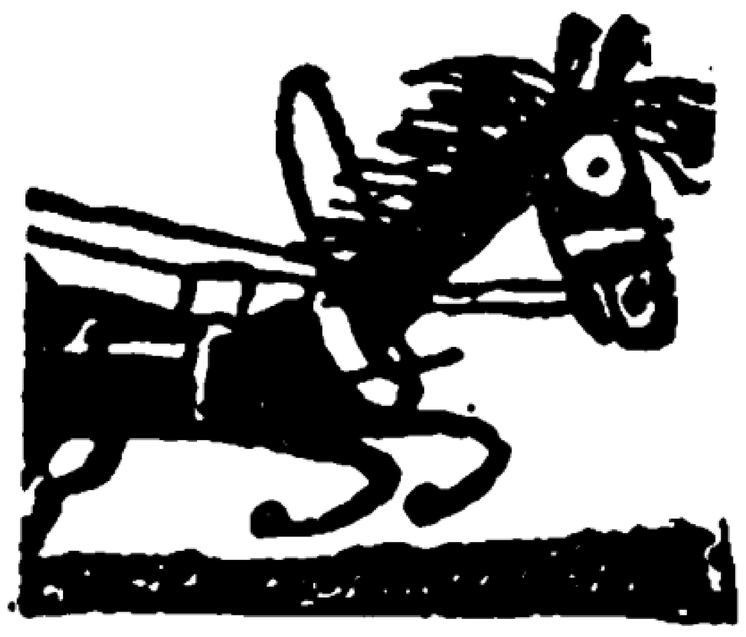
本田。僕が惡かつた、許しておくれ。指輪の一つ位なんでもないさ。君さつきお腹の子が何とか云つたが、姙娠してるのかい。

美代子。えゝ何だかさうらしいの。私この頃とても氣分が惡くて、一度お醫者に診てもらひますわ。

本田。本當に體を大事にしなくては駄目だぜ。

美代子。私、これからこの指輪をかへしに行つてきますわ。

本田。いいよ、はめておいでよ。君の持つてた澤山の指輪を皆賣つてしまつたんだもの一つ位買つたつてそれを怒つた僕は本當に惡かつたよ。



美代子。いゝえ、私が惡いんですわ、ぢき意地つ張りになるいけないくせを私は持つてるんですの。久子さんは氣合はない夫がある代りにお金持だし、私はお金はなくとも、久子さんとの愛に勝つた貴方と云ふすきな夫があるんですものね、本當に私馬鹿だつたわ。あの久子さんね。貴方に肖像畫をかいてほしいつて云つてらしてよ、おかきになる？



本田。誰があんな奴かいてやるものか、久子とは絶交だ家庭の平和を害する毒虫だからなあ。

美代子。まあうれしい！　完全に貴方は私のものね。

本田。馬鹿だね、そんな事あたり前ぢやないか、それより體を大事にするんだぜ。

美代子。えゝ。

美代子。罪もないのにひどい目にあつて可哀相においしさうねえ、食べませうか。

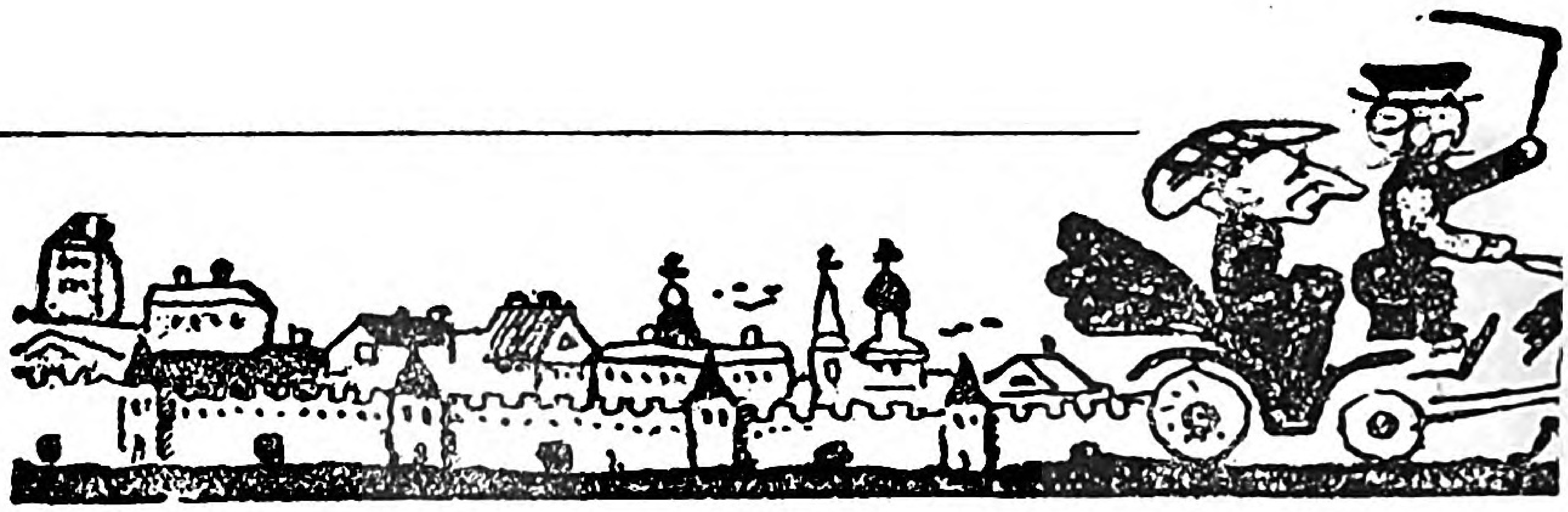
本田。食べよう。

美代子。やつぱりお金なんかない方が幸福ね。少しでもあるとぢき喧嘩なんかするんですもの、

本田。畫なんか賣れない方がいいなあハハハハ……

美代子。この指輪も早く質屋のお藏へ入つた方が仕合せだと云つた顔をしてゐてよ。

二人面白さうに笑ふ。



途上小話

笙 千 鳥

三年ぶりで支那から日本へ歸つて來た私だ、途行く電車の中などで見る人の顏がトゲトゲしくつて、めつたに笑ひ顏に、出つくわさない。自分の周圍の人たちまでイライラして居られるので、鈍感になつた私の神經までが尖りかけてゆきつゝあるのに、これはまたなんと嬉しい場面だつたらう。

ある日、梅も散つて櫻が笑ひかけやうとする大森八景坂の道を行くと、ある家の門の前に失業者らしい二十位の男がゴザの上に、まるで土用干のやうに古ぼけた、ぶ細工の玩具の犬を二三十並べて賣つて居る、その新米の商人は客を呼びかける文句も知らないやうでボツネンとしてゐる。

ところが、その附近のいたづら坊ちやん達、どれも小學校二三年ぐらゐなのが二三人その廻りに遊んでゐた。

私の通るのを見ると、そのうちの一人がその犬を持つて、

『けさから、一つも賣れませんでごぜえますだア、一つ買つて下せえまし、――化け猫でごぜえますだア』

ほんとうに、化け猫のやうなぶ細工な犬だ、私は思はず吹き出した。

『アハ………』

賣手の男と私と顏を見合せて

『ワツハ………』



都市浄化とは何ぞ！

——社會時評——

永島暢子

温情主義と高配との手の冷たさよ

温情主義と高配とを以て聞こえた、鐘ヶ淵紡績會社は、今回突然大減俸を行つた事は、非常な波動を各方面に與へた。六千萬圓の資本と、三千四百萬圓以上の積立金を有し、無配當不景氣など、資本家共が盛んに泣き言を並べたてゝゐるこの最中に、相變らず三割五分の配當を行ひ、武藤前社長が退職の時には、三百萬圓の慰勞金を出すなど、その大資本の威力を誇つた鐘紡がである。

鐘紡では、戰爭當時、他工場でも行つたが如く、戰時手當の名の下に全従業員に本給の七割、事務員に六割を支給してゐたのだが、最近の物價下落のため（と彼等はいふ）にその手當の意義がなくなつたので全廢し、新に一律に、三割の手當を支給するといふのだ、名目は何であれ、七割の手當を三割で胡麻化相とするのである。

勞働者は戰時に比して生活が樂になつたか？　少しでも人間らしい生活が出來る樣になつたか？　物價指數は或は戰時より幾分下つたかもしれない。だが依然としてその生活が、饑餓線上を歩ませられてゐるのが、勞働者の今日の狀態ではないか。今手元に統計がないので、細かしい事は言ひ得ないのであるが、總聯合關西大會の報告によると、鐘紡紡績女工一日の賃銀が、深夜業廢止前は平均一圓で就業日數二十六日、深夜業廢止後から繰業短縮まで日收九十三錢二十八日の勞働で二十六圓、繰業實施後から現在まで日收九十三錢の二十六日で二十四圓（東京日日）であるのを見てもその勞働條件が、いかに苛酷の下にあるかはわかるではないか。これが手當四割減になると、日收七十錢二厘の二十六日で十八圓二十五錢になるといふのだ。一體十八圓そこ〱で生活が出來るものかどうか？　かくして女工の血の結晶を削減の結果の五百萬圓（總聯關西大會報告）の捻出は、或は配當に、或は業務擴張に廻され、ます〱資本家自身の懐をこやすに備へて行くのである。

だが問題は、「鐘紡王國の従業員に寢耳に水の大減俸」が行はれたから起るのではない。そしてまた、よしそれを取り消させたから止むのでもない。繰短當時、既に紡績聯合會邊りで、物價下落の今、まづ勞働者の賃銀を下げよとの聲があつた事であるし、印度の關税引上げの際には、もうはつきりと資本家の胸には、この實行が算用されてゐたのだ。この資本家の用意に對して、各勞働組合は、日常的にどんな對策を講じてゐたであらうか。

勞働者それ自身の闘爭は、ビラを撒くのが目的でもなければ、自

己滿足の爲でもなく、勿論世間に宣傳する爲のものでもない事はいふまでもない事だし、また、「模範工場が、不景氣のためとは言へ、賃下を斷行した爲に他の全體に及ぼし、由々しい突發事件が起らぬでもない」(安部・東朝)事を心配して未然に防ぐ爲でもない。勞働者の利益を獲得し、搾取に抗して行く過程に於て、搾取なき社會の建設をなす歷史的使命を果さんがためなのだ。だから問題が、表面化されない時に於ても、常に戰ひの準備がなされてゐねばならず、いざ起つ！　時には、既に滿を持してゐねばならない筈ではないか。敵に火蓋を切られてから、「鐘紡の手當廢止を看過すれば、日紡合同その他の大小紡績工場の口實となるので、飽まで戰ふ」(日紡勞働・東日)と今更らしく決議をしたり、「事實の調査をさせると共に、執行委員會を開いて反對運動を起して、積極的に働きかける考へ」(總同盟・東日)では、頭底鬪爭の効果を獲得するなど思ひもよらず、いくらつもりのみは戰ひ拔くつもりでも、ビラ撒きと演說會と陳情に終止し、遂には泣き寢入りと、今までのストライキと同樣のコースをふむ惧れがありはしないか。

この減俸の中心問題は、手當と溫情主義のバクロであり、手當の本給繰り入れ、即時賃銀値上げ、最低賃銀制の確立に集注さるべきであらう。この手當の存在は、資本主義的經營の最も惡らつで巧妙なる手段の一つである。本給と手當とを別々にしておく事は、事のない時には、勞働者を恩義にからみつゝ安心して働かせ、首切り、減俸の時には、よい口實の道具とするのだ。工場扶助規則・健康保險法・賞與それ等の算定は、すべて本給が標準ではないだ。だから勞働者は、得態の知れない手當をうくるより、判然として本給を要求すべきである。殊に溫情主義に對しては、この際充分の批判が加へらるべきであらう。昨年政府が官吏の減俸を提出した時、眞先きにフォード氣取りで反對したのは武藤山治であつた。又常に、福利施設の、勞資協調のと、さも勞働者の味方をなしつゝあるが如くに稱へつゝ來たのであるが、社を去つてしまへば「減俸するのは、經營を合理化する上に尤もな事で、いづれ營業狀態の惡い會社でもそれにならうだらう。また鐘紡が溫情主義をとつて來てゐるから、動搖はしない」など、勞働者の無力を見込んで、ノホホンと涼しい顏をしてゐる如き、これが溫情主義の好典型である。これにだまされてゐる間は、勞働者はとてもうだつがあがらう筈がない。

鐘紡には、全國三十六工場、從業員三萬五千人以上ありながら、一つの工場として、勞働組合の組織なく、何等鬪爭の經驗を持たなかつたが故に、この逆襲におどろかねばならなかつたのだ。三割五分の高配をつゞけるために、勞働者の心臟の血まで吸ひつくす所の溫情主義を打つづぶせ!!

紡織勞働者の起つのは今である！　だが溺るゝ者は、藁をもつかむとて、決して藁が命の綱ではない事を知らねばならない。私達は、勞働者の味方を裝ひつゝ、資本主義の大海にフラ〳〵と存在のみを語る藁の樣な、勞働組合の多い事に注意せよ、勞働者は、勞働者の團結の力のみが眞實の力である事は、いつでも眞理であるのだし、この大衆の强き力が、革命的指導力と結びついて決定的に鬪爭をなさゞる限り、百の組織と雖も屁程の効用もない事を知らねばならないであらう。

教員受難時代

教員は教育者なるが故に、聖者である如く仙人である如く、人間

的なるものゝケン外におかれ、感情・生活共に社會の動く波の起伏に漂ふ事は、以ての外とされてゐた。そして貧乏と重任に喘ぎ乍ら結局は人間なるが故に恩給を目ざして奴隷的地位に吸ひついてゐたのである。が時代の波は、教員のみを除外する事は出來なかつた。

　金權・濱口内閣の緊縮政策は、資本の整理を着々として實行し、農村は極度に疲弊し、埼玉縣下の或農村の如きは、生活の苦しさから、自殺した小作人が八名もあるといふが如き狀態を現出してゐる。かゝる事情から必然的に、市町村に於ては經費の七八割を占むる教育費の削減を思ひたち、この氣運が、非常な勢で全國に波及した。即ちそれは、教員の初任給の引き下げ、昇給增俸の延期、賞與減額乃至廢止、住宅費旅費手當の廢止、高給教員を排して、安教員による補充、學校學級の廢合、教師の就職難、物品の節約等で押し寄せて來たのである。新潟縣下揚山村小學校では、平均給十二圓の低下を斷行し、秋田縣で各町村では學級減と安教員で補充する事を、埼玉縣下五十ヶ町村は一致して俸給減額を決議し、いづれも縣當局に許可を迫つた。且全國に亘つて既に一萬人以上の大馘首が行はれ、謂なき大異動を行ふなど、正宗以上の切れ味を見せてゐる。東京府下板橋町會では、教員住宅費廢止の問題にからんで亂鬪まで行はれ、文部當局は、教育上由々しき問題として、俸給引き下げ等の事なき樣、訓令を出したとの事であるが、各市町村は背に腹はかへられぬ今日、それは一片の空辭と終りつゝあるし、また終るであらう。かくして今まで超人間的に、默りこくつて來た教員も、生死の境に追ひ詰られて、生存の要求を叫ばざるを得なくなつたのだ。

　實に教員の、池塘の夢はあまりに長すぎた。教員も亦一の人間であり、働く事によつてのみ生活し得る階級である事を忘れすぎた、それ故に彼等は、團結の威力を非道德視するのだ。勿論教員とても、今まで、何等、自身の利益獲得の運動をなさなかつたといふのではない。社會民衆黨の爲藤五郎氏等は、多少かゝる傾向の運動に奔走したとも聞いてゐるし、帝國教育會を中心に、全國的の結合がある事はある。だがそれは、いづれも上申程度であり、修養會程度でしかあり得なかつた。偶ゝ教員の地位を正當に見、階級鬪爭に參加すれば、すぐ馘首を以て報いられる。さうしていふ事は、次代の國民の教育を双肩に擔ふ如き、殆ど誇大妄想に等しい謬見に捕はれて、あくせくと支配階級の强化に盡し、身は、刻々と泥沼に陷入れられる足場を、自ら作りつゝあつたのだ。

　濱口内閣は、選擧の好題目を、義務教育費一千萬圓增額にとり、農村の疲弊につけ入つて、農民の人氣を買ふ事に成功した。しかし疲弊の極にある農村は、その國庫支出の金を教員の俸給に振り向けない事は、五年度の豫算を編むに當つて、教員給料引き下げに、一致的に出た事によつても明らかであらう。（尤も我々の要求する義務教育費國庫負擔は、もつと廣義のものであるが、政府のいふ所をとつて例とした）板橋町會に於て演ぜられた亂鬪は、教員及生徒父兄對役場吏員となつてゐるらしいが、教員は單に一自治體と爭ふ限り何等の効もない事を知らねばならぬ。一體教育費自治體負擔は、勞農階級の負擔を非常に重からしむるばかりでなく、教員は、各町村の經濟的事情に支配されて、統一的なる利益獲得、且は被搾取的地位の解放の鬪爭をなす上に少なからぬ困難さを持つ。即ち給料値下反對と共に、教員俸給の全額國庫負擔は、その鬪爭題目に加へらるべきであらう。教育の大任、社會秩序の維持、日本帝國の强化などゝくだらぬ幻影に捕はるゝ事勿れ！　現代の教育、道德は、果して

何を目標としてなされつゝあるか。ますくプロレタリアートをして塗炭の苦しみに追ひやり戦争準備を合理化し、一握りの資本家地主の繁榮を持續せしむる爲のものゝみではないか。またこの御用をなさしめ樣爲にこそ、コク使と冷笑とを以て報いながら、腹の足しにもならぬ美名を奉つておだてゝゐたのだ。こゝに至つて教員は、一度自分の地位を勞働者の地位にまで徹底せしむる必要がある。そしてそこから起ち上るのだ。徒なる誇大妄想を打ち切らざる限り、經濟的に社會的に、政治的に、團結の力によつて自身の、亦、自己の階級の爲に鬪ひ、次代の國民の教育を、支配階級の立場よりする事を拒絶しない限り、自分はあくまで、奴隷的地位に蠢々しつゝ、自ら縊らねばならないであらう事を宣言する。

糸價融資補償法の發動

禍を轉じて福となすこの秘法は、支配權力を握る資本家にとつては、いとも易い事であつた。貿易の不振、生糸の慘落、金融の逼迫等々に悲鳴をあげた製糸業者は、繰短、勞働條件の惡化、賃銀不拂等を堂々とやつてのけて之が切り拔け策とした。殊に全國の製糸業者の約八割までが、女工の血と汗とを啜りつぱなしで一文も支拂はなかつた白晝の强盜的行爲は、いたく支配權力の共鳴を買ひ、寧ろ幸と化して、こゝに糸價融資補償法の發動となつたのである。町田農相は、この法發動に際していふ。「生糸は我國輸出の大宗にして、これが原料たる繭の製産に從事する農家は二萬戸その製糸業の經營數は、器械座繰り等にて七萬三千の多きに達し……國民經濟上最重要なる地歩を占むるものである。……ひるがへつて糸價の趨勢を見るに、昨年九月より漸落の途を辿り、本年三月一日の如きは、實際に於て、一千百圓程度となり、十年來の慘落を示したり……由來本邦に於ける製糸業は、政府の指導の下に、出來得る限り生産費を低廉ならしめ（製糸の工程は比較的容易であり、生産費の約八割は原料、二割の中に建物機械雜費賃銀を含む、即ち生産費の低廉はたゞに、賃銀を少なくして虐使する事である）優良なる品質の商品を供給すべく努力し來たる所にして、將來もこの方向にますく進展すべきものたるは言を待たざる所なり。然してこの業をしてよく責務を遂行せしめ、國際取り引きの圓滿なる發達を期し、需要者の地位を合せて考慮し、政府が今回この擧に出でたるなり」

いふまでもなく、生糸は我國の輸出貿易の王位を占むるものであり且繭の製産に從事する農家七萬戸の大部分は副業であつて、實に血の滲む程の勞働の上に製産されたものである事は事實である。だがこれは糸價補償法の發動と何の關係があるといふか。

糸價融資補償法は一口に言へば、生糸の價格安定のためにすると言はれるが事實は、政府の國庫より金を支出して、前年度の製糸に對して一定の金融を保證するものであり、また、糸價下落のために、銀行より增保督促に苦しむ製糸業者を援け、特に擔保下落によつて、貸金回收の不能に困じてゐる銀行業者を救濟する爲のものである。だからまづこの限度を規定としてゐるのだ。

一　損失補償は、昭和五年六月十日までに融通したる資金につきなす事。二　補償金額は、生糸一荷ロ（千斤）につき千九百圓を限度とする事。三　擔保生糸一ロ（千斤につき）融通する資金は、一萬二千五百圓とする事、四　擔保たる生糸は、資金の融通をうくる者が、昭和四年産繭を以て製造したる、輸出向機械生糸にして、最優等價格以上、倉入目一千三百斤以上の品質量目を具ふるもの一荷

口たる事。以下略

即ち養蠶家は、既に持ち繭を賣つた後ではあるし、製糸業者でないから、擔保となすべき生糸を持つてはゐない。糸價を吊りあげてもらつたとて、何等の恩惠がないばかりか、新繭を賣り出す時に、叩き落されるばかりである。また製糸業者にしても、中小資本家は持ち糸を叩き賣つた後ではあるし、且小資本家は、主として國用製糸を製產してゐる關係上、やはりこの法律には緣なき衆生だ。たゞある所のものは、大資本家は、糸價吊上によつて利益を得、且政府庇護の下に、どし〳〵金融も出來る所から、その經營の擴張充實が出來るので、いよ〳〵大資本に壓迫されて、手も足も出なくなり、慘めな狀態に沒落するのみといふものである。問題の女工の賃銀不拂の後始末など思ひもよらないのだ。

故に、この補償法は、決定的に、大製糸業者並に金融資本家の爲のみのものであるといふ事がいよ〳〵はつきりとして來る。卽ち、生糸の製產額は、年約十億に達し、これの金融關係は、米につぐ所の重要性を持つてゐる。而して問屋と銀行とが、製糸家に放資した資金の回收は、例年なら既に七割方の回收を見てゐるのに、今年は三割位の回收しかなく、製糸家も、これまでの暴利は藏ひこんで、これでは立ち行かぬと、相談づくで泣きを入れた譯である。さうして金融資本家、蠶糸業者政府鼎座の上、自分達に都合よく、この法案を作りあげたのだ。それがどんなに都合がよいかといふ事は、現在銀行は、生糸擔保に對して千八十圓を融通してゐるので、若し、糸價を千二百五十圓度に安定せしめ樣とするならば、百七十圓を損失補償額とすればよいのに、百九十圓とし、不當にも二十圓の差額をつけてる事でもわかるであらう。しかもこの補償に用する金額は、一般の見積りによれば、一千五百五十三萬四千四百圓（生糸總產額より強制共同保管五萬梱を除き、既約定物、新規約定のものを除いた物を十四萬六千梱とし、全部補償をうくる物として）（東朝）の勞働者農民の血税が、資本家の懐にころげ込むのだ。衣食難の今日、無利子の金が、金庫に寢かしてある金融資本家にとつては、ボタ餅で頰を打たれた程の喜びであり、製糸業者にとつては、大威張りで、資金の心配なく搾取工程に專心出來るといふものではないか。

この補償法は、あまりに大資本家庇護の色が濃厚なので、內閣陣營內に於ても傍に氣をかねる者もあり、政友會などは大童になつて惡口を叩き、議會の問題にすると息卷いてゐる。息卷いたとて、政友會は決して、民衆の味方ではないのだ。といふのは、抑もこの補償法を議會に提出し、シヤニムニ通過せしめたのが、政友會だつたのだ。その時民政黨は天下の惡法として批難抗擊鋭かつたのが、今はあべこべに民政黨內閣はこれを得々と用ひ、政友會は批難してゐる。つまりは自分ひとりで、金融資本家の御用を、誰よりもよく勤めてゐるその忠犬振りを示し、いつまでも政權にありついてゐたいから、いたちごつこで惡口を言ひ合ふのである。

殊に政友會は、濱口內閣によつて、うま〳〵と金融資本家の御機嫌をとられたのに業を煮やし、糸價補償法の發動を以て、綿糸布、鐵等の價格安定の法をも構ぜねばなるまいと、おだてゝゐるが、無產階級は、かゝる補償法は斷然拒否すべきである。勞農大衆は、自分達の血税を、むざ〳〵と資本家の懐をこやす爲に、ビタ一文たりとも浪費されるを見すごしてはならないのだ。

都市淨化運動の意義

都市美を保護するといふ浄化運動は、復興祭を飾る示威運動であつた。歩く途すがらに捨てられた紙屑の一つ、啖のドス青さは、どんなに不愉快なものであるかしれない。美装をこらした婦人が、一分の隙もない洋服紳士が、ペーヴメントに吐き捨てる唾には、憎悪の眼をむけても尙足りない程の悪感を持つ。路はいつでも箒き淸められたが氣持ちよい事はいふまでもない。けれど日本の帝都──彼等は、錦紗の裳を曳き、キッドの踵で踏みしめる散歩道だけを帝都と思つてゐるらしいが──は、啖を去り、紙屑を取り捨てさへすれば浄化されるであらうか。絶對、斷じて。

一歩退つて本所、深川方面を歩いても見よ。眞實に取り捨てねばならぬものは、いくら眼を覆ふても、しつこく展開されるであらう。日向に居汚く佇む失業者の群れ、ひもじい子供の眼つき、生活にやつれた母親の姿、かゝる民衆の不幸を徹底的に取り除いてこそ、帝都も浄化されるのではないか。

人間は本能的に、最も必要なものに奮ひ起つ。勞働者農民は、その飢ゑから解放さるべく起つに對して、支配階級並にその手先きは、ブルジョアジーの强化のために起つ。勞働者農民の示威に對しては、メーデーはさておき送葬に於ても、ジャ〱張り出たがる支配權力は、進んでこの浄化運動の提唱に賛成したりした。そして紙屑拾ひました、奇麗になりましたで納まつてゐる。公德運動の先覺者だとか、愛市の發露とか、おだてにのつて、白襷甲斐々々しく、繰り出したそのあどけなさから考へても、掃除屋さんや車屋さんが、思はぬ手助けに喜こんだ喜びを、自分のものとして、自己滿足してるのを笑ふ氣にもなれない。

しかし、貧乏に虐げられたプロレタリアは、そんな單純ではない筈だ。支配階級は、何故に、この浄化運動に滿腔の賛意を表したかを、吟味して見る必要がある。散歩に不快を退かれる爲か、帝都の美を保護するためか、彼等はどうしてなか〱悧巧だ。最も根本的なるもの、階級鬪爭を幾分にても胡塗せしめ樣が爲である。公德の名に於て、愛市の名に於て。

所謂社會奉仕程、反動的なものはない。失業者おびたゞしき昨今にも拘らず、何かと言へば、無報收でとび出す靑年團がある。ストライキ破りも平氣なら、暴力夜警の御用も勤める。農村婦人の手傳ひの名にかくれて、小作爭議その他によつて表はれる、階級鬪爭をゴマ化さうと計畫する愛國婦人會、勞働者の世界的團結の日と知れるメーデーを花祭りの昔にかへして、さんざめく事にまでのり出して來た、キリスト敎女子靑年會、宗敎の阿片で、民衆を眠らさうとする救世軍、愛市の名で、いつでもドン・キホーテの役を買つて出る東京聯合婦人會、農村婦人を一國にして、いつまでも支配階級の奴隷としやう事に汲々してゐる日本女子靑年團等々、數へ上ればきりがないが、何れも反動的役割を演ずる以外の何物でもないのだ

外國の市街は奇麗なのに、日本のみは汚くては國家の態面にかゝはる、といふ事ではなし、眞に人間の幸福を來すために、この帝都に限らず、取り除かねばならぬもの、持ち來さねばならぬものが、少なからずある筈である。それ等を如何にして實現するか、即ち我々の一切の運動は、人間の本能的希望を實現し、階級なき社會の建設の意圖の下になさるべきであつて、このためにのみ民衆は起つべきである。公德の、社會奉仕の、そんな胡麻化しの美名に動かされて、解放を意義づけぬ行動をなす者は、その心根の如何に拘らず、反動的であるといふべきである。(三〇・三・六)

黎明期に於ける勞働婦人

我國勞働婦人運動の展望

織本貞代

一

飢えざらんと欲する限り、彼の生計を立てる爲に唯一のもとでである勞働力を、すべての生産手段を所有する所の資本家に賣りつけ、その代價として得た所の勞賃によつて辛うじて自らの生命を維持し得る所の『近代的工場勞働者』はその發生に於いて機械の發明と固く結びつけられてゐる。婦人勞働者の發生も此の事情から例外である事は出來ない。何人も近代機械生産の發生以前に今日見る所の婦人勞働者の姿を想像する事は出來ない。從つて謂ふ所の勞働婦人問題もなければ、もとより勞働婦人運動もなかつたのである。が逆に勞働婦人運動の勃興は勞働婦人問題ある所に始めて見得る現象であり、勞働婦人問題は婦人勞働の發生と同時に根を卸した問題である。從つて勞働婦人運動の發生を究むるに當つて、封建末期に於ける手工業の時代から近代機械生産への轉換時代にかけて婦人勞働の發生の狀態を稍詳細に見る事は決して無駄な事ではない。産業革命が比較的秩序正しく行はれ、從つて勞働者階級が最も典型的な發展過程を經て來たといはれる英國に於ける産業革命直前の勞働者狀態について、エンゲルスの『英國勞働階級の狀態』は次の樣に語つてゐる。

『機械使用以前には原料の紡、織共に勞働者の家屋內に行はれた。妻女は夫の織る撚糸を紡ぎ自ら之に加工せざる場合には彼等は之を賣却したのである。かゝる織工家族は多く都會附近の田舍に住居して居つた。そしてその賃銀で充分よく暮して行けた。』

『勞働者の住居は地方的に分散して居る爲に勞働者相互間の激甚なる競爭戰なるものは不可能であつた、そこでは織工は多くの場合幾分の貯蓄をして小さな土地を賃借して是を暇の時耕作することが出來た…彼は安住し、而して現今の英國勞働者よりは社會

上遙かに一段高い階梯に立つてゐたのである』

『此の階級の道德的並びに理智的性質は容易に分明する。彼等は都會――彼等の作つた撚糸や織布は都會から出張して來る代理人に一定の賃銀と交換に引渡されるから彼等は決して都會に行く樣な事はなかつた――から分離されてゐた、則ち彼等は都會の極く近くに住居して居つても機械の發明によつてその仕事を奪はれ、勞働を求めて都會に入り込む事を餘儀なくされる迄は遂ぞ一度も都會に這入つた事の無いといふ程都會から區劃されて居たので彼等の道德や理智は其少しの小作地を持つ爲に通常直接の關係を結んでゐた所の農民(ヨーマン)(小地主)のそれと同一程度の段階にあつた。』

かくて彼等は客觀的に見れば商人を通じてその當時まで支配者であつた封建領主の役に奉する單純な勞働の機械に過ぎなかつたが、彼等自身からすれば、ひたすら彼等自身のさゝやかな利益の爲に生活し、彼等の織機の爲に、彼等の小さな小作地の爲に生きてゐる所の全くのヨーマンであつたのである。

英國勞働者の從來の狀態に急激なる變化を與へた最初の發明は一七六四年北部ランカシア地方スタンドヒルの一織工に依つて發明された彼の多軸紡績機(ジェニー)であるとエンゲルスは言つてゐる、機械は如何にして近代的勞働者を産出するに至つたか？再びエンゲルスに歸るならば『此の機械は普通の機紡車と異り一ッの紡錘に代ふるに紡錘を十六乃至十八有し、それが僅かに一人の勞働者によつて全部動かされてゐた、是に依り從來に比して著しく多量の撚糸を生産する事が可能になつた。從前一人の織工が三人の紡績女工を使ふ時分には糸が不足したものであつた。その爲織工は糸の出來上るのを待つて居ねばならなかつた。然るに今やそこに就業してゐる勞働者に依つて織られ得る以上の絲が存在する事となつた。さなきだに増大し來つた織物の需要は新機械の應用で絲の製産費が低減され、從つて製品の價格が低廉になつた爲一層旺盛になつた、益々多數の織工が必要になり、從つて織賃は昂騰した。さて今や織工は織機仕事をする方が儲高が多くなつて來たので漸次に野良仕事を廢めて全然織仕事に身を委ねた……かくして次第々々に彼の農業を副業に營んでゐる織工階級は全く消滅し去り、單純なる織工の新興階級に變じた――此等織工は單に勞働賃銀によつてのみ生活し、全然何等の財産をも有せずかくてプロレタリアになつた』

二

日本に於いても産業革命前に於ける勞働者事狀は英國に於ける夫れと略々同樣であつた。鎖國三百年の暗黒政治が日本への機械生産の移入を極力妨げはしたが、德川末期は流石に商業資本主義の發展時代であつたのである。卽ち商人の一團があつて、農民が農業勞働の餘暇に生産したる生産品を買ひ集め若しくは所要の資本を貸與して農民に生産せしめたる生産品を蒐め、是れを一定利潤を獲て市場に賣出してゐた。これは手工業者が團結して獨占的に工業勞働を營む經營組織上の原則を破壞するものであり、明かに舊來の勞働方法の上に起れる最初の資本主義的革命であつた。この方法は早期資本主義時代には何れの國にも發達したところであり、我國に於いても、德川末期に於て織物業について家內工業制度が發達した、例へば『越後より産する越後縮は同地方の特産物であつたが、それは同地方の農民家族が各期の農閑期を利用して生産したものであつた。毎年四月の上旬より堀之內、十日市、

小千谷、鹽澤の四個所に市が開かれ、江戸、大阪、京都より來る商人が是を買ひ集める』（佐野學氏著、日本經濟史一九五頁）『木綿については甚だ鮮明に家內工業の特色が表れてゐる。木綿は農民が自足經濟の要求よりして栽培に從事したのであるが、需要の多いことや、田租を搾取せられる結果として副業を欲求するに至つたこと等より、其生產が一層盛となつたのである。「廣益國產考」によれば大阪に中國九州四國の木綿を引受くる問屋が數軒ありこれを大阪中の仕入屋に渡し、更に之れを精製して各地方に賣り捌く組織が記されてある』『また奈良の晒は同地方の名產であつたがこれについては頗る整頓した家內工業的組織があつた。卽ち問屋・織屋・他所行商人・晒屋・揉屋・靑繭問屋等の系列をなし、生產者と販賣者との間に整然たる秩序が存してゐた（上掲書一九六頁）此時代に於て近世的意義を有する工業勞働者の存しなかつた事は言ふまでもないが資本家的經營の始まつた家內工業に於いては、今日の工業勞働者の先驅とも見做すべきものが發生してゐた。

上州地方には機織下女（農家の女子が一時的に雇傭せられたるもの）西陣には織子なるものがあつた。これ等の事情は如何に英國に於ける前記の事情と類似してゐることであらう。

三

機械生產により最初の紡績糸が我國に出現したのは明治五年である。が此の最初の紡績糸の出現までに如何なる經過を經て來たかを見る事は必ずしも興味のない事ではない。綿業硏究會々報第一號（大正十年）によりて鹿島萬兵衞氏の『紡績創業時代の回顧』には次の樣に述べられてある。

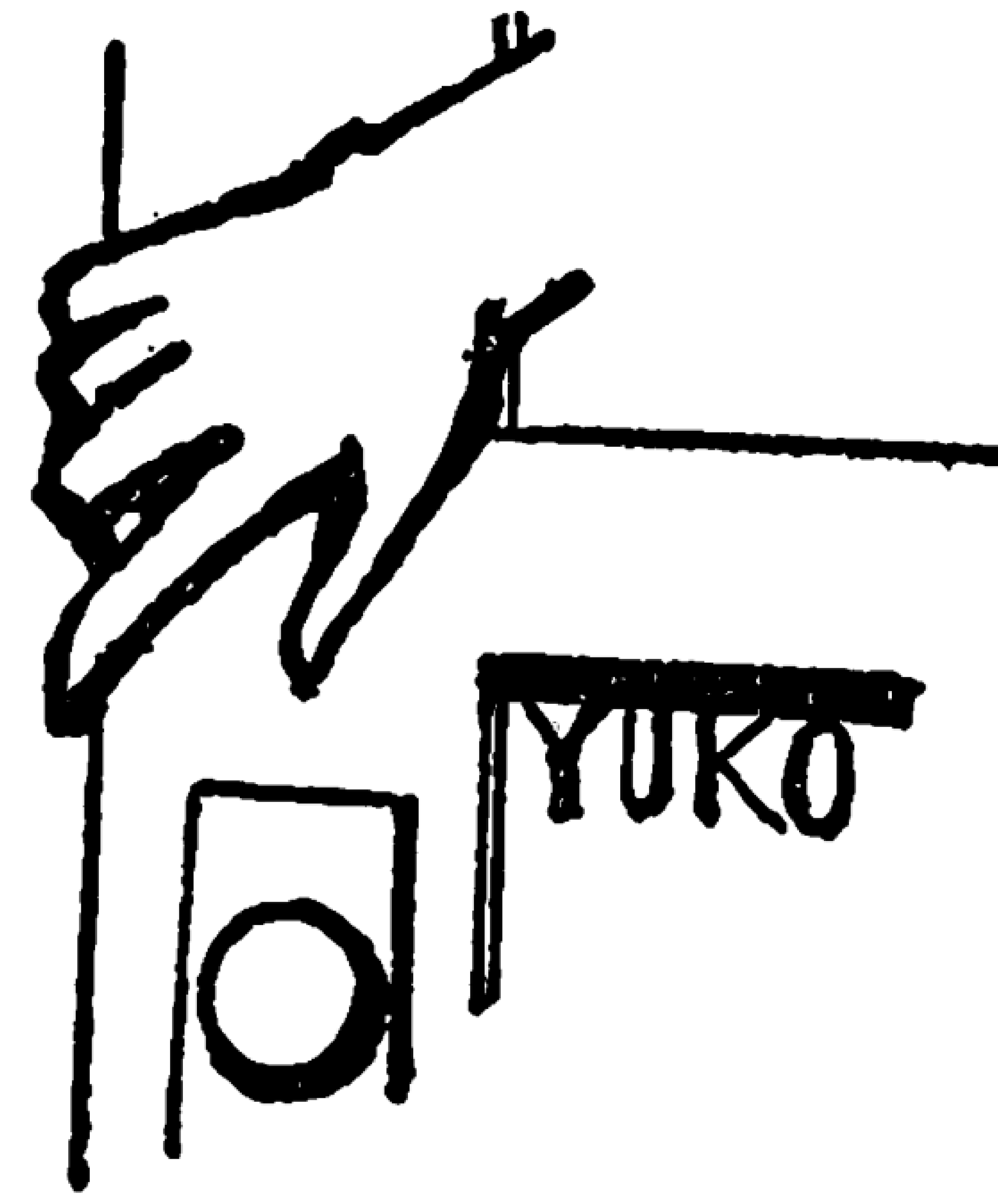
『我國紡績の元祖と申しますと西では薩摩の大守島津公で御座います……丁度薩摩の豪商濱崎嘉平次君が琉球から參つて綿糸のサンプルを持つて島津大守に御覽に入れました。是が始まりで御座います、是は多分文久年代の末か或ひは元治の年であつたらうと考へて居ります。私の父どもが集まりまして目論見ましたのは丁度元治元年で御座います、それから薩摩の大守が濱崎嘉平次君が獻上した紡績の糸を御覽になつて『將來我國の膏血を絞るものは是である』と仰せられた、といふ事は諸君も御記憶、御承知でありませう』『最初島津公の御着手なされたのは僅か六千錘と存じて居ります。二千錘がリング、四千錘がミュール、この機械をプラントフレーザー會社へ注文をして取寄せました。其の時に建築技師が二人紡績技師が三人外國から參りました。僅か六千錘の機械を仕立てるのに五人の技師を招いてやると云ふ樣な有樣でありました』『吾々等の父等同志の者は八人で其の當時目論見ました。所が元治元年の夏であつたと記憶して居りますが八人の者が……お互に唯金を出すといふ樣な漠たる事で橫濱のアメリカ一番館に極く小さな機械といふので注文をいたしました。……それから慶應四年の春、卽ち明治元年に上野の戰爭の年に機械が始めて橫濱に到着しました。其の時は八人の同志の者はもう過半は死んで仕舞つて、其機械を引取ることが出來ない、どうもかうも仕方がなくて非常に難儀をして漸く少し納まりがついたものですから、後に殘つた同志の者が集まつて先づ土地を選定する事に着手しました』『元來漠たる注文の仕方で只極く小さい機械と許りで注文しましたものですから、今から見ますと余るで玩具にも少し大きい位の漸く百四十四錘のリングが四つで御座います、つまりそれで五百七十六錘の機械なのです、それが到着した……何しろ水車を掛

けるには二十二點の落差がなければ出來ないので、これをするのに困つてあつち、こつちいゝ場所を探しました、そして漸く瀧の川の陸軍の反射爐があつたのを見付けて、あそこの落差は二十二點で適當してゐるから其處の拂下げを願つて色々と心配して見ました……さて機械の据附けになりますと、家を拵らへるにも一向何に依つてやつたものか經驗がないので……それからアメリカ人を一人機械師といふので一ケ月三百弗の賃金で雇入れました。又通譯を致すものは五十圓の月俸で御座いました。唯今では五十圓や三百弗の金は何でもないが其の頃の俸給から割出して參りますと非常に高いものになるのです。それで兎に角やり始めました所が其者等は鍛冶やか何かの下らぬ奴で紡績の機械の据附けが出來ない……其の當時の事は唯今から申しますると、全で虚僞の様であります、例へば螺旋鋲一本買ひに行くにも横濱まで買ひに行かなければならぬ』『漸くにして明治五年の春になつて紡績らしい撚の强い糸が出來ました。今でも御承知の方が御座いますか知れませぬが玉子糸といふ恐ろしく撚の强い糸が出來ました』が紡績事業の勃興期は明治二十年前後である『廿年前後には第二回の事業熱時代が現れた。その中心をなせしものは鐵道會社の計畫であつて紡績その他の工業會社之に次ぐ』(本庄榮次郎氏日本經濟史概說二六五頁)此の頃は又『其他地方にて養蠶、製糸、織物、水陸運輸等の小會社も起り士族の之に關與せしものも少くなかつた。(上揭書二六四頁)

此の邊の事情を再び鹿島萬兵衞氏の記述について見よう。『明治廿年一月二日に私は(北海道)から歸宅しました。此の頃誠に大阪地方に紡績會社の目論見が續々起つて居りました……遂に廿年四月四日、小舟町新道の田口待合の樓上に於いて五十萬圓の(東京紡績)の創立規定に記名捺印しました……舊派綿屋が東紡を設立すると新派連(玆に新派舊派といふのは、古くより東京に九軒の綿問屋があり此の問屋仲間が支那綿の輸入問題から二派に分れ三井、大丸、白木屋、京龜、奥田等は改革派卽ち新派であつた……織本)が聞き込み、何が五十萬圓ならばこちらは百萬圓三萬錘の紡績を起さんと……隅田村鐘ケ淵に地所を撰定して着々工事を進め程なく經營を開始せられたのであります』

『それから私が大阪の三軒やに大阪紡績會社といふものを起したのは多分十三年だと記憶します……それから開業したのが十五年で御座いましたか、十六年であつたか……大凡此十五六年の頃に日本に前なかつた所の會社的の紡績事業が成立つたものと御覧下すつて宜しう御座います』

『本邦に於いて洋式の機械を以つて廣巾の綿布を製織せるは明治廿一年七月小名木川綿布株式會社が、東京府下小名木川に二百臺の織機を据付けて運轉を開始したるを嚆矢とする。併しその以前に大阪織布會社が明治十九年機臺二百五十臺の設計を以つて大阪に起し、廿三年百二十臺を同市西區岩崎町に据付けて運轉を開始した』『水路の便利の處、男女工の澤山ある所差向き、本所、深川の地ならんと評議一決しまして、私は堀田區長に御目にかゝり……差向き、二千人位の職工を要します、往々は三四千人を使用致しますから御區內の繁盛を增します故何分御周旋を願うと賴みました』かくて現今紡績產業に於いて覇權を握る所の鐘紡(二十年五月)を始めとして東洋紡(十三年)尼崎紡(二十二年)攝津紡(二十二年)等何れも此の時代に墓石を据えたのであつた。(つゞく)



未開社會に於ける性と抑壓

B・マリノウスキー著
小林すみ子譯

――人氣を顚倒するの故に本能を無視する事久しきに渡つた後、現代の心理學は今や本能的諸活動の目錄を作つて記載する事に着手し始めた。之は疑いも無く進歩である。然乍ら直接本能を參照して個人及び社會生活の複雜した諸相を說明し樣とするならば、其の說明は曖昧となりこじつけになつて來る。社會內の心理學的要素に就いて議論する前に、本來の活動力を確乎たる有意義な性質に敎育して來た社會狀態なるものを我等は先づ知る必要がある。之が社會心理學の眞意である。土人の性癖はからくりと意匠で紛飾された習慣の代りになまなましい材料を提供して吳れる。

人間は理性の動物でもなければ本能のそれでもなく實に習慣の動物である。精神分析家の性に對する處置はいゝ敎訓だ。何故ならば、社會的結果を心理的な原因に歸して了ふ、人間的單純化と變形との二樣の結果をあからさまに曝露してゐるからである。概して異性である彼等は、恰もプラトン式な宇宙の實體でも扱つてゐる樣な態度で女性の心理を發表する。又、現代ヨーロッパ文明の特徵である種々な現象を、固定した人間生得の衝動の、缺かさぬ努力の結果であるかの如く取扱つてゐる。――

ジョン・デウキー「人間の性質及行爲」より

第一章――錯綜（コンプレックス）の形成

二、父權制度及び母權制度に於ける家族

此の第一の問題――ある社會に於ける 家庭の 組織がどんな 風に「家庭錯綜（ファミリーコンプレックス）」に影響し變形さすか――を調査する最良の方法は、自ら實際事に當り典型的な家庭生活の中に錯綜の由來を尋ねそれを他の文明諸國に於ける場合と比較して見る事である。私は此處で有らゆ

る形の家庭を檢査し樣とは言はない、只私的な觀察に依つて得た二つのタイプだけを細部に亘り比較してみよう。即ち一つは現代文明社會に於ける父系家族、もう一つは北西メラネシアのある島嶼社會に見られる母系家族である。此の二つの場合は社會學的觀察に甚く最も根本的に異つたタイプを表はしてゐるのであつて我々の目的には誠に相應はしいものであらう。さて、これから我々の文化と取組む北東ニユーギニアのトロブリアンド島の住民（又は北西メラネシアの）を御紹介する爲に數言申述べなければならない。

此の土人は母系である。即ち血屬關係は母親を通じてのみ認められ地位財產は女性系のみに讓渡される、と云ふ法律の下に生活してゐるのである。之は斯う云ふ事を意味してゐる。男兒や女兒は母方の家族氏族(クラン)及び民族に屬してゐて、男兒は母親の兄の權威や社會的地位を繼承する。そして子供が財產を讓られるのは父親からではなくして、母親の兄又は姉からなのである。トロブリアンドの男女は皆小兒の頃、性的遊戲時代を經驗し、年頃になると何事も大目に見逃され、次に戀人達は「未婚者の家」と呼ぶ公共の建物の中で、他の同じ樣な二三組と共に同棲生活を始める。そして最後が結婚である。多くの妻を蓄へてゐる酋長を除いては一般に結婚は一夫一婦制で、性的獨占の必要上永久的な結合であり、公けな經濟的存在であり又獨立した家庭である。一寸見た所では淺薄な觀察者は吾々社會の結婚其の儘だと思ふかも知れない、然し實際は大した相違なのである。先づ第一に、夫は子供の父と認められてゐない、此の「父」といふ言葉には我々が意味する樣な意義は含まれてゐない。肉體的な父の役目を知らない土人の考へに從ふと夫は子供の誕生には生理的に何の關係も無い事になるのである。子供は、母親の親籍でもう亡くなつた女の靈の働きに依り、小さな精靈の形で母親の胎內に入れられる、と信じられてゐる。そして子供が生れると夫は彼等を腕に抱取り保護し大事に育てなければならない、けれども彼は生殖には何等與る所が無かつたといふので子供は彼のものではないのである

父は斯樣に愛すべき親切な友達であり、個人としては子供と密接な關係を持つてゐるけれど、社會的には何等家系上の地位を認められぬ一個の他人に過ぎない。「骨肉」といふ同じ物質を分かち合ふ眞のつながりは母を通じてのみ存在し、子供に及ぼす權力は母親の兄が握つてゐるのである。さて、此の人間は、兄弟と姉妹間の有らゆる親しい關係を否定する嚴格な禁忌(タブー)に依り、前に擧げた母親とは親しくする事は出來ない、從つて彼女の家族とも同樣である。彼女は、酋長の前に出た平土民の樣に彼の權威の前に跪くが優しい關係は何等存しない。然し乍ら彼女の子供達は彼の跡取りなので彼が直接支配に當る。

彼の財產は死後子供達の所有となるのであり尙在世中には特に彼が持つてゐる藝能——舞踊、歌、神話、魔術、技術等を彼等に讓渡さなければならない。又彼は妹の家庭に食物を供給せねばならないので彼の菜園の收穫は大部分其の目的に消費される。それ故子供達にとつて父は只面倒を見て呉れる優しい仲間に過ぎず、伯父が訓練や權威の源であり家政權の表象なのである。

妻は決して虐待的な待遇を受けない。彼女は自分の財產と內外共に相當の勢力範圍を所有してゐる。夫婦喧嘩で母親が父親に虐められてゐる光景などは恐らく子供達の知らないものに違ひない。一方父は僅かに一部分だけ一家の稼手たる資格を有し、後は主に彼自らの姉妹の爲に働かねばならない。其の內に男兒は、生長した時は今

度は自分が自らの姉妹の爲に働かねならばないといふ事を知る様になる。

結婚は Patrilocal（父族結婚）である。即ち女は夫の家に行き彼の屬する社會に住む。一般に他の社會から來る事が多い。それ故子供等は法律上外來人としてその社會に生長する事になる。土地權も一村の榮譽を分つ正當な誇りすら持つてゐない。然るに彼等の眞の家庭、郷土愛の傳統的中心、彼等の財産、祖先の誇りは、他所にあるのである。此の二元的影響の結果奇妙な結合と混亂が持上る。

極く幼少時より同腹の男兒と女兒は嚴格な禁忌(タブー)に基いて家庭內で分けられる。即ちそれは相互間に親しい關係を持たせず、就中彼等の間で性的興味を絶對に起さしてはならないといふ禁止である。從つて兄は姉妹の上に實權を振つてゐるとは云へ、彼女の結婚問題に干渉するだけはタブーが禁じてゐる。諾否を與へる特權は兩親のものであり父は——彼女の母の夫——娘の結婚問題の場合だけ一番權力ある人間となる。

我々が比較し樣としてゐる二つの家族型の非常な相違は段々はつきりして來た。文明社會の家族タイプには、社會的背景を持つ權力ある夫と父が頑張つてゐる。(註)そして彼をして家族の扶養者たらしめ、少くとも名義上だけでも活殺の自由を手中に握つて意の儘に振舞はせる樣な經濟組織を我々は持つてゐる。一方トロブリアンド人間には獨立した母親が居り、子供の生産には何等參與する所無く稼ぎ手でも無く子供に財産を讓る事も出來ず彼等に振まふべく社會的に確立した權力を持たない、彼女の夫がゐる。それから他方には非常に勢力ある彼女の親戚殊に家族の扶養者であり且死後息子達に財産を殘してやる權威ある兄が居る。斯樣に社會生活の型と家庭組織が我々文明社會のそれとは全然異つた工合に配置されてゐるのである。

(註)「我々文明社會」とは此處では歐洲及び米國の一般社會を指してゐる事を一言斷つておく。私は主として大陸の中流階級の家族タイプに意を用ひてゐる、何となれば精神分析の結論はこうしたタイプを材料として築かれたのであるから。

前に豫言する譯では無いが西部歐洲でも北米でも大都市のブルジョア階級の間には、現在ローマ法や大陸的風習の母權狀態より寧ろメラネシアの合法的なそれに近づいて行く傾向が見えてゐる。

若し此の本の說が正しいとしたら、性の問題に於ける現代式なある發達(Petting Party etc 秘密に享樂する集合の類か？譯者)は父系制度の衰亡と同じく、家庭內の情操を非常に變形さす事であらう。

母系社會の家族生活を調査する事こそ興味有るのに、我々が知り過ぎる程知り最近の精神分析的書物に飽きる程引張り出されてゐる自分達の社會に就いてくだ〳〵しく述べる事は無益に見えるかも知れない。衆知の事として簡單に片附けて置いてよかつたかも知れない。然し先づ第一に比較條件をはつきりと目前に並べる事は比較的本質的な處置なのである。次に、此處に擧げられた母系社會の材料は人類學的實地研究(フィールドウオーク)と云ふ特殊な方法に依り蒐集されたのであるから、見地も蒐集方法も異るヨーロッパの材料もそれと同じ型に鑄る必要が有る。前に述べた如くどの精神分析報告にも、社會環境に對する直接な矛盾無き關係を見出さない。況して、不鮮明な錯綜(コンプレクス)と其の原因が我々社會の階級に依り如何に變化するかといふ議論等は以ての外である。而も乳兒期の葛藤(コンフリクト)は、ブルジョアの贅澤な育兒室と

百姓の小屋と貧しい職工の棟割長屋とでは明らかに同じでない。さて一寸精神分析の學說の眞實性を認明する爲には、下層社會を考へて見る必要があらう。其處には飾氣無い言語が有る。兩親と一つ室に住み一つ寢床を分つ子供が居る。シーンを複雜化さす樣な「親の代用物」（トロブリアンドの伯父）も無く、殘忍な衝突を變化させる樣な行儀作法も無く、嫉妬と日常の些細な張合ひとは固く根を下した敵意となつて折々火花を散らす。（註一）

（註）西部歐洲の農夫の生活、風習、及び心理狀態に就いて得た知識に基き、親が子に對する又子の親に對する心的態度は、無教育な階級と有識階級とでは大きな相違が有る事を斷言する。

我々が核心の錯綜（コンプレクス）と其の社會的生物學的な現實の土臺とを研究し、更に民俗學的研究迄進んで來る時は、農夫其の他の無教育階級を夢おろそかにしてはならないといふ事に氣付くであらう。何故ならば、一般の傳統といふものは現代のウキーンやロンドンニューヨーク邊りの食過ぎ、頭を散々使つて意匠を凝らし過ぎた人間共の生活狀態より、中央及び西部ヨーロッパの農夫や貧しい勞働者のそれに近い狀態から起つたのである。

さて、比較をはつきりと對立させる爲に、子供の歷史を各時代に分け、二つの社會を照し會はせ乍ら各々の時代に就いて述べて行く事にし樣。家庭生活の歷史的階級を判然と區別さす事は核心の錯綜（コンプレクス）を研究する上に肝要なのである。何故ならば精神分析學は――實際此處で精神分析學の功績の一つが見られる――人間の心的層の形成を明るみに持出しそれが兒童心理發達の階級に略相當する事を示したのであつた。性慾の明瞭に現はれる時代、危機、それに伴ふ抑壓（レプレッション）と健忘（アムネシア）――之に依り記憶の或る物は意識下に追遣られる――之等は總べて子供の生活に、區分出來得る明瞭な各時代の有る事を暗に物語つてゐるものである。

今の所は生物學及び社會學的標準に依り範圍を定めた四つの時代に區分する事で十分であらう。

（一）乳兒期、此の時代には赤ん坊は母親の乳房から榮養分を攝取し、安全に保護されてゐる。未だ獨りで勝手に動き廻る事や希望、思考等を分明に言語に表はす事は出來ない。此の時代を誕生から離乳迄の生育區域とし樣。未開土人間では之が二三才頃迄續くが文明社會ではもつと短く普通約一年で終る。子供は此の時期には生理的に家族と結付けられてゐる。

（二）幼兒期　未だ母親になついてゐて、獨立した生活をする事は出來ないが動き廻つたり喋つたり母の傍で自由に遊ぶ事は出來る樣になる。之が三四才から六才位迄の間であつて、家族の羈絆から次第に脫し始める時期である。子供は家族から離れて獨りで任意に振舞ふ事を覺える。

（三）小兒期　相對的に獨立し他の子供達とあちこち遊び歩く樣になる。又此の時代には、人類各分派及び社會の各階級の子供達が、社會の一員となる樣にどうかこうか手ほどきされ始める。或る土人間では入舍の、初步の儀式が始まる。我々の方では農夫や勞働者（主として中央ヨーロッパ）の子供達は未來の經濟生活に見習ひとして入れられる。西部ヨーロッパやアメリカの子供達は學業を始める。之は家庭的影響より分離の第二期であつて思春期迄續く。

（四）青年期　生理的思春期より社會的成年期迄を云ふ。多くの土人社會では此の時代は成年式の主なる儀禮が圍繞されてゐる、又他の部族では、特に青年男女の爲に種々な部族の法律や命令が下され

る。現代の文明社會に於ては第二番目の高等な教育を受ける時であり、最後の見習ひを終へる時である。此の時代には家庭の雰圍氣から完全に解放されて了ふ。未開人及び我々の下層社會では結婚と新家族の創立とで此の時期を終へるのが普通である。（此の項終り）

譯者附言

著者ブロニスロー・マリノウスキーは、現在ロンドン大學の人類學の教授で、この書は人間の本能と、文化が、社會的響影の下にいかに發達して行くかを研究したものです、フロイドは、すべての文化の根本はエヂプスコンプレックス（肉親の母を父より奪はうとするために起る父子間の錯綜）にあると說いてゐますが、彼はそれに反對して、社會狀態の異なるにしたがつて、性生活も異り、從つてエヂプスコンプレックスも起るか否かが定らないといつてゐます。この研究のために彼は、自らメラネシアの諸島に住み、土人の言語風習を知りその性生活に及ぼす社會的影響について研究しました。

もと〳〵この著書は四章二百五十頁からの大部のものですが、今後私はそのうちの特に興味ある部分、第一章錯綜の形成のうちの幾項目かと、第二章傳統の鎖とを譯すつもりです。可なり難解な大きな仕事ですが、私は今眞劍に歡びを持つてこの仕事に打ち込んでゐます。

最後に不必要かも知れませんが、フロイドの錯綜について極簡單な說明をつけ加へておきます（小林）

「愛情の競爭は性的に深く色づけられてゐると私は考へる。息子は早くも小さい子供として母親に特別に發達した愛情を懷いてくる。母をわがものと觀じ、父を自分の獨占を阻まうとする競爭者と觀じ始める。同樣に小さい娘は母を恰も自分と父の愛情關係を絕たうとする妨害者、自ら獨裁し樣とする自分の地位への侵入者の樣に考へる。この感情を私達はエヂプス錯綜（コンプレクス）と名付ける。」

「エヂプス錯綜は前の子供が生れてくる時は家庭錯綜（フアミリーコンプレクス）に迄發展してくる。」

「エヂプス錯綜は文化の本源であり宗教、法律、道德の初因である。」

——フロイド——

街路樹

柳原燁子

街路樹は初夏のきてみどりなり往きあふほどの人みな戀し

あひし目をつとそらしけり故しらず少女のごとく胸おどらして

飲食店たま〳〵くれば客よりも給仕女の數の多きこと

あゝ思想世相善導わが子らは檢束ごつこのまねをするぞや

往きもどりタクシーもよばず歩きたりけんやくしたる錢かぞへ見む

宅に亡命客印度人あり香織は長男の名

印度人の膝に抱かれて獨立のガンヂーの話きき居る香織

獨立の旗を造りてとせがむなり屬國の民のあはれなるかも

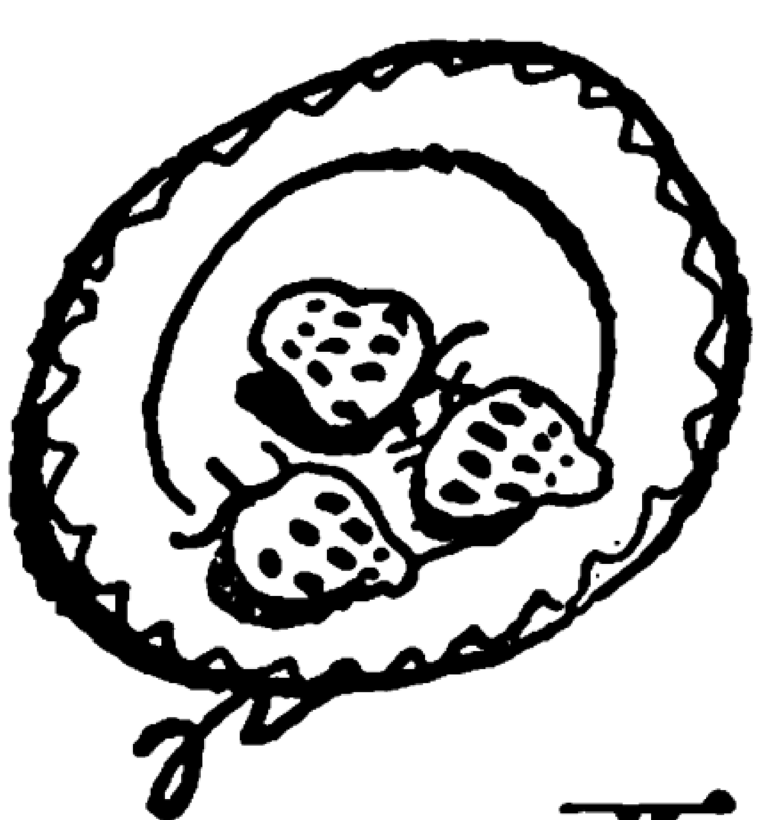
花もすぎぬ月もちいさくなりにけり思出ははるかふと添ひ寐せむ

あくせくとめつたにものもいはぬ仲それでまんぞくしてゐるわたし

老いてのち寐ものがたりもすべきぞとかくてふたりは房室に寐ず

かちぐり、よろこんぶ

萬年橋のたもと築地の川を前に古風なスパニッシュの様式で建つた東京劇場の初開場の三月二十九日、社長さんの招待券の中に入りきらない大きな體をちゞめながら、そこに流れてゐる空氣と色にそぐわない洋服の娘三人、のこのこと威張つて、玄關にずらりと並んでる美しい娘さんたちから紅白のマークを胸につけて貰ふ。六時から開場、七時までは劇場中をみせて、七時から音羽屋一門の壽式三番叟、をみせる、といふプログラムに、六時半についた劇場はもう人で一ぱいだ。廊下も、座席もどこもかも、人人人、やつと二階のすみつこの方にとびとびに見付けた席に、「こゝは所有主があるんですよ」とばかり荷物を置いて、模擬店めがけてとび出す。模擬店にはおすし、コーヒー、おかし、サンドウイッチ、おさけ、おでん。みんなはそれぢやはぢつこからとおすしのお店にとびこむ。せまい食堂に一ぱいの人、おすしの立喰ひをしながら、「こんなざわ〳〵したとこで飲むお酒おいしいかしら…男の人達はせか〳〵と德利とちよくを前においてのんでゐる。おなかのどの邊に入つたんだかわからないおすしをすまして「さあサンドウイッチ」ところがジリリリ、七時のベルがなつたのでとびこんだサンドウイッチやさんには、「御合憎ですが、洋菓子ぢや如何がでせう」とやられてしまつた。御菓子ぢやあとばかりとび出して、又横



西洋の唐茄子

―日本橋―

時雨

青葉の影を「柳の虫」の呼び聲が、細く長く、いきな節に流れてゆく
――孫太郎むしや、赤蛙……

ゆつくりとした足どりで、影を踏むやうに、汚れのない黑の脚袢と草鞋が動く――小さな引出しつきの木箱を肩から小腋にかけて、淺藍色の手拭を吉原かむりにしてゐる。新道にはまだ片かげがあつて、打水に地面がしつとりとしてゐる。

――いしもたやのくせに店をもつてゐる家――さうではなかつたのかも知れない、閑散な店なのだつたのかも知れないが、あんぽんたんはその家の、二間の障子がすぐはまつてゐる店口に腰をかけて、まばらに通る往來の人を眺めてゐた。その家は、一間巾位の中庭があつたので、天窓のやうな光線が上から投げかけられ、そこに植つた植木だけが靑々と光つてゐて、却つて店の中の方が薄つ暗かつた。天井から番傘がつるしてあるだけを覺えてゐる。眉毛をとつた中年增の女房さんと、その妹だといふ女と、妹の方の子らしい、靑い

の模擬店へゆく。「サンドウイッチありますか」秋田雨雀さんの可愛らしい白いあたまを横目にみながら、「五階のホールにいらしたらまだあるかもしれません」そこでエレベーターにのつて一路五階へ、――裝飾に配光に、支那つぽい匂ひの滿ちてる五階の大食堂には、三人、五人、まれな人影がちらりほらりしてゐる。こんなに空てるんなら大丈夫あるな。「サンドウイッチありますか」「サンドウイッチはないんですが洋菓子なら」「お菓子ぢやいやね、二階の人が五階にゆけばあるつて云つたのに」意地つぽい氣持がそんなにもほしくないサンドウイッチに妙にからまりつく。「ビールあるのよのんぢやはない」優子さんが勢よく提議する。大きなジョキイ二杯を目の前にならべられた社長さん驚いてる。そこへボーイがサンドウイッチを一皿持つてきてくれる「あらあるんぢやないの」「變ね、ベルがなつたらどこでもかしこでもみんなありませんて」「おくわしは食べる人が流石に少いんで」「これ〳〵そんなこと」叱られちやつた。こゝは劇場があくと支那料理やになるのかな支那式のかんじだから、ところが支那料理ではなく和食堂で宴會場にもなるといふ。このホールは又きのきいた休憩室や、バルコニーを持つてゐる。築地川に面したバルコニーからみる夜の東京は美しい灯の海だ。豪しやな歌舞伎座の古代桃山風な建物を斜め右前に、近代的な外かくを持つ新橋演舞場の背面を左に見る。電車、自動車、音、音、音、灯、火、燈、灯、銀座通り

疲せた小さな男の子とがゐた。

學校の行きかへりにその家の前を通ると、白い障子を細目にあけて外を覗いてゐるものがあつたが、聲をかけられたのはその近くだつた。はじめは何處のお子さんと訊いたりして、姉妹で私の肩上げをつまんだり袂の振りを揃へて見たりしてゐたが、段々に馴染んで先方でも大つぴらに表の障子を明け閉けて、店口に座つて私の歸りを待つてゐてくれるやうになつた。山吹きの枝のシンを巧く長くだしてくれて、根がけにしてくれたのもその人達だつた。

「鼠銀山」は日中か夕方に通つた。蝙蝠が飛び出して、あつちこつちで長い竹棹を持ちだして騒ぐ黄昏どきに、とぼ〳〵と、汚れた白木綿に鼠の描いてある長い旗を擔ついて、白い脚絆、菅笠をかぶつてゆく老人の姿は妙に陰氣くさくいやだつた。日中でも、

――いたづらものはゐないかな……

といふ聲をきくと、鼠でなくても子供でも首をひつこめた。

この家の女姉妹は、なんとなく女子供がいぢつて見たかつたと見えて、私の髪を結ばせてくれといつた。宅ではあんまりよろこばなかつたが、彼女たちは私の短かい毛をひつぱつて練油と色元結でくくりつけるのを悦んだ――あたしは店さきに腰をかけて、足をブラン〳〵させたり、片つぽ飛ばした下駄を足さぐりしたりして首だけ凝と据えてゐる。

青葉がもめて、風がすつと通つてゆき、うすい埃りがたつと、しんとした正午近くは、「稗蒔き」が來る、苗賣りが來る、金魚やがくる、風鈴やが來る。ほうづき賣りが來る。汗ばんで來たなと思ふころにはカタカタと音をさせて定齋屋がくる、甘酒賣りがくる。虫賣りがくる――定齋屋と甘酒やだけが眞夏になればなるほど日中炎天をお練りでゆくが、その他は小かげをゑらんで荷をおろす。丁度その家の隣りが堀越角次郎といふ、唐物問屋

のあかりはくつきりゝ帶の様に夜空にはつて美しい。

あんまりみとれてるとかんじんの菊五郎の三番叟をにがしちやふぞ。あはてゝ入つた二階のすみつこにはもう皆なが息をひそめて、席にあふれた人で一ぱいだ。舞臺では羽左衛門の千歳が踊つてゐる。水色の似合ふこの人につんと高い鼻が人形の様で、ほんものを感じられない若衆である。千歳が舞ひおさめて座ると梅幸の翁が靜かな舞をはじめる。金襴の袖がゆれて、翁の面の淋しさ靜かさがどこにともなくにじみ出す。翁が幕の中へ入つて仕舞ふと三番叟の菊五郎だ。氣持のいゝ元氣さ、どこからどこまで、あらゆるところに出てくるうまさ。いよう校長先生——うまいぞ——たのんます。——音羽屋——たまらなくなつた觀衆の口から飛び出すことば。やつぱりうまいわねえ——社長さんととしよりの尾上菊三郎とが小聲でかん心してる。解らないあたしたちにもしみ〴〵うまさがしみこむ。幕が降りて一ぱいの人がみんな出口へとなだれ出す中を、樂屋をみて來ませうとばかり揚幕から花道の下を樂屋口に入りこむ。鐵筋コンクリートの地下室はまだ乾ききらない冷たさで使はれてゐない清潔さとガランドウさを持つてゐる。奈落の廻舞臺の柱は歌舞伎座のも、演舞場のも、みな大きな木の柱で、奈落で生活する人達がその柱をつかんで體ごとヨイショとばかりまわしてゐたのに、こゝの柱は鐵骨である。頑丈な鐵骨が舞臺の下から下つてゐる。スイッチ一つ入れゝば廻る舞臺、

の荷藏の裏になつて、ずつと高い藏つゞきの日かげなので、稗蒔屋はのどかになたまめ煙管をくはへ、風鈴屋はチロリン、チロリンと微風(そよかぜ)に客(きやく)をよばせてゐる。そんな時あたしのおたばこぼんが出來上ると、中に赤や青や金色の小さな瓢簞(へうたん)か、役者の寫眞の浮いてゐる水玉のかんざしを、そこの姉妹が買つてさしてくれたり、腰にギヤマンの瓢簞をさげさせたりした。私のために大きな稗蒔きの鉢をかつて、柴橋(しばはし)をかけさせたり、白鷺をおかせたり



何人かの人間が體をしひたげながらあえぎつゝ廻す舞臺、文明はこゝにも一つの大きな機械の力を持ち込んでゐる。奈落の一すみに變電所がある。鐵で作られた大きな機械に多くのスイッチが並んでゐる。一つ〳〵がそれ〴〵の特達な用途を持つもの、成程大變さうだなと入口から首丈けつゝこんで感心する。奈落から一階上ると、初めの樂屋に、尾上菊子、菊枝、市川紅梅と三人の可愛い名札がかゝつてゐる。「あら菊子さんの部室」のぞいてみたが姿は見えなかつた。

樂屋の二階へ行くと廊下に一面ござが敷いてある。靴をそこでぬがされて、上つてゆくと羽左衞門の部室、梅幸の部屋、菊五郎の部屋と順に奥になつてゐる。狹い廊下一面に、劇場關係者、囃方、長唄、今日の舞臺に並んだ音羽屋一門のあらゆる人達が舞臺のまゝの姿で一ぱいつめかけてゐる。長袴、「澁野殿あいやしばらく」とでも云ひそうなかつこうをしてゐる。きちんと着物を着た美しいお爺さん、社長さんをつかまへてはなしをしてゐる。「ようこそ、ずい分お久し振りですな、御元氣ですか」誰だらうと思つてたら社長さん、「梅幸さんよ」「へえ」物靜かな美しいおぢいさんである。「まあお入りになつて」そこで廊下の雜踏を氣にしながら梅幸の部室に入る。青い疊、よごれない壁、木の匂ひの新鮮さ、新らしい部屋は氣持がいゝ。往來に面した窓には〆繩がはつてある。大きな鏡臺のとなりの神棚には、一合びんに半分位入つたお酒があがつてゐる。次の室の火鉢の上に自ざ



釣師の人形を水ぎはにおくために金魚も入れたり、白帆船をうかせたりしてくれた。

けれどあんぽんたんには親しめない家だつた。店口より上へ、あがつた事がなかつたので、いつの間にか私の妹の、人なつこいお丸ちやんが、代りに抱いたりかゝへられたりするやうになつた。

その家の右隣りの古板塀が、村上といふ漢方醫者だつた。その隣りが瀧床——瀧床とい

いかぎの様に天井からさがつてゐるかごには布が二三枚入つてゐる。「お入りなさい」つて云つたきり、姿の見えない主人のゐない部室でお茶をのみながらみんなは珍らしがつてキヨロ〳〵してみる。その中に菊五郎の部室の背りでシヤン〳〵〳〵〳〵と拍手の音がする。何だらうと思つてるとやがて廊下をぞろ〳〵と人が通り出して、主人が歸つてきた。「何ですあの拍手の音」「あれは式ですよ見なかつたんですか」「ええ」「おい〳〵水を一寸」「はい」「早く、何でもいゝのむんぢやないんだよ硯に入れるんだから」「はいすぐ」硯を持ち出して、梅幸丈は待ちかねてゐる。何かと思ふと、その卽ち式なるものを私達に說明して呉れるといふのである。墨をすりながら、「こゝに雛段があつて、その上段に翁の面箱と烏帽子と扇その下には眞中に鯛、左側に三番の扇と烏帽子、右に千歲の扇と烏帽子、その下の段には洗米に、盛鹽に、かち栗とするめと結びこんぶを入れた三寳を置いて、その前に翁が中央、左が三番、右が千歲と並んで、翁の前に銚子をおいてその向ひに太夫元がすわり、そのまわりに三人づつ小皷、太皷、歌ひ手と並び、翁から太夫元に盃をさし太夫からかへり、千歲にさしそこからかへり、三番にさしそこからかへり、太皷にさしそこからかへり、――チヨイ〳〵と筆にすみをつけながら疊の上に置いた小さな紙切に繪をかいて說明する。「つまり翁が一番のむ事になるんで」「ぢや醉つぱらつちやふでせう」「ほんとに飲

つても理髮店ではない、小さな酒屋だ。店の向つて右手に、石で袖をした中に大きな水桶があつて、貧乏德久利が洗つてあり、正面に盛切りの臺が拭きこんであつて、眞白な鹽がパイスケに山盛りになつて、二ツ三ツの酒樽と横に角樽が飾つてある店だ。赤ら顏の頭の禿げた瀧床は、大通りの大店をもつてゐる廻り髮結さんだつたのだ。だから酒屋さんの店にゐるときはすけない、たまに店にゐる時は、ずつと店の前の方へ腰かけをもちだして、お客に白いきれをかけて斬髮をしてゐる。その道具が、菊五郎のおはこの「梅雨小袖昔八丈」の髮結新三が持つてくるのとそつくり其儘のをつかつてゐる。瀧床親方は、ずんぐりした體にめくらじまの稍裾みじかな着附けでニコニコ洋鋏をつかつてゐたが、お得意なのは土鉢に植ゑた靑い、赤い實のなつてゐるトマトだつた。

尤もトマトなんて、知つてゐるものもすけなければ、食べることなどは猶更だつたであらうが、細竹でさゝへて、二尺五寸ばかりに伸びたそれは、葉が茂つて赤い實が美しく、斬髮の客の傍におかれてあつた。

「この實のなつてるのはなんだね？」

「西洋の唐茄子だといふことで――」

「へえ？　珍らしいものだが、西洋の唐茄子つて、ばかに細つかいもんだな。」

――その一軒おいてとなりに紙屑屋のおもんちやんの家があつた。おもんちやんの家は表はせまくつて紙屑で一ぱいだつたが――紙屑やといつても問屋だつたのだ――裏には空地があつて、糸瓜の棚が田舍めかしかつた。その後に空瓶の小屋があつた。空地では子供角力が夏になると催ふされた。

おもんちやんは脊の高い子だつたので、みんなから狂氣あつかひにされて、ある日大門通りの四ツ角で、いたづら子供たちにとりまかれ、肌ぬぎになつて折れた鐵物を振つて懸

むと酔つぱらつちやいますよ」一生懸命に説明してると色々な人が入れかわり立ち代り、お目出度う御座います〳〵。邪魔をしてる樣で氣がさすのでもそもそしちまふ。「この式は踊りが始まる前にして、すんで歸つてからまたするんですよつまり二度ね、」「こんぶや何かはどうするの」「こんぶは右の袖に入れ、するめは左のたもとに入れ、かちぐりはたべるんですよ、ところがかちぐりは固いでせう、だからたゞなめてをくだけ。おまけに老人で齒がわるいからなほさら、それから翁の横に火鉢があつてその上に銀瓶がかゝつてゐて、翁は舞臺から歸つてくるとその中に、袖に入れたコブを出して入れ火の中にはするめを入れてもやす。コブはお福茶で水引きのかけてある茶碗でのむし、するめをやくのはそれ風邪を引かないおまじない」「いろんなことするのねえ」「どうも有難うございましたごちそうさまになつて」「お茶だけぢやあ、こんどいらしたらかちぐりでも御ちそうしませう」「かちぐりぢやだめもつといゝもの」菊五郎の部室へゆくと出てくる菊子さんに逢ふ。之までいつも菊五郎のとなりへ鏡臺をならべてたのにこんどは別で「地下室におひやられちやつたわ」つて大きな聲で悄氣てみせる。室の主人公は御湯から上つたのかサルマタ一つで人と話をしてる。「裸で失禮」「病氣だつたんだつてねえ」「うんまだなほらないんだ」今日はよく踊れたぢやないの」「うんまあ」社長さんと喋べつてる菊五郎の聲をきゝながらその隣りの部室のいわゆる式場を覗く。翁の面箱、烏

童を追ひかけてゐた。花井お梅の刄傷の評判が高かつたので「花井お梅、花井お梅」とはやしたてられてゐた。

その隣家が小川湯、さうして三四軒おいておあぐさんの家であつた。その向ひ側で面白い家をあげれば、角が土藏から煙筒の出てゐる⊕芋屋の横腹、金物問屋金星の庭口、仕立屋井關さん、その隣りも大丸の仕立屋さん、猫ばあさんのゐた露路口、井關さんが丁字髷で、ここの親方はへッついといふ髮の見本を見せておいてくれた鍛冶屋さん――表に大きな船板の水槽があつて、丸子や琉金の美事なのが澤山飼養されてゐた。鍛冶屋の店さきには、よくかうした水箱があつたがあれはなんのためなのだらうか、刀鍛冶などの流れの末とでもいふしるしなのかどうか。その隣りが、芝居や講談などにある、芝日影町の古着屋で、嫁入着物に糊附けものを賣つたため、嫁御寮の變死から、その母親が怨みの呪ひ「め」と書いては燒火箸をつきさしてゐたといふ、怪談ばなしの本家江島屋の、後家になつた娘のすんでゐた格子戸づくり、それからどこかの荷藏があつて、丁度瀧床の向ふが、吾平さんといふ馬具屋であつた。

吾平さんは顔の大きな、鼻も大きな、眼のちいさい人で、たつぷりした白髮をなでつけ、大きな鼈甲ぶちの眼鏡を鼻の上にのせて、紫に葵を白くぬいた和鞍や、朱房の馬連や染革の手甲などをいぢつてゐた。鞭とか、馬びしやくとかいつたものは一かたまりづつになつて澤山上から釣してあつた。漸く一間半位の間口だつたが、賑やかな見あきない店で職人もせはしく働いてゐた。前を通るとニカワを煮る匂ひがした。

村上といふ醫者の家が一番變つてゐた。どんな時、誰がどんな病氣でも、あんぽんたんが藥をもらつてくる時、變だなあとおもふのは、練藥と膏藥の二種だけだつた。練藥は曲物に入れ、膏藥は貝殼に入れて渡した。

帽子、かちぐり、ある〳〵、若い男の人が片づけてゐる横で三人の娘、あらこのこんぶむすんであるは、や、かちぐり一つとつちまへヒョイとつまんでポケットへ一つ、どんなにかたいかあとで調べちやへ。「お久し振りですね、お元氣ですか」社長さん、あつちでもこつちでも、いろんな人につかまつては「お久し振りですね」をやられてゐる。菊五郎の部室へもどると、劇場の人がとくりを一本もつてきて「之をのんで下さいつて」「誰が」「元富士署の×長なんですがね三番の踊る床下に入れておいた酒をのむと中氣にならないつていふんです」「俺にのめつてのか有難いね、ぢや歸つてのもう、橋屋の部屋へいつて見ませんか、なんだか賑やかだ。」揃へてあるぞうりをはいて菊五郎はいつちやつた、あたし達も歸らうと思つて廊下をみるとさつきまであつたゴザは綺麗になくなつてコンクリートの床が一面、あはてたけど仕方がないので靴のあるところまで薄氣味の惡い拔き足で歩く。外へ出て讀賣講堂である婦人講演會をきゝにゆかうといふ車の中で、どら〳〵どの位かたいかちぐりだらう、思ひ出してポケットから取り出して優子さんと半分づゝ分けてかんでみたかち栗は前歯でくにやりとかみきれた。あんまり柔らかいので、はり合ひぬけがする位、でも何かのおまじないだらうと思つて、なま甘つぽい味をのみ込む。誰か希望者に梅幸氏のかいた繪を上げませうか。後できいて成程と思ふ程上手なんですが氏の繪は十八番ですつて。希望者手をあげ――（みどり）

敷石を二三段上つて古板塀の板戸を明け一足はひると、眞四角な、かなりの廣さの地所へ、隅の方に燒け藏が一戸前あるだけで、觀音開きの藏前を二三段上ると、網戸に白紙が張つてある。くぐりをあけてはひると、ハイカラにいへば二階はあるが一間の家で、入口の横に藥の名を書いた白紙を張りつたけ、引出しの澤山ある藥だんすがおいてあつた。薄暗い中に、紋附きの羽織を着た、斬髪の伸びた村上先生がゐた。御新さんは庭で――空地で、粗末な土べつつひで御飯を焚いてゐる。その近所に、ショボショボと竹が生へてゐるばかり、大きい方の娘さんは盥で洗濯をしてゐた。入口の塀の近くに、流石井戸だけはある。下の娘も黄色い顏で、外にもあんまり出なかつた。

　このお醫者さんは、外科はまるでだめだつたと見えて、女中の足の指も腐らせてしまつたが、あんぽんたんの父の手の外傷も例の膏藥で破傷風にしてしまつた。がまん強い父が惡熱にふるへて、腕まで紫色に腫れ上つてしまつても彼は貝殼の膏藥を貼りちらした。木魚のおぢいさんが吃驚して、醫の方で自分の 先生のやうな 木下さんといふ、旗本上りの顎髯の長いお爺さんを連れて來て手術をした。妙なところへ東洋風の豪傑と江戸つ子の負け惜しみをもつ父は、かなりな大手術であつたであらうに、わざ〳〵病室から離れまで出張して――枕も上らなかつたやうに思へたのに、八端のねんねこを引つかけて、曲彔によりかゝり高脚のお酒を飲みながら腕を裂かれてゐた。

　木魚のおぢいさんが助手で、膿盤は幾個もとりかへられた。强い消毒藥のかざは流れてきたが父の苦痛はすこしも洩れず、よく堪へてゐる樣子だつた。私はハラ〳〵した。障子の硝子の隅から細く覗いたが、父の姿は見えず、向ふの欄間にかけてある、誰が描いた古畫か、關羽が碁盤を見つめてゐる唐蠻が眼に來た。父のこの大怪我もばからしい强がりから、爪でひつかかれたのだつた。それも猫でも子供でもなく、父の部下のやうな若い代言

九ポ・八ポ・六號・六ポ

締切が迫つてくると秀英舍の瀧澤さんは女人藝術社に日參して悲鳴をあげてかんぺんしてくださいを連發して泣澤さんになつて仕舞ふ。一分位ひのびたひげをまんまるい顔にためて太つた體でひいひい秀英舍の坂をあがつてくる。毎月毎月組み込んだ、組み遊び追ひこみ、だめだな、かんぺん、困る、こつちも困る、を繰返しながら到々泣澤さん、「どんなに大變だか一度工場見にいらつしやい」「ええゆくわ」。でそんなに暇でもなけりやそんなに忙がしくもない四月のはじめ「瀧澤さん一體何御馳走してくれる」「うなぎでもなんでも」素川さんと優子さんとあたしの三人、社長さんは御留守番で日と鼻の秀英舍見學に出掛ける。

　上から順に下へ見てゆきませうと三階の文撰室へ入る。活字臺の上には、初號一號二號三號四號十二ポ五號九ポ八ポ六號六ポ七號と順序よく一ぱい並べられてる。仕事着を着た人達が、横二寸縱五寸位の木の箱と、原稿を左手に持つて、右手で活字を拾つてゐる。原稿を讀みながらスイスイと水すましが靜かな水の上を泳いでゐる樣に、糸をつけたものをひつぱつてゐる樣に、實にすばやく靜かにゴチヤゴチヤと小さな活字の一ぱいある箱の中から必要なものを撰り出して、原稿紙の字を追つて箱の中へ活字を埋めてゆく。とよくまあんなに早く出來るものだと感心する。ル

人たちだつた。鷗洲館とかいふ、藏前代地の、お船藏近くの大きな貸席で、代言人の大會があつた時、意見があはないとて、父の立つ演壇へ大勢が飛上つて來て、眞鍮の燭臺で打ちかかるものや飛附いてくるものを、父は黑骨の扇――丁度他家からおくられた、熊谷直實の軍扇を　したのだといふ、銀地に七ツ星だか月だかがついてゐたものだ――をもつてゐて身をふせいだのを、擊劍の方の手がきいてゐるので鐵扇をもつてゐるのかと思ひ、死もの狂ひで噛みついたりひつかいたりしたのであつた。

　騷ぎのあつた翌日、その狼藉者一黨が揃つて詫びにきたが、その時、父はすこし寒氣がするといつてゐたが、左の手の甲が紫色に腫れてるだけだつた。對手の幾人かは頭に鉢巻したり、腕を結はへてゐたりした。そしていつた。

「ばかな眞似をしてしまつて、あれが刀だつたら僕の頭は眞二ツに割られてゐるところだ。とても歩けはしないが、ぜひ詫びにゆけと皆に抱へてこられた。眼が廻るほどピンピンする。」

「も一度診察させるのだ、何しろ鐵扇だから、どこか裂れるか折れるかしてると思ふ。」

「ばか言へ、鐵扇なんて、そんなおだやかでないものを持つてゆくものか、辯論の自由を尊重しながら、そんな野蠻な――でも、ぢやないよ、見ろ、この扇だ。」

　みんな變な顔をしてゐた。元氣な父は村上さんに膏藥を貼らせながら、一人の手を見ていつた。

「や、その爪か！汚ねえのだなあ。」

　對手の人も鷹の爪のやうにのびて、しかも爪垢が眞黑い自分の五つの爪を眺めた。他の者たちも呆れた。だが、當然驚かなければならない醫者が平然としてゐた。

　父はお玉が池の千葉について劍を學び、初期の自由黨に參加した血の氣が、まだおさま

ビのついたのは又別にルビつきのがあつて、各〻違ふ發音によつて同じ字がならんでゐる。文撰室のすみの方では女工さんたちが、解版された活字を、號やポイントで揃へ、イロハにそろへてゐる。あんな小さなものがよく見出せると思ふ、六號にルビのついてゐる活字なんか素人見のあたしたちには何だかよくよめもしない、上かも下かも解らない。なれはすごいものだとしみじみ思ふ。木版の六號のルビ付のなぞは蟲目鏡をかけて作るのだといふ。モノタイプ—自動印字機は三千字程母字があり必要な字をキイでたたくとどんどん新らしい活字が出來て自然に組めてゆく。解版してゐる人はみな女工さんだ。年とつた人や若い人が一様に首と體をまげながら素早い手つきで活字をほぐしてゐる。

植字室へゆくと文撰された活字を組版にしてゐる。圓や點はここでいれられる。組版になると校正刷をすつて、了になると紙型にとつて、つまり活版の上に紙を置てぬれた布を其上におき、トントコトントコたたきながら浮き出させる。紙型が出來るとそれに煮えた鉛を流し込んで鉛版を作る。其儘では磨擦されへつて仕舞ふので銅メッキやニッケルメッキをしてから印刷機にかけて刷り始める。鉛版を作る所を見てゐるといつ迄もあきない。重そうな鐵の壓搾機の中に紙型を入れ、その上に紙を敷き、紙と紙型の間ににえた鉛を流しこむと美しく光つた鉛の版が字や畫を其儘浮き出させて出來てくる。スースーと切り目を入れてポンポンと裁ちわりすごい刀でへり

らなかつたのであらう。友達たちも自然荒武者だつた。その中に、友達であつて法律の先生である村田雷造といふ人があつた。神田猿樂町に住んでゐた。黄八丈の着物に白ちりめんの帯をしめて、女の穿く吾妻下駄に似た疊附きの下駄へ、白なめしの太い鼻緒のすがつたのを穿いてゐた。四角い顔の、才槌頭だつた。靜かにお茶を飲んだり、御酒をのんだりしてはなしてゐた。

ある時、あんぽんたんが六才か七才だつたらう、初夏に、このおぢさんと父との眞ン中に手をひかれて、鎧橋のたもとの吾妻亭といふ洋食やへいつた。おさな心に殘つてゐるのは皎々たるらんぷと、杉の葉と、白い卓クロースだつた。杉の葉は日本風の家を何か裝飾したものであつたらう、ブランデーをかけて火を燃すオムレツも珍らしかつたが、私の眼に今も鮮かにくるのは赤い、ツブツブのある奇麗な小さな丸るいものだつた。たしか一つぶしかついてゐなかつたが、あたしが凝と眺めてゐると、父が氣がついて、自分のお皿の中からとつて、あたしの白いお皿の、青いものの上にのせてくれた。すると、村田さんもおなじやうに、近眼鏡を近よせて、轉がさないやうにナイフの上に乘せてよこした。

それがあたしの、苺のはじめだつたのだ。食べはしなかつたが、その赤さは充分に私を悦こばせ、最後までそのお皿をとりかへさせなかつた。

「をかしな奴だ、氣にいつたら見てゐるばかりで、他のものも食はなくなつちやつた。」

父は歸つてからさういつた。その癖がついて、洋食は大きくなるまで食べないで、手をつけないで、きらひではない習慣をもつた。

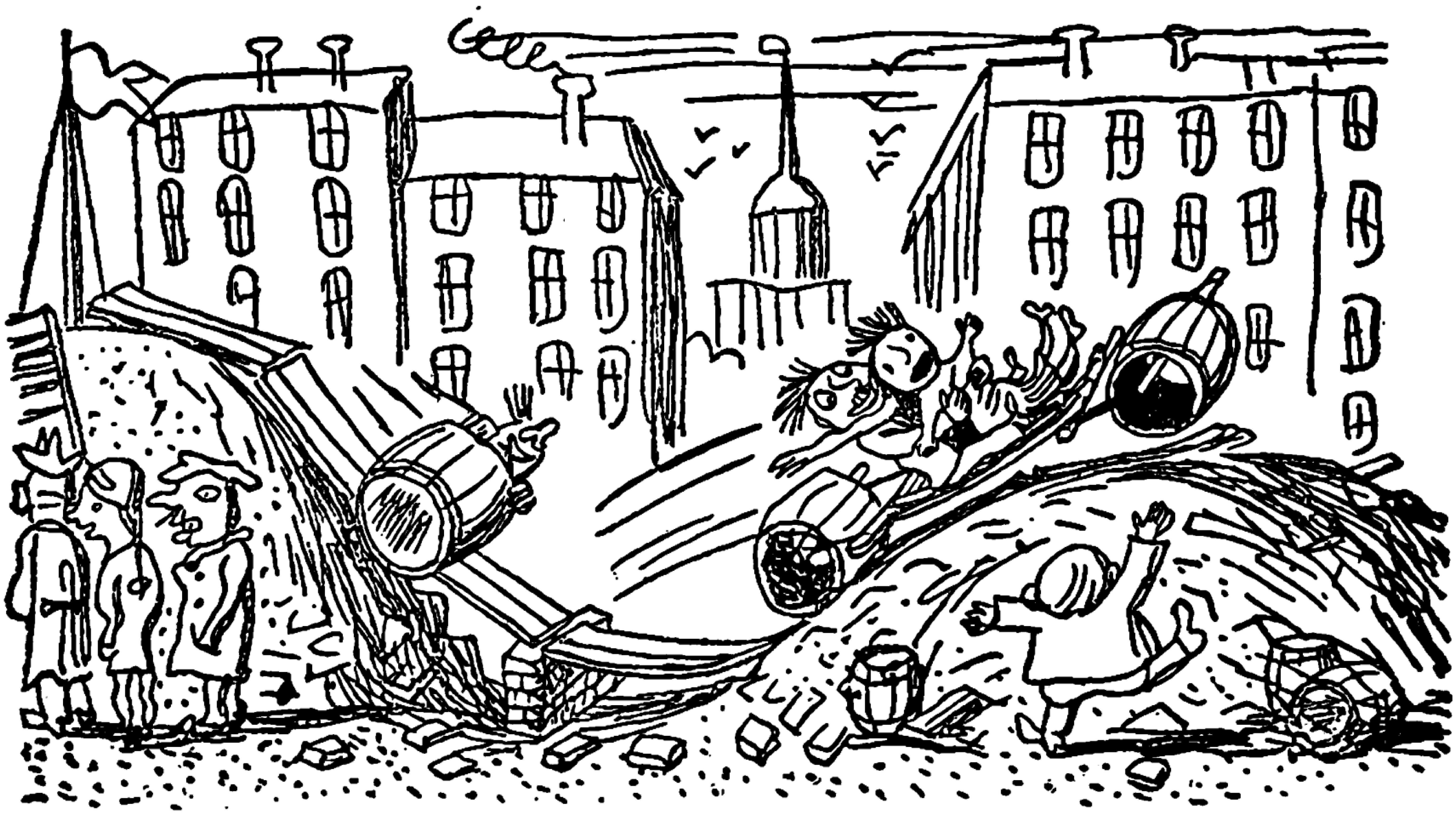
赤大根を知つたのもそれに似よつてゐる。十ばかりの時、クリスチャンの伯母夫婦——臺灣のおぢさん——が、神田南校の原の向ふ邸の中にゐた時分、官員だつたので洋室の食堂をもつてゐて、泊りにゆくと洋食が出た。從弟と私の妹おまつちやんと三人で、赤大根

のもぢやもぢやを裁切り、メッキのところへもつてゆく。一時半頃から見はじめて三時過になつてるのにまだ工場のいくらもみていない。「とても半日やそこらぢやあ丁寧にみてたらみきれやしませんよ」丁度三時から十分お茶の時間があつて職工さん達が休むので私達も應接室で一休みする。「ずい分いゝ工場でせう」「奇麗ね、だけどこれ丈にする迄には――今一體何時間勞働」「朝七時半から夕方五時半迄、ひる三十分十時と三時に十分づゝ休むから、まあ九時間」「ずい分働かすのねこれ丈精巧な機械が揃つてゐれば――」瀧澤さんが急にすと首をちゞめて「隣りは社長室なんだからも少し小さい聲で」うなぎの代りに紅茶と洋菓子で、一口しめらせて、印刷室にゆく澤山の輪轉機は今日は動かない。二三臺だけが少女の友かなんかをすつてゐた。一枚の白い紙が出てくる迄に兩面刷られて卅二頁におりこまれ、百枚を單位にしてストンストンと出てくる。機械の力――大きいもんだな。人間の手の様に、足の様に機械がいろんな働きをしてゐる。一體誰がこんなものを考へ出したんだ。どんな頭だ。なんて思はせられる。製本部も機械でどんどんやつてゐる。かと思ふと人間が機械の様に體で調子をとりながら、紙を折つてゐる室もある。たちづくめでみた肩のいたさに、働いて一日中立ちづめの人はどんなだらう。だが何といふ機械の魅力だ。（みどり）

を見た時、お皿の上で、葉をつまんで獨樂(こま)のやうに廻した。黒い立派な大きな門をもつたこの邸の構内には、藤島さんといふ、伯父には長官にあたる造幣局のお役人のお宅があつた。竹柏園佐々木信綱先生の夫人(おくさま)がそこのお孃さんだつた方(かた)だ。伯母の家の前、門のきはの竹の垣根に朝顔(あさがほ)が咲いてゐる家からは、いい音がきこえてゐた、琴のこともあればヴイオリンの時もあつた。幸田さんといふ、女でも偉い方で、一生懸命に勉強してお出なさるのだと、伯母はそのお家の前で鬼ごつこなんぞしてゐると叱つていつた。あの有名な音樂家である幸田延子女史と、安藤幸子女史御姉妹のお若いころのことであつた。

南校(なんこ)の原(はら)とは、大學南校のあつた跡だと後に知つた、草ばう／＼として、ある宵(よひ)、小川町の五十稻荷といふのへ連れてつてもらつた歸りに、原で人魂といふのを見た。

外國人の大きな曲馬團が來て、天幕を張り、夜になると太(ふと)い薪を積みあげて炎をたてるのが、下町そだちの子供に、どんなにエキゾチックな興趣(おもむき)を敎へこんだであらう。私は曲馬を見るよりは、その天幕ばり全部を見るのを樂しんだ。父が來て、伯母の一家みんなと見物にゆかうとしても、私は外景を眺めてゐるといつてみんなを困らせた。でも、原つぱのそこかしこに、馬が繋いであつたり、ある場所には象がゐたり、かしこい犬がゐたり、人間にしても、美くしい白人少女もゐれば、黒んぼもゐる。その人たちが惜げもなく腕や肩を出して、焚火のかゞりの廻りにゐたり、朝、原つぱを歩いてゐたりする景色は、とても樂しい生きた畫であつた。それにこの伯母の家にゐると、牛が淵へおたまじやくしを掬ひにゆけたり、駿河臺のニコライ會堂の建築場へもゆけるので、あきなかつた。御飯(ごはん)のときにみんなが十字をきるのも私の眼を丸くさせた。



地下室

—一幕—

首藤嘉子

並木昌子　二十四才
三浦久江　二十三才
木村末子　二十才
古賀しづゑ　二十二才
山瀬もと　二十六才
（以上）女事務員及びタイピスト

德本忠造　六十四、五才　菓子屋の爺さん
前田さよ　二十二才（低能な子守）
其の他、銀行員、會社員、小使ひ、女掃除夫、給仕、エレベーター係り、仲仕、自働車運轉手、靴直し、女事務員、タイピスト等、

現代。三月半ば頃。日暮れの三時から五時頃迄に轉換する事件。

ある大都會の、繁華な場所に位置したビルディングの地下室。

舞臺右手正面に粗雜な扉あり。開くと石の階段が見える。舞臺一面一つの十字路の廊下とし、縱通路は廣く、右手に金庫の鐵扉、左手にエレベーターの昇降口

とが向き合つてゐる、其の向ふは兩側共に倉庫の入口。正面廊下の外れに地上へ上る石段あり、薄い陽が射してゐる。金庫の前方に靴直しの出店、エレベーターによりたる方に果物、菓子等出し、コーヒ等呑める露天風の店あり。

舞臺全面、重苦しい暗さに蔽はれ、埃つぽい感じ。

幕明くと、數人の會社員が菓子屋の出店にて、珈琲を呑んだり餅を頬張つたり林檎をむいたりしてゐる。嬰兒を脊負つたさよが客に接待してゐる。向ひの靴屋では、二三人の會社員が立つたり腰かけたりして修繕を待つてゐる。法被きた仲仕が舞臺正面の石段より下り來り、口々に叫び合ひながら菰包みを倉庫へ運び入れる。暫くそれがつゞく。エレベーターが降りて來る。二人の事務服姿の若い女員先に飛び出し、菓子屋へ走つてくる。その間に一人の銀行員が年とつた小使ひを指圖し手車に載せた金庫をエレベーターより曳出し、金庫の鐵扉を鍵で開いて中へ這入つてゆく。二人の女事務員、隅つこでチョコレートを食べてゐる。さよイラ〳〵して調子が狂つてゐるのを誰も氣ずかずにゐる。

さよ　へえ、まあ、もうそんな時間かなア、四時か！　へえ。

會社員の一　まだ三時頃さ。土曜じやないか、今日は。あれだらう（金庫の方を顧で指す）

さよ　へえ、そうか、フン、又日曜かなア、（脊中の子をあやす）あゝよし〳〵、泣くんじやない…ないつてば、よし、よし。

會社員の一　（女事務員に）夏ちやん、こつちへ來ないか、ア、ン、そんな隅つこでなんか…コーヒ奢るぜ、え？　來いよう、こつちい。

女事務員の一　奢つてくれる？　じや行くわ、ねえ。

女事務員の二　それを待つてたとこなのよ、つて…ハッハッ…

（二人近よつて行く）チョコレート上げやうか。

其の間に、金庫より銀行員、小使ひが出て來てエレベーターを待ち、軈て退場。

會社員の一　姐さん、コーヒ二杯だ。チェッ！仕方がない。

女事務員の一　明日の活動、嘘じやないでしよ。連れてかないと恐いから。

會社員の二　ウン、ウン、わかつた。ハッ、ハッ、ハッ、又歸へりは…例の。

女事務員の二　あしこだけ、私は棄權してよ。こゝ十日程はね。

會社員の五　（靴直しの所から）さつきから、何だかおかしいと思つてたら、斷髮ですね。

會社員の一　へッ、へッ、浮氣封じにね。

女事務員の二　やだあ、あのね、お父さんが桃割れの根つから切つ

ちまつたんだもの。毎晩おそくなるつて、怒つて、そいで今日は何だか溫良しいでせう。

會社員の四　（修繕の出來た靴をはいて、こつ〱歩き廻りながら）女て、髮の形で隨分變るもんだなア。

女事務員の一　あゝ、あゝ、疲れちやつた。歸へりたいなア。このまんま。

女事務員の二　まだ一時間半あるんだもの。

二人、右手の階段より退場。

會社員の五　あの女あ、なか〱發展家ですねえ。

會社員の二　男の五人や六人を手玉に取るつてんですからな。全くこんな所の女は恐ろしいや。

會社員の四　君、三階の津谷商事のタイピスト、ね。ね、一寸淸楚な感じのする女ゐるだらう。

會社員の六　（今迄居睡つていたのが、顏を上げる）　フン、フン、

會社員の一　二十四、五の女だらう。

會社員の四　いや、もう、七、八位でさ。若く見えるがね。あれ高等淫賣だつてよ。

さよ――（性急に）　へえ、あの人が――靜かな、もの一つ言はない、溫良しい……

會社員の四　評判さ。赤新聞にも出てたよ。

會社員の六　フン、フン、それから？

會社員の四　一階の事務所の交換手で、東とかいふ女ね。

會社員の六　ありや、まだ子供じやないか。

會社員の四　子供といつたつて、もう十六だぜ、君。あれに何とか課長の妾だし。七階の女事務員の中には二人、貞操を金に換へる常習犯がおりますぜ。

會社員の二　この間も、女便所の中で××があつたそうじやないか。

會社員の五　あれは、えらい評判だつたねえ。

會社員の一　全く女つて奴あ、金次第でどうにでもなるもんだねえ。それにしても、食堂に一寸、いゝ子が三人程來てるじやありませんか。

會社員の三　ほゝう。僕はまだ知らない。

會社員の四　（苦笑）　ものになりそうな奴がいるんですよ。

會社員の二　目が早いなあ。どの子だね。

會社員の四　そら、色の小白い、目のクル〱つとした……。

會社員の六　あゝ、あれ、あれ、ゐるよ。俺も、フフ……俺もちよいと、ね、君、君　（會社員の肩を叩く）　その間さよキヨト〱そこらを歩いてゐる。

ぞろ〱立ち上り、時計を出して見ながら、エレベーターにて退場。

さよコーヒー茶碗を片附けてから、脊から赤ん坊を下ろし、

牛乳を呑ませる。

靴直し　爺さんは？

さよ　二階か三階か、どつかへ行つた。

靴直し　あしこの（舞臺正面の入口を覗き）入口から、どだい、風と砂と埃が舞ひ込みやがつて…口の中あザラ〳〵だ。

右手の階段から、自働車運轉手三人下り來り、菓子買をつて立ち喰ひする。

運轉手の一　おめえんとこの大將、怒りりつぽいんだろう？

運轉手の二　何、かまふものか。四時頃迄は大丈夫だとさ。重役室で納まつてらつしやらあ。

エレベーター止まる。あたふたと金釦姿のエレベーター係り走り出て來、うろうろ歩き廻る。

靴直し　埃が立つよ。

エレベーター係り　ヘン、煩さくつてたまんないんだよ。交換手が何遍も〳〵上り下りしてね。それが何にも用事なしにさ。花屋の蔭に隱れていて、僕のが止まると走つてきて乘るんだからなア。

さよ嚴粛な面持ちで立つていつてきいてゐる。

靴直し　果報者だあね、お前。

エレベーター係り　ヘツ！　あのお多福奴。そりや煩いんだよ。手を握りに來たりね、そりやもう…。

運轉手の一　よう、よう。

エレベーター係り逃るやうにエレベーターに入る。

右手階段より、女掃除夫四人、手に、箒、馬穴、雑巾等持ち、話し合ひながら登場。運轉手等正面入口より退場。

女掃除夫の一　目に見えるやうだよ。大きな屑籠を背負ふてさ。長い熊手のやうな箒を持つて、な、よち〳〵腰をこんなに（眞似する）屈めて歩いてる姿がなア。

女掃除夫の二　人事のやうに思はれんて。何時こちとらもお拂ひ箱になるか――。

女掃除夫の一　あの爺さんの娘、給仕になつてるんだろ？　三階か

――

女掃除夫の四　四階さ。私（わし）の受持ちの。

女掃除夫の三　やれ、やれまあ一服か――あゝ疲れた。あゝ、あゝ

（欠伸、腰より煙管をとり出し、吸ふ）

女掃除夫の一　暇さへありや、考へて――考へる都度（たんび）に情けなうなつてしまふ。

女掃除夫の三　仕方のない事さ。諦めなよ。まあ、働いて食つて行けるだけ有難いと思つてたらいゝんだ。

女掃除夫の一　だつて…朝から晩までつゞけざまに働かされて……たつた二十圓貰つて…六人家内だよ。うちは。おつ母が三年も寢てるしなア。弟が工場で働いて月に二十四圓だア。考へると涙が出て仕様がないよ。毎朝、毎晩考へることつたら、米代をど

う工面しやう……又十日も風呂へ這入つてないなア……六錢の電車賃がない時があるんだもの。

この時エレベーターより賑やかな笑ひで四、五人の若い女が登場。並木昌子だけ洋裝で、他は事務服を着てゐる。

山瀬　ほんとうに一年振りねえ、變つたわ、變つたわねえ、見違へるやうよ。あんた。

並木　私、何だか夢みてるやうな氣がしてよ。（にこやかに笑ふ）まあ、去年と些とも變つてないじやないの。あらッ、さよ……さよさんだつたわね。あなたお達者で――私、並木よ。

さよ　（ヂロリと見て顔を反ける）

並木　あんたは、まだ、雨にびしよ濡れになつた綿のやうに元氣のない顔してるのねえ。ねえ、去年と些とも違はない。

さよ　（暫くして、力のない聲で）並木さんは、いつも嬉しさうに……

並木　私が？　えゝ私はいつでも元氣で元氣で飛び廻つてるの。

女掃除夫の三　元氣になることさ（同一に）歌でも唄つて面白う暮さなくちやー――損だよ。（唄ふ）

かたい蕾も一夜の内に
咲いてみせます床の上
梅かいな、違ひますぞえ福壽草

女掃除夫の一　（泣く）生きてるのが、つくづくいやになつてしまふ。

女掃除夫の三　（唄ふ）咲いてみせます床の上……さあ又一と働きしやうか、え。

右手の階段より退場。

並木　さよさん、チヨコレートある？　板の方よ。ある？　なら、そうね。（頭數を讀む）十二下さいね。（さよより受とり、さよや靴直しにまで二つ宛與へる）いゝのよ、私は。

皆口々に禮を言ふ。食べ始める。

古賀　並木さん、今の會社いゝ？

並木　えゝ、こゝで働いてるよりはいゝけど、だけど何處だつて同じやうなものよ。

三浦　やつぱりタイプ？

並木　そうよ。私今日は本當に嬉しいの、お友達つていゝものねえ。

木村　久し振りだつたわね、あんた洋服よく似合つてるわ。貴婦人みたいだわ。もうずつと洋裝――？

並木　えゝ、覺悟きめちやつてね、變則な着物はぽいいと。働く者にはね、この方がいゝことよ。

木村　私、一寸、又行つてくるは。何處い行つてたつて叱られるんだもの。

並木　そうよ、じや、又お暇あつたらいらしつてね。

木村　さよなら。

古賀　直ぐ來るわ。澤山話したいのにねえ。

並木　いらつしやいね。さよなら。

古賀、木村、三浦、右手階段より退場。

山瀬　お父さん、お丈夫？

並木　えゝ、國へ歸つたのよ。わたし一人なの。

山瀬　まあ、じやお淋しいわけね。よく。

並木　えゝ、（笑ふ）お淋しいわけよ。

山瀬　私も、今のとこ厭やなの。出やう出やうと思つてるんですけどね。口がないもんだから……。

並木　あんた、それ、私が居る時から言つてたじやないの？　でもね、何處へ行つても同じことよ。女に住みよい世界なんてあるもんですか。それよりあんたどう？　（笑ふ）結婚なすつたら――私お世話してよ。いゝ人をね。

山瀬　あんたこそ。そんな美しい顏して、何處へでも行けるでせうに――。

並木　（笑ふ、こつ〳〵歩き出す）言つてらあ。いゝ人があつたら私しつかり摑まへて離さないわよ。だけれど無いんだもの。私、去年、こゝへ働きに來てた頃でも隨分氣位ひが高い方だつたけど、この頃はもう、自分ながら恐い程餘計高くなつてるのよ。ね、愚かなる者よ、汝の名は男なりだわ。

山瀬　並木イズムを發揮してるわ。あんたは男には騷がれた方だから――あれから、どう？　面白いことあつて――？

並木　ハツ、ハツ、この間ね、會社の歸へりに、賑やかな通りを歩いてたらね、四十過ぎた男よ、それがね、話しかけて來てね。一時間でいゝから交際きあつてくれつてんの。私默つてこつ〳〵歩いてたらね、何處迄も〳〵跟いてくるの。だから私腹が立つてね言つてやつたの。私がそんなに呆然とした女に見えますか？之でも私はレデイの心算なんですがねつて。ねえ、それでも何とかかんとか煩さいので、あべこべに言つてやつた？　私がいゝ所へ連れてつて上げます。そしてね、その爺さん喜んじやつてねえ。いそ〳〵と從いてくるのよ。私おかしくつてね、吹き出したい位ひだつたの、何處つて、解つてるじやないの、交番所さ。巡査にね、この男煩いからね渡しますつて、名刺おいてさつさと歸へつてきたの。

山瀬　思ひ切つた事をやるのねえ、あんたらしいわ。私なんか迚も、そんな事は――。

並木　男つて蛆だわ。あんた、十五六の子供でも、子供だと思つて安心してられないのよ。私には男といふ男、みんな獸に見える。

山瀬　どの男も、どの男もね。皆同じだわ。私なぞも、もう人生の半分になつているのに、一人位でも之と思ふやうな人に會つてもいゝのにと思ふわ。

並木　誰でもなんでせうね。男でも女でも、誰だつて理想の相手を血眼になつて搜してるのだから——私だつてさうなんですもの。いつかは逢へる——身も心も投げ出すやうな人にきつと逢へる。——さう思つてりやこそ、かうして呑氣に生きてられるんじやないの。でもね、大概なとこで我慢しとくものよ。結婚する迄せい〴〵陽氣に遊んでおくさ。ねえ、子供が出來てさ、子供、子供つて生きてる女程哀れに見える者、ありやしない。さうなると全然自分といふものが無くなつてしまふんだもの。

山瀨　あんた、山口運送店にゐた永井さん知つてるでせう。

並木　かうつと。背の高い、私位ひ高い人じやな　つたかしら。

山瀨　さう、髮の長いね、肌理の荒いザラ〳〵してた。

並木　その人がどうしたつてのよう。

山瀨　あんたが一月に止めたから、二月、三月、さう、三月の始めだつたわ、止めてね、結婚したの、

並木　ほーう。

山瀨　この間、ほんのこの間よ、赤ちやん產れてね。可愛い赤ちやんだつたけど、あの人も不幸な人ね。御主人といふのが肺病でね、死にかけてるやうな顏してるの。あれが變態性ていふんでせうねえ。あの人が他の男の人と少しでも話をするでせう。さうしたらいけないの。八百屋と話しをしたと言つては髮を曳摺つて蹴つたりね、隣りの人と挨拶したと言つては、怒つて段梯子から突き落したりするのよ。それも可哀そうに姙娠中なんですよ。そしてね、御主人、外へ出る時は表へ鍵をかけとくんだつて。永井さん結婚なさるつて聞いた時は、こゝの人は皆羨やましがつてたものよ。財產家だつてんでせう。始めのうち、若夫婦郊外へ別居してたんだつて。それが御主人が病氣で勤めも何も抛つたらかし、やつて行けなくなつて、本家へ歸へつたんでしたよ。そしたら御覽なさい。姑さんと出戾りの姉さんとが、永井さんを散々いぢめるんですつて。お前故に家を潰したつてね。永井さん憔悴れてね、泣いて話すのよ。主人はブラ〳〵して働くどころか、一ト月も家へ歸つて來ないし、實家へ歸へりたくても、養母はまだ二十九で自分と六つより違はないつて……そのお母さんが辛いからこそ、望まれるまゝ結婚したんでせう。あの人どうなるんでせうね、まるで身の置き場がないじやないの。それでもね、子供が可愛いから、たゞ子供の犧牲になつて生きていくつて泣いてたわ。

並木　御免なさい。涙が出てきたわ。（笑ふ）又。どうして、永井さんも犧牲なんて古くさい事を持ち出すんでせうね。そんな家ずん〳〵出てしまつたらいゝんだわ。子供は姑さんでも育てるでせうよ。犧牲なんてそんな馬鹿らしいもの……。第一に肝心なことは、先ず自分自身を活かす事、それから後に、自分と同じやうに他人を活かす事に務めるべきだわ。自分が不幸で人の爲めに、それが自分の子供としても、自分以外のものを活かす爲めに自分を

殺すつてそんな馬鹿々々しい事があるものか。私なら、そんな家から飛び出して自活して行くわ。

山瀬　それがねえ、永井さんとしては、そんな得手勝手な事は許せない事情があるんでせうよ。

並木　（鼻白んで）　駄目ねえ、こんなせち辛い世の中に、そんなにくよ／＼して泣いてる暇のある女の人がゐると思ふと勿體ない氣がする。私なんか、とつても忙しくつて、ろくに考へる暇なんかありやしない。世の中がグン／＼目の廻るやうな早さで動いて、變つて行つてるんですからね。

山瀬　私なんかそんな事わかんないけれど、大してそんなものに興味も感じないしね、どうなつてもいゝと思つてるわ。女なんかあんた、どんなに偉さうに言つてゝも、結局煙のやうに消えていつてしまふじやないの。それよりもお茶やお花を習つてる方が女らしくつて、いゝよ、無難で。第一男に後指さゝれないだけでも。

並木　それ皮肉なの？　私に。（快活に）　この頃の世相……移り變り。私はもう靜乎としていられないやうな氣がしてね、息が詰まりさうなの。女だつて男と何處に勝り劣りがある？　ロシヤを御らんなさい。家庭から婦人を解放せよ！　そしてね、何千人か入れる公衆食堂がある、國家經營の洗濯場、兒童教育所がある。働かざる者は食ふべからずで、女は臺所から解放されて男同樣働くのよ。一週五日毎に休みがあつてさ。工場でも勞働者が時間を交代でそれを繰り返へし／＼行つてるから失業者なんてないのよ。あらゆる職業に、生活に、女も男同樣の權力を得てゐる。あなた、私達の毎日の生活を考へなくつて？　伸び縮みも出來ない程押へつけられてゐる。あんまり押へつけられてゐ過ぎる。

さよ、時折、思ひだしたやうにセカ／＼と、また憂鬱にボンヤリと四邊を歩きまはる――

山瀬　だつて女ですもの、仕方がないこつたわ。女は弱いんだから。

並木　弱き者よ、か。あんた早く結婚するべしだわよ。え、君、したまへよ。及ばずながら。

山瀬　そら又出た。私もね、一人だけ、普通の人じやない人を知つてるんですけどね。その人はそりや眞面目よ。教會の人が感心してるもの。

並木　ほう、そりやいゝ。神樣、わたくしは神樣のみ名によつて祝福を――なあんて祈つて上げないわよ。私のやうなマテリヤリストはね。私はこう言つて上げる。君よ、生涯その男性の裏を見る機會なからしめよ。たゞ表面だけ見るの幸福を與へ給へよ。とね、いゝ言葉だわね、アーメン。

山瀬　冷やかしちやいやよ。實際、その人は眞面目なの。眞面目過ぎる程なの。女なんか見向きもしない。

並木　ほーう。だから結婚遊せといつてるんだわ。姙娠してね、夫が今日は居殘りで歸へつてきたら、まあ、そう、そりやまあお疲

れでしたらうつて、お茶漬けを出してあげなさい。そしてお水。それが夫婦圓満のこつさね。

山瀨　何だか解らない。

並木　解らなくつて幸ひさ。

エレベーターより、女給仕、長靴を持つて登場。

女給仕　山瀨さん、部長さんが呼んでるわ。

山瀨　さう、煩さい。直ぐこうなんだから。並木さん未だゐるでせう。

並木　さうね、ゐてもいいわ。

山瀨　又直ぐ來るからね、待つてゝね、一緒に歸へりませうよ、ね。（右手階段より退場）

女給仕　（靴直しに）これ直しといてつて。松本さんよ、私んとこの。いくら？

靴直し　さあ、なァ、えらい痛んでるから一圓八十錢。

女給仕　そう、あのけち親爺一圓八十錢も出すかしら。早くしといてね。

靴直し　あゝ。

並木　今日はァ。沖田さん。

女給仕　あらッ、私、今さつき、並木さんかしらと思つてたんだけど、遊びに？

並木　えゝ今日は私とこお休みなの。

女給仕　羨やましいわ。今度のとこいゝのでせう。待遇がいゝとか――

並木　あんた、去年とみると、まあ、隨分背も高くなつたし、肥えてきたのねえ、十七……だつたわね。

女給仕　今日ね、お父さん馘になつたの。

並木　クビ？　そ？　あゝそう、お父さん働きにきてらしたわね。まあ、急に？

女給仕　今日ね、一と働きして疲れたから廊下の隅つこで一服してたの。そしたらそれが見付かつて、そんな掃除位ひで草臥れるやうな年よりは仕樣がないつて、直ぐに止めさせられたの。もう六十だから。こゝ止したら何處にも口がないのよ。私一生懸命になつて搜してるんですけど、ないのよ。

並木　非道いのね。（涙ぐむ）

女給仕　事務所の人つたらね、職業紹介所から來た部厚い名簿を出してね、私がお父さんを許して下さいつて行つたら。

並木　あんた行つたの？

女給仕　だつて明日から食べていけないんですもの、行つたの、賴みに、そしたら名簿出して、この通り澤山の求職者があるんだから、若い働き手がいくらでも來るつて……

並木　失業者ばつかりふえてねえ。

女給仕　今さつきもね、今朝、毎日新聞にのつてたでせう。

並木　しらない。何が？

女給仕　うちの會社が給仕募集とか書いてあつたわ。そしたら朝から男の子が來るつたら、百人程も、廊下にずらつと並んでるの。うちんとこなんか、入つても仕様がないのにねえ、給料は安いし、晩はおそいし、叱られて、一日中働きどうし…そいで出世するのぢやないし。

並木　あの會社じや、私も毎日泣かされ續けたわよ。そら、毎朝痰壺を一つ宛洗はされるし、掃除して部長さんにお茶を持つてつて…お客があると、喫茶店へ走らされて、女給のやうにお菓子を運んだり…。ねえ、あの部長さん、私にいつゝも靴下や鼻のついた半帛を洗はしたわ。仕事のこと言つたら持つて行く都度に怒鳴り散らされるし、時には頭を叩きつけられるし、女事務員だか女中だか妾だか解らない。さうして部長さん、よく言つたでせう。折角金を出して使つている人間だ、少しでも働らかさなくちや損だつて――へん、まるで私等を虫けらのやうに思つてるんじやないの。そしてねえ、よくあの遠い郵便局へ走らされたものよ。七丁か八丁はあるでせうね、忘れもしない。暑い／＼日だつた。私あの日はお腹痛でウン／＼呻いてたのよ。仕方がない部長さんの命令でせう、電報用紙もつて走つて行つたのよ。そして歸へつてくると、もう一遍行けつてんでせう。私もう口惜しくつて、泣き／＼あの暑い、焦げつくやうな外へ走り出たのよ。そして痛いお腹を抱へながら、電報用紙を見ると、あんた、どんな事が書いてあると思つて……ゴケツコンヲシクス――私、道の眞中でわつと泣き出したわ。その時、心の底から亡くなつた母さんが戀しくつてね、母さん、母さんて、夢中になつて呼んだの。

女給仕　部長さん、相變らず偉さうにしてるわ。お茶を持つてこい。こんな温いの呑めるかい、熱うしてつて二遍も三遍も氣に入る迄換へさせるの。

並木　あの禿ちやんの土木さん。まだいる？

女給仕　フン、えらさうにしてるわ。毎日／＼部長さんの氣嫌ばつかりとつて、へいこら頭下げてはね、部長さんが居なくなると。

並木　すぐ、部長さんの棚下ろし始める。ホツホツホ…。隨分私も聞かされたもんだわ。

女給仕　（急に沈みこむ）つらいなア、お父さん働らかないと、どうして食べていく…。あゝ、もう胸が一杯になつてしまふ、又お母ちやん、出て行くつて泣くんだわ、大喧嘩…あゝいやだなア、お父さん愚圖だから何處へ行つても斷はられるのよ。私、どうしやうかしらん…。

靴直し　出來たよ。

並木　力を落すもんじやなくつてよ。どんなに辛い時にも希望を失つちや駄目。ねえ。空が雨で眞暗になつてね、これがどうして、何處から晴れるのかしらと考へてゝも、又いつの間にか、どこか

らか晴れていつて、お天氣になるもんでしよ。何でもかうしたものよ。さう思ひ詰めることなんかありやしない。しつかりしてね。元氣を出して…今度はあんたが働くのよ、お父さんと二人分…夜にね、何か內職でもして。あんたも解つたでせう。人間、働く程幸福なことはないつて…若い間ね、働ける間働くこと。年とつたら働きたくつても働かして貰へないんだから、ね、ね、强くなつてね、あんたが今しつかりしなくつちやどうなる？

女給仕　私ね、並木さんの話を聞いてると氣が浮き〳〵して元氣になつてくるの。さよなら、又いらつしやいね、さよなら。

並木　さようなら。

　女給仕、長靴をもちてエレベーターにて退場

　さよ、忙しなく、グルグル歩き廻つてゐたが、

さよ　並木さん（邊りを憚かるやうに首を縮める）

並木　何あに。

さよ　私、お話があるんですが…この赤ん坊が…この…

　此の時、右手階段より古賀しづゑ一人登場。

古賀　いらしたのね、心配したわ、並木さん歸へんなさつたかと思つて…。

並木　それが、こゝに鎭坐ましましてるんだから堪んない。

　さよコーヒ沸かしの傍へ引込む。

古賀　つらいのよ。

並木　何にがさ、情けない顏して。まるで私が泣き顏購買所の主人役のやうだわ。

古賀　あの木村さんね、なつてないのよ、私を目下のやうに思つてるの、そりや私は馬鹿よ、何にも學問のない馬鹿な女よ、それでもあんなに偉さうに事毎に怒られると情なくて…。

並木　あんたより確か二つ程下だつたわね、木村さんて。

古賀　そ、さう。あの人男の人を八人持つてるのよ、それが自慢でね。男の人に着物やら指環やら、リボンやら、お菓子やら、化粧品道具を買つて貰つては鼻高々と私にみせるの。この頃ね、課長さんを引張つてるのよ。その課長さんもね、木村、木村つて、いやらしい程呼ぶの、手紙を木村さんの机に置いたりね、毎日活動へ行くんですつて。だからこの頃の木村さんの大得意つたらお話にならないわ。

並木　あんた達二人、仲よささうに見えるのにねえ。

古賀　誰でもそう言ふわ。それは表面だけでね、木村さんの意地の惡いことつたら、私の缺點を見付け出さう〳〵としては人に云ひふらしたりね、私が一寸、男の人に話しかけられると、目に角立てゝ怒り散らすのよ、そして人には、その人と私とがあやしいとか…。秘密ばつかし作つてね、私を焦らしては嬉しがつてるの。一寸した事にそりや意地の惡い…。

並木　女同志ではね、仲がよければいゝ程小さな、目に見えない位

ひの小競り合ひが始まるものね。そして些とした事に優越感を感じたいものだから――そこが缺點ね、女の間の。

古賀　そりや私は馬鹿よ、無學で何にもわからない‥‥だけどもあんまり馬鹿にし過ぎると思つて‥‥並木さん、あんたの事もえらい惡く言ひ觸らしてるのよ。こゝであんたが綺麗いつて評判だつたから――怒つてね、並木さんはあれは肺病だ、あんなにすらりとした色の白い人は肺病に決まつてるて――こうなんですもの。

並木　（哄笑）肺病はよかつたわね、幸か不幸かこの通り、咳も出ず飛び廻つております。つて誰かに跪まづきたいやうよ。

古賀　私、もう行くわ、お喋舌してしまつて――又木村さんに睨まれる。並木さんそいじやさよなら、又、又ね、お體お大事に。きつと又いらつしやいな、ね、ね。

並木　えゝ、有難う、又ね。

古賀急いで元の階段より退場、數人の仲仕、大きな莚包みを擔いで、正面入口より倉庫へ運び入れてゐる。陽光が翳つて砂埃の立ち昇つてゐるのが仄白く見える。

舞臺更に漸暗くなり、紙直し屋と、菓子店の上に小さな赤い電燈が點く。突然赤ん坊が火のついたやうに泣き出す。

さよ、狂的にあやす。

さよ　ねんねんやう‥‥ねんねんよう。ねんねんよう‥‥‥‥

並木　ああ、さよさん、さつき、何か御用だつたの？

さよ　あの、何でもないんですけど、一寸‥‥もう止めとこう。

並木　まあいやな人ねえ、罪よ、話しかけて止すなんて。（近づいて）赤ちやん、あんたの？　まあよく肥つて‥‥。

さよ　いゝえ、私じやないんだつす。

並木　あんたのお姉さんの？

さよ　いゝえ、私の主人の子供だつす。

並木　へえ、じやあんた、そのお店へ働きに來てるの？

さよ　そうじやないんで。あの、私は女中で。子守りだす。

並木　主人夫婦は？　こゝへ來ないの、あんたが一人‥‥變ねえ。

さよ　へえ、あの、この子の親は二人とももうありやしませで――あの、こゝの爺さんと私が、この店へ來て‥‥

並木　爺さん？

さよ　へえ、あの、婆さんが死んだのんで、爺さんたら、私のやうなものを‥‥

並木　面白いお婆さんだつたけど――あの人が亡くなつたつて？

さよ　（弱々しく、決心したる顔付きにて）あの、私、あの、あのこの子供が腹が立つて仕様ないんだつす。

並木　まあ、どうして？

さよ　あの、この子さへなかつたら、私、あの、家へ歸へられるんですけんど――あの、この子だけが‥‥

並木　（さよの蒼き顔を見て慄然と）仰有い。どんな事でも聞いて

あげてよ。

さよ　（激しい並木の聲につり込まれて）　二、三日前にも、あの、あんまり家が戀しうなつてからに……もうたまらなくなつてしまうて、こゝで、誰もいない時に、わつと泣き出してしまうたんだつす。そいで……そいで、もうかつとなつてその儘、家へ走つて歸らうと思つて……。

並木　歸へつたの？

さよ　（魔誤々々して）　いんや、田舍ですもん、こゝから汽車で一時間半もかゝりまつす。何んぼ歸へりたい思ふたつて、この兒が一人おいとくのが可哀そうで、わし、歸られまつせん。

並木　そんなに家が戀しいものかしら……。

　靴直しや店をしまひ、正面出入口より退場。

私、あんたの心持ちがようく解る氣がしてよ。でもあんたには歸へりたいと思ふ家があつていゝけど、私はそんな所、この廣い世の中に持つていないんだもの。（呟くやうに）　烏や雀には巣があつても、私には暖い巣がない。

さよ　（泣き出す）　私は十の時にお父つさんに死なれました。そいでお母さんが今の所へ嫁にいつたので、十一の時から私は奉公に出されて——今まで十一年の間他人の家でばつかり暮してきたんでつす。あの、十五六の時まで、家が戀しうなる度に、逃げて歸へつて行きましたが、お父さんやお母つさんの傍で駄々をこねてる弟や妹を見ますと、羨やましいのなんのつて……あの、わし、あの……（歔欷す）　このまゝどんな事でもして働くから、家へ居らしてと頼んだかつて、お父つさんが繼父で怖いから、お母つさん手を合はして、わしに他所で働いてゞくれと、こう拜みますんでつす。こうして奉公してゝも、家が戀しうて〳〵毎晩、家のこと夢にみんことありしませんのだつす。この間も、Yまで買ひもんにやらされた時に、あの、わし、飛び立つやうな思ひで、あの、そこから一里程の田んぼ道を走つて、家へ歸つていつたんだつす。そいたら、おつ母さんびつくりして、早う歸へれと言ひますのんで、あの、わし、もう拜むから奉公を止めさしとくれ、おつ母さんの所で働かしておくれと言ひましたら、あの、そんなに歸へりたいんなら、お父つさんには、上手いこと取りなしたげるが、御主人の方は、えゝのんかとこう……。わしもあのう、よう考へてみたら、この兒が、わしが居らんと誰も見てやる人がないで……それが辛い……あの、そんなら、あの兒がなかつたら歸つてもいゝかと、おつ母さんにそう言ふたら、あの、うん〳〵そんなら歸へつといでと……そいで、あの、わし、この兒さへ……あの、……

並木　（溜息を吐き出す）　ねえ、そんな辛さを持つてゐる者は、あんただけじやないことよ。私のことも考へて御覧なさいな。私には肉身つて年とつた父一人ぼつちだけよ。それが商賣には失敗す

る、勤めるには口がないしさ、道具も着物も何も金になるものはすつかり賣り拂つて、旅費を拵へて國へ歸へつちやつたの。今親戚で世話になつてゝ、一週間毎に手紙寄越してくるわ。皆から馬鹿者扱ひにされて辛いつて…そして一圓でもいゝから小遣ひを送れつて——。私の給料が三十三圓で、ね、自分一人分食べてゆけるかいけないかに、きゆう〱言つてるのに、その上、親戚の者から、父に着せる着物がないから至急縫つて送れですつて…どこからそんなお金が出るの？　このビルデイングにも、高等淫賣が澤山居るつて聞いたことがあるが、私はそれは尤もだと思ふわ。女一人、眞面目にコツ〱働いてるだけで、どうして一ケ月やつていける？　この社會は女を奴隷以上にはみて いない。（嗤ふ）私は之でとつても憂鬱なのよ。會社から歸へる電車の中ではいつつも、あゝ又明日まで一人ぼつちだなアつて考へてる。晩なんか、小さな、薄暗い、何もないガランとした部屋でしく〱泣き出してしまふの。人が戀しくつて。ねえ、あなたも私も『愛』に飢ゑつくしてしまつてるのねえ。一日一日と心が荒んでくるのを見てると、たまらない。（氣を入れ換へて）「だけど、私つていふ奴、人の前では陽氣で、呑氣者で、何一つ不幸なんてものは知らないつて顔で通つてるのよ。（笑ふ）勝氣だから、腹が立つても、怒つた顔を人に見られるのがいやなもんで、どんな事でも笑つてゐる。隨分おかしな人間でせう。

さよ　（幽靈のやうに立つてゐる）私は生れてから、まだ幸福とかいふものは、あの些ともしりまつせん。もう——何でもいゝから、あの、家へ歸へりたいんでつすう。

並木　私はあんたが羨やましい（さよ彈かれたやうに、並木を見詰める）あなたはまだ歸れる家があるんだもの。私には歸へつて行く家なんてありやしないわ。でもいゝや、そんな事——私には仕事があるものねえ、ねえ、さよさん、私には仕事がある。それが私の一切のものよ。ねえ（さよ、青白き顔を靜かに投げる）あんたも、何か自分の仕事をもちなさいよ——。

さよ　仕事…？

並木　そうよ、仕事よ。赤ン坊見てやるのも仕事だけど、そんな嫌な爺さんなら止めちまいなさい。でなきや、愛人を持つかだわ。

さよ　——

此の時、三浦久江、颯々しくエレベーターにて登場。

三浦　並木さあん。

並木　あら、誰かと思つた——。

三浦　いやになつちやふ。社の人つたら、まあ會社に何しに來てんのか些とも解らない。朝から晩まで、女の話で持ち切つてるんだものう。みんなでね、×本集めてはそれの多いのが鼻を高くしてるの。女給から電話が掛つてくるとね、うまい工合、友達と話してるやうに誤魔かしやちふのよ。「フン、フン、君、じや僕あのレ

コード持つてね、なるべく早く行くから待つてゝくれ給へ——なあんてね。女事務員の事なら爪の先迄知つてる。うちの課長つたらね、私の傍へきて、人が居るのに、腰を觸つたり、腕を撫でたり手を握つたり、肩を抱いたりするのよ。そしてね、一人前の女にしてやらうか——なんて。煩い、いやになつちやふ。みんな、あんな人の奥さんが、うちの夫は品行方正で御座ると、毎晩お料理をして待つていると思ふと可哀さうになつてくるわ。その夫が一歩外へ出ると、どんな事するかわからない——ヘッだ。

並木　だしぬけに何を言つてるの。あんたの社の人達、今日は又どうしてこんなにくしやみが出るのかなアつて、鼻抓んでるわよ。

三浦　癪に觸るんだものう。今日も又みんなでカフエーを荒しにいくんだつて——あ、それから、電話でね、山瀬さん、今日は居殘りしなきやならないから、濟まないけれど、並木さんにお先へ歸へつて下さるやうに、だつて、お取次ぎしてよ。

並木　そりや、ありがと。私も、そろ〳〵御歸還遊ばさうかなア。

三浦　一緒に歸へりませうか。

並木　お供を申しつけるわ。さ、さつさときたまいよ。

三浦　いやだア。

さよ　(落膽して)並木さん、もう、あの、お歸へり。

並木　あゝ、又近いうちにきてよ。ねえ、それまでお元氣でねえ、私、祈つて、よ。

さよ　——(なにか言ひかけて項垂れる)

並木　さようなら。

三浦と二人、右手階段より退場。

舞臺更に暗くなる。どや〳〵と七、八人の女掃除夫右手階段より降りてきて、わい〳〵話しながら、箒や馬穴等隅つこに並べ、腕を延ばして欠伸したり、肩を叩いたり、髪の解けを撫でつけてから、又ぞろ〳〵と正面出口より退場。それより前に登場した給仕が、さよの店に來て果物を澤山買つて大急ぎで退場。舞臺正面の出口より、仲仕達の鼻唄聞え、それに交つて自動車の音、自轉車のチリン〳〵等きこゆ。さよ、呆然と店も片付けずにゐる。脊の子泣き出す。

さよ　(半分泣き聲で)　ねんねんよ……坊やはよい子だ、よい子だよい子だ——(ヒステリックになる)

德本忠造右手階段より登場。

忠造　あゝ、おそうなつてしまふて……今迄引き留められてなア、あゝ忙しない、忙しないこつちや。さよ、そこを掃いとけ、いやいや、こゝもつと綺麗に掃除せんことにや——まだ片附けるのには早いぞ。なぜさう骨惜しみしくさるか。どうや、大分賣れたか、うん?

じやら〳〵音立てゝ金高を熱心に調べだす。——間。

さよ　お爺さん。

忠造、金の方に氣を取られて返事せず。

さよ　お爺さん……。

間

さよ　（低く）お爺さん。

忠造　何だ、煩い。

さよ　おれ、もういやだ。（狂つたやうに）暇を貰いたいのでつす。

忠造　（顏を上げる）何言ふてる。馬鹿ッ！　阿呆奴が、お前に暇をやつてたまるかい。まだ二年にもならないじやないか。五年といふ決めだぜ。えゝか、ようきけ。お前のお父が人の金を盜んでよ、懲役に行く所をお前、三百圓貸してやつて、お前を身代りにつれて來おつたんじやないか——俺をな、あんまり甘くみると一寸痛えぞ。

さよ執拗にせまつてゆく

さよ　そんなきめ、私は知らなかつた。そんなこと嘘だ。もう三年？　このままで三年？（次第に聲が上づつてくる）嘘だ、そんなことはない。かへして下さい。

忠造　（冷やかに）ほざくない！　見てみろ、證文がものをいふわ。お前の父親も母親も承知なのだ。ものを食はせて、暖う寢せてやるのを有難いとも思はぬ罰當りめ。

さよ　（必死に）何もお母さんはいやせなんだ、あの、あの（吃音つて）あの、働かぬとはいはないが、……あの、お金をかりて……この赤ん坊をせはしたり、お前の、お前の……。

忠造　やかましい。やい、默らぬか。

さよの胸ぐらを執つて叩きのめす。さよ唇を強く嚙み强情に佇立つたまゝ胴震ひしてゐる。

忠造　泣いてる間があつたら、金の儲かる工面でもしてみろい。飯ばかりくつてからに、阿呆め。

給仕　（エレベーターから降りて來て）お菓子やさん、八階の極東合資にね、餅菓子を三圓ばかり直ぐ持つてきてくれつて——。

忠造　はい、はい、極東合資さんに——はい、宜しう御座います。直ぐに、直ぐに持つて參じますから——毎度有難うございい。

給仕退場。忠造大忙てに忙てながら餅菓子を包み、エレベーターに乗る。さよ、昂奮して歩き廻る。ふいに立ち止まり激しく泣きながら赤兒を脊より下ろす。

さよ　畜生、殺してやる！　覺えてろ!!

ふら〳〵と行つて、入口から砂を一握りして來て嬰兒の口の中へ入れ、呆心したやうに息を詰めて凝視していたが、

さよ　（投げつけるやうに）死んぢまへ、死んぢまへ——一體、誰が可愛さうなんだ——。

さよ　（破た人形のやうに赤兒を抓みあげて振る。）だれが可哀さうなんだ、誰が可哀さうなんだ。だれがかわいさうなんだ——

幕

みちづれ

ヴイクトオル・マルゲリット作

望月百合子譯



第二章──

四

昨夜からかゝつてアニックはサン・シュルピスの廣場からラスパイユ街に手廻りのものを運んでしまつた。移轉は簡單だつた。三つのトランク數個の包みだけだつたから。着換えの衣類と愛好の部屋飾りと……それに小さな本箱とで、その中には數册の哲學書や、詩集や、ルナンの『科學の將來』や『青春の思ひ出』などがあり魅惑者アナトオル・フランスの書も、カミイユ・モオクレエルの『肉體的戀愛』も、ジャン・フイノの『性問題と偏見』などもあつた。彼女は日常生活に必要なものだけにして、後は仕事に必要な書物も、家具類も、繪も、事務室に殘して置いた。

『さよなら壁よ！　さよなら卓子よ……さよなら私の寢室よ！』と彼女は、幾年來、彼女の生活の中に溶け込みまざり込んで來たものの生命を、眼や手で愛撫し乍ら言つた……

彼女は萬有に生命ありといふ信念を持つてゐたので、無感覺のやうに見えるものゝ中にも、それ自身に固有のわなゝく生命を認めてゐた。それは彼女が屢々ジエラアル・ド・ネルヴアル──かつて好きだつた友達の一人──の美はしい次のやうな詩を默誦する程であつた。

漠々とした存在の底に神がかくれてゐる。
盲目の壁に汝を狙ふ眼あるを恐れよ、
物質そのものに言葉が宿つてゐる。
それを惡しき用に供するなかれ。

『さよならよみなさん、でも私大抵毎日こゝに歸つて來ますよ』

閾際で、扉を閉める前に、彼女は廣ひ部屋をもう一度抱きしめるやうにみまはした……彼女の勉强と、彼女の獨立のために幸福な驛程だつた！　併しそれはもう過去だ。新らしい驛程への途に進み入

らうとした時、彼女はやゝメランコリイを感じた…併し彼女はその新らしい驛程からも只幸福しか期待しなかつたけれどもまた彼女は、困難と闘ふことなしでは何事も成就しないことをよく知つてゐた。

また彼女は、自分が希望を抱いたり、愛したり——働らいたりしたこの佗住居を、不確かな海にしつかりと錨を下ろした小舟のやうにそのまゝ後に殘しておくことを心強くも思つた。そこに、一週間のうち幾度も——相談や訪問を受ける處の個人的住居であると共に自分自身をとり戻すためや、熟考や、孤獨のために必要な庇護所をいつも見出るせといふ考へは、彼女にとつて愉快だつた。

だがまた、静かに安定した生活にすつかり入つてしまふことや、愛人と様々な日々や夜々の樂しみを分けることを考へると、やはり愉快だつた…彼はいつの間にか、大寢臺のある部屋の隣りの秘書室を空けて、そこを彼女一人の部屋に當てた。その隣室は浴室とは別の化粧室になつてゐた。

『あなた!』と彼女は感動して言つた…『私は殆んどこのお部屋にはゐませんでせうに…』

その夜、彼等はブルウサ夫人とゼロノフからスエーデン舞踊會と晩餐に招ばれたが斷つた。そして子供のやうに、彼等だけで、更らに密接になつた二人の生活をたのしみ、お祭りのやうに彼等の共同生活の第一日を祝つた。

アニツクは疲れて、事務室にはたつた一脚しかない、ふく〳〵と快よい皮の腕椅子に身を埋めた。そして事務卓に向つたアメデエが高くした電燈の傘の下の圓光の中で讀書しはじめた。アメデエは仕事にかゝつた。そしてアメリカ商業會議所から送つて來た山のやうな小册子類や報告等を檢べてゐる。彼は大戰以來、ニユウヨークからサン・フランシスコまでと、シカゴからスウヴエル・オルレアンまでのアメリカ旅行を企てゝゐる。そして彼がかつて滯在してゐたイギリスの後に、ヨオロツパ復興の最も有勢な債權者たるこの大實業國を知りたいと思つてゐた。

偶然に——或は本能的にか——彼は眼をあげた。丁度その時アニツクは、不意に苦しげな顔になつて、手にしてゐた本をとり落した。彼女は蒼白になつて心臟を押えた。ジヤクマンはびつくりして起ち上ると彼女に飛びついた。

『どうした?』

『何んでもありません…心配なさらないで下さい』

と彼女は言つた。

『びつくりしたよ』

彼女は急に起ち上つた。

『あゝ! 心臟が苦しい…一寸…一寸行つて來ます』

『ついて行つて上げよう…』

『いいえ、いいえ、そんなになさらないで下さい! すぐ歸つて來ます。』

彼女はすぐ、やつれた顔をして併し微笑し乍ら部屋に入つて來た。彼は不安な眼で彼女をみた。併し彼女は重々しいと同時にいたづらさうに默り込んでゐた。

『ねえ若しやそれは?』と彼は胸をふるはせて訊ねた…

二人は長いことお互に見つめ合つてゐた。彼は彼女の顔に自分の切な質問への沈默の答へを讀んだ。そして口ごもり乍ら言つた。

あれだらうか?』

『えゝ、いまはもうたしかにさうよ』

『あゝ　何んて幸福だらう！』

彼は有頂天になつて喜んだ。そして同時に、今迄、幾度も話し合つたのだがいつでも彼女に反對され、彼の懇願も何にもならなかつた――そしていまは彼女のこの氣まぐれとも見えるやり方に恨みさへも持つてゐる――問題を一氣に言ひ出した。

『ぢやもう少しだつて躊躇することは出來ない。あきらめて私の妻にならねばならない‥‥　あなたはさうしなければならない。あなたのであると同時に、私のでもあるもののために‥‥　考へてご覽なさい‥‥　若し未だ躊躇するなら、今度はもう僕に反對する理由が立たない。』

『だけど‥‥』

彼女は彼の顔に驚きとことに苦痛の色とを見た。そしてまた更に彼を悲しませるのだと思つた。然し深い信念の閃に押されて彼女は言つた。

『どうして躊躇することが出來ないんです？　それでどんな違ひがあるんです？』

『あなたが、辯護士のあなたが、そんなことを平氣で言ふんですか？‥‥　いまだに吾々のこの社會で私生兒に對して挑戰するあの馬鹿々々しいが、しかし有力なあらゆる偏見を知つてゐるのに‥‥‥‥』

『だからなほさうです！　だつて私たちはさういふ偏見を無視してゐるんですもの！　だつて私たちは私たちの子供にいくら有力だといつても、そんな馬鹿げた偏見をまぬがらせるやうな教育と安心とを與へることが出來るでせうもの‥‥　私たちからそれを始めようではありませんか？』

彼は怒つて肩をそびやかした。

『そんな空想はやめよう。さうした段階は一代では乘り越えられるものではない。吾々の子供は吾々の社會とは全く似よつた社會に住むだらう。かうした社會だのに吾々の息子が――娘だつたらなほさら！　――何時かその教育にも拘らず苦しみを持つ危險がないといふことをあなたは保證することが出來ると思ふんですか？』

『貴方は一つの理想のためには苦しんでもいいといふことをお考へになりませんか？　それに貴方は法律案の提議をなさつたではありませんか、それに依ると‥‥』

彼は彼女の言葉を遮ぎつた。

『だが議會への提案なんぞ！‥‥僕達もそして僕達の子供もその提案が通過する前に死んでしまふだらうよ！‥‥考へて御覽、たゞ離婚問題だけでも、王政復古後、七月君主制の後、帝政の後、その上にまだ共和制が敷かれてから二十年も待たなければならなかつたことを‥‥‥僕達の子供を先驅者にするのはいいさ。だが始めから不利な狀態に置いてはいけない』

彼女はすつかり氣力を恢復してゐた。

『却つて有利な狀態に置くんですよ！　今日、めざめつゝあるあらゆる自覺は苦惱を生みます。明日、生れた瞬間から鍛え上げられる私達の子供は、今日程は苦しまないでせう。子供達が呼吸も始めないうちから解放された生活をさせること、子供達の眼が開くがいなや眞直な道を示すこと、それはどんなに確實な、どんなに力强いことか知れません！　貴方の仰有ることをそのまゝ貴方にお返へしするわ。いまはもう躊躇することはできない！　つて。』

彼は溜息を吐いた。

『可愛いアニック、そんなに夢中になつて…注意おし！　いまのこの社會がいかに不正であつて、僕達の子供達はなを何代もかうした狀態に生きねばならないんだ…　あなたには子供を私生兒として生む權利はない』

『まあ、おかしなことを仰有る…ホホホホ…やつぱりお母樣の息子ね。それは貴方の遺傳よ、精神的の相續よ！』

『それはそれでもよろしい！　この間、僕達の結婚に就てあなたに同意を强いた時、僕は僕のことしか考へなかつた。ほんとに僕は男としてあなたに同意を强いたのだつた。併しいまは、あなたが僕に與へてくれたこの大きな喜びを持ついまは、知つてしまつたいまは僕達の子供が、そこに既に現はれてゐるいまは、僕は父親の權威を以つてあなたにそれを强ひる。僕は子供がほんたうの家庭に、しつかりとした家族の中に入つてくることを望む…。さうすることによつて子供はより以上みんなから、兩親から、祖父母から、僕達のお友達から可愛がられるばかりだ…』

アニックはどうしても涙を堪えることが出來なかつた。彼は彼女の手を執つた。

『分りましたか。ジヤクマン夫人？』

『いいえ、ちつとも私には分りません。私は貴方が持て餘してゐらつしやるこの社會の重荷をすつかり、たとへ貴方をお苦しめするやうなことになつても、はつきりと始めから…私の子供には免がれさせたいと思ふのです…あゝ！　もう、もう、お願ひですから、この無駄な苦しい爭ひは止めませう…私の同意なんか期待してはいけません。何故なら、前よりも一層、これからは、貴方に對して私は法律上の自由が必要なんです…心配なさらないで、考へてみて下さい！　さうしたからつて何んにも貴方に惡いことはないではありませんか。いつだつて御相談の上で何んでもするんですから。これからすつかり貴方と御一緒に棲むことには同意したではありませんか？　そしていまこの通り貴方のものです——たゞ私の仕事の時間を除けば…。今日は殊に最も大きな幸福が私達にやつて來たんですもの、ねえ貴方、そんなにお苦しみにならないで下さい！　私のやうに、小さな生命の中に私達の愛を甦生させ延長することの喜びだけを考へて下さい…ねえ、さうでせう？』

やさしく、彼女は彼の顏を抱いて說きつけた。そして兩腕を彼の首にまわしてその膝に腰かけ、彼の胸に甘えるやうに蹲くまつた。彼女は彼の胸の激しい鼓動をきゝ、默つて彼の胸の思ひを追つてゐた。彼の胸は悲しみで滿されてゐた。併しそれもだんだん宥められてゆく…彼女はもうそれ以上悲しみを深めようとはしなかつた。そして甘へるやうに言つた。

『それに、ねえあなた、私に反對なさつちやいけません。だつて私、さうしたいんですもの……』

彼女は心の中で『少しづつ、この人を說き伏せよう。この人はきつと讓步するに違ひない…』と思つた。かうして體を寄せ合つてゐると、不可避的に起つてくる慾望に柔らげられて、彼女は考へることを止めた…彼女にもう自分の意志を通さうとも、二人の中のどちらが正しいか極めようともしなかつた…彼女は眼を閉ぢて、近づいてくる快樂に陶然となつた。

アニックは臺所のことだけをダンヴオア婆さんに殘して一切の家

事を引受けた。またアメデエの仕事や、彼の財產の處理に就て助言することすらも承諾した。たゞ彼女は、彼女の生活は彼女自身の收入で支えるといふ一點に就てしか頑張らなかつた。

幾日か、幾週間か過ぎた。五月になり六月になつた暗默の約束で彼等は、絶對にある暗い一點――彼女の絶對的全的な自由には決して觸れないことにしてゐたが、どうしてもどこかにしつくりしないものがあつた。彼女は平野の上に輝やく嵐の太陽のやうに平等の世界を翺翔してゐた。彼等はよく、未來のことや、まだ目立たないとしても彼女の姙娠から、間近な將來に豫想される澤山の計劃を語り合つた。息子だつたらジヤクマンの祖父のやうにクロオドと呼ばふ。娘だつたら！…彼は彼女にモルヴアル夫人の名をつけたいと思ふ…併し彼がさう云つたとき、アニツクは不快な顏をかくすことができなかつた…彼の兩親に對してたしかに彼女が抱いてゐる反感を理解し乍らも、無意識的に傳統主義を持つてゐる彼は、この二つの家庭間の割目、つまり自分の母親が自分の妻から愛されることが出來ないといふ破綻を悲しんだ。

『娘だつて、やつぱりクロオドと呼んでいいぢやありませんか…女の子にだつてきれいな名前ですもの…』とアニツクは衝突を避けやうとして言つた。

月日が經つにつれて、アメデエは益々憂欝になつて行つた。どうして子供が生れる前にアニツクに結婚を同意させたらいいか、とそればかり考へるやうになつた。そのために彼は夜も眠むれなくなつた。アニツクは身を裂かれる思ひで彼の氣持ちを追つて行つた。

午後はいつも、敗戰酣はな彼は否應なしに出かけねばならず、彼女は一人になつた。さうすると彼女は忙しい仕事――相談だの司法省だの――にも拘らず、心配で一杯になるのだつた。彼女は、出產が近づくにつれて激しい爭ひが避けがたいことが分つてゐた。彼女は前よりも餘計友達に會つたり、姉に會つたりして、このともすれば悲觀に傾く氣持ちに抵抗しようとした。同時にまた苦惱を免かれる爲に、一層熱心に身を入れた。

司法省の控室には毎日決つて現はれた。書類を一杯詰めた折鞄を小脇に抱えて、敷石の上を急ぎ足に往き來した。誰も彼も彼女に挨拶する…彼女に對する尊敬は益々大きくなる！　それは彼女に對する笑顏が益々廣くなり、法帽が益々低く下るのでも分つた…彼女は機嫌よく併しとり澄して、さうした挨拶に答へた…。

『あゝ！　この人々は私をどう思つてゐるんだらう、私がアメデエの共同者であることを知つてゐるものだから！…』

彼女は自分の成功を只自分の才能にのみ歸したかつた。

彼女がある訴訟に勝つた時に――どうして日を暮らしてゐるかとアメデエに訊ねられたので（これは始めての質問だつた）彼女は一切のことを話した。すると彼は激昂して彼女につめ寄つた。

『あなたはあんまり要求しすぎる！　男は男だから…若しあなたの職業がさうした當て外れを惹き起すなら、止めつちまへばいいぢやないか？　何も誰も仕事をすることなんかあなたに强ひはしない！』

彼女はびつくりしてアメデエを見た。何んといふ權幕だらう？　多分彼ははづみなのだらうけれど、いつの間にか世間並の男のやうなことを言つてしまつた！…だがこれ以上當り前な才能と時間の利用を止めて何をしろといふのだらう？　彼女は次のやうに答へるだけに止めた。

『そりや、何も私に强ひはしません……だけど、さう云へば貴方だつてさうぢやありませんか？　若し貴方の生活に仕事がないとしたらどんなだとお思ひになつて？』

『それや、あなたの場合とすつかり同じぢやない』

『同じぢやないつて？　どうして？』

夕食の知らせでその話はそれきりになつた。併し彼女はある陰影を心に殘した……。同じではない？……彼女は彼のその言葉の裏にある考へを見極めようとした。これが、共同生活に於ける夫と妻の役割は本質的に異なり、習慣に依つて、各々の仕事が隔離してゐると考へる男の感情なのだらうか？　明らかに……最も解放された人人すらも、他の人々のやうに、所有慾を持つたエゴイストだ！

彼女は、有名な辯護士である彼が、彼と同じ職業を營み、而もそれに成功してゐる事をあまり快よく思つてゐないのだとは思へなかつたので、それ以上追究しては考へなかつた……まつたく、こんな下らない事――と云へ二人が同じ樣な職業を持つてゐる夫婦間にはよくある――は、どう考へてみても彼に出來るとは思へなかつた。

議會が開かれてゐるある木曜日に、彼女は他に用事がなかつたので、マドモアゼル・アルデイの友情に浸りに行つた。アルデイはいつものやうに喜んで彼女を迎えた。やさしいアルデイを見ると、アニックは今迄長いこと訪ねもしなかつたことを悔いた。

『お腹の工合はどう？』

『非常に順調です』

『どんなに會ひたかつたか知れないよ。こゝでは、子供達を他にすれば、私は全く隱遁してゐるやうなものだからね。ブランシエさん達の他にや、私は誰にも會はないんだよ』と老婦人は言つた。

『あの方はどうしてゐらつしやる？』

『さあね、この頃、あの人達の間にや少しばかりの困難があるらしいよ』

『まあ！』アニックは自分の屈托で一杯になつてゐたので、別に好奇心も動かなかつた。『私はまだちよいとあの方達の處へも寄れると思つてましたのに……もう二ケ月もお目にかからないんですもの……私はどうして今迄暮らして來たか分らないんですよ

最初に訪問した時から、忘れがたい記念日の思ひ出に結びつけて、彼女はモニックに友情を感じ、ジョルジ・ブランシエには卒直な同情を持つてゐた。彼等は屢々會つて、お互に晩餐に招び合つたりした。――『あの人達の結婚生活を見てゐるのは愉快だ』とすらも、この前ブウルヴァル・ラスパイユの家に彼等を晩餐に招んだ後でアニックは言つた程だ。彼女はその時アメデエがメランコリックに『うん』と言つたのを思ひ出した。そしてまた彼は溜息と共に――『あの人達は全く幸福だ。モニックは結婚に成功したのだ……』と言つた。そのことをマドモアゼル・アルデイに話すと、彼女もやはり、それをそれとない非難であると感じたのだつた……

『で、やつぱりアメデエは結婚を問題にするの？』

『前よりもつと……』

『いま、私にはあの人が前よりも少しは餘計に分るよ。ねえ……あの人のやうに聰明で、善良であつても、男にとつては、夫婦がそんな風に暮らすといふことは、非常に隔てを持つてゐるやうに思つたり感じたりする習慣を、急にやめることがむづかしいんだよ。理論だけでいくらあの人が進んでゐたつて駄目なのさ。それを實行するといふことになると、また別問題でね……』（つゞく）



女人聯盟各地支部報告

京都支部例會記

岩田敏子

三月十六日午後二時から都ホテル前アリゾナバーに於て三月例會を開く事にした。

アリゾナバーは嘗て名古屋の聯盟で活躍して居られた眞井壽子氏御姉妹の經營になる美しく靜かなバーである。

眞井氏の御好意に甘へて感謝しながら早速お借りする事にした。

晴一時曇り——の天氣がにはか雨となつてうすら寒い。蹴上げの停留所で冷たい風に吹かれて待つ事一時間餘り。二時すぎにアリゾナバーに戻つて人數をしらべると十二人。然しこれまでのレコードだ。

兼ねて御依頼してあつた成瀨無極先生をお迎へに行かふと思つてゐる所へヒョッコリ先生がお見えになる。一同恐縮してしまふ。

先生はビールを一同は熱いレモンテイーを頂いてそれから先生を中心に記念撮影をする。

先生はビールで上機嫌になられる。私達も蜜柑を食べながらグット氣が輕くなつてしやべり出す。

自己紹介の言葉に先生は一々うけ答へをして下すつて時々ヤヂつたりシャレをおつしやる。其の度に一同は大笑をする。自己紹介が濟んで先生のおはなしを承る事にした。

先づ先生は京都にかうした婦人の集りが出來たと云ふ事は眞によろこばしい事であると云つて祝福して下さる。それから明治以來の婦人進出の歷史を簡單に——鹿鳴館時代の事青踏社の事雜誌火の鳥の事など。其の中で女人藝術は最も發展性があると云ふ事などを靜かな聲で話される。

又先生が學生時代に或る雜誌の戲曲募集に出した時先生の戲曲が二等で一等は長谷川時雨女史のものであつた。此の時はじめて長谷川女史を知り其の戲曲のうまさに驚かされたと昔を追懷せられる。

それから先生の藝術論になつて自分は一方にのみ傾いてしまふと云ふ事はあまり好まない。プロレタリヤ藝術を最上のものと思つてしまふ事はよくない。もつと大きな廣い心で總ての藝術を包含し得るようにならなければ駄目だ。勿論現代の社會と云ふものを研究するのも大いによろしい。誰が考へても現代社會の不合理なる事は明白である。が貴女方は如何にすればと云ふ手段をよく考へ、えらばねばならぬ。

他の支部はどうだか知らないが京都は京都としての色彩を保つと云ふ事は惡くないと思ふ。先刻も誰かが云はれたように婦人として妻として又母としての立場を忘れないようにしてほしい。それから男子の會員は絕對に入れない方がよろしかろうとコン／＼と云ひ含めて下さる。

勿論私達にも異議はない。

「斷然入れませぬ!!」とお答へすると——「ヂャ僕ももう歸らうか」と云つて笑はされる。

それからイヴセンのゴウストの第三幕を朗讀する事にした。

夫人——岩田
牧師——伊庭
女中——眞井壽子
其の他——先生

先生があまりうますぎるので三人共恐縮してしまふ。

少こしお腹がすいたのでうどんを食べる事に一致したらうどんを食べて本社へ送るよせがきをする。

ボツ／＼散會にしようと云ふ頃署からU氏がお見えになる。

そこで私は今日の例會の一部始終を報告した。

先刻から私達を面白さうに見てゐるドイツ人に女性進出行進曲の繪はがきを差し出すとよろこんで歌詞を詠んでゐる。そして歌つて呉れませぬかと云ふ。二十日にここへレコードが來ると云ふと二十日にアナタ來ませんか。そしたら私も來ます。私はうなづいて皆さんと一所に外に出た。

夜空には月が美しくホテルの窓は明るい。

ホテル前の廣い道を私達はしやべりながら一列横隊で南へ歩いた。

秋田女人聯盟支部準備會

加賀谷政子

二月二十五日午後一時から、秋田家庭新聞社樓上で、二回目の「女人聯盟」秋田支部準備會を開きました。そして春暖の候を期して發會式をかねた講演會を開催し度いといふ事になり、その計畫をたてゝゐます。その時はこちらで旅費を持つ事にして、出來る事なら、長谷川さんをはじめ二三の方に御來秋を願ひ度いと思つてゐますが……。

雪にとざされる期間の長い秋田も此の頃は餘程冬ごもりから解放されて、活動も容易になつて來ました。私たちもこれから大いに「女人聯盟」と共に活動する事の出來るのを喜んでゐます。

四月號を手にした時の私たちの會合は又更に新らしい愛讀者を迎へて、增々確實な歩みを進めるでせう。未だ準備中で、甚だ漠然とした御報告ですが……

神戸支部

三月例會――三月二十三日、開催さる。

大阪支部

三月例會――三月二十八日、午後七時から

大阪北濱三丁目　土橋商店二階で三月小說號の合評會をする。參會者二十人餘。雨の中をわざ〳〵遠方から集まつて下すつた諸氏の御熱心に深く感動した。雨足のはげしいペエブメントは「女人藝術」聯盟員の行進曲だ（綠川）

長野縣南信支部準備會

横田文子

昨年末から計畫して、今度女人藝術の女人聯盟支部準備會を持つところまで來た。これは勿論女性の社會的、政治的に對する權利獲得、その他封建時代思想から、實踐的に全女性を脫脚せしめんとする、自覺せる聯盟にする希望で、當然現社會に於て蜂起す可き現象であり、全日本の同性はすみやかに團結すべきはずだと思ふ。一人より二人、二人より五人と、次第にかたまり合つて、ある程度に到達すればきつと何ものか大きなものを、獲得出來ると信ずる。そうした意味で、支部は長野縣南信支部と稱して、女性同志お互のために南信の所々、農村、工場の同性達にこの際、すゝんで「女人聯盟に參加していたゞきたいと思ふ。大體は月一回例會を開き講演會、講讀會座談會等を開催、機關紙として「南信女人聯盟」を發刊、極力農村、工場に「女人藝術」及び「女人大衆」を持ち込み、共濟的機關の設置を計る。行く〳〵は本社から來て頂いて講演會もするつもりである。

福岡支部

女人大衆をテキストにして看護婦さん達で研究を開きました。姓名は當分發表しないで欲しいといふ希望ですが、熱心な諸姉の研究態度を大いに期待してゐるのです。私は十日頃上京いたしますが、研究會は適當な人にたん當して戴きたいと思つてゐます（山本有子）

徳島支部

女人聯盟員の濱本房子さんが「愛慾華」といふ本を出したので、當支部では四月二日午後一時徳島公園內太陽軒で出版記念會を開催いたしました。會するもの十五名、中々盛會でした。（藍谷恂子）

婦人彙報

▼小作人二百餘名地主を包圍

栃木縣那須郡鍋掛村の大地主熊滓龍太に對する小作爭議は昨年暮れ以來、大衆黨及び農民組合の支持によつて續けられてゐたが、最近に至つて、小作人の家族二百餘名は熊滓の家を包圍し、大示威運動を開始した。同地には他に大山、西郷、三島、森など大農場があるので、爭議の波及を恐れて、黒磯署員が鎭壓に急行したが、暴動化の形勢もあり、重大視されてゐる。

▼敎員の初任給引下げ

北海道を初め各地で敎員の初任給引下げが行はれ、漸次全國的となる形勢なので一般敎員は生活をおびやかされ動揺を來たしてゐる。昨年司法官の減俸問題で大味噌をつけた當局は、敎員の待遇低下は士氣を沮喪せしめ、敎育上悪影響を及ぼすといふので地方長官に向つて警告を發した。現在師範卒業者の初任給平均、第一部男子四十八圓七十九錢、女子四十一圓十六錢、第二部、男子四十八圓七十九錢、女子四十一圓十三錢であるが、敎育者としての立場上、減俸問題に對しても大つぴらに不平を發するわけにゆかぬといふ考へ方をしてゐる者も澤山あつて、一層不穩の非を呈してゐる。なほ茨城縣の中學校、及び小學校では敎員の大整理を行ひ、轉勤、首切り七百名の多きに上り、大混雑を呈してゐる。

▼引込めた災害扶助法案

內務省が今度の特別議會に提出す可く準備中だつた屋外日傭勞働者の災害扶助法案はすでに諸般の手續きまですんで、政府案として出す筈のところ、全國土木建築請負業組合及び土木請負業者達の猛烈な反對を受けて、突然引込めることになつた。災害による扶助料を事業主が全額負擔するのは餘りにも當然な事で、これまで不完全乍ら工場鑛山勞働者に工場法、健康保險法を設定したと同じ性質のものを、事業主の反對によつて引込めるやうな弱腰政府は、絶對に勞働者の味方ではないと痛憤してゐる。現在この案を適用される屋外勞働者は土木建築關係のもの最も多く、百三十三萬五千人、沖仲仕十三萬人、鐵道從業員(私鐵線路工夫其他)十三萬七千人、乘合自動車從業員三萬人、土砂、石切、砂利採取勞働者十二萬六千人、全部で百七十五萬八千人といふ大多數で、これ等勞働者の一年間の死亡及び全治三ヶ月以上の重傷者十五萬人以上である。一方工場鑛山勞働者三百萬人中、一年五萬人位の死傷者で、屋外勞働者は約六倍の危險にさらされてゐる事になる。アメリカ邊りでは四十階の建築には四十人の死者を出すと云はれてをり、丸ビルの時には二人の死者と二百人の負傷者とを出してゐる。屋外勞働者は彼等の立場から資本家事業主の現政府を痛烈彈がいすべきである。

▼都落ちの家出人激增

春、精神異狀、親子兄弟喧嘩、家庭の不和、都會の憧れなど樣々の理由で三月中の家出人は二千を突破してゐる。これなど家出人の大體の傾向は都へ、であつたものが、近來逆になつて、田舍落ちの家出人が約半數をしめてゐる。殊に五十歲前後の分別盛りの家出人の增加は都會の生活難、就職難の如何に深刻であるかを語つてゐる。

▼緊縮とスパイ政策

緊縮。新豫算の削減が全國思想特高網にまで影響して、機密費なるものが十分に使へなくなり、したがつてスパイ政策上に打擊をこほむると最近警視廳が頭痛鉢卷きである。一萬人近い全國高等警察官中三千人の轉任解職者を出す筈であるが、資本家のお手先、スパイ共も彼等の親分、資本家の爲の産業合理化、不景氣の生むおびたゞしい失業者と一緒に街に放ぼり出されるのかと思ふと一寸苦いこつけいさだ。

▼上野圖書館の値上げ

上野帝國圖書館は日本一の國立圖書館として、苦學生や、篤學者の唯一の便宜になつてゐるが、今度閲覽料の値上げをした。普通、三錢のが五錢、特別十錢を十五錢として回數劵を廢止する事になつた。一般民衆敎育機關としての圖書館の値上げは非常に非難されてゐるが、同館では大藏省が無理解で收入支辨を迫まられるので止むなくやつたと辯明してゐる。

▼ラヂオが操縦する戰車

東京工廠の長山少佐、久松中尉、針谷技手等が大正十五年以來專心研究中の戰車のラヂオ操縦が此度完成して、日比谷公園で實驗を行つた結果好成績であつた。これはラヂオによつて遠くから自由自在タンクを動かす仕掛で、陸軍當局は世界にもない素晴らしい人殺しの武器だと誇つてゐる。

▼監獄部屋の監督に嚴刑

北海道上川郡多寄村地内四線潤池工事場の田貞館野一郎(二六)吉田元次郎(五一)の兩人にかゝる土工虐待事件は監獄部屋の傷害暴行事件として注目されてゐたが、大審院板倉裁判長によつて懲役八ケ月の嚴刑を下された。事實は昨年五月土工部屋で何の過失もない土工に毆打暴行を加へ、更に數回に亘り木製のステッキでなぐり五週間乃至六週間の傷害を加へたもので一審、二審共に懲役八ケ月、執行猶豫二年の寛大な判決を下したため、檢事から上告されたもので、執行猶豫を取消されることになつたのである。

▼方向轉換のケ前夫人

ケマル・パシャが舊習の固いトルコの婦人達を解放した時に、最もその急先鋒を承つて、遂に餘りにモダーンすぎるといふ理由で離婚されたケマル・パシャの前夫人は、其の後どうしたわけか急激な方向轉換を行つて、流石にヴエイルまでは被らないが、「シャルシャフ」といふトルコ從來の服をまとつて、物見高い人々の目をそば立たせ乍ら。大統領夫人時代の思ひ出の記を執筆してゐるとか。

▼無産黨戰線統一協議會

第二回總選擧に慘敗した各無産政黨は急に戰線統一の必要を感じ全國無産大衆黨の主催で無産政黨戰線統一協議會を作り、書記長水谷、書記横田、村井、黑田、田中の四氏を推し、無産政黨の無條件合同を提唱してゐる。委員長には堺利彦氏を推し、機關紙として、「無産大衆」を月三回發行、全國遊說、失業反對の聲明書の發表など、十七日の會合で決議した。

▼無産婦人解放の阿片「婦人」

西本願寺派の婦人會聯合本部の機關紙「婦人」は宗教婦人雜誌の大いなるものであるが、「戰旗」二月號で神近市子氏から、かゝる雜誌は無産婦人解放運動の阿片だから注意せよとの一般警告を發せられ、急に宗教の受難來として防衞戰を張る可く準備中であるといふ。如何にも阿片の役目をつとめさうな宗教家のろうばい振りではあるが、近來澎湃として發展し、意識化しつゝある無産婦人と及びその運動に對して、どんな防衞方法を試みるかは見ものである。

▼製糸工場の食費引下げ

つい先だつて賃金不拂ひで問題を起した長野縣下の製絲工場では又工女の食費引下げをくはだてて諸方の注目を引いてゐる。從來製絲工女の食費は、健康保險料の算定基準が賃金と食費とのプラスに依て割り出されてゐた關係から一日三十錢といふ事になつてゐるが事實支給されるのは一日十八錢から高々二十二錢程度の甚だしいものであつた。それを又々食費引下げとなればどんな粗食待遇をするものか一寸見當がつかない位で、かうしたへい害の起る最も大きな原因は、事實において食費は工女の賃金から差引いてゐ乍ら、慣習的な見方から食事は工場主が恩惠的に給與してゐるといふ風に思はせてゐたためで、このまゝ食費の引下げを行へば必然的に現在以上の粗食を奬勵する結果になる。それに對する一策として、食費を女工の賃金の中に明らかに繰入れて支拂ひ、その中から食費として工場主に支拂ふ形式に改めよとの運動が起つてゐるが、働いた賃金を拂はない上に一層ひどい食事を支給するやうな工場主達のためには直ちに絲價補償法をしいた政府は、この問題をどう取扱うか注目しやう。

▼菊五郎を校長の俳優學校

心座、優志會など、俳優の左翼團體がぞく／＼と解散される時に一方では六代目菊五郎を校長とする俳優學校の設立がすゝめられ、著名劇作家、劇評家、現歌舞伎俳優幹部連を教師として極めて大規模な組織を持ち、新劇、舊劇、映畫方面の俳優を養成する。本科、研究科各三年で、松竹本社及び俳優協會が援助する事になつてゐる。

▼新女學士二人

京城府觀水洞生れ辛義敬(二三)さんは東北帝國大學法文學部文科を卒業文學士となつた。專攻は西洋史で、今年たつた一人の女文學士として、母校梨花女專の先生になる筈、なほ、九州帝大法文學部を卒業した松田富美子さんは社會學專攻の日本最初の女法學士である。

▼勞働者の失業二十萬人

緊縮の宣傳が利きすぎて、安達内相が急に國産品奬勵の景氣煽りをやつてゐる時、勞働者の失業は實に恐る可き勢ひで增加しつゝある社會局の調査によれば昨年十二月中の解雇者十九萬五千三百〇一人、に對し傭人數は僅かに二萬五千三十五人で差引十七萬二千十七人は全く失職食に餓えてゐる事になる。勞働者の失業と同時に智識階級の失業及び就職問題も今や重大視されはじめてゐる。

編輯後記

櫻がわあつと咲き立ててどこもかしこも春で一ぱいだ。四月の街に五月の匂ひの風が吹いて白く乾いたアスフアルトのほこりが、廣告取りに廻つて疲れた汗ばんだ肌にとびつく。廣告取りはむづかしいなあ。だけど知らない道を、何となしの期待に胸をふくらませながら目的地に向つてゆくとき、斷はられたつて何だつてかまわないピチピチしたうれしさがある。この頃はみんなで廣告を增さうと思つて一生懸命なんだから。それから社に送られる投書原稿は開き封にして原稿在中と書いていただきたい。多くの投書が多くの場合郵税不足でくるので、社では迷惑してゐる。こん度から郵税不足は受取らないで返送する。甚だしいのは三錢切手をはつて封をして原稿在中と來る。いくら原稿在中でも封をしてあれば信書同樣になる事を知つて頂きたい。(みどり)

私達はもうたまりかねて編輯室の窓をすつかりあけはなしてしまひました。なごやかな春風は絕えず私達の編輯に興奮した顏や、赤インクによごれた手を心地よく洗つてくれます。早く編輯をすまして又五圓旅行でもしようか等とさゝやきあつてゐます。どんな馬鹿らしい旅をしてくるか樂しみにして居て下さい。それから一つ繪のかける方に御願ひ。カツトを描いて送つて下さい。面白いものはどんどん使ひます。自分の力で、自分自身の面白いものを出して下さい。近代的な新しい味のもの、但し少女雜誌趣味におちいらない樣にくれぐれも願ひます。それでは待つてゐます(優子)

花の四月は全く人の心を浮き立たせます。なごやかな光線に明るい編輯室は何時も活氣に滿ちてゐます、先月郷里畝傍へ行つてなつかしい空氣を充分吸つてきましたが住み慣れた田園の山々、今は妙に憂欝な物に感じました。とても靜かな場所で退屈さに堪へきれなくなつていたら關西旅行に社長さんいらつしてすつかり嬉しくなつて社長んについて飛び廻はり、潑溂とした聯盟の方達に逢つて二倍の元氣が出ました。(美智子)

いよいよ一九三〇年のメーデーを迎へる。地方女人聯盟の發展はすこぶる盛んで、各地に支部がぞくぞく出來ニユース係りが目をまわす忙しさだ。だが支部の設立については出來る丈充分に本社との連絡をとつて頂きたい。支部の活動は支部の方々に責任もつてお任せしてますが、本社への通信は絕えず下さい。近く設立規約をおまわしする手筈です。なほ附錄女人大衆は先月素紙をつけて卅頁したばかりで、遞信局から三種郵便物として苦情をいはれ、差當り今月だけ舊態に戻しました、來月は何等かいゝ方法をとる考へです。

東京はつい先日復興祭とか何とか、一時ごまかしの景氣煽りを盛んにしてゐるが、日々の新聞も糊塗し切れず失業勞働者二十萬人、紡績大工場を誇る鐘紡が卒先的に從業員三萬五千人に對して二割三分の減收など、合理化の嵐が吹きすさぶ樣子を報じ。咲きそびれた飛鳥山の花の下では生活難の首縊りがぶら下る、來客の話では越後には農民の暴動が起りつゝあるとか。正に人心騷然!(素子)

健やかな風よ、日の光りよ――ふと白い花片が風にながれてゆくのを見ると、春もいつか闌けて、さつきめく風が吹いてゐるのだ。ともすれば涙ぐましい自分の心を制服して、まつすぐに胸を反らし、まともにものを見てゆきたいものだと思ふ。さて旬日にして市に躍りだす「女人藝術」五月號は勇氣ある少年のやうに、青葉に嘶く若駒のやうに、潑溂と期待される大衆に、微笑をもつておくりたいと思つてゐる。すこしでも憂欝のかげなどあつてはならない。その點ではかなり隅にまで注意深くしてゐるつもりではあるが、女といふもの他人の耳に生へてゐる生毛まで氣にする癖に、自分のホクロに生へてゐる毛も、耳糞も氣にしない天下泰平さがあるから、よほど氣をつけなければならないと自ら誡めてはゐる。本誌を愛する方々よ、お氣附きの惡い點を歯にきぬきせずおしへて下さい(時雨)

昭和五年四月廿五日印刷
昭和五年五月一日發行(毎月一回一日發行)

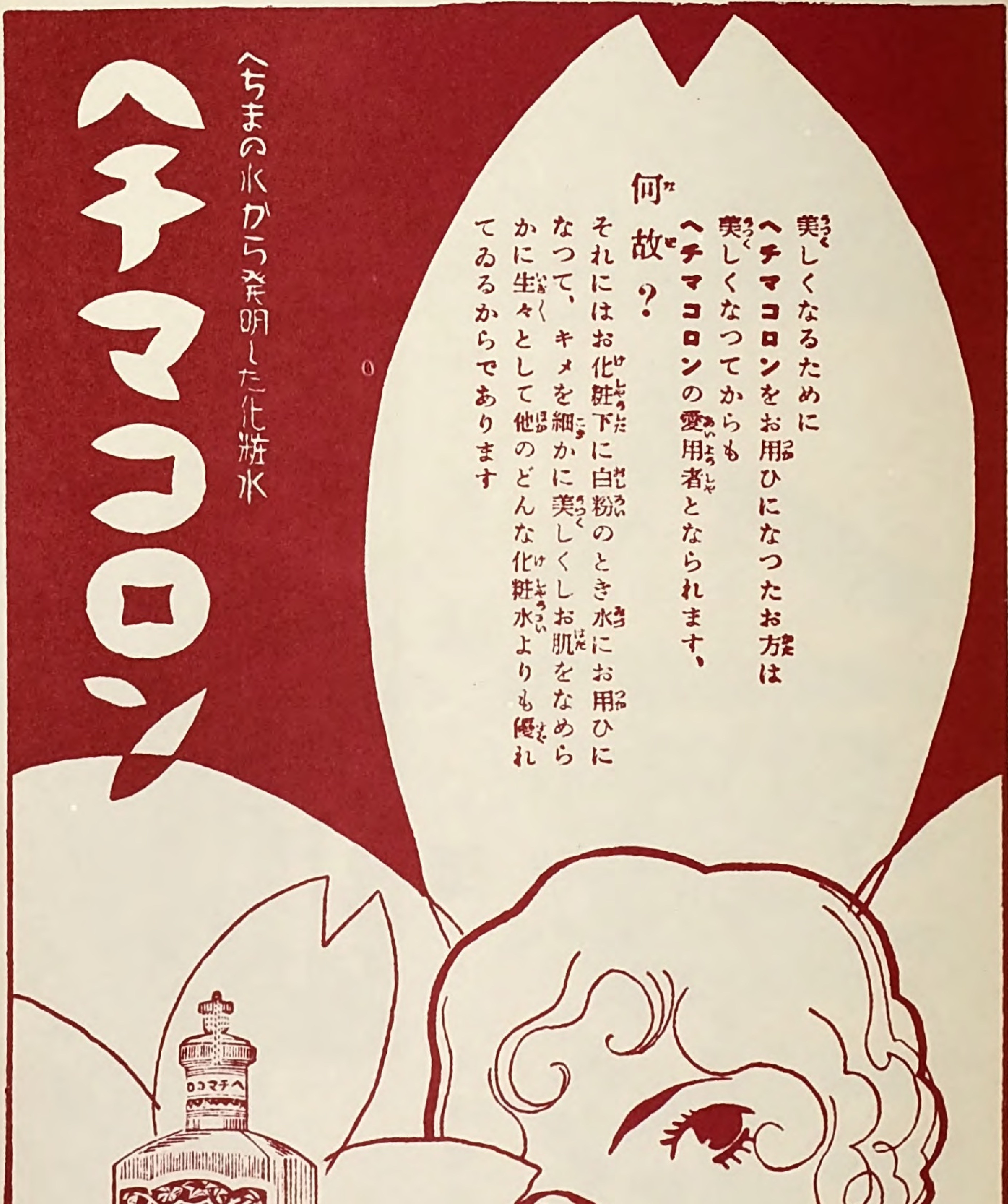
送料一部 壹錢五厘

定價	
1部	40錢
6部	2.40錢
12部	4.80錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
□郵便切手代用は一割增の事。

發行兼印刷者――長谷川ヤス
編輯者――素川絹子
印刷所――秀英舍
大賣捌――東京堂 北隆館――大東館 東海堂

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地 女人藝術社 電話牛込(24)一七八九 振替東京 七五八二五


ヘチマコロン
へちまの水から発明した化粧水
何故？
美しくなるためにヘチマコロンをお用ひになつたお方は美しくなつてからもヘチマコロンの愛用者となられます、
それにはお化粧下に白粉のとき水にお用ひになつて、キメを細かに美しくしお肌をなめらかに生々として他のどんな化粧水よりも優れてゐるからであります
ヘチマコロン
TOWEL GOURD COLOGNE
MANUFACTURED BY G. AMANO & CO TOKYO
本舗 東京 天野源七
大瓶 .50
小瓶 .30

昭和三年九月六日第三種郵便物認可

近刊

火刑

下巻

長編小説「妖都」

定價壹圓五十錢

長編小説「火刑」上巻は異例なる好評七十版を重ね下巻發行を待たれつつありました。「妖都」は此作者特獨の作品です、敢て推賞の多くの辭をもちひません。發賣の日をお待ち下さい。

麹町區下六番町

平凡社

振替東京二九六三九